竜の華は蒼月に舞う

ひなき　つぐり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
竜の華は蒼月に舞う

【Ｎコード】
Ｎ３６８７Ｖ

【作者名】
ひなき　つぐり

【あらすじ】
気が付いたら２１世紀の砂漠の戦場から、肌寒い森へ飛ばされてました。出会ったのは、史実とはかなりかけ離れた伊達政宗でした。って、なんで私子供の姿なの！？
戦国ＢＡＳＡＲＡの世界で人とは違う力を持った主人公が、伊達軍メインの面子に囲まれて成長する話・・・になるはずです。タブン。

１０／３　第一部完結しました。　１０／１０　小話は、竜の華

は朧月に微睡む　へ移設しました。
第二部スタートに向けて、キーワード一部変更しました

1　出会い（前書き）

十ウン年ぶりに二次小説を書きます。読みにくい等あるかと思いますが、寛大なお心で読んで頂けたらと思います。
なお、作者は英語が大の苦手であります。英文は滅茶苦茶かと思われますが、雰囲気でそこはスルーしていただけたら、嬉しいです（笑）翻訳機能に頼りきっております（笑）

1　出会い

２０××年。中東某所

「Ｉｔ　ｉｓ　ｃｏｎｆｉｒｍｅｄ　ｔｈａｔ　ｔｈｅ　ｂａｔｔｌｅｆｉｅｌｄ　ｉｓ　ｐｏｉｎｔ　ＸＸ０１.（ポイントＸＸ０１にて交戦確認！）」

「Ｄｉａｎａ　ｉｓ　ｍａｄｅ　ｔｏ　ｇｏ　ｔｈｅｒｅ.（ディアーナを向かわせる。）」

報告を受けた男は、目の前の通信機を手にした。

「Ｄｉａｎａ　ｍｕｓｔ　ｇｏ　ｔｏ　ｐｏｉｎｔ　ｘｘ０１.（ディアーナ、ポイントＸＸ０１に向かえ。）」

ガーピーと雑音の中、抑揚の無い女の声が了承を伝えてきた。

戦況はあまり芳しく無い。

特殊部隊でもトップクラスの腕を持つディアーナならば、少しはこの状況を打開できるだろうか。

そんなことを思いながら、通信機を元に戻した時、モニターを見つめていた部下が悲鳴を上げた。

「Ｃｏｍｍａｎｄｅｒ!Ｉｔ　ｗａｓ　ｐｏｉｎｔ　ＸＸ０１　ａｎｄ　ｔｈｅｒｅ　ｗａｓ　ａｎ　ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ！Ｔｈｅ　ｄａｍａｇｅ　ｓｉｔｕａｔｉｏｎ　ｉｓ　ｕｎｃｅｒｔａｉｎ！Ｃｏｍｍｕｎｉｃａｔｉｏｎｓ　ｗｅｒｅ　ｂｒｏｋｅｎ！（隊長！ＸＸ０１にて、爆発！当方の被害状況不明！通信が途絶えました！）」

「Ｗｈａｔ!?　Ｈｏｗ　ｄｉｄ　Ｄｉａｎａ　ｂｅｃｏｍｅ　ｉ

t!?（なんだと!?ディアーナはどうした!?）」
「Ｄｉａｎａ　ｃａｎｎｏｔ　ｂｅ　ｃｏｍｍｕｎｉｃａｔｅｄ!（ディアーナも通信不能!）」
「Ｔｈｅ　ｅｎｅｍｙ　ｆｏｒｃｅ　ｉｓ　ｉｎ　ｔｈｅ　ｓｔａｔｅ　ｏｆ　ａｎｎｉｈｉｌａｔｉｏｎ!（敵軍も壊滅状態!）」
「Ｗｈａｔ!?　Ｔｈｅ　ｅｎｅｍｙ　ｆｏｒｃｅ?　Ｉｔ　ｉｓ　ａｂｓｏｒｂｅｄ　ｗｈａｔ!?（何!?敵軍もだと?何がおこっている!?）」

次々に舞い込む劣勢を報じる情報に、男は頭を抱えた。

硝煙と砂埃と、汗と血の臭いが充満する戦場が私にとっての日常。わずかな判断ミスが、自軍の隙を生み死に至る世界で生きていた私は、大抵のことは動揺せずに対処する自信はあった。

「Ｗｈａｔ　ｈａｐｐｅｎｅｄ?（なにがあった?）」

意識を取り戻すと同時に、状況確認のために周りを見回す。
中東の砂漠にいたはず。
なのに、今目の前に広がるのは若葉の茂る木々。そして肌寒い。

オアシスか？先程の爆発でオアシスまで吹き飛ばされたのか？
しかし、オアシスが肌寒いというのはおかしい。
理解不能な状況に、心臓がきゅっと縮む思いがした。
それでも自分の状況を調べるために、わざとゆっくりと体を見下ろし、そして今度こそ悲鳴を上げた。

「Ｗｈｙ　ｄｏ　ｉｔ　ｂｅｃｏｍｅ　ａ　ｃｈｉｌｄ！？（なんで子供！？）」

何かの破片が掠ったらしく、右太腿と、左手脇腹を負傷していたが、そんなことは日常茶飯事だからどうでもいい。
動けないほどの重傷でもないし、私は人より治癒が早い。

問題なのは、体そのもの。
見慣れた自分のそれよりも、はるかに小さい手。
短い足。
低い視線は、身長が縮んだ事を示している。
着ていた砂色の戦闘服がぶかぶかで、下手をすれば脱げてしまう。

「Ｉｔ　ｂｅｃａｍｅ　ｉｔ　ｓｏ　ｗｈｙ　ｗｈａｔ！？（なにがどうしてこうなった！？）」

ああ、言葉すらもうまく話せない！

どうすべきかわからずに、その場で座り込んでいると、大地が振動しているのに気がついた。

何かが来る。

敵か？味方か？

座り込んでいては、いざという時に動けない。
ズボンは諦めて、上着の腕を捲り上げて手を出し、長すぎる裾を膝の位置までくるようにポケットにしまっていたロープをベルト代わりにして調整。
よし、これでなんとかいけるか？
次は身を隠す場所だが。

木の上に隠れるしかないかと、登りやすそうな木を見つけて登ろうと手をかけるが、子供の体になったせいか力が入らない。
これでは木に登れないじゃないか。
若干焦り始めた時、地響きかわすぐ近くまできた。

こうなったら、木の裏に隠れるしかない！
登るのを諦めて少しでも奥に隠れるために身を翻そうとした時、先頭を走る男とバッチリ目が合ってしまった。

しまった！！

慌てて逃げようとすると、右足に激痛が走り、バランスを崩して今度は左脇腹に痛みが走って息が詰った。
そのままその場に座り込んで、激痛をやり過ごすが、落ち着く頃には当然私の存在は男たちに発見されていた。

「なんでこんなところにガキがいるんだ？」
「この辺りには人は住んでいないはずですが・・・。」

戸惑う様子の男たちは、日本語を話している。
日本の軍か?それにしては、恰好が・・・。

見上げれば、馬に乗った日本のサムライの様な恰好の男たちが、訝しげに私を見下ろしていた。
サムライの様な、というのは、鎧や刀をさしている辺りはサムライっぽいのだが、リーゼントに、モヒカン、スキンヘッドなど、私が以前学んだ日本のサムライとはかけ離れたヘアースタイルの男があちこちに見えたのだ。

なんだ?新興勢力か?
こんな奴ら、見たことも聞いたこともないぞ?

「Ｉｓ　ｔｈｅｒｅ　ａ　ｓａｍｕｒａｉ　ｉｔ　ｉｓ　ｗｈａｔ？（なんでサムライがいるの?）」

呆然と呟いた言葉を聞き取った隻眼の男が一瞬驚いた後、喜色を浮かべた。

「Ｈｅｙ，ｙｏｕ!Ｃａｎ　ｙｏｕ　ｓｐｅａｋ　Ｅｎｇｌｉｓｈ？（おまえ、南蛮語が話せるのか?）」

うわ、英語まで話すサムライなんて聞いたことない。
何が起こってるんだ?ここはどこ?こいつ等何者!?

ある村で何やら不穏な動きがあると黒脛巾組からの報告が上がり、がっつり釘を刺してきた帰り道で、木にしがみついている五つか六つくらいのガキを見つけた。
春が来たばかりのまだ薄ら寒い山の中で、ガキ一人で何をしているんだ？
ある程度近づくと、こちらを振り返ったガキと目が合った。
そして、慌てたように動き出したとたん、躓いたのかその場にうずくまった。

「なんでこんなところにガキがいるんだ？」
「この辺りには人は住んでいないはずですが・・・。」

馬に跨ったままガキを見下ろし、誰にともなく尋ねれば、背後に控えた小十郎が戸惑ったように答えた。
囲むオレらを見回して、ガキも戸惑いの表情を浮かべる。
まじまじ観察していると、ガキが口を動かした。

「Ｉｓ　ｔｈｅｒｅ　ａ　ｓａｍｕｒａｉ　ｉｔ　ｉｓ　ｗｈａｔ

？（なんでサムライがいるの？）」

は？今こいつ、南蛮語を話したか？
おもしれぇ！こんなガキの癖に、流暢に発音してやがる。

「Ｈｅｙ，ｙｏｕ！Ｃａｎ　ｙｏｕ　ｓｐｅａｋ　Ｅｎｇｌｉｓｈ？（おまえ、南蛮語が話せるのか？）」

丸い目がさらに丸くなった。
おいおい、目が落ちそうだぜ？

馬を下りて、うずくまったまま動かないガキの側に行くと、血臭がした。
「怪我したのか？」
様子を見ようと手を伸ばすと、ガキはビクッと震えて身を硬くした。

「Ａｈ～、傷を見るだけだ。怯えんな。」
「あなた、てきじゃないの？」
「敵？お前、襲われていたのか？」
「ううん。てきのところにいくとちゅうで、ばくはつにあったの。」
「Ｗｈａｔ？爆発？」

爆発って、お前！
慌ててガキの着ている妙な着物を捲りあげれば、右太腿に酷い裂傷があった。

まだ付いたばかりの傷のようで、血が止まってねぇ。
背後で様子を伺っていた小十郎が息を飲み、慌てて後方にいる奴に布と薬を持ってくるように命じた。

「痛くないのか?」
「だいじょうぶ。なれてる。」
「こんなもんに慣れるんじゃねぇよ。ほら、治療するから、これを脱がすぞ?」
小十郎がガキに一応の断りを入れて、着物を脱がせると、ガキは大人しく従った。
「っ!腹もか。」
「ないぞうまではいってないから、ちがとまればもんだいないよ。」

おいおいおいおい、どんなガキなんだよ、こいつは。
大の大人でも泣き喚くような大怪我なのに、泣くどころか悲鳴一つ上げやしねぇ。

「ねぇ、ここはどこ?あなたたち、さむらいにみえるけど、なんでそんなかっこうをしているの?」
貧血なのか青ざめた顔色のガキが、オレや後ろの連中を見ながら恐る恐る聞いてきた。

「お前、ここがどこだか分かってなかったのか?ここは奥州だ。オレはその奥州筆頭、伊達政宗だ。Ｙｏｕ　ｓｅｅ?」
「おうしゅう?・・・・・・・え?・・・・・・・おうしゅう?」
きょとんとした後、強張って、そして愕然となった。
「おうしゅうって、にほんのむかしのちほうのなまえだったよね・・・。そして、さむらい・・・。」
「おい?大丈夫か?」

真っ青になってブツブツ言い出したガキは、声をかけるとがばっ！！と勢い良く顔を上げた。
「いまなんねん！？」
「あ？天正１３年だろうが。」
「て、てんしょう・・・。ああ、だから、さむらい。でも、りーぜんとはないよ・・・。うん。ないない。」

治療が終わった小十郎も気味の悪いものを見る目でガキを見下ろしていたが、そんなことに気づくこともなくひたすらぶつぶつ何事か言っていた。
「そうか。なるほど。」
「何一人で納得してんだ？」
「うん。わたし、なんでかしらないけど、ここにとばされてきたんだ。」
「Ｗｈａｔ？」
「え？あ、なんでもないよ。じぶんのたちいちをりかいしただけ。」

こいつ、年齢の割には小難しい単語を使って話しやがるな。
南蛮語を話す辺りも、ただもんじゃねぇ感じだ。

「お前、どこから来たんだ？」
治療を終えた小十郎が、服を着せてやりながら問えば、ガキはうーんと首をかしげた。
「どこといわれても・・・。」
「帰る家はあるのか？」
「ない。とりあえずきょうはこのあたりでのじゅく。」
「このあたりって、正気か？」
「だいじょうぶ、サバイバルはなれてるよ。」

けろっとした顔で答えると、ガキは立ち上がって小十郎に頭を下げた。
「てあてしてくれてありがとうございました。んじゃ、そろそろいくね。」
「あ、ああ・・・。」
小十郎、困ったような顔でこっちを見んじゃねぇよ。

しかたねぇ。オレもコイツには並々ならぬ興味があるからな。

立ち去ろうとするガキを問答無用で抱き上げそのまま馬に飛び乗った。
「え?えええええええ!?」
「怪我が治るまで、オレのところに来い。Ｙｏｕ　ｓｅｅ?」
「で、でも・・・!」
「でももクソもねぇ。オレが決めた。お前に拒否権はねぇ。」
「いいの?」
「同じことを言わせんな。それより、お前名前は?Ｗｈａｔ　ｉｓ　ｙｏｕｒ　ｎａｍｅ?」
「つき。」
「つき?」
「そう。ｍｏｏｎ」
ああ、月か。
「ツキ、しっかり掴まってろよ?Ａｒｅ　ｙｏｕ　ｒｅａｄｙ?」
「ＯＫ」
きゅっと小さな手でオレの腰にしがみつくツキを抱きしめ、馬の腹を蹴った

「ちょ、て、てばなしうんてんあぶないいいいい！！」

聞こえねぇな！

1　出会い（後書き）

お読みいただきまして、ありがとうございました。

2　お世話になります

戦場で数々の危険をおかし、尚且つ危機一髪的な目にも沢山遭遇してきたけど、馬の手放し操縦はそれ以上の恐怖だった。
もう、政宗の馬には乗らない。

手放し操縦、ダメ、ゼッタイ。

貧血と荒い運転でぐったりな私を、手当をしてくれた男が慌てて抱き上げながら、政宗に小言を言っている。
そうだー、もっと言ってやれー。

連れてこられたのは、こじんまりとした感じの城だった。小田原城を昔一度だけ見たことがあるけど、それよりはかなり低い。
城ってもっと高くてきらびやかなイメージだったけど、実際はそんなでもなかったのか。

そんな感想を抱きつつ部屋に通されると、女の人が先に知らせを受けていたのか待ち構えていた。
Ｗｏｗ、日本美人って感じの綺麗な人だ。
ここのところ、アメリカやら中東の濃い顔ばかり見ていたから、和風美人に少し尻込みをしてしまう。

子供の姿になってから、どうも私らしくないというか、自分の感情をコントロールできなくなっている。

汚れを拭き取ってもらって、着物を着せてもらうと、また別の部屋に連れて行かれた。

「お連れしました。」

襖越しに連れてきてくれた女の人がいうと、中から政宗の声で中に入る様に言われた。

「ご苦労だったな、喜多。」

中に入ると、着物姿になった政宗と、さっきの男が座っていた。

男の人の横に私が座ると、政宗はわずかに首を傾けた。

「Ａｎ？なんで、女の格好なんかさせてんだ？」

政宗、今心底不思議そうに聞いたね。

まぁ、この時代ショートヘアーの女の子はいないだろうから、勘違いされても仕方がないけど、さっき思いっきり真っ裸の上半身を見られたんだけどなぁ。

子供だから、胸見ただけじゃわかんないか。

この女の人は何も聞かずともわかったんだけどなぁ。

「殿、もっと見る目を養いなさいませ。」

ため息混じりに女の人が言えば。

「おい、小十郎、お前わかったか？」

若干罰が悪そうに頭を掻いた政宗が、隣に座ってた男の人に矛先を振った。

「もちろんですとも。」

お兄さん、目が泳いでるよ。

私を介抱してくれた男の人は片倉　小十郎と名乗り、着物を着せてくれた女の人が喜多さんといって、小十郎の異母姉であり、政宗の乳母なんだってことを教えてくれた。
そしてここは米沢城で、政宗はここで一番偉い人ってことも教えてくれた。

多分、隻眼の伊達政宗ってなると、あの伊達政宗って間違いないんだろうけど、あのリーゼントやモヒカンは戦国時代の末期であってもあり得ない。
って、ことは、ここは、過去の時代ってわけでも無さそう。
異世界？そんな非現実な話、あり得ない。

あり得ないけど、私は子供の姿に戻ってて、ここにいる。
もしかしたら、実際の私はあの爆発に巻き込まれて、意識不明の重体とかなのかもしれない。
ま、どちらでも、今起こってることをどうにか出来るわけでもない。
なるようになるしかないか。

「Ｒａｔｈｅｒ！（それよりも！）ツキ、お前のことを教えろ。」
喜多さんに非難の眼差しを向けられて、タジタジだった政宗が、それを振り切るように荒っぽく言った。
誤魔化したな。まぁ、いいや。

「わたしはここではない、べつのせかい、べつのくにから、どういうげんいんかはわからないけどここにきた。ここにくるちょくぜんは、さばくでてきとこうせんちゅうのなかまをたすけるために、はしっていたんだけど、じらいかばくげきかはわからないけど、とにかくばくはつにまきこまれたので、きがついたら、あのもりにいたの。」

別に隠したり誤魔化したりする必要性は感じなかったし、追い出されてもなんとかなると思ったし、あったままを正直に話した。

政宗はしばらく何か考えた後、胡坐を崩して立て膝で頬杖をついて私を見下ろした。

「南蛮から来たってことなのか？」
「Ｎｏ」
「お前がいた場所に戻ることはできるのか？」
「たぶん、むり。」
「お前の世界では。その歳で戦にでるのか？」
「そういうこもいる。わたしは１０さいのころからだけど。」
「Ｗｈａｔ？ツキはまだ６つにもならねぇ位じゃねぇか。」
「ああ、みためはそうなっちゃったんだけど、なかみは１７さいだよ。」

ん？あれ？もしかして、ここだと年齢は数え年でカウントするのか？
「ちょっときくけど、うまれたばかりのあかんぼうって、０さい？１さい？」
「１歳だろうが。なんだ０歳って。」
「わたしのせかいでは、うまれたときは０さい。まるまるいちねん

たったら1さいってかぞえるの。って、ことは、こちらだと、わたし19さいだ。すごい、いっきにとしをとったきぶんだ。」

ちょっとまて、6歳に見えるってことは、私見た目は4歳って事か？

そりゃ、しゃべるのも体を動かすことも難しいはずだ。

参ったな。4歳にサバイバル生活できるかな。知識はあっても、体力とかがあやしい。

なんて考えているうちに、政宗がひょいと私を抱き上げた。

「19って、その形でオレと同じ歳か？」

にやにや笑っていた。

信じてないな。・・・まあ、逆の立場だったら私も信じないが。

「ま、ツキが行く当てもないことはわかった。しばらくここにいろ。その傷が治ったら、里親探しもしてやる。喜多、ツキの面倒を見てやれ。小十郎いいな？」

「受け賜りましてございます。」

「承知。」

二人が手を付いて頭を下げると、政宗は満足げに頷いた。

どうやら、私はしばらくここに置いて貰えるらしい。

「ありがとう、まさむね・・・・・さま？」

なんて呼んだら良いのかいまいち分からなくて、間があいた挙句、疑問形になった。

そもそも、英語生活が長かったから、敬語とか敬称とか苦手なんだよ。

手招きをされたので、立ち上がって政宗の前に立つと、膝の上に座らせられた。
「政宗でいい。お前はオレの客だからな。」
「うん。」
抱っこされた状態で、こっくり頷けば、大きな手がワシワシと頭を撫で回した。
頭がもげる！

ここに来て一番最初に通された部屋が、私の部屋となった。
障子を開ければ、見事な日本庭園が見える。

食事も終わり、喜多さんが布団を敷いてくれて、おやすみなさい。
・・・はやいよ。まだ日が沈んでそれほど時間がたってないよ。
完全に子供だと思われてるんだな。

縁側に出て、傷を庇いながらゆっくり膝を抱えて座った。
細い三日月が西の空に傾き始めている。
満月にはまだ日数がかかるか・・・。
それでも、月の光を体に帯びる事によって、怪我をしている部分の痛みが和らぐのを感じた。

私は月の一族の最後の生き残り。
両親も兄も殺された。
もう月の名を継ぐのは私一人。

異形の力は、正にも負にもなる。
家族は決してこの力を、人を傷つけることには使うなと教えてきたけれど。

両手を月に透かすように天に向ける。
血に染まった両手。
私は家族とは違う道を選んだ。
もう戻ることはできない。

背後で何者かがこちらを伺っている気配がする。
戦国なら、忍者かな。
なんて思いつつも、その場から動かずにじっと月を見上げていると、気配が動いた。

「春とはいえ、まだ冷える。いつまでもそんなところにいたら風邪を引くぞ?」

ゆっくり振り返れば、藍染の着物を着た政宗が部屋の入り口で立っていた。
「うん。」
頷きはしたものの、部屋に戻る気にはなれず、再び月に視線を戻した。

「何を見てる？」
私の横に腰を下ろして、胡坐をかくと、政宗はひょいと私を抱き上げて足の上に乗せた。
「Ｏｈ、ずいぶん冷えてやがるな。」
傷を思ってか、ふわりと軽く腕が回されて、私も抵抗せずに背中を政宗に預ける。
「まさむねはあったかいね。」
「・・・・・・そうか。」

何か私に用事があったのかと思ったのに、政宗はしばらく黙ったまま、私と一緒に月を見上げていた。
背中の温もりと体に伝わる鼓動に、だんだん瞼が重くなってきて、やがて意識がとぎれた。

初めての場所でツキが心細い思いをしていなければ良いと様子を見に来て見れば、縁側でぼーっと月を見上げて座っていた。

その小さな体を淡い光が包んでいて、ツキが手を天に向ければ尚一層光が増した。
普通の子供ではないと思ったが、もしかしてこいつも・・・。

「春とはいえ、まだ冷える。いつまでもそんなところにいたら風邪を引くぞ？」

声をかければ、特に驚いた様子もなくゆっくりとこちらを振り返った。
幼い顔には表情がなく、まるで人形のようだ。
「うん。」
こくりと頷いたが、その場から動く気はないらしく、再び視線は外に向けられた。
「何を見てる？」
言いながら隣に座り、胡坐をかいた足の上にツキを乗せてやれば、いつからここにいたのか、小さな体はすっかり冷え込んでいた。
「Ｏｈ、ずいぶん冷えてやがるな。」
まだ傷も痛むだろう。
なるべく傷に当たらないように抱きしめてやれば、大人しくもたれかかってきた。
本当に小さな体だな。
この城にコイツくらいのガキはさすがにいないから比較はできないが、かなり小さいほうだろう。

「まさむねはあったかいね。」

独り言のように呟かれた言葉に、一瞬どう言葉を返そうか、悩ん

だ。

「・・・・・そうか。」

結局それだけ言うと、会話は途切れた。

昔、まだオレが梵天丸と呼ばれていた頃、小十郎にこうしてもらっていたことがあったな。

言葉もなく、ただ二人で月を眺めていたことが。

あの頃自分が感じていたはずの感情を思い出そうとしたが、もう思い出せない。

いろいろなことがあって、必死に生きてきた日々に埋もれてしまったんだろう。

それを寂しいとか悲しいとか思うほどガキじゃねぇが、たまにはこうして思い出そうとするのも悪かねぇな。

腕の中の小さな体が重くなったような気がして覗き込めば、いつの間にか寝ていた。

起こさないようにそっと持ち上げて、布団に寝かせた。

「Ｇｏｏｄ　ｎｉｇｈｔ　ツキ。」

2　お世話になります（後書き）

お読みいただきまして、ありがとうございました。

3　人形の夢（前書き）

流血、暴力描写を含みます。苦手な方は回避願います。
少し短めです。

3　人形の夢

人の気配を感じて、目が覚めた。
体は動かさず、目だけで辺りの状況を観察する。
見慣れない天井に、見慣れない部屋。
私なんでここにいるんだっけ？

覚醒しきれない頭のまま、人の気配が近づいてくる襖を見つめた。
すっと襖が動いた瞬間、布団を跳ね除けて起き上がろうとしたら、脇腹に痛みが走り息が詰まった。
「ツキ？・・・おい！大丈夫か！？」
痛みのあまり、蹲ったまま悶絶している私に、慌てて走りよってきた小十郎を見て、ようやく昨日の出来事を思い出した。

「っ、いったぁ・・・。きずのことわすれてた。」
昨夜月光浴で痛みは半減したものの、傷自体が癒えている訳ではなかった。
「おい、無茶はするな。」
ゆっくりと布団に戻されて、楽になった体に知らずため息が漏れた。
「こじゅろう、ありがとう。」
「いや。それより、顔が赤いようだが、熱でも出たか？」

そう言いながら伸ばされる手に、一瞬緊張が走った。
小十郎もそれに気が付いたのか、手がぴくっとなったけど、そのまま私の額に載せた。
「少し高いな。傷が熱を持ち始めたのかもしれねぇ。今日は一日ここで養生していろ。いいな？」
「うん・・・。ごめんね？」

面倒をかけてごめんなさい。
良い人だと分かっているのに、警戒しちゃってごめんなさい。

二重の意味を込めて言えば、小十郎は少しだけ笑った。
うわー・・・強面のお兄さんの微笑って破壊力すごいわー・・・。
熱がまた少し上がったような気がするよ。

「後で姉上に朝餉を運んでもらうから、それまでもう少し寝ていろ。」
「うん。」
ゆっくりと頭を撫でられて、私は目を閉じた。
ごつい手の割に、撫で方が優しくて気持ちいいな
子供がいるのかな。慣れてる感じがする。

二、三回撫でた後、小十郎は音もなく立ち上がって部屋を出て行った。

それにしても、昨日ある程度回復したと思ったのに、熱が出るなんて。
治癒が遅い。
元の世界なら、三日月でも傷がふさがって多少の痛みが残る程度だったのに。

包帯をとって見ないとわからないけど、多分まだ傷は塞がってなさそうだ。
子供の姿だからか？
それとも、世界が変わったから？

まだ小さかった頃は、確かに癒しの力はそれほどじゃなかった。

転んで怪我をしても、他の子よりは少し治りが早いって程度だ。
ちゃんと力をコントロールして自分のものにできたのは、いつ頃だったっけ。

浮かんだのは、1人の男。
私に力の使い方を教え、そして、家族を殺し、戦場で何度か戦った男。
もう、会うこともないだろう。
悔しく憎く思う気持ちの片隅に、解放されたような安堵感もある。

薄情、なのかな。
疲れた、なんて考えたりするのは。

うとうとしては、目が覚め、すこし起きてはまたうとうと・・・。
その間に、いくつもの夢を見た。
良い夢も、悲しい夢も、次々と流れるように。

大きな月が昇る夢を見た。
私はその月の下で、無心に舞を舞っている。
扇の要に結ばれた銀色の鈴がリンリンと揺れ動き、静かな夜に響いた。
その隣に、母が、父が、兄が現れ、共に舞う。

一族に伝わる、秘伝の舞。
蒼い月の昇る晩に、次代の宗主を選ぶための儀式。

やがて、月は小さな光と変わり、私の目の前に下りてきた。
手にしていた扇で受け止めれば、何の変哲もなかった白い扇は、冷たい青い光を纏った鉄扇へと変化した。

母はそれを見届けると、満足げに笑った。
父も兄も一緒に笑った。
扇はずしりと重く、そして冷たかったが、とても美しかった。

月明かりに照らされていた辺りが、一瞬にして暗闇に覆われる。
「やはりお前が、今代の蒼月（そうげつ）となったのか。」
暗い愉悦に歪んだ顔が突然現れた。

（いやだ・・・。この先は見たくない・・・。）

「お前に決まったのなら、もう他はいらないよ。」
にぃっと三日月のように細められた目は、狂喜しか宿してなかった。

叫ぶ間もなかった。
まず父が首の動脈を手にしていたナイフで深くえぐられ、血を噴出して倒れた。

鉄の匂いをした、暖かな赤いものが私の顔に飛んできた。

兄は眉間を銃で撃たれ、後ろに倒れた。

母を助けようと、飛びつこうとしたとき、後ろから羽交い絞めにされた。

「お前は見ていなさい。」

耳元で囁く声は、いっそ優しいくらいだった。

そして、母も銃で頭を撃ち抜かれて、絶命した。

「くくくっ、これでいい。これで、お前は僕と同じところに堕ちて来る。」

男は父の血に濡れた手で私の頬に触れ、嬉しくて堪らないというような表情をした。

「待っているよ?僕の蒼月。僕を殺しにおいで?」

なぜ?どうして?

あんなに優しかったのに。

あんなに大切にしてくれていたのに。

信じていたのに。

大好きだったのに。

ゆるさない。地の果てまでも追いかけて、追い詰めて、殺してやる。
その為ならば、なんだってやってやる。
私は、朔夜（さくや）お前を絶対に許さない。

目が覚めたとき、辺りはすでに夜だった。
熱は下がったようで、昼間だるかった体がすっかり元に戻っていた。
月明かりが差し込む場所に寝かされていたようで、傷ももう痛まなかった。

寝間着を脱いで、右の足とお腹に巻かれた包帯を外せば、ピンク色の新しい肉で傷が塞がれていて、もう動いても問題はなさそうだ。
寝間着をもう一度着なおして、試しにストレッチをしてみるが、痛くないし傷も開かない。
障子を開けて、昨夜と同じように縁側に出て月を見上げれば、昨日より太くなった三日月が昇っていた。

朔夜は今頃私が消えたことをどう思っているんだろうか。
ＸＸ０１ポイントで交戦中の敵兵の中に、朔夜もいたはず。

きっと私が巻き込まれた爆発を見ただろう。

もう、私をあの狂気の目で見ることはない。
私の中に、私の母を求める目で。
朔夜が母に思いを寄せていたことは、前から薄々感じていた。
母を愛し、母が愛した父を憎み。

私の師として家族と共に過ごしてきた日々で、朔夜は何を思っていたのだろう。
いつから、私を母に重ねて見ていたのか。

優しかった。温かかった。
朔夜がとても好きだった。
なのに。あの夜に一瞬で全ては消えてなくなった。

憎んだ。殺してやると、誓った。
朔夜が望んだとおり、裏の世界に身を堕とし、死に物狂いで力を見につけた。
朔夜を殺すために、関係のない人をたくさん殺した。
家族のためではない。
裏切られた自分が、朔夜を許せないと、叫んでいた。

7年。
全てを捨てて駆けてきた。
こんな結末は想像もしていなかった。
私か朔夜のどちらかが、もしくは互いが、自らの血に染まって息絶えるまで続くと思っていた。

私から憎しみを取ったら何も残らない。

糸の切れた操り人形になったみたいだ。

「・・・・・っ。」

見上げていた月が滲んで、涙が溢れた。

ぽたり、ぽたりと頬をつたって落ちる滴が寝間着を濡らすのを、どこか他人事のように見下ろした。

3　人形の夢（後書き）

お読みいただきまして、ありがとうございました。

4　告白

ツキが熱を出したと聞いて、執務の合間に何度か部屋を訪れてみたが、いずれも眠っていて喜多に追い払われた。
Ｓｈｉｔ！喜多はいつまでもオレをガキ扱いしやがる。

今日の執務も終わり、これならば文句はねぇだろと、小十郎を伴って部屋に来て見れば、喜多の姿はなかった。
おまけに、ツキもいねぇ！
二人で風呂にでも行ったのか？

「政宗様、庭に・・・。」
小十郎がわずかに開いていた障子を指した。
「また月見でもしてるのか？」
「また、とは？」
「昨夜も縁側に座り込んでやがった。」

障子を開けてツキの姿を探したが、縁側にはいない。
「どこいった？」
暗い庭で気配を探れば、隅に植えられた椿の辺りにいるようだ。
「小十郎、体が温まる様なもんをなんか用意して来い。」
「はっ。」

小十郎が部屋を出て行くのを見送ってから、庭に下りてまっすぐツキのいる場所に向かった。
「Ｈｅｙ，熱出してるくせに、こんなとこにいるんじゃねぇよ。」
膝を抱えて蹲ったまま動かないツキを構わず抱き上げれば、泣いているようだった。
「Ｗｈａｔ' ｓ　ｕｐ？　（どうした？）」

ぼろぼろ零れる涙を拭ってやりながら聞いたが、ツキはふるふる首を横に振るばかりだ。
相当前から泣いていたのだろう。
着ている寝間着の袖はびしょびしょに濡れている。

縁側まで戻って、ツキを抱いたまま掻巻で包んでやった。

「家に帰りたいのか？」

ふるふる

「どこかが痛むのか？」

ふるふる

「腹減ったのか？」

ふるふる

「怖い夢でもみたのか？」

こ・・・・・・ふるふる。

頷きかけたが、やはり横に振った。

「話す気にはなれねぇか？」

・・・・・・・・・・。

迷っているようだ。
しばらく視線があちこちを彷徨っていたが、きゅっと目を閉じ、そして開いてまっすぐ俺の左目を見た。

ようやく涙はとまったが、真っ赤に腫れた目元が痛々しい。

「わたしを、ここにねかせたのはまさむね？」
縁側に程近い場所に敷かれた布団を指差して、ツキが尋ねた。

その質問に、オレは自分の考えが正しかったことを感じた。
「ああ。」
「そっか・・・。」
ツキは一つ頷くと、オレの膝から下りて、掻巻を外した。
そして、廊下に通じる襖を見て
「こじゅろう、はいって？」

廊下で成り行きを窺っていた小十郎の存在に気が付いていたのか。
一瞬の間が開いて、険しい表情の小十郎が入ってきた。

「どうして俺がいるのがわかった？」
「それも、はなす。」

まずは冷えた体を温めろと、小十郎が持ってきたお茶を政宗が私の前に置いた。
「ありがとう」
湯気の昇る湯呑みを両手で持って、一口飲んだ。
口に含んだ瞬間、甘みが広がった。でも、後味はさっぱりとしていて、砂糖が入れられているわけでもないようだった。
「おちゃなのにあまい・・・。」
「甘茶だ。」
驚いてお茶を観察していると、警戒心で刺々しかった小十郎が苦笑した。

廊下にいた小十郎の気配を感じたからただ呼んだだけだったのに、子供らしからぬ事をしたために警戒心を持たせてしまった。
私は決してここの人たちに害を加えるようなことはしないのに。

「で、話してくれるんだろう?」
湯呑みを空ける頃合いを見計らって、政宗が促した。
「うん。」
さて、どうやって説明しようかな・・・。

見せた方が早いか。

「これを見て。」
寝間着の裾を払い右腿を見せた。
「・・・傷がふさがっている？」
小十郎が驚きの声を上げた。
あの生々しい傷を手当てしたのは小十郎で、たかが一日で治るようなものではないことを知っていた為の驚愕だ。

「たぶんまさむねはもうきがついているとおもうけど、わたしはふつうのにんげんではないの。つきのちからをあやつることができるんだよ。このきずも、つきのひかりをあびてなおしたの。こじゅろう、ちょっとかたなをぬいてみて？」
「お、おう。」
脇に置いていた刀を戸惑いつつ小十郎が抜けば、私はためらいなくその刃を自らの腕に走らせた。
「な！！」
慌てて小十郎が刀を腕から放し、政宗が私の腕を取りあげて、止血をしようとした。
「だいじょうぶ。みてて。」
思ったよりも浅い傷を二人に見せた後、障子を開けて腕を月の光にさらした。
「こうしているだけで、きずがなおるの。」
そういっている間に、血が止まり、ゆっくりと傷が塞がってかさぶたがのこった。
「ほら。」
「Ｓｏ　ｇｒｅａｔ！（すげぇな）」
「おお！」

完治とは行かないまでも、塞がった傷を見せれば、二人は目を見開いて私の腕を見つめた。

「と、まぁこれでわたしがふつうのにんげんではないってことは、わかってもらえたとおもってもいい？」
「確かに普通じゃねぇな。すげぇ力だな？」

え？なんでそんな羨望の眼差し？
ここは気味悪げに見るのがセオリーってもんじゃ？

政宗も警戒していたはずの小十郎も、すごいと感嘆はするものの、気味悪がる様子は一向に見られない。
見せた人は必ず恐怖を隠して、誤魔化し笑いを浮かべて逃げていったのに。

「なんて面してるんだよ。」
「え？」

苦笑している政宗に抱き上げられて、また膝の上に座らせられた。
ちょ、いいの？小十郎がまだ警戒してるんじゃないの？
焦って小十郎を見れば、どういうわけか小十郎も同じように苦笑している。

「そんな泣きそうな面をするな。」
泣きそう？私が？
「ふたりはわたしのちからがきもちわるくないの？」
「なぜだ？この世界で癒しの力を持つ人間なんて聞いたことがねぇ。お前しかできないことだ。Ｓｐｅｃｉａｌなことを誇りこそすれ、なぜ怯える？」

「みんなきもちわるいっていうの。」
こんな弱気なことを言うのは、いつ振りだろうか。

また滲む目尻を拭いながら、恐る恐る口を開いた。

「わたしのせかいでは、かがくがすべてで、こういうふたしかであやしげなことはいたんしされていたの。わたしはちゆのほかにもいろいろできたから、いちぞくのなかでもきみわるがられた。」

「他にとは？」

「こうげきされたときに、かべをつくってぼうぎょするとか、あとからだがうごきやすくなるようにきょうかしたりとか。」

外来語を使わずに説明するって難しい。

政宗たちも良く分からないって顔をしている。

これもやって見せたほうが早いな。でも、コントロールできるかな・・・。

「やってみせるね？できるかどうかはいまいち自信がないけど・・・。」

政宗の膝に座ったまま目を閉じて、手のひらを前に突き出してそこに意識を集中させる。

「Ｅｘｐａｎｄ　ｔｈｅ　ｓｈｉｅｌｄ．Ｌｅｖｅｌ　１０．（シールド展開。レベル１０。）」

そっと目を開けて見れば、青白い透明の膜が出来上がっていた。

おお、やればできる！

「これがぼうぎょのかべ。これくらいだととんでくるいしをはじくくらいしかできないかな。こじゅろう、なんかなげつけてみて。」

「いいのか？」

といいつつも、やる気は満々ですね。

後ろで政宗もすげぇと言いながら、シールドに触ろうと手を伸ばした。

「さわっちゃだめ。しびれるよ？」
と、警告してるのに、聞かずに触れてＯｕｃｈ！と手を振っていた。
かなり弱いものだから、びりって来るくらいだと思うけど、本気で張ったものに触れたら手が消滅しちゃうよ？
「だいじょうぶ？」
「ああ。このくらいなんでもねぇ。しかし、おもしれぇな。オレや小十郎の雷もこういうことができると戦略に幅が広がるかもな。」
一応声をかけてやれば、なんとも楽しそうな答えが返ってきた。
「？かみなり？」
「お前の話が終わったら見せてやるよ。この壁ももういい。」
言われて、シールドを解除。

弱いものとはいえ、張りっぱなしは結構疲れるんだよ。
でも、これで話はしやすくなった。

「このちからは、わたしのいちぞくにうけつがれていて、ははをそうしゅとしてひっそりといきていたんだ。わたしが１０さいのときに、つぎのそうしゅとしてわたしがえらばれた。」

さきほど見た夢を思い出し、痛む心を手を握り締めることでこらえる。
「そのばで、わたしのししょうであり、いとこでもあるおとこに、わたしいがいのすべてのいちぞくがころされた。」
握り締めた爪が手のひらに食い込んで、ぷつっと皮膚を破る感触がした。

不思議なことに、言葉は淡々と紡がれて物音一つしない部屋に消えていった。
「わたしはそのおとこにふくしゅうをするとちかい、このちからをみがいた。そしてそのおとこをおいもとめて、たくさんのせんじょ

うをわたりあるいた。だから、けはいをよむくらいのことはできるし、それいじょうのこともできる。たくさんのひとをころしたし、なんどもころされそうになった。」
「ツキ、もういい。」
政宗が静かに止めたけど、私はまだ話し尽してない。

「ここにくるちょくぜん、わたしはそのおとこがいるばしょにむかっていた。こんどこそ、さしちがえてもころすつもりだった。なのに・・・。ふくしゅうはもうかなわない・・・。」
「ツキ!!」
いきなり握り締めていた手を大きな手がつかんだ。
小十郎だ。
無理やり手を開かれたので何かと思ってみてみれば、血が流れていた。

「すまなかった。敵国の間者ではないのかとお前を疑った。」
「んーん。それがふつうだとおもう。こっちもふよういにけいかいをさせちゃってごめんなさい。」

こちらも謝れば、政宗が優しく撫でた。
「これで、ツキのことはわかった。そうだろ。小十郎?」

「はっ。唯一つ、疑問に思うことがございます。」
「なに?」
「ツキは10歳の時に襲名をしたと言っていたな?」
「うん。いった。」
「Ah~そういえば、昨日オレと同じ歳だとかも言ってたな。」
「うん。それもいった。」

じぃぃぃっと二人が私を見下ろした。

やっと信じる気になったのか？
「Ｈｅｙ，ツキ、お前の世界はその形で成人なのか？」
「そんなばかなことあるわけないでしょ。わたしだって、・・・そりゃ、へいきんしんちょうよりはたしょうちいさいけど、ちゃんとせいちょうしてたよ。」

うう、成長期に栄養剤中心の食生活だったせいか、１５０センチしかない私は、政宗たちにとっては子供とそう変わらないかもしれないけど。
「わたしだって、なんでこんなにちぢんだのかしりたいよ。うごきにくいし、バランスもとりにくい。ちからだって、こどものときにもどったみたいにコントロールがむずかしいし。」
「ま、焦らずとも、そのうち成長するだろ？少なくとも、元の姿になるまではここにいれば良い。」
政宗が言えば、小十郎も頷いた。

「ここにいろ。自分のやりたいことが見つかるまでは。」
「え？」
「やることがねぇっていうなら、オレの相手をしろ。Ｙｏｕ　ｓｅｅ？」
「は？」
「政宗様は目を離すと、すぐふらっとどこかに行ってしまわれる。ツキが監視をしてくれるならば俺も仕事がはかどる。」
「おい、小十郎！」
バツの悪い顔で小十郎に詰め寄る政宗。

・・・・。ここにいてもいいの？
あの時は、この時は、そういえばあの時に、と過去の問題行動を次々と暴露され、ほじくり返して小言を言われ、政宗のほうが子供に見える。

「・・・ふふっ」
二人のやり取りがおかしくて、笑いがこみ上げてきた。
「あはははは！！まさむねのかんしにんむね。ふふっ、りょうかい。おうけします。」
驚いたように私を見ていた二人も、やがて嬉しそうに笑って私の頭を代わる代わるなでた。

暗い眼をして自分の過去を語り、全てが果たされることなく終わってしまったと嘆くツキ。
居場所がないならここにいれば良い。
やりたいことが見つからないなら、見つかるまでオレの側にいれば良い。
初めて見せた笑顔が、もうこれ以上曇ることのないように。

「さて、ツキだけに手の内を晒させたんじゃ悪いからな。」

立ち上がって、ツキをつれて庭に下りる。
刀は一本でいいだろう。
渋い顔をしている小十郎の側を離れないようにツキに言い置いて、抜刀する。

「ＨＥＬＬ　ＤＲＡＧＯＮ！」

空に向けて放った一撃は、青い雷の竜となり、空に昇った。
よし。まぁ、こんなもんだろ。
刀を納めてツキを見れば、小十郎の服の裾をつかんだまま、目を見開いて硬直していた。

猫の子供みてぇな反応だな。
「どうだ？オレも気持悪い、か？」
はじかれたように顔を上げて、それから首が飛んでいくんじゃねぇかってくらいに横に振った。
「すごい！あんなことできるんだ！？」
「まぁな。」

ここまで素直に賞賛されて、悪い気分はしねぇ。
「どうやってやるの！？」
「まずは、「政宗様！！」・・・小十郎がだめだとよ。」
やり方を教えようとしたとたん、鬼の形相をした小十郎がオレとツキの間に入った。
「危険なことは教えてはなりませぬ！」
Ｏｈ、小十郎、お前はツキの父親かよ。

4　告白（後書き）

本日はここまでで。お付き合い頂きましてありがとうございます。

次話をうっかり抹殺してしまった＼（＾ｏ＾）／
これから思い出しながら頑張って書き直します（涙）

5　最終兵器彼女（前書き）

すんません。タイトルこれしか浮かばなかったです

5　最終兵器彼女

戦国時代の朝は早い。
一日は日の出と共に始まって、太陽が沈むと終わる。
殿様な政宗はともかく、働いている人たちはもっと早くから起きて動き出している。

私の朝も当然のように早い。
ここに来て１０日程がたち、最初は人の気配だけで飛び起きていたけれども、最近は起こされて目覚める。
今朝は喜多さんだ。

まだボーっとする頭を顔を洗うことで解消させ、着物に着替えさせてもらう。
本当は着物は着ようと思えば一人で着られるけれど、どことなく楽しげに着付けてくれる喜多さんに任せている。
私のいた時代と、ここでは微妙に着こなし方も違うみたいだし。

「今日は天気がよさそうね。そろそろ桜が咲く頃かしら。」
「そうだね。このじだいもおはなみってするの？」
自分で寝ていた布団をしまいながら尋ねれば、喜多さんはにっこりと笑って頷いた。
「しますよ。殿はそういう行事を大切にされる方ですから。」
「へぇ。」
「さ、片付いたら朝餉にしましょう。そろそろ殿も鍛錬を終えられる頃合でしょうし。」
良くできましたと頭を撫でられて、それから手をつないで部屋を出た。

喜多さんはなんとなく私の母と同じにおいがするから、安心する。
年齢もほとんど変わらなさそうだ。
優しいだけじゃなくて、時には政宗や小十郎すらも叱り飛ばす厳しさも見せるけれど、それも冷たくはないから好きだ。

他愛もない話をしながら廊下を歩いていると、前方からたくさんの人の気配と、二つの荒々しい気配を感じた。
それから、怒号と歓声が聞こえてきた。

「あら。今日の鍛錬は打ち合いでもしているのかしら?」
「え?ころしあいとかのまちがいじゃなくて?」
「いやだわ、ツキったら。」
クスクス笑っている場合じゃないよ、喜多さん。
結構すごい気だよ?

気配のするほうへ向かうと、広い庭に設けられた鍛錬場で、伊達軍の兵士のみんなが輪になっていた。

「ヒャッハー!」
「ハァ!!」

みんなの輪の中心には、殺気紛いの荒々しい気を発している、政宗と小十郎。
目付きがもう、なんというか・・・。

「ねぇ、きたさん、あのふたりけんかしてるとかじゃないんだよね?」
「もちろんですよ。鍛錬です。」
「えー・・・・っと、なんか青く帯電しているようにも見えるんだけど・・・。」

「鍛錬です。」
「・・・・・へぇ・・・・・。」

あ、兵士の一人が巻き添え食らって吹っ飛んだ。
衝撃派を食らったスキンヘッドが、モヒカンやリーゼントに担がれて運ばれていった。

「喜多様、お嬢、おはようございます！」
縁側で立っていた私たちに気が付いた兵士の一人が、輪の中から抜けてさわやかな笑顔を浮かべて近寄ってきた。
背景と表情が合ってなさすぎだよ。

「おはようございます。ねぇ、あれってどうしたの？」
「え？筆頭と片倉様ですか？いつもの鍛錬ですよ。」

マジか。マジで言ってるのか？
兵士の目を見ても、洗脳されているってことはなさそうだ。

私たちに気が付いてない政宗と小十郎は、ますますエスカレートして放電量を高め、ここにまで静電気が飛んできている。

肉眼では追いつけないほどの刃先のスピードって、どうなってるのさ。
「Ｅｎｈａｎｃｅｄ　ｄｙｎａｍｉｃ　ｖｉｓｕａｌ　ａｃｕｉｔｙ.（動体視力強化）」
小声で呟くと、目がほんのりと暖かくなって、見えなかった刃先が

良く見えるようになった。

二人ともすごい速さで刀を操ってる。
私が言うのもアレだけど、人の域を超えてると思うよ。
飛んでくる放電は、二人の刀がぶつかり合って弾き飛ばされているんだね。
うん。なんて迷惑なんだ。

「・・・きたさん。あれ、そろそろとめないとまずくないですか？」
ちらりと喜多さんを見上げれば、菩薩のような優しい表情をして私を見下ろした。
「ツキ、アレを誰が止められるというのですか？」

のぉう！！悟りを開いてる！！！
喜多さん以外の誰に、あの二人を止めることができると！？

伊達軍の最終兵器（リーサルウェポン）と噂される喜多さんが悟りをという現実逃避をしている中、政宗と小十郎はいったん距離を開けて、止まった。

終わったの？

そうほっとしかけた時、政宗の構えが変わった。
対する小十郎も政宗の動きを見て、刀を顔の横で構えた。

ぎゃー！！あれは絶対大技だ！！

「喜多様、お嬢！ここは危ねぇ！奥へ逃げてくだせぇ！」
側にいた兵士も気が付いたようで、慌てて私と喜多さんに奥に行くように叫んだ。

仕方ない、もし怪我をしたら、反省文１００枚書かせてやる！！

「Ｅｘｐａｎｄ　ｔｈｅ　ｓｈｉｅｌｄ．Ｌｅｖｅｌ　１００！！（シールド展開。レベル１００）」

なるべく大きな盾を思い描きながら、両手を前に出す。
男が私たちの前に立ち、自ら壁になってくれようとしたその後ろに、シールドを展開。

「ＨＥＬＬ　ＤＲＡＧＯＮ！！」
「鳴神！！」

ふざけんなぁぁぁぁぁ！！こんなん今の私のシールドで守れるか！！

ぶつかり合った雷同士が弾け飛び、私たちのほうまで飛んできた。
余波にもかかわらず、かなり重い衝撃が両手にかかった。
歯を食いしばって何とか耐え切ったあと、シールドは自然に消滅。
二人はどうなったと、砂煙の向こう側を目を凝らして見れば、無傷で立ってやがりましたよ。
しかも、まだ構えを解いてないし、更なる技を仕掛けようとかして

ないですよね？

「きたさん、あぶないからさがってたほうがいいよ。」

「ツキ？いまのは？」

戸惑う喜多さんを無視して庭に下りると、コキコキ首を鳴らして軽く準備運動。

よし。

「Ｅｎｈａｎｃｅｄ　ｂｏｄｙ．Ｓｔｒｅｎｇｔｈｅｎ　ｔｈｅ　ｉｎｓｔａｎｔａｎｅｏｕｓ　ｆｏｒｃｅ．（肉体強化、瞬発力特化）」

青い光が体を包み、纏わり付くようにぴったりと寄り添った。

なんとかいけそうだ。

こちらにまったく気が付いてない二人は、次の技を出そうと姿勢をわずかに低くした。

「Ｒｅａｄｙ・・・」

私も身構えてぐっと体を低くする。

「はぁぁぁぁ！！」

「うぉぉぉぉぉぉ！！」

どこの格闘マンガの主人公だよと、突っ込みを入れたくなるような雄叫びを上げて、二人は刀を構えたまま走り出した。

一気に終わらせてやる！

「Ｇｏ！！」

弾丸のごとく飛び出した私は、ちょうど二人がぶつかる地点に飛び込んだ。

ようやく二人は私の存在に気が付いたようだけど、技を出しかけていた体が、そう急に止まるものではない。

「なっ！」

「あぶねぇ！」

驚愕に目を見開く二人が、まるでスローモーションのように見えた。

瞬発力と筋力を上げたおかげで、二人の動きを楽に追うことができる。

まずは刀を握る二人の手を払って、刀を弾き飛ばした。

そのまま、右足を振り上げて小十郎の脇腹を上段回し蹴り。

着地したその足で、飛び上がって、左足で政宗の首を目掛けて中段回し蹴り。

小十郎には綺麗に決まったけど、政宗はとっさに腕でガードして蹴りを防いだ。

「・・・ちっ。」

小十郎が脇腹を抑えて膝をつき、政宗が腕で顔をガードし、私が華麗に着地したという図だけが、他の人の目に映った。
完全ではないとはいえ、この私の攻撃を防ぐとは、やるな政宗。

強化を解除して、ふっと息を吐く。
倒れるほどではないけど、大技連発は前よりも堪えるなぁ・・・。
なんて考えながら立ち上がろうとしたとき。

「Ｈｅｙ，今何しやがった？」

ワシっと頭を大きな手がつかんだ。
「いたい。ぼうりょくはんたい。」
頭を掴む手をペシペシ叩きながら振り返れば、凶悪な笑みを浮かべた政宗がこちらを見下ろしていた。

こわっ！！ただでさえ目付き悪いのに、その笑顔は禍々しさを更に強調してるね！
つか、う○こ座りで目線合わせるのもやめて。
似合いすぎてるよ。

「からだをきょうかして、しゅんぱつりょくをあげて、ふたりのあいだにとびこんだんだよ。いったでしょ？からだのきのうをあげることができるって。」
「そういえば、言ってたな。でもよ、あとちょっとで小十郎に勝つところだったのに、邪魔すんじゃねぇよ。」

頭から手を離して、面白くなさそうに拗ねる政宗。

これで良いのか？奥州筆頭・・・。

「あばれすぎでしょ？さっきスキンヘッドがはじきとばされてけがしてたよ？やるならわざなしで、ひとにめいわくかけないようにやりなよ。」

「それじゃおもしろくねぇだろ？」

「たのしけりゃてしたがけがしてもいいのか？」

「あいつらそんなにヤワじゃねぇよ。」

「はんせいしろよ！」

「・・・ツキ、おめぇオレにだけ口が悪いんじゃぁか？」

「きのせい。」

なんて、二人で話をしていると、横から冷たい空気が漂ってきた。政宗も気が付いたらしく、あん？と呟きながら横を見上げ、固まった。

私もつられて横を見上げ、同じく固まった。

そこにいたのは、ボコられた小十郎を片手でぶら下げた、満面の笑顔の喜多さんだった。

い、いっとくけど、私あそこまで小十郎をボロボロになんかしてないからね？

「殿、ツキ、お話があります。そこに正座なさい。」

怖い。政宗や小十郎さんなんてメじゃないくらい、怖すぎる！！。

慌ててその場に正座する私と政宗。

それを見て、喜多さんはうんうんと頷いた。

あ、なんか許してもらえそう・・・？
そう思った瞬間。

「貴方たち、いい加減にしなさい！！」

カッと目を見開いて叫んだ喜多さんは、阿修羅そのものでした。

それから小一時間ほど、延々と喜多さんの説教は続いた。
途中で意識を取り戻した小十郎も加わって。

暴れまくっていた二人は、大人としての限度と常識を弁えろと懇々と説教され、止めただけなのに私まで危ないことをしたと一緒に怒られた。

ようやく説教から開放されて、遅い朝ごはんを食べる頃には、政宗も小十郎も口から魂が抜けかけていた。

喜多さんが最終兵器（リーサルウェポン）だという噂が本当だということを身をもって実感した朝でございました。

もう、喜多さんにだけは絶対逆らいませんとも。

5　最終兵器彼女（後書き）

お読み頂きまして、ありがとうございました。

6　歓迎会（前書き）

未成年の飲酒は法律で禁じられています。お酒は二十歳になってから！です。

6　歓迎会

朝から大騒ぎをして、喜多さんに私の力について説明をして、朝ごはん食べて、仕事をしている政宗が逃げ出さないように監視をして、ついうっかり昼寝していたら一緒に政宗まで添い寝してて小十郎に二人して小言を言われ、また仕事して、私だけまたうたた寝して、気が付いたら夕焼けだった。

「おおう、こうしていちにちをふりかえると、なんのみのりもないよ・・・。」

ひとり残された政宗の部屋で呆然と赤く染まる空を眺めた。

喜多さんは私の力について少し驚いたものの、政宗や小十郎という能力者がいるせいか、あっさり納得してくれた。

傷の治りが早かったことも、それで納得したらしい。

ホント、前の世界では考えられないほど、みんなに受け入れられているよなぁ。

良く寝たせいか、朝力を使ったにもかかわらず、絶好調と言っても良いくらいに体が軽い。

少し運動でもしないと、夜眠れなくなりそう。

でもなぁ・・・。小十郎がなぁ・・・。

ちょっとでも着物の裾を乱すと、小言が飛んでくるんだよなぁ・・・。

リーゼントがいるんだから、ズボンとかないのかな。ついでにTシャツも。
着物でするスポーツっていったら、羽子板か？鞠つきか？
政宗相手してくれないかな。

・・・いや、やめとこ。間違いなくデスマッチになるな。

それにしても、政宗どこいっちゃったんだろ。
誰かしかが必ずそばにいたのにみんな居なくなるなんて、なんかあったのかな。
人様の家で勝手にうろついていいかもわからないしなぁ。

うーむ。とりあえず片付けでもしておこうかな。

書き損じてぐしゃぐしゃに丸められた紙をゴミ箱っぽいカゴにまとめて、散乱した本をタイトル順に並べてみた
あ、あいうえお順じゃなかった。イロハだ。
家に先祖代々の書物とかがあって、容赦ない古文書を小さい頃から読まされていたので、ミミズがのったくったようなも難なく読めるんだけど、読めるなんて言ったら、何をさせられるかわかったもんじゃない。
この前なんか華押を私に押させようとして、小十郎に大目玉を食らっていたし。
うお、これ収支報告書じゃん。なんでこんな下のほうに埋められてるのよ。

わざと一番上に置いといてやれ。

ごっちゃごちゃだった部屋がなんとか見栄えよくなった頃、廊下に人の気配がした。
と、思ったら、スパーン！と小気味の良い音を立てて襖が開け放たれた。
「梵！おっまたせ～！・・・・・って、あれ？」
政宗と同じ年齢くらいの男が、満面の笑顔を浮かべて飛び込んできたが、部屋の真ん中で書簡を政宗が嫌いな仕事順に並べていた私を見て首をかしげた。
「あれ？ここって、梵の部屋だよね？君だれ？」
「ぼんっていうのがだれのことかはわからないけど、ここはまさむねのへやだよ。」
「そう、その政宗ってのが、梵なんだけどさ。梵を呼び捨てにする君は、一体何者？」
わずかに警戒心を見せる男に、そっちこそ誰さ？と思いつつも態度からここの人だろうと推測して答えた。
「わたしはつきです。いそうろうです。」
ついでにぺこんと頭を下げれば、男も
「ああ、君がツキか。梵から聞いてるよ。俺は伊達成実だよ。」
と、警戒心をといてぺこりとお辞儀した。
・・・名前を言っただけで、警戒を解かれたのは初めてだよ。
城主の部屋で一人で書類をいじっていた部外者が居て、なんでもっと警戒心を抱かないんだ？
大丈夫か、この城のセキュリティ。

なんて内心で心配をしている私を他所に、成実は部屋をキョロキョロと見回した。

「で、梵はどこ？」
「しらない。ねておきたらだれもいなかった。わたしもちょっとこまってる。」
「むぅ。じゃ、一緒に探しに行こうか？」
「うん。」

二人で手をつないで自己紹介をしながら、城の中をうろうろ。
成実は大森城ってお城の城主を任されてるらしくて、何時もはそこに居るんだけど、今日は政宗に呼び出されたんだって。
米沢はともかく大森城ってどこさ。
馬で一刻くらいだって言ってたけど。
もう少し成長したら、馬の練習して、私も外に出てみたいなぁ・・・。
そのうち政宗に相談してみよう。

なんて思っていると、良い匂いが漂ってきて、自然と足がそちらに向かった。
よく兵士のみんなが集まってご飯を食べたりする広間から漂ってくるようで、膳をもった女中さんたちが出入りをしている。
「ゆうげのじゅんび？」
それにしては量がハンパない気がする。
「いや、違うな。今日は宴会をするみたいだ。」
やりぃっ！と喜ぶ成実。

宴会か・・・。一体どんな様相になるんだろ。
まるで暴走族の乱闘のような騒ぎになるんだろうか・・・。

それはそれで、ちょっと見たい。

「ツキ？」

夕日を背負ってクロスカウンターな政宗と小十郎を想像してニヤついていると、ちょうど広間から小十郎が出てきて、怪訝そうな顔をした。

あう、おもいっきりにやけ顔を見られた。

「政宗様がお前を探していたが、成実といたのか。」

「うん。しげざねがまさむねをさがしてるっていったから、いっしょにさがしてたの。」

ね？って成実を見上げれば、そうそうと頷き返してきた。

「まぁいい。まもなく始まるから、お前らも中で待ってろ。」

顎で広間を示されて、恐る恐る中を覗いてみると、ヤンキー集団が所狭しと座っていた。

うわぁ。むさくるしいなぁ。

隅のほうで大人しく待ってるか。

成実に手を引かれて中に入ると、何人かが気が付いたらしくお嬢ぉー！と叫んで手を振っていた。

「大人気だねぇ。」

「ははは・・・どうも。」

一番の上役が来てないのに、飲み始めてる連中もいるよ。

いいのか？

なんて思っていると、目の前で成実も手酌で盃にお酒を注いで煽り始めた。

「んまーい！やっぱり酒はうまい！」

「まだえんかいはじまってないのに、のんでいいの？」

「え？大丈夫！梵はそんなこと気にしないよ！それより、ツキちゃんも飲む？」

くいっと盃を差し向けられて、ちょっと迷った。
いや、私お酒大好きなんだよねぇ。日本酒とかもう最高。
飲みたい。飲みたいけど・・・・。
「なーんてね。子供にはまだ早い早い！」
迷っているうちに、盃を引っ込めて、再び手酌で飲み始める成実。
・・・・。おのれ。この恨み晴らさずに置くべきか。おぼえてろよ？

「ここにいたのか。」
ひょいと抱き上げられて、びっくりして振り返れば、苦笑いをした政宗がいた。
「うん。おきたらだれもいなくて、しげざねがきたからいっしょにまさむねをさがしていたんだよ？」
「Ｓｏｒｒｙ．良く寝ていたから、もう少し寝かせておこうかと思ってな。」

筆頭コールに沸きあがる広間を、私を抱いたまま突っ切り、一番の上座に座った。
「Ｈｅｙ，ｇｕｙｓ！Ａｒｅ　ｙｏｕ　ｒｅａｄｙ？」
にやりと笑う政宗。

「「「「ｙｅａａａａａａｈ！！」」」」
ノリが良いなぁ・・・。

「今夜はツキのｗｅｌｃｏｍｅ　ｐａｒｔｙだ。お前ら、派手に楽しめよ！？」
「「「「「「「ｙｅａａａａａａａａａａｈ！！」」」」」」」
はい？私の歓迎会なの？これ。
「Ｌｅｔ＇ｓ　ｐａｒｔｙ！」
「「「「「お嬢、ヨロシク！！！！」」」」」
「あ、よろしくおねがいします。」
よろしくが、夜露死苦って聞こえたのは気のせいだよね。

かくして、野郎共の野太い歓迎の声と共に、歓迎会という名の飲み会がスタートした。

小一時間ほどもすると、みんな程よく酒が回ってきて、あちこちで泥酔する人や、楽しくなっちゃったのか踊り出す人やらでカオスだ。
政宗の横でご飯を食べていると、モヒカンが現れて問答無用で私を抱き上げて肩車をした。
食べたものがリバースしちゃうよ！！

そのまま仲間のところまで連れて行かれ、意味不明な盛り上がりに巻き込まれた。
酒が入ってるお前らは良いよな！

素面な私にはついていけないよ！

「今朝の筆頭と片倉様の間に割って入った技凄かったな！どうやってやるんだ？」

「どりょくとこんじょう。」

適当に答えたのに、モヒカンは酔っ払っているらしくて、

「そうか！俺もがんばるぜ！！」

と感動していた。

ま、努力するのは悪いことじゃないから、頑張れ。

できたら足軽から大将になれるよ。

生温い目で酔っ払いどもを見守っていると、背後からベロベロに酔った成実が、がばぁっと抱きついてきた。

「ツキちゃ～ん！楽しんでるぅ！？」

「おまえほどではないがな！」

「あはは～、子供って肌がすべすべだねぇ。」

すりすりと頬擦りされて、更に強い力で抱き潰されそうになる。

ぐえ！マジで痛い！

「ちょ、いたい！ばかぢからでだきつかないで！」

「ツキちゃんはかわいいなぁ～。こんな子供が俺もほしいぃ～～。」

「ぎゃー！！はなれろー！」

酒臭い顔でキスをしようとする成実を全力で拒否するが、大人の男の力には到底敵うはずがない。

「まさむねぇぇ！！へるぷ！！へるぷぅぅぅぅ！！！」

ごすっ！！

鈍い音がして、成実が後ろに倒れるのと同時に、ひょいっと抱き上げられて我に返ったときには政宗の首にしがみついていた。
「Ｈｅｙ，成実。ちょーっと悪戯が過ぎるんじゃねぇか？」
「うう、梵手加減してよね。」
「Ｓｈｕｔ　ｕｐ！ツキが穢れるだろうが。」
「ひどい！梵ひどいよ！」
「しげざねこどものまえに、もっとちからかげんをまなばないと、まずおよめさんがこないよ？」
「がーん！」

打ちひしがれる成実を放置して、政宗は小十郎の待つ上座へと私を抱っこしたまま戻った。

最近抱っこされ慣れてきたなぁ・・・。

元の場所に戻った政宗の胡坐の上に座ったまま、再び食事を再開。
なんでここなんだ？
私の席はすぐ隣だったはずなのに。
降りようとすると、政宗に押さえられるので、もう諦めというか開き直りの境地で食べてます。
これ、子供の姿じゃなくて、元の姿で想像したら、恥ずかしくて死ねるよ・・・。

子供デヨカッタナァ・・・。

それにしても、さっきからいいペースで二人とも飲んでる割には、顔色一つ変わらないな。
つか、とってもおいしそうですね！飲みたいですよ！
うまい食事にうまい酒と来たら、もう最高だと思いますよ。
ここの食事、ほんとに美味しいんだよね。野菜とか味が濃くてさ。味付けもいいし。
うっかりすると体重が増えそうで怖い。

「ああ、酒が切れましたな。ただいま用意させます。」
「頼む。」
小十郎は女中さんたちが動き回っているところに危な気なく歩いて行った。
「こじゅろうもまさむねもおさけつよいねぇ。おいしい？」
「おう。お前も飲んでみるか？」
と、なみなみと酒の入った盃を差し出された。

さっきは成実にしてやられたから、今回は考えることもせずに受け取り、一気にあおった。
芳醇な香りでも、爽やかで飲みやすい飲み口。
いい酒飲んでやがるな！
喉を通れば、胃の辺りがかぁっと熱くなり、くくぅっと声が漏れる。
「お、おい、ジョークのつもりだったのに、飲みやがった！」
んまーい！
久しぶりの日本酒うますぎっ！

どいつもこいつも、子供だからって見せびらかすだけで、自分たちばっかり楽しみやがって。
私も飲ませろ！
「政宗さま！なにしてらっしゃるんですか？！」
徳利を手にした小十郎が帰ってきて、額に青筋を浮かべている。

「おいしー！たんれいからくちうまうま～さいこ～！」
「お、おい、ツキ？」
心のままに叫べば、小十郎が戸惑ったように呼んだが、気にしなーい。
もっと飲ませろ～足りないぞ～

「こじゅろう、もっとちょうだい？」
上目遣いでお願いして見たけど、駄目だと怖い顔で言われてしまった。
ちぇっ、だめかぁ。
子供の体のせいか、ほんのわずかの酒量でも、顔が火照っているのがわかる。
「あれ？ツキちゃんどうしたの？」
小十郎の後ろから成実が顔をだした。
おでこがまだ赤くなっていて、なかなか面白い顔をしている。

「ツキが酒を飲んじまった。」
「はぁ？梵だめじゃん。子供にはまだ早いよ。」
「こどもじゃないよぅ！おとなだよう！」
どいつもこいつも！
子ども扱いはおもしろくなーい！
むくれて視線を下げれば、成実の手にある徳利を発見。
さっきはしてやられたからな。

「おたからげっとだぜ！！」
子供の頃見ていた、某黄色い電気ネズミを連れた少年の様なセリフを吐きつつ、成実の手から徳利を奪取。
「あ！」
「コラツキ！」
「おい！」
成実、小十郎、政宗が止めようとする前に、徳利ごとごきゅっごきゅっごきゅっ！と一気飲みしてくれた。
うまい酒だけに勿体ない気もするけど。
「お～～～いし～～～～。」
天にも昇る気持で、意識はブラックアウト。

6　歓迎会（後書き）

本作では政宗も小十郎も成実も独身設定となってます。

7　竜の花

やっちまった。
一気に酒をあおったあと、なんともいえない幸せそうな顔をして、そのまま後ろにひっくり返ったツキ。
本来はどうだかしらねぇが、子供の体で一気飲みはよっぽど刺激的だったようだ。
「今の所問題はないようですが、心配なので部屋に寝かして姉上に診てもらいます。」
「いや、お前らはここにいろ。」
動こうとする小十郎を止めて、ツキを抱き上げた。
「梵が介抱するなんて、めっずらし～。」
「こいつは特別だからな。」
にやりと笑えば、成実が今度こそ本当に驚いたという顔をしたが、気にせず部屋を出た。

ツキの部屋に入り、敷いてあった布団から掻巻を取って、ツキを包んだ。
そのまま縁側に出て空を見上げれば、満月が東の空に見えた。
怪我が治るくらいだから、アルコールもこうしていれば抜けるだろう。

相変わらず気持よさそうに眠っているツキの頭を撫でながら、今朝の出来事を思い返した。
小十郎との打ち合いで、つい技まで出し合うほど白熱していた。
あの状態になれば、並の人間には手出しはできない。
だが、ツキは易々とオレらの間に入り込み、刀をはじき、蹴りま

で入れてきた。
体が小さかったから小十郎のダメージも小さかったが、成人したツキが同じことをすれば、肋骨の一本は折っていただろう。

もし、他の武将にツキの存在が知れれば、否応にもツキはこの戦国の世に巻き込まれる。
それだけは、なんとしてでも防いでやりたい。
求めるものがあって戦場に立つオレとはちがう。

力があったが故に、人に忌み嫌われ。
その血族の中でも異端な力を持つが故に畏れられ。
そして、家族を殺された後は、その力を使って復讐を為そうと生きてきたツキ。
この世界に来て、復讐をすることは叶わなくなったと嘆いていたが、解放されて少しずつ明るさを取り戻してきた。

元々喜怒哀楽の激しい性格だったんだろう。
笑ったと思うと、怒り出したり、叫んだりしては、城内を走り回っている。
見ていて飽きない。
側にいると、オレも小十郎もしばらく忘れていた穏やかな気持になる。
他の連中も、ツキを見かければ楽しげに笑っている。
この城の人間にとって、ツキは特別な存在となった。

外にその存在が洩れるようなことがあったら、ツキの平穏は消えてしまうだろう。
ここに閉じ込めてその存在を隠し続ければ、ツキを護ることはできる。
だが、それは、羽を切って飛べなくしてしまうこととなんら変わりはない。

「どうしてやるのが一番良いんだろうな？」
一人呟いて、満月を仰いだ。

「この娘の望むままにしてやればよい。」
「ツキ？」
起こしちまったか？

見下ろせば、わずかに青い燐光を放ってオレを見上げるツキと目が合った。
その目はいつもの黒ではなく、青。
それに気が付くと同時に、ツキから得体の知れない気配が発せられていることに気が付いた。

「誰だ？」
脇に置いた刀を手繰り寄せて尋ねれば、ツキはふわりと浮かんでオレを見下ろした。

「妾は蒼竜。この娘をこちらに連れて来た者じゃ。」
「あ？連れて来た？どういうこった？」

ツキの体を乗っ取ってるのか？
殺気は感じられないが、人ではない凄烈な気配を感じる。

「異なる次元の、遥かな時空の先にて終焉を迎えた我が一族の末の娘をこちらへ連れて来たと申したのじゃ。」
胸を張って偉そうに答えると、蒼竜と名乗ったツキは宙に浮かんだまま庭に降りてキョロキョロ辺りを見回した。
「なかなか住み心地のよさそうな場所じゃの。安心したわい。」
「何しに出てきた？ツキの体は大丈夫なのか？」
刀を持ったままオレも庭に下りて尋ねた。
「いや、うまそうな酒に誘われて降りて参ったのじゃ。今宵はちょうど月も満ちておるでの。娘は問題ない。安心せい。」
「ツキをお前の一族の者と言ったな？きちんと説明しろ。」
「畏れを知らぬ者よの。・・・まぁよい。うまい酒の礼じゃ。」

そういうと、蒼竜はにんまりと笑った。
酒好きは血筋か？

「妾は月を司る神の僕（しもべ）。平行して成り立つ幾つもの次元を渡り歩く者。この娘が居った次元も、お主が今居るこの次元も、その他の次元も全て交わることなく平行して存在している。時の流れは人の子にとっては過去から未来へと流れるものだが、妾は戻ることも進むこともできる。ある時妾は人と交わった。その血の末がこの娘。我が一族と呼べる者はこの娘とあと一人だけになってしまったがな。」

もの悲しげに目を閉じて、蒼竜は声もなく笑った。
「ツキは神に連なるものだと言うことか？」

「まあ、そういうことになるかの。」
「なぜ、この世界に連れて来たんだ?」
「限界だったのじゃ。・・・娘の心が。」

感情を殺し人形のようだったツキ。
確かに、ふらりと死の世界へ行ってしまいそうなほど、暗い眼をしていた。

「ここでなら、娘の力は異形ではない。次元を超え、時を遡る危険を冒してでも、連れて参りたかったのじゃ。多少縮んだ位でこちらに送り届けられて、本に良かった。」
「ツキが子供の姿になったのは、時間を遡ったからなのか?」
「その通りじゃ。消滅の危険もあったが、この娘を救うにはやるしかなかったのじゃ。」
「たった一人のために、神がそこまでするか?そこまでするならなぜ、ツキの家族が殺される前に助けなかった?」

ツキが蒼竜の血筋ならば、ツキの家族もそうなるだろう。
問いに蒼竜は自嘲を浮かべた。

「神とて万能ではない。妾が娘の許へ参ったあの惨劇の晩。あの男が狂気に走るのを娘の内で見た妾は、当然止めようとした。だが、あの男は妾の存在に気がついていて、自らの力を使って妾を娘の内に封じて動けぬようにしたのじゃ。まさか己の血族に妾を封じることができるなど、思いもよらなんだ。それから封を破る力を蓄えるまで、この娘の目と心を通じて、全てを見てきた。」

自嘲はそのままに、蒼竜は月を仰いだ。
「妾が愛した者の末裔(すえ)が、もがき苦しみ、己を殺し、人の血にまみれ、心を引き裂きながらも憎悪を止められぬ姿は、本に哀しく、何もしてやれない己を呪った事か。神の僕として永劫を生きる妾にとって、血族の幸せを見守ることが唯一許された慰みだったのじゃ。この娘は妾に残された最後の花じゃ。どうしても、護りたかった。ようやく封を破る力が戻り、頃合をみてこちらに運ぼうと思ったとき、この娘のすぐ側で大きな爆発が起こったのじゃ。それに乗じて事を為した。」
「それで、爆発に巻き込まれて・・・って言ったのか。Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ。これで納得できたぜ。それで、ツキは元の姿に戻るのか？それともこのまま普通に成長していくのか？」

それによっては、今後のツキの身の振り方も変わってくるだろう。だがどちらにしても、オレの側においておくことは決定だがな。ツキを離す気は更々ねぇ。

「満る月が一つ昇るたびに、娘はひとつ時を取り戻す。季節が一巡りすれば、本来の姿に戻り、力も戻るはずじゃ。それまで、娘を頼みたい。妾も側に居てやりたいが、務めを果たさねばならぬゆえ、神の御前に参らねばならぬのじゃ。」
「ツキは必ずオレが護る。安心していいぜ。」
「・・・・・・頼む。・・・・・・。」

？どうした？
まだなんかあるのか？

何かを言いかけては口を閉ざす蒼竜。
何度か同じ事を繰り返した後、ようやく呻く様に言った。

「頼む。決してあの者に娘の存在を気づかれてはならぬ。」
「あの者ってのは誰だ？」

嫌な予感しかしねぇ。
まさか・・・。

「・・・一族に滅びを与えた男。」
「ツキの家族を殺したって男か？なんでそいつもこっちにいる？」
「爆発の瞬間、娘のすぐ側に居たようでの・・・・どうも娘を爆発から救おうと飛び込んできたようじゃ。娘の体にしがみついていたせいで、一緒にこちらにつれてきてしまった。」
「その男はツキを殺そうとしてるんじゃねぇのか？」
なんで助けようとした？

「解らぬ。だが、決して娘と接触させてはならぬ。万が一、この世界でまたあの二人が出会うと事になれば、もう妾にもどうすることもできぬ。」
「Ｓｈｉｔ！！他国の武将よりも厄介じゃねぇか！で、その男はいまどうしている？」
「解らぬ。だが、間違いなくこの世界のどこかにいる。娘のように子供に戻っているはずじゃ。」
「なら、しばらくは向こうも動けねぇってことだな？」
「おそらく。」
「Ｏｋ。万が一ツキに気がついて接近するようなら、殺るぜ？」

はっきり宣言をすると、蒼竜は無言で頷いた。
「そろそろ時間切れじゃ。妾は行かねばならぬ。」
ツキの体を纏っていた青い燐光が薄れてきて、蒼竜はオレの右の頬に手を当てて仄かに笑った。
「隻眼の竜の子よ。お主に妾の花を託す。今はまだ蕾なれど、やがては大輪の華となろう。大切にしておくれ。」
「ああ。任せろ。」

必ず、護るぜ。

燐光が消え、気配が遠のいた途端崩れ落ちたツキを抱きとめ、様子を窺った。
何事もなかったように良く寝ている。
ここに来た頃は、ほんの少しの物音でも飛び起きて警戒していたが、今では多少揺すったくらいでは起きやしねぇ。
それだけ安心できているってことなんだろう。

しかし、問題は山積だ。

自国の問題もある。
先日起きた一揆は抑えた上で、農民側とこちらの話し合いの場を設けたことで沈静はした。
だが、他にも問題は山積で少しずつ改善しているのが現状。

他国に目を向ければ、北は最上、南部、南は北条、武田、西には上杉。
今は織田や豊臣の猛攻のせいで各国とも動きは控えめだが、いつどこがどう動くか分からない。

どこにいるか分からないツキの仇を密かに捜し出す事は難しい。
ツキにどういう人間なのかを聞けば、多少は探しやすくもなるが、またあの暗い底なしの表情をさせたくなどはない。

「む～、もぉ・・・・のめない～・・・。」

・・・をい、人が悩んでいれば、幸せそうな夢を見てやがるな？
口をむにむにと動かして、ほにゃ～と笑うツキ。

・・・かわいいじゃねぇか。

まぁとりあえず黒脛巾を動かして情報を集めて見るしかないか。

ツキを抱えて立ち上がり、布団に寝かせる。
立ち上がろうと上体を起こした途端、くいっと何かが引っかかった。
見れば、ツキが小さな手でオレの着物を掴んでいる。
引き離すこともすぐにできたが・・・。

眠るツキの横に静かに寝転んで、オレもゆっくり目を閉じた。

7　竜の花（後書き）

お読み頂きまして、ありがとうございます。

次回は週末更新予定です。よろしくお願いいたします。

8　おはようございます

青い月が昇る草原で一人。
ただ月を見上げていると、誰かに頭を撫でられたような気がした。
政宗や小十郎たちとは違う、柔らかな優しい手。
喜多さんかな？

《この様な形でしか護ってやれなくてすまない。許しておくれ。》

頭に直接響く声が聞こえた。

ああ、貴女は。
たった一度だけ、あの時のあの一瞬。
逢えたと思ったら、消えてしまった、蒼い月の方。

《妾の蒼月華（そうげっか）よ。
もう、側には居られないが、どうか、この地で幸せに。

強く、気高くあれ。さすれば、月はいつでも其方と共にある。≫

ああ、私をここへ連れてきてくれたのは、貴女だったのか。
私を助けてくれたのか。

手を伸ばせば、名残惜しむように、ふわりと頭を撫でられた。

やがて優しい手はゆっくり離れ、頂天にあった月は小さな光の粒になり、私の掌に降りてきた。

あの日のように。

≪強くあれ。気高くあれ。≫

それが、貴女が私に願う事なれば。

今はまだ、立ち止まる事もあるかもしれない。
でも。

「蒼月華の名に恥ぬよう、心いたします。」

掌の光が、青い美しいあの扇になった。

朝日が部屋に差し込んで、その眩しさに意識が浮上した。

夢を見ていたはずなのに、思い出せない。
誰かと話していたような気がする。

むぅ。あれは誰だっのか。

ぼーっと考えつつ、眩しさから逃れるために、布団を被ろうと手探りをしようとしたが、何かに拘束されているのか体が動かない。

「・・・？」

うっすらと目を開けて状況を確認しようとしたけど、目の前が真っ白いものでいっぱいだった。

なにこれ？

自慢ではないが、本来私は低血圧で寝起きが悪い。
緊張が強いられるような場所では、眠りが浅いためそんなことはないけど、安全だと知ってしまったここではすんなり覚醒することはほとんどない。
今朝もぼーっと目の前の白を眺めていた。

・・・まあいいや。まぶしい。眠い。

目の前の白いものに顔を押し付けて、朝日から逃げると、再び夢の世界へ。
行こうとしたら、白い壁が震えた。
「くっくっくっく、どんだけ寝起きが悪いんだよ。」
んー？なにこれ？

すすすす・・・と白いものを上へ上へと上っていくと、肘枕をしながらさも愉快そうにこちらを見ている政宗の顔とぶつかった。

「まさむね・・・？」
「Ｇｏｏｄ　ｍｏｒｎｉｎｇ」
「おはよう？」

空いている方の手は、しっかり私の体に回されていた。
動けない原因はこれか。

しかし、それにしても・・・。
無駄に顔の綺麗な男が、朝の気だるげな顔で、しかも掠れ気味の低い声で囁くな。

そして、なぜここで一緒に寝ている？

「朝から無駄にエロい。」

「えろ？」

「なんでもないです。それよりも、なんで一緒に寝てるの？」

「ツキが離さなかったからだろ？」

そう言うと、政宗はわたしの目尻を指で拭った。

「離さなかったって、んな馬鹿な。・・・ん？なんかついてた？」

「泣くほど悲しい夢でも見たのか？」

泣く？え？

驚いて目をこすると、泣いていたようで、指が濡れた。

「んー、覚えてない。夢を見た事はわかるんだけど、なんの夢だったのかさっぱり。でも、どっちかっていうと、いい夢だったと思う。」

「そうか。」

そういうと政宗は左目を和ませて、頭をなでた。

それが意外にも心地よくて、うっかり二度寝しそうになる。

危ない。こんな状況を小十郎や喜多さんに見られたら、憤死するほど恥ずかしい。

温い布団に未練を残しつつ、えいやぁ！っと勢いよく跳ね起きると、なんか違和感を感じた。

「あれ？なんか寝間着が小さい？」
そんでもって、言葉がいつもより明瞭に話せる。
なんだ？なにが起こった？

首をかしげて自分を見下ろしていると、政宗があくびをしながら起き上がった。
「すこし成長したんだろ。」
「は？」
「昨日より大きくなったから寝間着が小さくなったんだろ？」

確かに、数センチくらいだけど成長したようだ。
でも、昨日まで1ミリも伸びてなかったのに、何でだろう？

「昨日なんかあったっけ？」

昨日あったことを思い返して、挙げていってみよう。

「朝から大暴れして、喜多さんに折檻された。」
「Ｓｈｉｔ！！余計な事を思い出させるんじゃねぇ！」
「昼寝いっぱいして、小十郎に小言を貰った。」
「それも言うんじゃねぇよ。」
「あとは、政宗の部屋を片付けながら、嫌いな仕事を優先でやるように書簡を並べかえた。」
「そんなことしやがったのか！？おまえ、オレがどんだけ苦労して誤魔化してると・・・！」

「ほほう、そんなことをされていたのですね？政宗様？」
すすすーっと開いた襖から小十郎の地を這うような声が聞こえた。
「げっ！小十郎！！」
「今日はこの小十郎が、しっっっかりとお側で控えさせていただきます！」
「Ｎｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏ！！」

小十郎たのしそうだなぁ・・・。
なんて眺めていると、喜多さんが何時ものようにおはようございますと言いながら襖を開けて入ってきた。
「あらあら、なんの騒ぎですか？」
おっとり微笑む喜多さんに、三人で仲良く朝のご挨拶。

喜多さんにだけは礼儀を欠いてはいけないと、昨日骨の髄まで染み込ませて頂きましたから！

「あら？ツキ少し大きくなった？」
喜多さんが私の寝間着を見て、首をかしげた。
「そうなの。朝起きたら寝間着が小さくなってたの。昨日の歓迎会までは普通だったのに。」
「用意したものだと、少し小さいわね。ちょっと待っててね。」

喜多さんが私の着物を選びなおしに出て行くのを見送っていると、隣で、政宗に無断で私の部屋で寝たことや、仕事を溜めまくっていたことなどなどを、くどくど説教していた小十郎が、そういえばと言って、私を見た。

「酒飲んで引っくり返って、具合は悪くねぇか？」
「うん。ぜんぜん。すっごくおいしかったよ？」
「うまかった、じゃねぇ。子供の体で、あんな無茶しやがって。」
ぐっと小十郎の眉間の皺が深くなった。
一気飲みは確かに無茶だったかな・・・。

「ごめんなさい。次からは、ちびちびやります。」
素直に謝ったのに、拳骨を貰ってしまった。
痛い！

「人の酒を奪うたぁ、どんだけ酒好きなんだよ。」
呆れ顔の政宗に、私はむっとなった。

「みんな美味しそうに飲んで、挙句わざと見せびらかすのが悪い！」
「Ｓｏｒｒｙ．お前がそこまで酒好きとは知らなかったからな。」

オーバーアクションで肩をすくめる政宗。
知らなかったなら、これからは忘れるな！

「私が酒好きだということを肝によぉっく銘じておけよ！そして、晩酌には私も誘って下さい。」
ぺこり。

「偉そうなんだか、下手なんだかわからねぇ奴だな。」
「そもそも、ガキが酒を飲むな！」
小十郎がすかさず突っ込みをいれてきたが、無視です無視。
二日酔いもないし、体調も良いくらいだもん。飲んでも問題ないよ。

・・・・って、ん？
あれ？

「昨日って満月だったよね？」
「Ｙｅｓ．」
「だから、体調がいつもより良いんだ。」
「そうなのか？」
「うん。昨日結構力をいっぱい使ったのに、なんともなかったもん。」

満月はその名の通り、月が満ちる日なので、私の力も一番強くなる。
二日酔いも無いもそのお陰かも。

「あ、もしかして、私が成長したのも、満月だったから？」

理屈は良く分からないけど、満月の力で体が少しずつ元に戻るのかも。

「まぁ、次の満月のときにまた成長すりゃはっきりするだろ？それよりそろそろ朝餉にしようぜ？」
「ですな。朝餉が済みましたら、すぐに執務に入りましょう。」
「ぐっ。・・・・・わーったよ・・・。」

肩をがっくり落として政宗は小十郎に引きずられるようにして、部屋を出て行った。

日ごろの行いって、大切だね。勉強になったよ。

8　おはようございます（後書き）

読んでいただきまして、ありがとうございます。

9　お仕事の時間

朝食後は、お仕事の時間です。

げんなりした表情の政宗と、まだ眉間の皺が取れない小十郎と、二日酔いで頭を抱える成実があまり広くない部屋で仕事をしている。いくら顔がいい男たちとは言え、鬱陶しいことこの上ない。

苦手な仕事を全て隠していたことがバレた政宗は、小十郎監視の下、必死に処理促進中。

成実もなんかの報告書が提出されてなかったとかで、強制的に書かされている。

日ごろから真面目にやってりゃ苦労はしないのに。

「ツキぃ、これを持っていって～。」

成実がようやく書き上げた紙を乾かすように振りながら差し出したので、受け取った。

ちらっと見れば、やる気のない字で領地の状況についての報告が書かれているようだった。

「成実、これほんとに持っていくの？」

「そうだよ？何で？」

「問題なしと、概ね平和しか書いてないじゃん。」

「なんだと？」

私の言葉に、小十郎が反応して手にしていた紙をひったくっていった。

「うわっ！なんでツキちゃん読めるんだよ！？読めないと思って頼

んだのに！！」
すでに逃げの姿勢に入った成実が、裏切られた！などと人聞きの悪いことを言いながら、逃走を図った。
「まて！！こんな報告書上げられるか！！書き直せ！！」
その後を、小十郎が疾風のごとく追いかけた。
成実、Ｇｏｏｄ　Ｌｕｃｋ！

さて、そろそろ墨でも擦って置くかなぁ。
この墨の匂いって、好きなんだよねぇ。
うっとりしながら擦っていると、なにやら左前方から視線を感じた。
顔を上げれば、政宗がじぃぃぃっとこちらを見ていた。
「なに？」
「お前、字が読めたんだな。」

・・・・・・・・。しまった。

「・・・・ヨメマセンヨ？」
「通りで、書類を並べ替えられた訳だ。」

「イヤ、ダカラ、ヨメマセンテ。」
「朝から普通に話せてただろうが？」

ニヤニヤしながらにじり寄ってきやがった。
手には大量の書類が握られている！

「仕事追加だ。読んで不備がないか確かめろ。」
「いやいや、どれが不備だかなんて、判断つくわけないじゃん！」
「Ｎｏ　ｐｒｏｂｌｅｍ．お前の勘でいけ。」
「無茶振り！！推定７歳のお子様は墨を擦ってるお仕事が一番だって！」
「Ｓｈｕｔ　ｕｐ！誰のせいで、こんな目にあってると思ってやがる！」
「政宗が自分で蒔いた種でしょうが！」

びしっと言ってやれば、政宗は少し考えた後、ニヤリと笑った。

「お前が手伝えば、仕事が速く終わる。早く終わったら、城下に連れて行ってやるぜ？」

う・・・。卑怯な・・・。

確かに、この世界に来て半月近くになるけど、一度も城から出たことがない。

「行きたくねぇか？」

耳元で囁くように言われ、びくぅっと飛びのいた。
み、耳元で囁くな!!
耳はダメなんだよ!

耳を押さえて固まる私を見て、ニッタァと政宗が笑った。
「耳が弱いんだな?」
「ち、近寄るな!ロリコンめ!」
「ろりこん?なんだそりゃ?」
現代用語は通じねぇのか!
「幼女趣味ってことだ・・・ぎゃぁぁぁ!!ななななな!!!」
耳を舐めやがった!!
「誰が幼女趣味だ。」

お前がだぁぁぁ!!
ほとんど押し倒されて襲われている状態ですが!?

「手伝う!手伝うから離れろ!!」

息も絶え絶え政宗の下から這い出て、未だに治まらない鳥肌を撫でつけまくった。
ちくしょー、今ので一気に立場が弱くなった気がする!

まぁ、最初から居候だから、偉い立場ではないんだけどさ。

「このオレ様にそんな態度をとるのはツキくれぇなもんだぜ?」
私の机に書類を遠慮なく置いて、自分の机に戻った政宗は、ニヤニヤしながら筆を取った。
「うるさい!」

耳が強くなる訓練方法とか無いもんかな・・・。

やるからには、仕事は完璧に！が、モットーです。
渡された書類を手に取り、端からしっかり読んでいく。
時候の挨拶から始まっているこれは、他の城主からの手紙のようだ。
なになに？・・・

「政宗ぇ、これ冬に届いた手紙じゃん！どんだけ放置してたのさ！」
「先を読んでみろよ。放置したくなるオレの気持ちがわかるぜ？」
手を休めることもこちらを見ることもなくウンザリだというように答えた政宗。
どれどれ

「ああ、嫁をもらえって督促ですか。しかも、この人の娘さんをめっちゃアピールしてるね。」
「しつこいんだよ、そいつ。オレが元服したすぐ後からずっとだぜ？」
何か苦い思いでもあるの？走らせる筆が微妙に荒れてるよ？

仕方ない、これは小十郎行だな。
次は・・・

って、これ私が見てもいいのか？
各城の兵士の配置状況と軍備の実状、支出などが細かに記されてい

た。
城の名前で書いてあっても、場所がわからないし、これがこの時代にとって良いのか悪いのか、さっぱりわからないんだけどさ。
「なんか引っかかるか？」
熟読していると、政宗が覗き込んできた。
「んー、状況とか規模とかさっぱりなんだけどさ、この城、最近修繕かなんかした？」
「あ？記憶にねぇな。もしかしたら、小十郎なら知ってるかもしれねぇが。」
それがどうかしたか？と促されて、私は数カ所を指で示した。

「これ単価は少ないけど、足して行くと他の城の倍くらいの金額になるよ？」
「Ｗｈａｔ？」

書類を見る政宗の目が、段々厳しくなる。
そりゃそうだろう。
細かく分散してわかりにくくしてるつもりだろうけど、注目して見てみれば、大した規模でもなさそうなのに、軍備費や食費、食費、その他の支出が少しずつ他より多い。
塵も積もればで、さっと暗算をして見た感じで、成実の城の倍は金を使ってる。
「これは調べる必要がありそうだな。綱元に任せるか。」

鬼庭　綱元さんは主に政治関連を請け負っている人で、喜多さんの父親違いの弟で、小十郎の血のつながらない兄弟らしい。なんか複雑だね。
とりあえず兄弟ってことで納得した。
まだ直接会ったことはないけど、政宗の仕事を手伝うようになっ

て何度かその名前を聞いてはいた。
どんな人なのかな。小十郎みたいに強面系の渋いオジサマかな。それとも、喜多さんみたいに美形中年かな。

「はい！政宗！私が持って行きたいです！」
「あ？」
「それ、綱元さんに渡すんでしょ？」
「そうだが、小十郎の目を通してからだな。小十郎に持って行かせりゃいいだろ？」
「えー、つまんない～。美形中年見たい～！！」

机にしがみついてガタガタさせながら抗議をすれば、政宗がハン！と鼻で笑った。
「お前が綱元んとこに行っちまったら、誰が仕事すんだよ。」
「おまえだ！！」
「いいから、次いけ、次。」

ううう、なんでこんな目に・・・。
小十郎が戻ってきたら、言いつけてやる。

溜め込んでいた仕事の2割が早く結婚しろよっていう、家臣たちからの嘆願書に近い手紙。
4割が政宗が決裁しないとまずい稟議書。
3割がさっき成実が書いてたような、各城の城主からの報告書。
1割が私的な手紙だった。

見た感じで、溜め込んだせいで何か悪影響が出ると言うようなもの

はなかったけど、決裁待ちの稟議書は不味いんじゃないの？

「政宗、この束だけでも自分で見て。問題ありそうなのと、あんたの判断が必要な奴ね。」

押し付けられた書類のうち、3分の1まで絞ってあげた私をほめろ。政宗は、はいと手渡した書類を素直に受け取り、二、三枚めくって見たあと、満足気に頷いた。

「Ｇｏｏｄ　ｊｏｂ．見る目は確かだな。」

「褒められてもうれしくない。で、これが後でちゃんと読んで返事してあげなよって政宗宛ての個人的な手紙。つか、私的な手紙を読ませるな。それと、こっちは小十郎に相談して、お断りならちゃんとそれなりの対応をしなよねって、手紙。んで、報告だけの書類で問題なさそうな奴。」

はぁ、肩こった。

小十郎が居れば、こんな無茶振りされずに済んだのにさ。

二人が部屋から飛び出してから結構経つのに、戻ってこないってのはどうしたんだろ。

「小十郎と成実はどこまで行っちゃったのかねぇ。」

「さぁな。それより、そこら辺の女中を捉まえて茶を持ってくるように言って来てくれ。」

「了解～。」

ツキが部屋を出て行くのを見送って、渡された書類を改めて見た。
実は一度目を通していて、内容は大体把握しているのもを試しに渡してみたんだが、ここまで見事に振り分けができるとは、嬉しい誤算だぜ。
的確に内容を吟味した上で振り分けをしてる。

「誰かいるか？」
一枚ずつ書類をめくりながら声をかけると、どこからともなく黒い服に身を包んだ男が音もなく降り立った。
「御前に。」

「小十郎は何をしている？」
「成実様と共に、綱元様のところに居られます。」

ふむ。綱元につかまったのか。あれだけ騒げば見つかりもするか。
しかし、三人が揃ってるなら、好都合だな。

「これを綱元のとこに持っていけ。」
「御意。」

書類を受け取ると、音もなく男は去った。

綱元を呼びつけると、ツキが騒ぎそうだし。
逆に綱元がツキのことを知ったら、スカウトして連れて行っちまいそうだからな。
昨日のうちに整理されていた他の書類や本も、隠しておいたものが引っ張り出されているのはいただけないが、見やすくなって仕事がやりやすい。

最初に見た小十郎も驚いていたな。
これでツキに仕事を手伝わせても、文句は言わなくなるだろう。

しかし、計算までそろばんも使わずにやってのけたのには驚いた。
ツキのいた世界では、一体どんな教育を行っているのか。
今度ゆっくり聞きたいもんだ。

書類をあらかた片し終わる頃、人の気配がした。
「Ｈｅｙ，ずいぶん時間がかかったじゃねぇか。迷子にでもなってたのか？」
最後の書類に筆を走らせてながら声をかければ、ツキではない男の声が帰ってきた。
「申し訳ありません。私がツキの足止めをしていたんですよ。」
「あ？綱元？」

顔を上げると、綱元を先頭に、ツキ、小十郎、成実が雁首を並べて立っていた。
「お茶を持っていく途中でみんなに会って、政宗のところに行くって言うから一緒に来たんだよ。」
自分で使っていた机に茶を載せた盆を置いて、かいがいしく円座を

人数分並べると、ツキは小十郎たちに座るように指示した。
礼を言いつつ各自が座ると、茶を並べ始めた。
「政宗、仕事終わりそう？」
オレの机に茶を置きつつ覗き込むツキ。
「Ｔｈａｔ'ｓ　ａｌｌ．」
「Ｇｏｏｄ．」
ツキはにっこり満足げに頷くと、立ち上がって一番下座の円座に座った。

全員が落ち着いたところで、綱元が口を開いた。
「小手森の件ですが、早速調査を開始しております。大内は最近蘆名と通じていると言う話もあるようですし・・・。」
「ああ。結果が分かったら報告しろ。」
「御意。」
まぁ、大内を討つことになるだろうな。
早ければ、ひと月後には戦か。

「梵、その話は後でも良いんじゃないの？それよりさ、ツキちゃんって字が読めるけど、どこで学んだの？」
すかさず成実が話を断ち切ってきた。
確かに、ツキが居る場で話すことじゃねぇな。

話を振られたツキは、首を傾げて少し考えたあと、オレを見た。
「Ｃａｎ　Ｉ　ｔａｌｋ　ｔｏ　ｔｈｅｍ　ａｂｏｕｔ　ｍｅ？（私のことを彼らに話していい？）」
「Ｏｋ，Ｎｏ　ｐｒｏｂｌｅｍ．（ああ。問題ねぇよ。）」

こいつ等ならばなんの問題もねぇ。
頷いてやれば、ツキは茶を一口飲んだ後、んーとと呟いてから話し

出した。

「私はここの世界ではないところから、ふとした拍子にこっちに飛ばされてきて、森で困っていたところを政宗と小十郎とその他大勢が通りかかって拾ってもらったの。」

「この世界じゃないとこってどこ?」

「んー、ここと良く似た世界の、ずっと未来。」

自分のいた世界を思い出すツキの目は、思ったよりも落ち着きを見せていた。

小十郎もそれに気がついたようで、ほっと息を吐いた。

「日の本の国、私たちの世界では日本って言うんだけどね、そこでは6歳・・・えと、ここだと8歳か。その年齢になったら、全員学校って言うところで、勉強をするんだよ。字や計算はもちろん、いろんなことをね。」

そうだったのか。だから計算もできたんだな。

「8つの子供は、身分に関係なく全て、ですか?」

綱元が興味深そうに尋ねる。

「私の世界では、表向きは身分による差別はないの。勤労、教育、納税は日本国民の三大義務で、教育は嫌でも受けなきゃダメなんだよ。」

「子供が学んでいる間、誰が田畑を耕すのですか?」

「機械・・・カラクリが人の代わりに全てをこなすから、働き手はそんなに居なくても大丈夫なんだよ。」

「面白いですね。もっと詳しく教えていただきたいのですが。」

「私は私が学んだことを知っているだけだから、大して教えられないよ。学校だって、ほとんど行かなかったし・・・。」

っと、ここでＳｔｏｐだな。
「できるのは文字を読むだけじゃなさそうだな。よぉーっし、ツキはこれからはオレの補佐役な。Ａｒｅ　ｙｏｕ　ＯＫ？」
「誰が承諾するか！小十郎もなんとか言ってやってよ！！」
「禄は出してやるから、諦めろ。」
「こじゅろぉぉぉぉぉ！？」

これで決定だな。
ニヤリと笑えば、ツキは畳に両手を突いて項垂れた。
これから執務も楽しくなりそうだぜ。

9　お仕事の時間（後書き）

本日もご訪問ありがとうございます。

１０　春は〇〇の季節です

政宗のところでお世話になってるんだかしてるんだか分からない居候生活も、早くもひと月が過ぎた。
弥生に入りここ奥州でも桜が咲き始めて、つい昨日満開を迎えた。

政宗の執務を手伝い、ようやく本日の目処がついたので、障子をあけて窓から見える桜を眺めた。
今日午後から花見の宴が行われるらしく、階下では兵士のみんなが楽しそうに会場作りをしている。

ちなみに、政宗の執務室は2階にある。私の部屋は1階。政宗の就寝する部屋も1階。
最近知ったんだけど、政宗の私室は私の部屋の並びだった。
不審人物を招くにあたって、殿の部屋の近くにするかな。
政宗があそこにしろって言い張った結果らしいけどね。

閑話休題

ぼへ～っと桜を眺めていると、政宗が筆をおいてこっちに来て座った。
膝の上はやっぱりデフォルトですか。
まぁ、慣れちゃったからもう良いけど。

風にのって舞い込んできた桜の花びらを手のひらで受け止め、しげしげと眺める。
私の知っているソメイヨシノとは、少し色も形も違うようだ。

こっちの方が、色味が強い。

「日本人の桜好きは、どっちも一緒だねぇ。」
「ツキのところも花見の習慣があるのか？」
「あるよ。花見っていうより、宴会がメインだけど。」
「そりゃ、うちも同じだな。」
でしょうねぇ。

ここ数年は中東やら南アフリカやら熱い国が多かったし、毎日紛争やら戦闘やらで花を愛でる余裕も時間もなかったからなぁ。
こうしてピンクに染まる景色を見ていると、あっちの世界の出来事は夢だったような気がする。
平和だなぁ・・・。
ここが戦国の世で、あちこちで戦がおきてはたくさんの人が殺されているって分かっているけど、ここは人の笑顔が耐えない平和な国に見える。
きっと、政宗が私に気を遣ってくれてるからなんだろうけど。

風に乗ってひらりひらりと花びらが舞い降りる。
膝の上でそれを眺めているうちに、春の陽気とあいまって、催眠術でもかけられたかのように瞼が重くなってきた。
ううん、いかん。昼寝をしては、また小十郎に叱られる。
「眠いのか？」
「うん。子供って、こんなに眠くなる生き物だったっけ・・・。」
目をこすって眠気を追いやろうと頑張っていると、政宗はひょいと私を持ち上げて、横抱きに座らせて、背中をトントンし始めた。

「何してんの？」
「今夜は遅くまでＰａｒｔｙだから、昼寝しとけ。」
「小十郎に怒られちゃうよ。」
「Ｎｏ　ｐｒｏｂｌｅｍ．今日はこっちにはこねぇよ。あいつはやることがあるからな。」
やること・・・？なんだろ。準備かな。
と、いうか、ほんとに眠い。
「部屋を出るときは起こして行ってね。」
「分かった分かった。」
んじゃ、ちょっとだけ・・・。

目を閉じると、あっという間に意識が途切れた。

どこかから笛の音が聞こえてくる。
それに合わせる様に、琴の音も続く。
凛として澄んだ笛の音と、零れ落ちるように爪弾かれる琴の音。
心地の良い音楽になって響いてくる。

ゆっくり目を開けると、政宗の執務部屋だった。
ぼーっとしながら起き上がると、政宗の羽織がずり落ちた。
「・・・まさむねぇ？」
「起きたか？」
しょぼしょぼする目をこすりながら声をかけると、意外にも真面目に仕事をしていたのか、机に座っている政宗がこちらを見た。
いや、違うな。明日は二日酔いで潰す気満々なんだな。
明日の分まで今日頑張って片付けようと言うことか。

ぼーっとする頭で判断すると、重力には逆らわずに、再び畳の上に横になった。
「起きるんじゃねぇのか？」
「んー。笛と琴の音がきこえたような気がしたんだけど、誰か演奏していた？」
「いや、オレには聞こえなかったぜ。」
「夢だったのかなぁ。」
ずり落ちた羽織をもそもそ肩まで持ち上げて、夢と現実の間に居るような感じを満喫する。
「ホントに目覚めが悪ぃな。」
「んー・・・。気持ちよすぎる・・・。」
呆れた政宗が立ち上がってこっちに来ると、私に覆いかぶさった。
・・・なんか、とんでもなく、嫌な予感再び。

カッと目を見開いて、政宗の腕の中から脱出すべく横に横転。
そのまま素早く立ち上がって、しゅたっと敬礼。
「起きました！見ての通り、しっかり起きました！！」
「ちっ。もっと気持ちよくして起こしてやろうとしたのによぉ。」
冗談半分本気半分な顔をして私を見上げる政宗。
危なかった・・・。危うく、Ｒ１８な世界になるところだった・・・！

着崩れをささっと直して、寝癖のついた髪も手櫛で整え、落ちていた羽織を拾って皺がよってないことを確認。
よし。昼寝の証拠隠滅。

再び仕事を始めた政宗の肩に羽織をかける為に背後に回りながら、机の上を確認。

ほんとに明日は仕事しなくても大丈夫なようにしてるよ。
「羽織ありがとう。」
「おう。」
と、肩にかけようとした瞬間、ぐいっと引き寄せられて、気がつけば政宗の膝の上に仰向けでひっくり返っていた。
「な、な、な、・・・・！？」
「あんまり可愛いことばっかりやってると、ほんとに襲っちまうぞ？」
そういうと、フリーズしている私の頬にキスをした。

いやね、欧米人に囲まれて生活してから、頬へのキスなんて挨拶程度のものなんですがね。
なんですがね。
艶っぽい笑みを乗せた唇とか、獲物を狙うような目とか、そんなオプションなんか挨拶にあるわけなくてですね。
つまり。

「ふんがぁぁぁぁぁぁ！！！！」

政宗を思いっきり弾き飛ばして、敵前逃亡をいたしました。

どこをどう走ったのか、気がつくと人気のない廊下でぜぇぜぇ息を切らして座り込んでいた。

最近運動不足だから、すぐ息が切れちゃうなぁ・・・・・って、そうじゃなくて！！

なんなの！？あれは一体何事！？

誰か説明してください！

ダンダン！と床を叩きながら悶絶していると、背後に気配を感じて、慌てて立ち上がった。

政宗が追いかけてきたのかと思ったら、驚いた顔で私を見下ろす小十郎だった。

「どうした？何でこんなところに居る？」

膝を突いて目線を合わせて小十郎が尋ねてきた。

説明して欲しいとは思ったけどさ、説明の前にこちらが説明しなきゃならないわけで。

こっぱずかしくて言えません。

多分真っ赤な顔をしているだろう私が、目をうろうろ彷徨わせて挙動不審な動きをしていると、小十郎はやれやれと溜息をついた。

「政宗様にからかわれたんだな？」

からかわれた？あれが？

いや、そうなのか？

そうだよね？きっとからかったんだよね。

やだなぁ、政宗ったら役者なんだから。

もうそういうことで納得しよう。

でも、これだけは確認をしておきたい。

「あのさ、政宗って小さい子供が・・・その、・・・性的な意味で好きなの？」
恐る恐る尋ねると、小十郎はは？と呆けた顔をした。
これはこれで貴重な表情だけど、今はそれを鑑賞する余裕なんかない。

「政宗様がツキに何をしたのかは知らねぇが、政宗様に限ってそんなことはねぇ。この小十郎が断言する。」
「だ、だよね？からかわれただけだよね？」
はぁぁぁぁぁぁぁっ！！安心した！！
そうだよね、あの政宗に限ってないよね！？

「幼女には興味はねぇ。だが、ツキは別だろうな・・・。」
心からの安堵の溜息をついて力が抜けていた私は、同じく溜息を吐いた小十郎の呟きは聞こえなかった。

１０　春は〇〇の季節です（後書き）

ひなきにとっての春は、仕事の季節です。一年間でもっとも忙しい季節です。桜を愛でる気力も湧かない（涙）

11　桜の下にて

暮れ六つ（18時頃）になり、ようやく花見が始まった。
恒例の政宗の号令が上がり、みんなでテンション高い雄叫びを上げてスタート。
場内の外堀を囲むように植えられた桜の木の下が会場で、当然政宗は特等席の一番桜が綺麗に見える位置に居た。
その横には、私と小十郎も当然居る。今日は成実は自分の城で盛り上がるらしくて不参加らしい。

小十郎に連れられて外に出た私は、どういう態度をしたら良いのか分からなくて、小十郎の後ろに隠れている。
大丈夫だとは思うんだけど、なんか恥ずかしいんだよぅ。

早くも大盛り上がりで酒を飲み交わす野郎共が憎い。
相変わらず旨そうに酒を飲んでやがるな。
いいなぁ。飲みたいなぁ。うまそうだなぁ。

「ツキ、分かっているとは思うが、ダメだぞ？」
じぃっと見ていたのに気がついた小十郎が、政宗の盃に酒を注ぎながらいった。
くっ、小十郎め。

泣く泣くお茶をすすりながら、桜の花を見上げる。夜桜は初めてだ。
辺りにはたいまつが幾つも灯されていて、それなりに明るい。
昼に眺める桜も良いけど、夜は夜で良いもんだねぇ。

「願わくば　花の下にて　春死なむ　その如月の　望月の頃」

桜を眺めながら小声で囁くように言えば、ぶはっと盛大に酒を噴出す音が聞こえた。
なにごと？
隣を見ると、顔を赤くして咽ている政宗と、介抱する小十郎がいた。
「大丈夫？どうしたの？」

ああ、酒がもったいない。

「ごほっ！いま、なんていいやがった？」
「ん？今？」
「辞世の句みてぇなのが聞こえたが？」
苦しげにしている政宗に代わり、小十郎が背中を撫でながら聞いてきた。

「ああ、聞こえてたのね。西行ってお坊さんの有名な和歌だよ。知らない？」
「聞いたことねぇな。」
「そっか。」
「ツキ、ずいぶん渋い歌を歌ったもんだな。」
ようやく呼吸が整った政宗が、ちょっぴり涙目でこちらを見た。
「そう？私は好きだよ、この歌。」
これだけ綺麗な景色の中、静かに息絶えることができたなら。
きっと幸せな人生だったなぁって思いながらいける。

なんて、ちょっぴりセンチメンタルなことを考えちゃうのも、桜のせいかな。

ちょっとでも風が吹けば、ひらりひらりと桜の花びらが舞い踊り、その動きは見ていて飽きない。

しばらく眺めていると、なにやら目の前に赤い毛氈が敷かれ、琴が運ばれてきた。

え？誰かが演奏するの？

尋ねようと横を見れば、小十郎が立ち上がって、琴の方へ歩いていった。

「え？まさか、小十郎が琴を演奏するの？」

残った政宗に聞くと、にやっと笑って琴が運ばれてきたほうを顎で示した。

「琴は喜多だ。小十郎は竜笛。二人とも結構名の知れた名手なんだぜ？」

言われて振り返れば、喜多さんが桜重の着物をきてこちらに向かってきた。

「うわぁ・・・。喜多さん綺麗・・・。」

小十郎が喜多さんの斜め後ろに座って、二人でそろって一礼。

さすがのヤンキー集団も、静かにその演奏が始まるのを待った。

懐から横笛を出した小十郎が、日ごろからは想像もできないような優雅な所作で笛を構える。

それにあわせて、喜多さんも琴に手を乗せて、一瞬だけ二人顔をあわせた。

澄んだ高い笛の音色が最初に響いた。
それから追うように琴の音。

楽曲なんて分からないけど、凄く綺麗な音楽だ。
時には強く、時には消え入りそうなほど優しく。
桜が舞い散る風景と、二人の姿が夢のように儚くも美しいものに見える。

ゆっくり目を閉じて音の世界に聞き入る。
瞼の裏で、まだ両親が居た頃の私が、兄と楽しく舞を待て居る姿が浮かんだ。
ずっと辛い思い出しか思い出せなかったのに・・・。
優しく笑いかける兄に思わず頬が緩んだ。

やがて笛の音が夜空に消え入って、二人の演奏は終わった。
ゆっくり一礼をする二人。

「Ｔｈａｔ‘ｓ　ｇｒｅａｔ！」
静寂を破ったのは、政宗の満足げな言葉だった。
「相変わらず、最高だ。」
「ありがとうございます。」

それを皮切りに、あっちこっちで指笛や歓声があちこちでやんややんやと始まった。

あーあ、雰囲気一瞬で崩壊。

でも、これが伊達軍らしいっちゃ、らしいのかも。
喜多さんも小十郎もみんなの所に引きずり込まれちゃった。

「どうだった？」
いっきにお祭騒ぎに戻った連中を眺めながら、政宗が尋ねた。
「すごいね！あんな綺麗な演奏、初めて聴いたよ！」
「だろう？」

まるで自分が褒められた様に嬉しげだね。
自慢の家臣なんだって全身で語っていて、ちょっと可愛いね。
って、ことを口にしようものなら、どんな目にあうか分からないので、言いませんけどね。
でも、本当にすごかったなぁ。

「笛については、私やったことないから分からないけど、琴は本当にすごい。あんなに綺麗な音が出るんだねぇ。今度喜多さんに教えてもらおうかな。」
「なんだ、ツキも琴を爪弾くのか？」
「うーん。まぁ、ね。ほら、古くから続く家だったし、神楽とは少し違うけど舞を舞うのが宗主の仕事みたいなところもあって、その伴奏に琴とか笛とかみんなちょっとずつかじるんだよね。私笛はどうしてもダメだったから、琴をやったんだけど、琴もねぇ・・・。」
酷いときは糸を切っちゃって、みんなに呆れられてたなぁ・・。

はう～と、内心落ち込んでいると、政宗がこちらをじぃっと見ているのに気がついた。

「なに？なんかついてる？」
花びらでもついているのかと、頭を撫でて見ていると、ちょいちょいと手招きをされた。
ん？なんだろ。

ハイハイするように近寄れば、また膝の上に抱え上げられた。
・・・・しまった！！昼間の悪夢再びか！？

ビシッと固まっていると、政宗がくつくつ笑った。
「なんもしねぇよ。ただ、少し肌寒いから、行火代わりだ。」
「お酒飲んでるんだから、私よりはよっぽど暖かいでしょうが。」
言いつつも、私自身が暖かいので、降りようとはしないけどね。

結構座り心地も悪くはないし、暖かいし、いい座椅子なんだよね。
思ってることがばれたのか、むにっとほっぺを抓られた。
「いひゃい！」
「ツキ、ここでの生活は慣れたか？」
思いもよらなかったことを聞かれて、思わず振り返って政宗の顔を見上げた。
穏やかな左目にぶつかって、私は素直にこくんと頷いた。
「ここに来てすぐの頃は、ちょっと一人になったりすると、前の世界のことを思い出したりしては、苦しかったり悲しかったりしたけど、今は大丈夫。思い出すのは、子供の頃のこととか、楽しかったことの方が多くなったよ。」
離れたところではしゃいで踊りまわっている、モヒカンとスキンヘッドを眺めながら、くすっと笑った。

先日あの二人と会った時の事を思い出して笑いがこみ上げる。

「なんだ?」
「あのね、この前あの二人が私のところに来てね、・・・ぷぷぷっ!」
「なんだよ、気持がわりぃな。」
「うるさい。でね、よっぽど私が暇そうにしてたように見えたらしくてさ。一緒に遊んでくれたのね。その遊びって言うのがさ、・・・・あははははは!!思い出したらお腹がよじれる!!」

あの強面がよ?必死に鞠をついたり、人形遊びをしようとしたり。普通なら気持悪いとしか思えないんだけど、彼らすんごく真面目に私の相手をしてくれてね。
もう、おかしくておかしくて。
何のバツゲームかと思ったわ。

結局耐え切れなかった私が提案した、鬼ごっこをすることになったんだけど、これがまた凄くて。
通りすがったほかの兵士も巻き込んで、気がつけば伊達軍総出の鬼ごっこになっちゃった。

小十郎にばれたら、そうとうヤバイ鬼ごっこだったね。

「と、とにかく、一緒に、ね、遊んで、くれたん、だよ。」
「大丈夫か?死にそうだぞ?」
息も絶え絶えになる私の背中を撫でながら、政宗は呆れ顔だ。
「大丈夫。えと、何の話をしてたんだっけ?」
「いや、もう分かったからいい。」

くいっと盃を空けて、再び酒を注ごうとしたが、徳利の中身は空っぽだった。
転がってる徳利は、5個。
結構良いペースで飲んでるなぁ。
小十郎も帰ってこないし、仕方ない。貰いにいってやるか。

立ち上がろうとしたら、政宗に止められた。
「お酒貰ってくるよ？」
「いい。そろそろ行くぞ。」
「行く？どこに？」

抱っこされて連れてこられたのは、厩舎だった。
馬？何で馬？
そのまま自分のところに行くと、馬も政宗がわかったようで顔を上げた。
サラブレッドを一度だけ見た事があるけど、あれに比べれば全体的に少しずんぐりしてる。
まぁ、サラブレッドは走るためだけの馬で、この馬たちは戦場に駆り出される馬だからねぇ。

「一応聞くが、馬に乗れるか？」
馬に手綱を着けながら政宗が顔だけ振り返った。
「一応ってのむかつくけど、乗れません。」
今時馬で戦争する人はいませんから。

近場だからと、手綱をつけただけで鞍も着けずに馬を出すと、私を片腕で抱き上げて、そのまま馬に乗り上がった。

「ちょ、マジ？」

ここに来た時の悪夢再びか！？

「しっかり捕まってろよぉ？」

「お前が手綱をしっかり握れよ！！」

「Ｎｏ　ｐｒｏｂｌｅｍ！」

問題ありまくりだって！

落馬する時はお前も道連れじゃぁ！と、渾身の力でしがみつく事しばし、馬のスピードが徐々に落ちて来たので恐る恐る顔を上げた。

ふおおおお！

城で見た桜も綺麗だったけど、ここはもっとすごい！

小高い丘の上に何十本という満開を迎えた桜が、風に花を散らせていた。

松明の明かりとかはないけれど、半月を過ぎた辺りの月が思ったよりも明るく辺りを照らしてる。

「すげぇだろ？」

「うん！城のも綺麗だけど、ここのはもっとすごい！」

馬から下ろしてもらうのももどかしく、地面に足が付いた途端走

り出した。
人があまり来ない場所なのか、散った桜は踏み潰される事なく綺麗なピンク色の絨毯が広がっていた。
まるで雪みたいに降り続く桜。

「ここはオレが子供の頃見つけた場所だ。小十郎も知らねぇ。」
隣に来た政宗が、いつの間に用意していたのか、徳利と小さ目の盃を二つ取り出した。
「ほれ、飲むだろ？」
差し出されれば、素直に受け取った。
「ありがとう。気が利くじゃん。」
「あれだけ物欲しげな目をされればな。」
一言余計だ！

ひらりひらり・・・。ひらりひらり。
二人並んで、特に会話もなく、静かに盃を傾けてはまた桜に魅入られる。
ひらりと、花びらが一枚、盃に落ちた。
「・・・・。こんな綺麗な世界に、ずっと居られたら良いのに・・・。」
思わず零れた言葉。
政宗はハッと笑った。
「汚いもんがあるから、綺麗なものが綺麗に見えるんだよ。綺麗なものだけなら、いつか何も感じなくなるぜ？」
「うん。そうかもね。」
夢は夢だから、綺麗なものとして憬れていられるんだろうね。手に入れたら、それもいつか不要なものとして捨ててしまうのかもしれない。
「でも、願うことは、大切なんだよ。」

真っ暗などん底の世界で憬れていた綺麗な夢のような世界。
二度と私には手に入らないと思っていた。
諦めて、綺麗な世界さえ憎みかけていた。

けれど。
ここに来て、沢山のものを与えてもらった。

安心して眠れる場所。
毎日食べられるおいしいご飯。
笑って語り合える時間。
自分を認めて、受け入れてくれる人たち。

全て政宗と出会わなければなかったことだ。

「政宗、ありがとうね。」
「Ｙｏｕ' ｒｅ ｗｅｌｃｏｍｅ」

この場所に連れて来たことのお礼と思って受け取ったのかもしれないけれど。

私を見つけて、拾ってくれてありがとう。

11　桜の下にて（後書き）

西行の和歌は印象に残っている歌の一つです。特に古典に造詣が深いわけでもない作者ですが、学生時代に読んで、想像して、共感した歌です。

12　猿も木から落ちる（前書き）

ヒロインの知識レベルは、作者と同じです。サンデー様、アニキ様ごめんなさい～（´Д`　）

12　猿も木から落ちる

風の強い日も落ち着いて、爽やかな季節の卯月がやってまいりました。
田んぼでは田植えが始まって、なんとなく心躍る季節。
もちろん、ここ米沢城の人たちも私も農業に精を出して、みんな一丸となって頑張った。

驚いたことにその指揮は全て小十郎がしているらしくて、執務中の政宗の監視も程ほどに畑に行ってしまうこともしばしば。
その表情は愛しの彼女にでも会いに行くんですか？ってくらい嬉しそう。
初めは本当に彼女に会いに行くのかと思ったくらいだ。

先月の満月の翌朝、また少しだけ成長して、小学校入学くらいの身長になった。
これで満月の度に少しずつ元の大きさに戻ってるんだと分かって、かなりほっとした。
ただ、伊達軍の皆の反応が少し怖かった。
普通の子供じゃないって分かって、怯えられたりしたらどうしようって。

でも、皆大きくなったと喜ぶだけで、ごく普通に接してくれたのだ。
不思議に思って皆に聞いて見たら、小十郎から説明があったんだって教えてくれた。
皆の前で力を使ったすぐ後のことだったらしい。

道理で歓迎会からこっち、誰も何も聞かなかったんだな。
ほんと、良い人たちばかりで感謝するばかりだよ。

今日も日課となった政宗の手伝いのため、執務室に向かうと、政宗と小十郎以外に、成実と綱元がいた。
おや、珍しい。
「おはようございます。成実来てたんだね。綱元さんもここに来るなんて珍しい。」
「ツキちゃんおはよう。」
「おはよう、ツキ。」

なんとなくビリッとした空気を感じつつ、なんかあったのか?と内心首を傾げていると、政宗が見ていた書類から顔を上げた。
「ツキ、今日は執務はなしだ。」
「ん?なんかあるの?」
「使者が来る。敵国の武将だ。何があるか分からないから、今日はこっちには近寄るな。」
ほうほう。だから、みんな集合してるんだね。
政宗愛されてるなぁ。

「了解。緊張を要する場に、私みたいな子供が居たら違和感だしね。休暇を貰ったってことで、ゆっくりしてるよ。」

ふふっ、これはチャンスだ。前から実行しようとしていた、お出かけのチャンス!

「なんだ、てっきり除け者にされたと騒ぐかと思ったが、嬉しそう

だな。」
「もう、肩凝る作業をしなくて良いと思うと、嬉しいですよ。」
鋭い小十郎の突っ込みに、こっそり冷や汗を拭いつつ、にっこり答えた。
「安心しろ。アイツが帰ったら、溜まった分の仕事がある。」
「ぐはぁ！休暇が楽しくなくなるようなこと言わないでぇ！」
ただでさえ、最近回される仕事量がハンパなくなってきてるって言うのに！！
冬は何もできないから、比較的暇らしいんだけど、雪解けと共に回ってくる書類の数は日々増えるばかりだ。
明日のこと考えない。考えたら負けだ。うん。

「興味本位で聞いちゃうんだけど、誰が来るの？」
部屋に帰ろうと襖を引きながら、ダメもとで尋ねると、小十郎が苦虫を噛み潰したような顔になった。
政宗は不敵な笑い。
綱元さんはちょっと頭がいたそう。
成実は何時もと変わらないニコニコ顔。
なんだ、この反応は。

「甲斐の武田のオッサンの所の、真田幸村って武将だ。」
・・・ん？真田幸村？
え？あの大阪夏の陣の真田幸村？

今まであまり他の国について考えたことなかったな。
政宗が回してくる書類は奥州内のことばっかりだったし。

・・・こりゃ、すこし勉強しておかないと・・・かな。

そんなわけで、他国に多少は詳しそうな人を求めてやって参りました、兵士の詰所。
鬼ごっこ以来結構顔見知りもできて、今では政宗が忙しい時はここで暇をつぶす事が多くなった。
女が兵舎に行くなどと、小十郎がぐちぐちいうので、内緒だけどね。

「たのもーう！」
一応声をかけて戸を開けると、丁度休憩中だったのか、円陣を組んでしゃがみこんでいるのが見えた。
つかさ、畳あるのに、なんでわざわざ地面でう○こ座り？

「お嬢！どうしたんっすか？」
ニコニコ愛想がいいのは、ちょっと小太りな孫兵衛。
「今日はお客さんがくるから、お休みなんだって。みんなは忙しい？」
「ヒマっす！丁度これからヒマだってんで、裏山で山菜でも採ってこようかと話してとこなんすよ！」
孫兵衛を押し退ける様に前に出て来たのは、長髪の文七郎。
「へぇ、裏山で山菜採れるんだ。私も行ってもいいかなぁ？」
「もちろんっすよ！」
文七郎をさらに押しのけて前に出て来たのは、リーゼントの良直。
この三人が、人形遊びまでしてくれた、なかなか面白いトリオだ。
「んじゃ、ちょっくら着替えてくるんで、待ってて！」

この前小十郎と一緒に畑仕事を手伝うのに、用意してもらったのがあったはず。
着物は動きにくいし、すぐ着崩れするから、袴を貸してもらったんだ。
よくこんな小さいサイズがあったねぇって言ったら、政宗が元服前に着ていたやつなんだって。
それはそれで、汚しちゃまずいんじゃ？と思っていたら、濃紺の袴はすでに所々泥汚れっぽいのがついていた。
不思議に思って見ていたら、政宗もよく小十郎と一緒に畑に行ってた様で、その時着ていた物だと、喜多さんが教えてくれた。

そんな訳で、ダッシュで部屋まで戻って、私用の箪笥の中から、着物と袴を取り出す。
今日はチビ政宗コレクションより、濃茶の袴と、若草色の着物をチョイス。
ばばっと帯を解いて、ちゃちゃっと脱いで、着物を羽織る。
男用の着物はお端折りないから楽ちんだわ～。
帯を結んで、後は袴。
袴もそんなに難しくないから、ささっと着込んで、準備完了！

うむ。鏡を見ながらじゃないから、多少不恰好かもしれないけど、子供だし問題はないでしょう！

いざ出陣！

裏山と言って、どの規模の山を想像しますか？
私はドラ〇もんでよく見る山くらいかと思ってました。

「マジで山だと思わなかったよ！」
草履で来た私は敗者だ！
皆はしっかりした皮足袋を履いて来ていて、山登りする気満々だ。
うう、みんなの足でまとい決定。

仕方ない。ここまで来れただけでも満足しなきゃ。

「ねぇ、草履で来ちゃったから、私ここで馬と一緒に待ってる。ごめんね。」
やる気に燃えてるところを水をさす様で申し訳ないけど、山中で皆に迷惑かけるよりはましだ。
「お嬢一人をここに置いていく訳にはいきませんぜ。おぶって差し上げますよ？」
良直がしゃがんで背中を見せたけど、そういうわけにはいかない。
「大丈夫。ここから動かないようにするし。」
しばらく悩んでいたようだが、やがて意を決すると皆山の中に入っていった。

山の入り口の、比較的開けた場所で、すぐ近くには川が流れている。
川の水を飲んだり、草を食べてまったりのんびりしている馬を、少し離れたところからぼんやり眺めた。
そろそろ政宗の所にお客さんが来た頃かなぁ。

真田幸村かぁ・・・。どんな人物だったっけ？
歴史にそこまで詳しくなかったから、伊達政宗がいつ何をしたのか？とかその辺りのこともサッパリなんだけどさ。
そもそも私の居た世界の過去って訳でもないから、名前が一緒でも全然違うのかもしれないし。

奥州って東北だったよね。仙台は宮城か。
落ち葉を払いのけて適当な木の枝を手に取ると、ざっと日本地図を書く。
確か、北海道はまだ開拓されてないはずだからパス。
えと、東北が奥州だとして、新潟辺りは越後で上杉謙信。長野と山梨は甲斐で武田信玄。
神奈川辺りは北条？んで、千葉辺りが里見だっけ？
それから静岡とか辺りは徳川で、名古屋は織田で、大阪が豊臣。
あと南はごめんなさい。分からないや。てへ。

で、時代の流れ的には、織田の鉄砲で武田信玄やられちゃうんだっけ。
織田信長は本能寺で明智光秀に打たれちゃって、明智光秀もすぐに豊臣秀吉に打たれちゃう。
で、しばらく豊臣秀吉の天下が続いて、秀吉の死後、関が原、大阪冬の陣、夏の陣で徳川の天下が確定。
ううーん。そうするとさ、政宗はどの辺りでどう活躍するんだろ。
もっとちゃんと勉強しておけばよかったなぁ。

ダメだ、私一人で考えてても、ない知識からは何も分からないや。
今度小十郎に聞いて見よう。

棒を投げ捨てると、今度は少し近くを歩いて見ることにした。
なんだか、アレが出てきそうな感じの山だなぁ。
えーと、なっていったっけ。ほら、ジ○リ作品のやつ。森の中でカタカタ音をたてて首とか回しちゃうやつ。
何だったっけかな。

あ、そうだアレだ！

「まっくー○くろ○けでておいでー！でーないとめーだまをほーじくるぞー！！」

ん？なんか違ったか？
と、首を傾げた時。

「こわ！！」

誰も居なかったはずの木上から、男の声が聞こえて、迷彩柄の服に身を包んだ男が落ちてきた。

大将から旦那一人を奥州に向かわせたと聞いて、心配で様子を見に向かう途中、山の中で一人でしゃがみ込む子供を見つけて立ち止まった。
子供の近くには馬が三頭繋がれていて、それ以外に人の気配はない。
・・・いや、ここから少し離れた場所にいるな。
様子を見に走って見れば、蒼の鎧を身に着けた男たちが、競うように山菜を集めているようだ。

って、ことはあの子は留守番なのかねぇ。
山に一人で置いていくなんて、無用心だな。

なんとなくほっとけなくて、子供の所まで戻ると、木上から気配を消して様子を窺うことにした。
しゃがみ込んで何事か考え込んでいる子供の足元には、かなり精巧な日の本の地図が描かれていた。
この子、一体何者なのさ？
危険な感じはしない。ただの子供に見える。
そのうち飽きたのか、辺りをうろつき始めて、やがて首を傾げてまた考え出した。

見ていて飽きないな、この子。
何を悩んでるんだろ。

しばらくして、何か閃いたのか、嬉しそうな顔をすると、突然大声で歌いだした。

「まっくー○くろ○けでておいでー！でーないとめーだまをほーじくるぞー！！」

こわ！！何この子！！突然無邪気な顔で目玉ほじくるとか言い出したぁぁぁぁ！？

衝撃は思わず口をついて出て、驚いた拍子にバランスを崩して、子供の前に落ちた。

ううーん。俺様忍失格。

びっくりして固まっている子供にへらっと笑いかけると、付いた土を払って立ち上がる。

「いや、びっくりさせちゃってごめんね？俺様もびっくりしちゃってさ。」

目をまん丸にして固まっていた子供は、木の上と俺様を何度か見比べて、それから真っ赤になった。

あれま。可愛い反応。

「も、もしかして、聞いてたの？」

「だめだよ～？目玉くりぬくなんて恐ろしいこと言っちゃ。」

めっと軽く叱ってやると、子供は真っ赤な顔を手で隠して悶絶し始めた。

「誰も居ないと思ったのにぃぃぃぃ・・・」

まずい。可愛すぎる。
この子持って帰ったらダメかな。

しばらくして落ち着いたのか、子供は疲れたと溜息を一つ付くと、その場に座り込んだ。
つられて俺様も一緒に座る。

「お恥ずかしいところをお見せしてすみません。」
ぺこりと頭を下げる子供の顔は、まだ若干赤い。
「いえいえ、通りすがりに子供一人で何してるのかと思って、しばらく見てたんだけど、君なかなか面白いねぇ。」
「記憶から即刻抹消してください。できないなら、私が抹殺して差し上げます。」
「だから、怖い事言っちゃダメだって。・・・って、君、女の子？」
袴を穿いてたから男の子かなぁと思ったけど、良く見れば女の子だ。
「そう。私はツキって言います。」
「ご丁寧にどうも。俺様は佐助ね。」
「佐助？・・・・佐助・・・・・。」
ん？どうかした？

俺様をしげしげと眺めて、何かを思い出すような顔をして、それからポンっと手を叩いた。

「真田幸村だから、猿飛佐助なのか！すげぇ！」

え？なんで旦那のこと知ってるの？ってか、俺様佐助としか名乗ってないよ？
・・・この子、本当に何者？

俄かに警戒して距離を取った俺様に、子供はきょとんとした顔に

なった。
「どうして、俺様や旦那のことを知ってるのかな？」
懐のクナイにいつでも手を伸ばせるようにしながら尋ねると、子供は首をかしげた。
「えと？今日真田幸村が来るって政宗が言ってて、何があるか分からないからあっち行ってろって言われて、暇だから山菜取りについてきて、会った人が佐助って名乗ったら、普通猿飛佐助でしょ？違った？」
は？なんでこの子から独眼竜の旦那の名前が出てくるのさ！？
流石の俺様も、頭がこんがらがってきたよ。
「ツキちゃん、君何者？独眼竜の旦那のなに？」
「居候です。」
「居候？子供なのに？」
独眼竜の旦那の所にこんな小さな子供が居るなんて、聞いたこともないよ？
「事情があって、お世話になってます。・・・いや、お世話してます・・・か？」
はぁ？
事情って何さ？お世話してますってどういうこと？
聞きたいことがたくさんあったけど、どうやら時間切れみたい。残念。
遠かった気配が三つ、こちらに近づいてきている。

「そろそろお迎えが来ちゃったみたい。俺様もそろそろ旦那の様子を見に行かなきゃならないから、行くね。また近いうちに、ゆっくり話をしようね。」

是非とも、ツキちゃんについて詳しく知りたいなぁ。

にっこり笑って言うと、子供はニヤリとどっかの誰かを彷彿とさせるような笑みを浮かべた。

「佐助が政宗の敵でないならば、いつでも歓迎するよ。政宗同席でね。」

うわぁ、俺様なんか一本取られた気分。

１２　猿も木から落ちる（後書き）

本日もご訪問ありがとうございました。

くどい様ですが、ヒロインは歴史を良く知りません。知識は全部テレビで仕入れた模様です（笑）

おそらく、信長が現れようが、秀吉と信長が敵対してようが、全てノー突っ込み、華麗にスルーでしょう。

13　赤い人に会いました

佐助が消えた後、大量の山菜を籠いっぱいにして戻ってきた良直たちと、何事もなかったフリをして合流して、ただ今城に帰還中。
安心して乗っていられる馬って、最高だね。
ちょっとお尻が痛いのが難点と言えば難点だけど。

いやぁ、佐助に会って警戒されたときはどうしようかと思ったよ。
私は歴史上の人物として知っているけど、うっかり興奮して猿飛佐助ってフルネームで言っちゃったのはまずかった。
失敗失敗。
政宗の名前もつい出しちゃったしなぁ。
政宗のところに佐助が行って、私と会ったよとか言っちゃったらどうしよう。

佐助、二度とこっちくんな。
甲斐へカエレ。余計なことを言うなよ！？

それより、着いたらバレる前にさっさと着替えて証拠隠滅せねば。
地べたに座ったから、袴のお尻が汚れちゃったよ。
政宗も小十郎もまだ来客の相手をしてますように！

願いむなしく、城に帰ったら門の前で小十郎と政宗が仁王立ちしてました。

とほほ・・・。

黙って城を出たことを怒られ、ついでに一人で山の中に居たことも白状されられて怒られ、も一つおまけに袴を汚したことも怒られた。
言い訳を言う隙すら与えてもらえず、二人がかりで怒られて、ちょっとマジに泣きたい。

そんなに怒ることないじゃん。
私だって、外に出たいんだよ。
外の世界を見てみたいのに。
なんでそんなに怒るの？

ぐっとこらえていたのに、ぽろりと目から涙が落ちた。
「・・・・っ。・・・・・っく・・・。」
「ツキ？」
驚いたような政宗の声に、私はキッ顔を上げて睨んだ。
「政宗と小十郎のばかぁぁぁぁぁぁ！！！」
「お、おい！？」

そのまま二人を突き飛ばすように間をすり抜けて、そのまま外に飛び出した。

がむしゃらに走って、城の裏手に出たところで、思いっきり声を上げて泣いた。
なにさなにさ！！
わたしだって、わたしだって！！
ちくしょー、政宗なんか・・・小十郎なんか・・・・！！

「政宗と小十郎なんかハゲちまえぇぇぇぇぇぇ！！！」

「ぶは！！！あはははははははは！！！！」
「こ、こら、佐助！！」

いきなり笑い声が聞こえて、驚いて振り向くと、腹を抱えて笑い死にしそうな佐助と、佐助を諌める赤い服を着た政宗くらいの歳の男の人が物陰にいた。

「さ、すけ？」
なんでこんなところに居るの？

びっくりして涙は止まったけど、しゃっくりがとまらない。
着物の袖でごしごし涙を拭うと、未だにひーひー言ってる佐助と赤い人のところに近づいた。
「ツキちゃん最高だよ！！あははは！！双竜の旦那のハゲ・・・。ぶふ！ぶは！あははははははは！！！」
「いい加減にせぬか、佐助！」
そういっている赤い人も、必死に笑いを堪えようとしている様に見えますが。

「なん、って、ここにっ、いるの？」
ようやく笑いが収まってきた頃に尋ねると、佐助はしゃがんで私と目線を合わせた。
「いや、帰らないとダダをこねる旦那を説得していたら、ツキちゃんが凄い勢いで走っていくのが見えたんでついてきたの。」
「某は、真田源次郎幸村と申す。何ゆえ斯様に泣いていたのでござるか？」

・・・この人が真田幸村？
若いのにずいぶん言葉遣いは古風だな。

政宗が会わせない様にとしていた人だけど、会っちゃったし、政宗の言うことなんか今は聞きたくない気分だし、いっか。

「黙って、やまっ・・・に、行ったのが・・・っ・・・。」
「あー、あれ、黙ってきてたの？そりゃ、怒られるよ。」
「山？どういうことだ？」
「山に山菜を取りに来た奴らに黙ってついて行ったのが、竜の旦那と右目の旦那にばれて怒られたんだって。」
「あんなに怒ることないのにいいいいい・・・。」
思い出したらまた涙が出てきた。

「それは、ツキ殿がいけなかったでござるよ？」
幸村が私の涙を拭って、優しく言った。
「ツキ殿が突然居なくなってしまわれて、政宗殿も片倉殿も心から心配したのでござろうよ。怒りは心配と安堵の裏返し、でござる。」

そうかな・・・。

うつむいて、二人の様子を思い返す。

門の前で私を見つけたとき、ほっとした様な顔をしていた・・・かな？

「ちゃんと謝れば、お二人も許してくれるはずでござるよ？」

「・・・そうかな・・・。言うこと聞かないなら、もう出てけとか言われないかな・・・。」

「言うわけがないでござるよ！もし、万が一斯様なことを申されることがあったら、この真田幸村がお二人に鉄槌を下してやるでござる！」

ぐっと握りこぶしを作る幸村。

良い人だなぁ・・・。

「旦那も成長したね・・・。俺様感動したよ。」

胸元から手ぬぐいを取り出して、目元を拭う佐助。

お前は子供の成長を喜ぶ母親か。

「ツキ。」

政宗の声が聞こえて、振り返ると腕を組んで私を見ていた。

う・・・。心の準備がまだできてない・・・。

どうしようかとためらっていると、背中をぽんと優しく押し出された。

「某がついているでござる。ちゃんと話をしてこられよ。」

「・・・うん。」

おずおずと政宗に近づいて、あと三歩という所で立ち止まった。
「あ、あのね、まさむね。・・・・えとね・・・。」
うつむいたまま、顔を上げられずに、消え入りそうな声で何とか言葉を紡ぐ。
ううん、この歳になって謝るとか恥ずかしいし、怖い。
本当に出て気とか言われたらどうしよう・・・。

「だ、だまって居なくなって、ごめんね?」
よし、言った。言えたよ私!
けれど、政宗は黙ったままだ。
え?・・・もしかして、本当に、出てけコース?

怖くなって、恐る恐る顔を上げると、何かを堪えるような政宗の目とぶつかった。
「ツキは、この城に居るのが窮屈なのか?」
「え?」
「外の世界に出たいのか?」

なんで、そんな顔?
どうして、政宗の方が泣きそうな顔してるの?

「出たいか?って言われれば、そりゃ出たいよ。でも、ここが窮屈だとか、嫌だとかそんな風に思った事はないよ。」

ここに来て二ヶ月ほど経つけど、米沢城から出たのってまだ二回

だけ。
何でか分からないけど、政宗は私が外に出ようとしたりするのを避けようとしている節がある。

「なんで1人で勝手にいなくなった?」
「政宗が忙しそうにしていたからだよ。私を近寄らせたくなかったんでしょ?逆に聞くけど、政宗は私を他所には出したくないと思ってるみたいだけど、それは、私が普通じゃないから?政宗も私のことバケモノだって思ってる?」

自分で言っておいて、また泣きそう。
一度泣くと涙腺が緩みやすくなっちゃって困る。

泣かないように我慢しながら政宗を見上げると、驚いて目を見開いていた。
「違う!ツキをそんな風に思ったことは一度もねぇ!」
「じゃあ、なんで!?」

叫んだ瞬間、ほろりと涙が零れた。

「私はね、見たいの。政宗や小十郎や綱元さんや成実が毎日頑張って良くしようとしている、この国を。その上で、私にできる手伝いをしたかったの。
今日はどこそこで雨が降って田植えの準備は順調だとか、飼っている牛に子供が生まれたとか、書類だけじゃなくて、目で見たいの。
それがダメなの?どうして?」

政宗は左手で頭を抱える様に私の前にしゃがみこんだ。
あーとか、うーとか、もごもご言っている。
やがて、はぁぁぁぁっと盛大な溜息を吐いた後、腕の隙間から私を

見上げた。

「ツキ、お前の力はオレたちのものとは違う。それは分かるな？」

「うん。」

「その力を狙う奴らが必ず出てくる。下手したら命すら狙われる。散々そういう目に遭って来たお前を、オレはもうそんな目に合わせたくなかったんだ。・・・だが、これはただの言い訳だな。」

そんな風に思っていたなんて、知らなかった・・・。

ただ拾っただけの人間に、そこまで思ってくれているなんて・・・。

がりがり頭を掻いて政宗は立ち上がりながら私を抱き上げた。

「Ｓｏｒｒｙ．これからはお前にも奥州を見せてやるよ。そして、天下をな。ただし、オレと一緒というのが条件だ。Ｙｏｕ　ｓｅｅ？」

「Ｉ　ｓｅｅ．政宗、ごめんなさい。」

ぎゅっと首に抱きついて謝ると、政宗は優しく頭を撫でてくれた。

「あー、ところで、俺様たちの存在はなかったことにされてる？」

あ、すっかり忘れてた。

振り返ると、良かったでござるぅぅぅぅ！！と泣いて叫んでいる幸村と、一本足で立ったまま足を組んで暇そうにこちらを見ている佐助がいた。

すげぇ、佐助器用だな！

「てめぇら、なんでまだいやがるんだ？それより、今の話を聞いてたな？その記憶をきれーに消してやるから、ちょっと来い？」

私を下ろすと、すらりと腰に佩いていた刀を抜いて、佐助たちを手招きする政宗。

「ちょ、親子揃って似たようなこと言わないでよね！」

「この猿が！！誰が親子だ！！」

「んじゃ、兄妹？」

「弟ならともかく、政宗を兄とは認めません！！」

「ツキ！？」

ショックだと私を見下ろす政宗を押しのけて、佐助と幸村の前に立った。

「おかげで仲直りできたよ。幸村ありがとう。」

「某は何もしてござらんよ。」

ほんとに幸村は人が良いぁ。こういう謙虚さを少しは見習えと言いたい。

で、ここからは別問題なわけだけど。

うーん。どうしようかな。

幸村はともかく、佐助は初めから私を怪しいと見てるしなぁ。

ここで誤魔化したところで、しつこく探りを入れられそうだなぁ。

「Ｉ　ｔａｌｋ　ａｂｏｕｔ　ｏｎｌｙ　ｔｈｅ　ｐｏｗｅｒ　ｏ

ｆ　ｈｅａｌｉｎｇ．ＯＫ？（癒しの力についてだけ話すよ。いい？）」
「Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．Ｉ　ｅｎｔｒｕｓｔ　ｙｏｕ．（わかった。お前に任せる。）」

ひそひそと相談をしている間も、佐助は私から少しも目を逸らさない。
めんどくさいけど、仕方がない。

「佐助、今なら政宗のお許しも出たから、質問に答えるよ？だから、そんな穴が開きそうなほどこっちを見るな。」
溜息混じりに言えば、佐助はへぇっと眉を片方だけ器用に上げた。
「良いの？じゃぁ、遠慮なく。ツキちゃん、君は一体何者？」

まぁ、その質問に尽きるよね。
全部を馬鹿正直に話す必要もないよね？

「私は、政宗と同じ歳の、ちょっと人とは違う力が使える、通りすがりの通行人です。」
うむ。こんな感じで嘘は言ってないな。
違う世界から来たってことは言ってないけどな。

「ツキちゃんが独眼竜の旦那と同じ歳？」
「どう見ても、裳着もまだのようにお見受けいたすが？」
「どういうわけか分からないけど、縮んじゃったんだよね。そんでもって、どういう理屈かは分からないけど、満月になると、少しずつ元の大きさに戻ってるの。何で？とか言わないでよね？私だって知りたいんだから。」

完全に信じてない佐助と幸村だが、信じる信じないは私の知ったこっちゃない。
「そんで、力のことなんだけど、怪我を治したりすることができます。」
「怪我を？如何様にして？」
幸村が身を乗り出して聞いてきたので、自分で指先でもどこでも良いからちょっと傷を作るように指示した。
私が自分でやっても良いけど、痛い思いはなるべくしたくないじゃん？
佐助にクナイを借りて、腕を数センチほど傷つけた幸村。
赤い血が垂れて、痛そうだ。

「これでよいか？」
「うん。で、こうやって、私が手をかざすとね・・・。」

掌に意識を集中させて、傷の上に翳すと、青い光が幸村の腕を包み込んだ。
「温かいでござる・・・。」
人に術を施すの、実はすんごく久しぶりだから、ちょっと不安だったけどなんとか成功したみたいだ。
ここまでかっこつけて、治せませんでしたなんて言った日には、佐助にどんな目に遭わされることやら。

気持よさそうに目を細める幸村から手を離すと、傷は綺麗になくなっていた。
よし。成功。
「ま、こんな感じ。佐助、どう？」
間抜けにも口をぽかーんと開けたまま、幸村の腕を撫でたり叩いたりつねったりしている佐助に、声をかけると、そのまま私を見た。

「こりゃ、確かに凄い力だね。」
「すばらしいでござる！！」

どうしてこう、この世界の人は、力を恐れたり嫌悪したりしないんだろう・・・。
怯えられたり逃げられたりするのは慣れてても、賞賛とか尊敬の目で見られるのは、どうにも慣れないよ。

ちょっと困って隣を見上げれば、仕方ねぇなぁって顔をした政宗が、大きな手で私の頭をぐりぐりっと撫でた。

「おい、猿。これで満足か？」
「猿って言わないでくれる？・・・確かに、俺らにはない力だね。ねぇ、ツキちゃん、甲斐に来ない？」
「それを、オレが許すと思うか？」

佐助の言葉に、政宗の声が低くなった。
全身が殺気だって、今にも刀を抜こうと柄に手を伸ばしている。
小十郎との鍛錬で見せたものとは、比べ物にならないほどの冷たい気が、ビシビシと飛び散って、怖い。

「佐助の申し出はちょっと嬉しいけど、甲斐には行かない。ここに居る。これは決定事項。」

政宗の横から顔を出してはっきりと言えば、佐助はざーんねんと大して残念そうもない表情で大げさに肩を竦めた。
対する政宗は殺気を引っ込めて、満足そうにしている。

もうさ、この態度の差が私にとっては決定打だよね。
駄目で元々って感じがひしひしと伝わってるのに、本気で怒る政宗のところに居たいと思うのが人情だよ。うん。

ところで、幸村と佐助は一体何しに奥州まで来たの？
事の発端は、幸村が使者としてここに来るって話しだったはずだけど。
政宗としては、用事が終わったんだからさっさと帰れって感じなんだけど、幸村は終わってないから帰れないと言わんばかりだ。

「武田のオッサンが、同盟の話を持ってきたんだよ。もちろんお断りだがな。」
同盟？武田？
全然話が見えません。

「質問です。武田のオッサンってだれ？」
「武田信玄公を知らぬのでござるか！？」
「武田信玄なら知ってるよ。風林火山でほうとうで信玄餅な人だよね？」
「ほうとう？信玄餅？なんだそりゃ。」
あれ？ほうとうも信玄餅もないの？美味しいのに。残念。

って、ちがう。話がそれた。
「その武田信玄が、政宗に同盟を持ち掛けたの？なんで？」
「近頃、織田の猛攻が続いていて、西はほとんど落ちた。西が片付けば、いずれ東へと侵略は始まる。各国で個別に織田に対するよりも、ここは一つ同盟を組んで織田を打とうってのが、うちの大将の考えな訳。ちなみに、上杉からは快諾を貰っているよ。」
ふーん。今日本はそういう状況なんだね。
初めて知ることばっかりだ。
「で、政宗は同盟は嫌だと？」
「Ｉｔ　ｉｓ　ｎａｔｕｒａｌ．　（当然だ）オレはオレの力で天下をとるんだ。」
「小十郎はなんて？」
「小十郎の意見は求めてねぇ。」

そうですか。
どうしたら良いのか？とか詳しいことは判らないけど、政宗が意地を張ってるみたいだってことはわかった。

こういうところが、弟にしか見えないっての。

「幸村は武田信玄の書状をもって来たんだよね？」
「もちろんでござる！御館様が直々に某に託された書簡でござる！」
「で、政宗はそれに返書を書いたの？」
「必要ねぇ。」

なるほどね。
全身で御館様Ｌｏｖｅ！！と訴える幸村にとって、その書状を無下にされた幸村は、帰る気にはなれないだろう。

「政宗、今夜一晩だけじっくり考えてみて。小十郎の話も聞いて。その上で同盟を断るなら、ちゃんと返書を書いて。それなら幸村も納得するでしょ？」

「ああ？めんどくせぇ。考える必要なんてねぇよ。」

「政宗殿がきちんと考えられた上でのご決断ならば、某も御館様の元に戻り、その意向をお伝えしましょうぞ。」

それまでは帰らない所存！と息をまく幸村を横目に、政宗の耳元にそっと顔を寄せると、ひそひそと耳打ちした。

「書簡書かない限り、たぶんこの辺りで野宿とかしてでも帰らないと思うよ？」

嫌ぁな顔をする政宗。

よし、後一押し。

「ちゃんと小十郎とも話をして、二人で同盟破棄するならするでちゃんと礼儀には礼儀を返さないと伊達男の名が泣くよ？」

「・・・・ッチ、仕方がねぇな。」

よし。懐柔成功。

13　赤い人に会いました（後書き）

読了ありがとうございます。

１４　深夜のお勉強

夕餉も入浴も済んで、今日も一日色々あったなぁと思いつつ、喜多さんにお休みなさいの挨拶をして、さて寝ようかと布団に入った直後、政宗と小十郎の襲撃に遭いました。

完全睡眠体制に入ってたところだった私の機嫌は、現在うなぎ下がりです。

「乙女の就寝時間をなんと心得るか？お肌が荒れたら、責任とれよ？」

「ツキの意見も一応聞いておこうと思ってな。」

ひとの話も聞かずに、政宗は布団の中の私を引き摺り出して、膝の上にのせた。

「一応程度の意見なんか、必要ないじゃんよ。失礼な奴だな！」

「すまねぇな。ツキ。」

きっと暴走する政宗を止められなかった事に対する謝罪だろう。

小十郎は脱いだ羽織を私に羽織らせて、政宗の前に座った。

仕方ない。きっと昼間の事だろう。

考えろと言ったのは私だし、少しは付き合うか。

「で、話って武田信玄の同盟の事？」

「そうだ。」

「ツキは同盟についてどう思う？」

小十郎さん、私この世界の状況がよくわからないんで、明日あたりあなたに教えてもらおうと思っていたのですが？

私が別の世界から来た人間だっての、忘れてないだろうか？

「まず、教えてもらいたい事があります。今、この日の本の国の勢力図はどうなってるの？」
「そこからか。」
呆れた声の政宗。
「情報を故意に隠蔽していた奴が言うな。全て包み隠さず情報を公開しやがれ。」
出鼻をくじかれてがっかりしたみたいな顔すんな。

と、いう訳で小十郎先生と政宗助手席による戦国講座～。

まず、東北一帯は政宗が治める奥州。小さないざこざはあるものの、内政の充実を頑張っているおかげでとりあえず落ち着いている。そろそろ天下目指していっちゃう？って感じらしい。

んで、お隣は上杉謙信が治める越後。お約束と言うかなんと言うか、ずっと武田信玄の甲斐と睨み合い&小競り合いを繰り返していて、今のところ奥州を攻める気はなさそう。

相模の北条氏政は武田信玄に押さえつけられている状況らしく、ここも奥州までは手が届かない。
その甲斐は、北条と同盟を結んで、それから越後とも同盟を結んだ。

その西に行けば、三河の徳川家康は織田信長と同盟を結び、織田は明智光秀、前田利家を配下において、中国地方および、九州を制圧。

辛うじて安芸と四国は織田に対抗をしているという状況。

なるほど。今一番強大なのは、織田軍ってことね。

「状況は大体分かった。で、武田信玄が持ちかけてきた同盟の内容は、伊達にとって不利なの？」

詳しいことを言われても分からないから、とりあえず小十郎の意見を聞く。

政宗に聞いたって、個人的感想しか出てこなそう。

「期限は織田信長の首を取るまで。織田軍が同盟国に戦を仕掛けてきた時には、他の国も兵を出して加勢すること。そして、織田を攻めるときは同盟国の連合軍で戦を仕掛けること。あとは武器や食料等の融通。対等な同盟の条件を提示してきていると、俺は判断した。」

ふむふむ。同盟としては、悪くはないわけね。

で、次は政宗か。

「政宗は、昼間天下は自分の力でとるって言ってたけど、同盟を結ぶ気にはまだなれない？」

「当然だ。織田信長の首はオレが獲る。」

「そこに、公算はあるの？織田の兵力と伊達の兵力は？」

「・・・・・ちっ。」

分かってはいるんだね。良かった。安心した。

これでオレが強いから大丈夫！とか言ったら、甲斐に行こうかとか

考えちゃうとこだよ。

政宗の膝から降りて、正面向かい合うようにして正座をすると、目を合わせて私の考えを話した。

「政宗は、奥州筆頭伊達政宗だよね。奥州のみんなの生活を、命を、未来を背負う人だよね。この同盟を受けるか蹴るかで、自ずとみんなの未来は変わってくる。だから、小十郎や綱元さん・・・まぁ、一応成実の意見も聞いて、その上でじっくり考えて決めて欲しい。それが、私の意見。」

ゆっくり目を閉じて、政宗が考え込むと、私はほっと息をついた。良かった。政宗がきちんと感情を抜きにして考えれば、奥州のために必要な決断をすることができるはずだ。
ちらりと小十郎を見れば、同じようにほっとした表情をしている。

まったく。最近なんだかんだと政宗に手を焼くと、私に振ってくるのやめてよね。
単なる我がままならともかく、こんな重要な政治の局面なんて、私に振られても何もできないっつーの！

「小十郎、近いうちに甲斐に行くぞ。直接武田のおっさんと話をつける。良いな？」
小十郎の名を呼んで静かに開いた政宗の目は、迷いや苛立ちはなかった。
一つの方向を決めた、筆頭としての目だ。

「御意。」
深く一礼をして、小十郎は嬉しそうに私を見た。

だから、もう私に振ってくんな！

それからも何故か私の部屋で二人は甲斐に行く日程を詰めたり、同盟の内容で不審な点や納得いかない点を話し合っていた。再び政宗の膝の上で抱っこされつつ、最初は口を挟んだりしていたものの、日付が変わって大分時間が過ぎた頃、途中で寝落ちした。

難しい話は政宗の部屋でやれっつーの。

１４　深夜のお勉強（後書き）

長くなったので分割します。
小十郎視点は２３時投稿予定です。

15　右目は苦労症（前書き）

お待たせしました。小十郎視点です。

15　右目は苦労症

先触れ通りに、真田幸村は供の一人もつけずに、ここ米沢まで来やがった。
それが伊達など取るに足らぬと言っているようで気に入らねぇ。
政宗様も同じお気持なのだろう。機嫌がよくない。

成実の案内で部屋に通され、挨拶もそこそこに書状を懐から取り出して、政宗様に手渡した。
書状に目を走らせて、数瞬の思案の後、真田に書状を突き返された。
「前から言ってるが、オレは誰とも連む気はさらさらねぇ。帰りな。」
「御館様からのこの同盟の話を、受けぬと申されるのでござるか！？」
「ああ、そう言ってる。」

そして、政宗様は話は終わったと言わんばかりに、部屋を退出なさってしまった。

確かに同盟はいずれは必要になるだろう。
それは政宗様とて心の片隅にあるはず。
だが、同盟を持ちかけた相手が悪かった。
信玄公、なぜ真田を使者になさった。
真田を好敵手としている政宗様が素直に話しを受けると思うのか？

頭が痛い。

「片倉殿、何故政宗殿は同盟を許諾ならなぬのか？」

それは、使者がお前だからだ。

よっぽど言ってやろうかと思ったが、真田が捨てられた犬の様な目でこちらを見やがったので、ぐっと言葉を飲み込んだ。

そんな目で俺を見るな！

「政宗様には政宗様のお考えがある。」

それが、真田を喜ばせたくないとか、そんな理由でない事を祈るばかりだが。

ああ、胃が痛え。

畑で癒されたいもんだぜ。

それからしばらくして、ツキが城から抜け出して、うちの連中と山に出かけたと知らせが入り、ただでさえ機嫌の悪かった政宗様のいらつきは最高潮となった。

様子を見に向かわせた黒脛巾の報告で、まもなく帰ってくると分かった政宗様は、無言で城門の前に立塞がり、俺も一緒にツキの到着を待った。

政宗様はツキをそれは溺愛なさっている。
城の者は全員、政宗様の態度からそれを感じ取っている。
気が付いてないのは、当のツキ本人くらいのものだ。

政宗様は、ツキの情報が外に洩れることを極端に警戒なされる。
ツキも薄々は自分が城に半軟禁状態であることに気が付いているようだったが、特段それを疎んじているようではなかった。

だが、違ったのだろうか。
俺や姉上にすら何も言わず外に出るとは。

もし、万が一、敵国の兵に会ったらどうする。
山で遭難したらどうする。
野生の獣に襲われたらどうする。

あああああああ・・・・・。胃が・・・・・・・・・。

人の気も知らずに、帰ってきたツキは政宗様と俺の姿を見つけるなり、うげぇぇぇ!!と叫んだ。
・・・今日は、徹底的に説教をしてやらねば。

この小十郎、修羅となろうぞ!!

政宗様と俺の説教により、小さくなっていたツキの肩が震えた。
「ツキ?」

驚いたような政宗様の声に、ハッとなってツキを見れば、目に涙を浮かべて政宗様を睨み付けている。

「政宗と小十郎のばかぁぁぁぁぁぁ！！！」

城中に聞こえそうなほど大きな声で叫んで、そのままツキは走って部屋を出て行ってしまった。

ツキの奴、あれほどはしたないから足は広げるなと言ったはずだが。ましてや、政宗様に馬鹿だと？

「政宗様、この小十郎が捕まえて連れ戻してまいります。」

怒りを露に立ち上がった俺を、政宗様は引き止められた。

「いや、小十郎、オレが行く。ツキにはツキの考えがあるのかも知れねぇ。それも聞かずに頭ごなしに叱り付けたのは良くなかった。」

そういうと、政宗様はツキを追って一人で出て行かれた。

確かに、ツキにも理由や事情があったのかもしれねぇ。

外見は子供でも、中身は成人した女だ。

時には政宗様よりもしっかりした考えを示すこともある。

見た目に囚われて、ツキを子供扱しすぎた。

俺もまだまだ・・・だな。

しばらくして、機嫌の直ったツキを連れて政宗様が戻ってこられた。
何故か、後ろに、真田と猿飛も連れて。

「うちの旦那がどうも駄々をこねたらしくて、すいませんねぇ。」
猿飛、てめぇまで何でいやがる？
そして、真田。てめぇは甲斐に戻ったんじゃなかったのか？

「・・・政宗様、ご説明を。」

「Ｏｈ，小十郎その面怖えよ。ツキが怯えるだろ？」
はっとしてツキを見れば、真田との会話に夢中でまったくこちらなど見向きもしてない。
「政宗様！！」
「うるせぇよ、小十郎。とにかくこいつらを今夜は泊めることにした。準備しろ。終わったら、俺の部屋に来い。」

楽しげに話をするツキを見て舌打ちをすると、政宗様はツキを真田から引き剥がしてそのまま出て行ってしまわれた。

まさか、同盟について考え直されたのだろうか・・・。
それ以外に武田の者を城に一晩とはいえ泊めるなど、考えられん。

真田と猿飛の部屋をツキと政宗様の部屋から一番遠い離れに用意し、念のために黒脛巾の数人を張らせると、急ぎ政宗様のもとへと

戻った。

執務室にはすでにツキの姿はなく、政宗様一人が書状を手にして思案されていた。

「小十郎、この書状を読んでみろ。」

渡されたのは、真田が持ってきた同盟についての書状だった。

端から端まで目を通し、同盟の内容と条件を頭で整理する。

多少の疑問や問題はあるものの、概ね悪くはない内容だ。

だが、あの甲斐の虎とも言われた男が、出してきた同盟の話だ。

熟考に熟考を重ねて、あの男の真意を読み取らねば。

「悪くはないと思います。各地へ飛ばした者の報告では、織田の勢力は日増しに強大化し、他国を蹂躙しつくしている様子。万が一この奥州へと目を向けられれば、流石に分が悪いかと。」

「小十郎はこの同盟を結んだほうがいいと思ってるって事か？」

「はい。乗ってさほど損はないかと。」

書状を返して政宗様を窺えば、深く思案しておられる様子。

「なぁ、小十郎。オレは魔王のおっさんの首を獲る。そして、天下を取って奥州を今以上に安定させて繁栄させる。その決意に少しの躊躇いもねぇ。」

「はっ。承知しております。」

「・・・。それならいい。少し考える。」

昼間はあれ程までに同盟を結ぶことを拒否されていた政宗様が、再考されているのはなぜだ？

何があった？

それが分かったのは、夕餉も終わり、そろそろ皆が就寝しようとしだした頃だった。
「Ｈｅｙ，小十郎。ツキんとこ行くぜ？ついて来い。」
「は？ツキは先程就寝のため部屋に戻りましたが？」
そろそろ床に就く頃だろう。
「いいから、行くぞ。」
「政宗様！？」

止める間もなく、ツキの部屋の方へ向かう政宗様を慌てて追いかけた。

「ツキ！ちょっと付き合え！」
襖を開け放つと同時に言い放つ政宗様に、ふざけんな！！とわめくツキの声が中から聞こえてきた。
断りもなく部屋に入り、すでに火を消して就寝していたツキを布団から引きずり出し、膝に抱える政宗様に、頭痛を再び覚える。
「一応程度の意見なんか、必要ないじゃんよ。失礼な奴だな！」

確かにそうだな。
だがな、ツキ。政宗様が意見を求められるなど、そう滅多にあることではないんだ。
政宗様の迷いを聞いてやってくれねぇか？
「すまねぇな。ツキ。」
羽織を着せてやりながら言うと、仕方がないなぁと呟いて、政宗様

を促した。

そもそもツキには、この日の本の他国の知識がなく、まずそこから説明をした。
違和感なく執務に携わっているおかげで、ツキが異世界から来たってことを忘れかけてたぜ。

あらかた理解を示した後、俺に同盟の内容についてどう思うかと尋ねた。
日中政宗様に申し上げたとおり、悪くは無い同盟内容だと思うと答えた。

それに何度か頷いた後、政宗様を見上げた。

「政宗は、昼間天下は自分の力でとるって言ってたけど、同盟を結ぶ気にはまだなれない？」
「当然だ。織田信長の首はオレが獲る。」
「そこに、公算はあるの？織田の兵力と伊達の兵力は？」
「・・・・・ちっ。」

政宗様も本心では分かっていらっしゃるのだ。
このまま織田と正面からぶつかることは得策ではないと。
だが、奥州筆頭としての、意地と誇りが同盟を躊躇わせているのだ。

ツキは政宗様の膝から降りると、強い光をその目に湛えて正面か

ら見据えた。

「政宗は、奥州筆頭伊達政宗だよね。奥州のみんなの生活を、命を、未来を背負う人だよね。この同盟を受けるか蹴るかで、自ずとみんなの未来は変わってくる。だから、小十郎や綱元さん・・・まぁ、一応成実の意見も聞いて、その上でじっくり考えて決めて欲しい。それが、私の意見。」

奥州に暮らす民の未来を優先で考えろ・・・か。

その通りだ。

奥州の平穏と民の暮らしの向上を考えて、天下を取ると宣言された政宗様。

その政宗様が選択する一つ一つに、奥州の未来がかかっている。

俺や綱元殿は政宗様を一番に考えるあまり、その事の大切さを忘れていたのかもしれねぇ。

しばらく目を閉じて考え込んでいた政宗様は、やがて目を開き宣言なさった。

その目は、全ての迷いを捨てた政宗様が本来持つ力に満ちた目だ。

「小十郎、近いうちに甲斐に行くぞ。直接武田のおっさんと話をつける。良いな？」

「御意。」

深く一礼をした後、ほっとした表情のツキを見た。

ツキが居てくれて本当に良かった。
これからもよろしく頼むぜ。

15　右目は苦労症（後書き）

ヒロインと政宗に振り回される小十郎の一日でした。

16　叫ぶ（前書き）

16　叫ぶ

昨夜はかなり遅くまで話し込んじまった。
朝食も半分寝たままの状態で食べていたツキは、今も隣で座りながらこっくりこっくりと頭を揺らしている。

武田信玄からの書状に対する返書も書き終わり、今は小十郎が真田と猿をここに連れてくるのを待っているわけだが・・・。
「ツキ。もうちょっと頑張って起きてろ。もうすぐ真田と猿がくる。返書をくれてやれば、奴らもさっさと甲斐に帰る。それから寝ろ。」
「むー・・・。眠いんだよ。パト○ッシュ・・・。」
なんだパ○ラッシュってのは。

揺すっても、頬を軽く叩いても、耳に息を吹きかけても、ツキの目が覚める様子はない。
しかたねぇな。
昨日は外に出たり、泣いたり怒ったり走り回ったりしてかなり疲れていたところを、夜遅くまで付き合せちまったからな。

ふらふらと安定しないツキを足の上に抱き上げ、腕で背中を支えて頭を肩に凭れ掛らせた。
しばらくもぞもぞしていたが、そのうち、ふすーふすーと寝息を立て始めた。

初めて会ってから大分成長したが、まだまだ小さな体。
こうして抱き上げれば、すっぽりと収まってしまうほどだ。
それなのに、オレや小十郎を振り回して、焦らせて、心配させて、・・・嬉しい言葉をくれる。

「私はね、見たいの。政宗や小十郎や綱元さんや成実が毎日頑張って良くしようとしている、この国を。その上で、私にできる手伝いをしたかったの。
今日はどこそこで雨が降って田植えの準備は順調だとか、飼っている牛に子供が生まれたとか、書類だけじゃなくて、目で見たいの。
それがダメなの？どうして？」

あの言葉には本当に参った。
あんな殺し文句不意打ちでくるとは思わなかった。
外に出たがる理由なんて、城に飽きたか、仕事が嫌になったか、オレの所が嫌になったかのどれかかと思ってた。

民の暮らしが見たかったと、その上でできることをしたかったのだと。
それは、オレと一緒に同じものを目指すということか？

オレと一緒に居ると、いうことか？

「上等だ。俺の側で見せてやる。最高の景色って奴をな。」
眠るツキの頬にキスを落として、その顔をじっくり見つめた。

早く大きくなれ。それまでは待っていてやる。

しばらくして小十郎が真田と猿を伴い部屋に戻ってきた。
慣れない人の気配を感じたのか、ツキが腕の中で目を覚まし、わずかに緊張を見せたが、オレと小十郎の姿を見つけると、くあぁぁぁと欠伸をした。

「まだ眠いよ、パト○ッシュ・・・。」
「だから、そのパトラ○シュてなんだよ。」
「犬。」

・・・このやろう・・・。

「あれ?ツキちゃんどうしたの?」
猿がゴシゴシ目をこすっているツキを見つけて首をかしげた。
「昨夜遅くまで起きてたから眠いんだろ。」
「寝ようとしたら、政宗に襲われた。」

間違っちゃいねぇが、誤解を招く言い方だな、をい。
この凍りついた空気を何とかしやがれ。

そして小十郎!お前も一緒に居ただろうが!!そんな目でオレを見んな!!

「は、は・・・。」
真田が顔を真っ赤にして、オレを指差しワナワナしだした。

まずい！

猿の野郎はすでに耳に指を突っ込んでいる。
オレはとっさにツキの耳を両手で塞いだ。

「破廉恥いいいい

思いっきり想像しちゃったんだよ。」
「佐助も破廉恥！！！」
だから、うるせぇんだよ！
猿、てめぇわざとか？

「想像・・・？あ、そっか。襲われたって言い方が悪かったのね。」
猿に言われて初めて自分の発言の意味を理解できたようで、ふんふんと頷いた後、ツキはにやっと笑った。
嫌な予感がするぜ。

「あのね、襲われたんじゃなくて、寝ているところをいきなり来て無理矢理・・・。」
「む、むりやり・・・！？」
「私を布団から引きずり出して・・・。」
「ひひひひひ＃＄％＆＊@！？」

おいおいおいおい！
嘘は言ってねぇが、なんかすげぇオレが変態みてぇじゃねぇか！

「小十郎と三人で・・・。」
「三人！？」
おい、猿。変なところで食いつくな！

初めは呆れて見ていた小十郎も、自分に火の粉がかかると見ると、慌てて口を挟んだ。

「今回の同盟についての話をしていたんだ！！」
「ちっ。」
舌打ちすんな！！

「と、言うわけで三日後、こちらを出ることにする。」
「承知。申し出を受けてくださったこと、嬉しく思いますぞ！！」

今後のことについて打ち合わせをしている政宗と幸村を、少し離れたところから、小十郎と佐助と三人で眺めております。
ぶすぅとした政宗と、嬉しさを全身から滲み出している幸村。
ホント対照的な二人だ。

エロ政宗に対して、純情幸村。
あの雄叫びは困るけど、なかなか面白かった。
是非甲斐に行った暁には、全力で遊びたいもんだ。

「ツキちゃんも甲斐に来てくれるの？」
小十郎の向こう側にいた佐助がひょいと顔を寄せてきた。
「うん。いくいく。駄目だって言われたら、こっそりついてく。」
甲斐についていくのは決定事項です。
小十郎もそのつもりだったのか、聞こえているだろうに、特に否定はしなかった。
「んじゃ、ツキちゃんが好きなものを用意しておくよ。何が良い？」
ひゃっほー！！んじゃ、遠慮なく！
「にほんし・・・・。」
「酒は禁止だ。」
「・・・・・・・・・お気遣いなく・・・・。」
小十郎のばかぁぁぁ！！

政宗の返書を手にして、満足げに幸村は佐助と共に甲斐へと帰っていった。
それを見送った後、政宗と小十郎はしばらく城を空けることになるので、その間の引継ぎをするために綱元さん成実との話し合いの為、執務室へ戻っていった。

私は喜多さんに連れられて、自分の部屋でお昼寝です。
「まったく。小十郎も殿をお止めできなかったとは、嘆かわしい。

子供は寝ることが仕事だというのに。」
「いや、喜多さん、私19・・・。」
まあ、あと一年くらいの辛抱だから、子供扱いでもいいけどね・・・。
あ、そうだ。

「喜多さん、私甲斐に行くとき、袴がいい。着物で馬乗れないよ。」
「あら？ツキも行くの？」
「うん。小十郎も駄目って言わなかったよ。」
言っても行くがな！
「それじゃぁ、いくつか用意しましょう。本当は可愛らしい着物を用意したかったのだけど・・・。」

動きにくいので勘弁してください。
それに一応は着られるけど、鏡がないと無理。
鏡が貴重品なこの世界で、そんな注文はつけられない。
人様んちで着崩れた着物で過ごすわけにはいかないよね。
その点、袴なら小十郎に着せてもらえる。

チビ政宗コレクション部屋にいそいそ向かう喜多さんの背中を見送って、衝立で日陰になっている畳の上にごろんと転がった。

甲斐はどんなところかな。
前の世界では山梨や長野に行った事はないけど、ぶどうや桃、林檎をよく頂いていたなぁ。
この世界でもあるのかな。
あるなら食べたいなぁ。でも、季節的にまだか。
同盟を結ぶなら、そのうちまた甲斐に行くこともあるのかもしれない。

その時は、佐助に用意してもらおう。
ついでに酒もね！

16　叫ぶ（後書き）

遊びすぎました（笑）

17　甲斐の虎に会いました

やって参りました、甲斐の国～！！

米沢からひたすら馬で移動の四日間。
お尻も太股も背中も筋肉痛。
初日は話そうとすれば下を咬み、容赦ない政宗の馬捌きにバランスを取るのも必死だったけど、流石に翌日には慣れてきて話すことくらいはできるようになった。
これなら一人で馬乗れるんじゃね？と思ったけど、政宗のお許しが出るわけもなく、大人しく同乗するしかなかったけどね。

政宗は何時もの着物ではなく、鎧に蒼の陣羽織を身に着け、腰には六本も刀を差してる。
確かに同盟を組むためとはいえ、敵地に向かうんだから鎧とかは分かるんだけどね。

その刀はなんですか？
普通一本。差してても二本でしょうよ。
六本って、どうすんの？
ストック？

確か、初めて森で会ったときも同じ恰好をしていたはずなんだけど、傷を負ってたし、そんな些細なことはどうでもいいってくらい混乱していたからなぁ。

と、言うわけで、出発前に聞いたよ。
その刀は何事かと。

そしたら凄く嬉しそうな顔をして、刀を構えてくれました。
六本いっぺんに！！！

指の間に挟むように、右手で三本左手で三本。
六爪流と言うそうです。
二刀流なら聞いたことあるけど、六爪流・・・。

異世界ってすげぇなと、心底思いました。

「ツキ、あそこに見えるのが、武田信玄の居城、躑躅ヶ崎館（つつじがさきやかた）だ。」
遠目に見えるでかい建物を指差して、政宗が機嫌よく言った。

あれが武田信玄の城かぁ。
やっぱり小田原城みたくどーんって感じじゃないのね。

「政宗様、先触れのものを出しました。今より油断なさいませぬよう。ツキも油断するなよ？」
観光気分で城を眺めていたら、小十郎が側に寄ってきた。
「ハッ！このオレがヘマなんざしねぇよ。」
「りょうかい～。」
二人で仲良く返事をしたのに、小十郎は胃の辺りを押さえて溜息を吐いた。

そして今、武田信玄、真田幸村、伊達政宗、片倉小十郎という錚々たるメンバーに、私が違和感を与えまくりながらも同じ部屋で対面を果たしております。

政宗たちもでかいと思ったけど、武田信玄はそれ以上に大きな男だった。

二メートル超えてない？

つか、武田信玄も赤いのね。

素敵な胸筋お持ちですね。触っても良いですか？

政宗と信玄公は同盟の内容について、あーでもないこーでもないと話をしていて、何かの駆け引きでもしているのだろう。

二人を見る小十郎の目も真剣そのものだ。

多分、話の内容を理解してないのは私と、隣でにっこにっこしている幸村だけだろう。

ううん、これと同列か・・・。

複雑な気持だ。

途中、感極まったらしい幸村が雄叫びを上げて、信玄公にぶっ飛ばされて佐助に回収されると言う面白ハプニングがあったけど、概ね順調に話し合いは終わって同盟は成立した。

政宗も小十郎も満足そうなので、うちの出した条件は通ったんだろう。
良かった良かった。

なんて思いつつ、凝った肩と首をほぐそうとクキクキと間接を動かしていると、信玄公が私に目を向けた。
瞬間、無意識に緊張が走り、思わず身構えてしまった。
「其の方が幸村が申しておった、ツキ殿か？」
「ああ、そうだ。ツキ、来い。」
政宗が手招きするので、信玄公に警戒しつつも、じりじりと近寄った。
「どうした？お前が尻込みするなんて珍しいじゃねぇか。」
政宗の背中に隠れるようにしておずおずと信玄公に顔を向けた。

やっぱり、政宗や小十郎、幸村たちとは違うオーラがあるよ。
殺気を放つわけでも、今にも襲い掛かろうというわけでもなく、ただ悠然と座って私を見ているだけだというのに、威圧されてしまう。

「ほら、挨拶くらい自分でしろ。」
政宗に促されて、意を決して口を開いた。
「つ、ツキです。・・・お初に御目にかかります。」
「うむ。ツキ殿の話は、幸村や佐助からよく聞いておる。此度の同盟を独眼竜に決意させたのは、他ならぬツキ殿だと。」
「いや、そんなことは・・・。」
「礼を申すぞ。」
頭を下げられて、慌てる私に、政宗は楽しげに肩を震わせた。
「流石のツキも、アンタの前だと緊張するらしい。」

しますよ。ハンパないんすよ。
目力っていうの？
ものすごいです。
普通にしているだけなのに、怒った時の小十郎より迫力ある気がする。

「今宵は宴を催す。存分に楽しむといい。」
政宗よりも大きな手で頭を撫でられ、本気で頭をもがれるかと思ったけど、優しい感触にほっとした。
こっくりと頷くと、信玄公は満足気に笑って部屋を出て行った。

「は～、緊張した。凄いオーラだった。」
政宗の背中にもたれかかるように座って、溜まった息を全て吐き出した。
「そうか？」
「うん。なんかね、表面だけじゃなくて、奥底まで見られてる様な感じの目だった。」
よいせと政宗の正面に回って、膝の上に座ってようやく人心地ついた。

なんか、もうここが精神安定の場になっちゃってるんだけど。
元の姿に戻るまでには治さなきゃな。

小十郎に世話を焼かれ、政宗に抱っこされているうちに、佐助が迎えにきた。
「ごめんねぇ。旦那が派手に吹き飛んじゃって、治療してたら時間かかっちゃってさぁ。」
そういえば吹っ飛んでたねぇ。

私が治療してあげればよかったかな・・・。

なんて考えていると、それが分かったのか政宗がいつもの事だからほっとけと言うと、佐助も苦笑してそうだねぇなんて言っていた。あれが何時もの事だなんて、甲斐はどうなってんの？

そして、完全に無視されてますが、この部屋の大きな壁の穴はどうするんだろ。

ちらりとその穴を見れば、とてもさわやかな風が吹き込んでいた。ざ、斬新ナ窓デスネ・・・。

「それ？それはね、夜中に小人さんが来て直してくれるから、そのままで平気だよ。」

「は？」

驚いて佐助を見ると、虚ろな目をした佐助が、アハハースゴイデショーと、あらぬ方向を見てちょっとヤバイ笑いをしていた。

「ま、まさむね・・・。」

「ツキ、世の中には触れてはいけねぇもんがあるんだ。そっとしておいてやれ。」

うん。そうだね。

日が傾いてきた頃、大きな部屋に呼ばれて宴会が始まった。

伊達の皆よりは若干大人しめなものの、こちらの宴会もそれなりに

盛り上がっている。
ええ、私は上座でお偉方に囲まれて御茶をすすってますが何か？

しかし、米沢とはまた違う食材を使った料理は美味いな！
ここは小麦が採れるのか？うどん久しぶりに食べたよ！
おなかいっぱい。満足です。

ちらっと横を見れば、政宗と信玄公が酒を飲んで言葉を交わしている。
その姿は思ったよりも怖くなくて、最初よりは大分緊張も薄れてきた。
他の人にはない甘味を私の膳に載せてくれたりと、結構気を使ってくれるのが嬉しい。

その両サイドにはそれぞれ小十郎と幸村が陣取っていて、そこから下座に向けてごっつい顔したおじちゃんたちがずらーっと並んで、更にその向こうで普通の兵士たちがやんややんやと楽しそうに騒いでいた。

いいなぁ。のみたいなぁ。
ここは伊達の城じゃないから、徳利を政宗がちょろまかしてくるなんてことできないだろうな・・・。
つか、政宗私の存在など忘れて飲んでやがるな？
きぃっ！うらやましい！！

ご飯も食べ終わったことなので、信玄公の向こうに居る幸村のところで少し遊ぶことにした。
酒が入り、すこし潤んだ目でほんのり頬を染める幸村は、やばいく

らいに可愛い。
「つきどの、しょくじはしたにあったでござるか？」
うおおお・・・。やばい。舌っ足らず萌える。
「ゆ、幸村、大丈夫？」
思わず鼻を押さえながら声をかけると、きょとーんとした顔で首をかしげる幸村。
ぐはぁ！凄い破壊力だ！
「お、お持ち帰りしてもいいですか？」
「いいわけねぇだろ。」
首根っこを掴まれて引きずり戻されて、振り返って見れば政宗が呆れた顔して私を見ていた。
「どこのおっさん思考だ、てめぇは。」
「だってぇ、可愛すぎるんだもん。見てよあの顔！」
幸村って生まれてくる性別間違えてない？女の子だったら、めちゃくちゃモテたよ。
「Ｈａ！男の面なんざ見て可愛いとか思わねぇよ。気色わりぃ。」
「え？やっぱ幼女萌え？」
「まだその話を引きずるか！」
ぎりぎりと頭を鷲掴みにされ、ものすごい力で締め付けられる。
「痛い！痛いって！！」
暴力はんたーい！！

「そのくらいにしておいてやれ。本気で痛そうだぞ。」
笑いを滲ませた信玄公に諌められ、政宗は舌打ちをしてから手を離した。
「つきどの？だいじょうぶでござるか？」
ひょいと抱き上げられて、よしよしと頭を撫でられる感触に驚いて顔を上げれば、萌え幸村がにっこにっこしていた。
「つきどのはかわいいでござるなぁ。それがし、つきどのがだいすきでござる～。」
そして、熱烈ハグ。

ちょ、やめっ・・・！生肌が顔に・・・！
なんかいい匂いがしやがるな！！

完全パニック状態になった私は、わたわたと両手を振り回して暴れるが、幸村の腕はびくともしない。
「てんめぇ・・・・。」
「政宗様！！」

後ろで政宗が殺気だって刀を抜こうとするのを、小十郎が必死に止めている。
俄に殺気立つ上座で、信玄公だけが悠然と構えていて、私たちの様子を見守っていた。

「幸村離してぇぇぇぇ！！」
「いやでござるぅぅぅぅ！！」
「おいコラ！それは破廉恥じゃねぇのかよ！！」
「政宗様、落ち着いて！！」
「まさむねどのは、そんざいがはれんちでござる～。」
「それは同感！」

「ツキ！政宗様だって傷付くんだぞ！！本当のことを思っても口にするな！」
「小十郎！オレはおめぇの言葉に傷付いた！！」

もう、カオスだ。

だれか何とかして！！と、思ったとき。

「はいはい。旦那もうそろそろ寝ようねぇ。」
ゴスっ！

すごい物音がして、私を抱えていた幸村の腕から力が抜けた。
何事？

佐助が慣れた様子で幸村を肩に担ぎ上げて、私を見下ろした。
「ツキちゃんごめんね。旦那抱きつき癖があってさ。酔っ払いのしたことだから許してやってよ。」
「いや、それはいいんだけど、ゴスって言ったよね。ゴスって。」

素早く政宗に回収されてしまったので、確かめることはできないけど、多分幸村の後頭部には立派なタンコブができてるんじゃないかな。
・・・それより、この後始末、どうしよう・・・。

佐助に担がれて退場する幸村を見送りながら、小十郎がひでぇよぉと泣きが入ってる政宗と、おろおろしている小十郎をどうするか、

頭を悩ませた。
もうさ、素面なのが敗因？
飲んじゃえば私も楽しくなる？

こちらの騒ぎなど気にもせずに盛り上がっている、武田軍の皆さんをうらやましいなぁと黄昏ながら眺めていると、ポンっと信玄公に肩を叩かれた。

「なかなか面白いものを見せてもらった。ツキ殿、これからも幸村を頼んだぞ？」
「え？」
なんでそうなる？政宗だけでも持余し気味なのですが。

信玄公は私の話など聞いちゃいねぇって感じで、楽しげに笑って豪快に酒をあおった。

17　甲斐の虎に会いました（後書き）

御館様の魅力を表現できないｏｒｚ

18　満ちる月に捧げる祈り

宴会もまだ続いていたけど、そろそろ眠くなってきたこともあって、私一人先にこっそりと抜け出させてもらった。
政宗と小十郎は主役ということもあって、信玄公と酒盛り。
佐助は幸村の御世話。
私一人場違いでつまらないじゃないか。
もちろん、武田の女中さんに案内してもらって部屋に戻ってきたし、政宗や小十郎が私を探してたら部屋に戻ったと伝えて欲しいとも伝えてきた。

ようやく部屋で一人になり、ほっと一息つく。
広々とした和室の床の間には、見事な水墨画の掛け軸と、緋色の見事な扇が飾られていた。

障子を開けて外を見れば、綺麗な日本庭園と昇り始めた満月とが幻想的な景色を創っていた。
「うわ～。こういうの久しぶりだ・・・。」
そこそこ大きかった私の家にもこんな感じの庭があって、ババ様が何時も縁側に座って庭を眺めていた。
ババ様は母の前の宗主で、座を譲った後は静かに余生を過ごすはずだった。
あの日朔夜に殺されてしまうまでは。

ちらり・・・。
床の間の扇を見る。
「借りてもいいですか？」

多分近くで身を潜めているだろう、佐助の部下に聞こえるように声を出して見るが、反応はないので勝手に了承の意と受け取る。
こんな綺麗な扇、飾っとくだけじゃもったいないよ。

舞扇を手に取り、庭に下りると月に一礼を捧げて、ゆっくり扇を広げた。
「だいぶへたっぴになっちゃっただろうけど。ま、許してよババ様。」

ババ様は私の舞の先生。
何時も縁側でババ様が私の舞を見て、いい所、直すべき所を細かく教えてくれた。

ジイ様が亡くなった日、ババ様が舞った送魂の舞。
あの日、私が皆の為に泣きながら舞った舞。
それをもう一度。

やはり腕の動きや足裁き、手の指の動き、体全体の表現力。
全てが以前よりもぎこちなくて不恰好。
舞踊は首と手の動きが重要と言われているのに、それが満足にできない。

でも、心は高揚する。
月を見上げて、祈りを捧げ、願いを誓う。

ここにきて、私は毎日が幸せです。
ごめんね。あいつを殺すことは叶わなくなったけど、私は幸せなの。

こうして、また舞を舞えるようになったの。

「ぱぱ・・・まま・・・おにいちゃん・・・。」

いつか、皆のところに逝ったら、お説教たくさん聞くから。
またお前は！ってげんこを貰っても、文句は言わないから。
だから、ごめんなさい。

私はこの世界で生きていく。
政宗や小十郎の側で、この戦国の世を生きていく。

ここで、幸せに生きていきたいの。

ごめんなさい。

「まったく、お前はばかだなぁ・・・。」
「幸せになりたいという娘を叱る親がどこにいるの。」
「今まで辛かった分、幸せにおなり。ありがとう。」

そんな家族の呆れたような声が聞こえたような気がした。

最後の舞を終えて、深々と月に一礼を捧げると、後ろから拍手が聞こえた。
振り返ると、政宗が障子に寄りかかったままこちらを見ていた。

「Ｓｏ　ｂｅａｕｔｉｆｕｌ．」
「Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ．」

あまり上手に踊れなかったのに、褒められちゃった。
もっと練習をしなきゃなぁ。ね、ババ様。

扇を畳んで政宗の居る縁側まで戻って草履を脱ごうとすると、いきなり抱き上げられて、ぎゅむぅっと抱きしめだれた。
ぐえぇぇぇ！
ミが出る！！はみ出る！洩れ出る！！

「ぐ、ぐるじい・・・。」
「Ｏｈ、Ｓｏｒｒｙ．」
力を緩めた後も、政宗は私を離さず、その場で立ち尽くしていた。

「天に帰るのかと思った・・・。」
吐き出す息と一緒に囁くように呟いた政宗の言葉に、思わず笑った。

「私が帰るのは、米沢の城だよ。」

そう言って短い腕で政宗の背中を何とか撫でると、政宗は少しだけきゅっと力を込めた。

それから二人で縁側に座って月を眺めつつ、政宗が貰ってきた酒を飲んだ。
良くやった！偉いよ政宗！

「さっきのは幻覚だったのか？」
ご機嫌で盃を傾ける私を横目で見て、政宗が残念そうにぼやいた。
「ま、舞を舞っているときは、１．５倍綺麗に見えるらしいからねぇ。凄いね踊り効果。」
「自分で言うなよ・・・。」
「よく言われたんだよねぇ。舞っている時の半分でもいいからおしとやかにしなさいって。」
「・・・母親にか？」

少しの躊躇いの後、政宗は静かに尋ねた。
その気遣いが嬉しくて、盃を置くと政宗の膝にコロンと頭を乗せて転がった。

「ううん。一族皆に。」
「どんだけお転婆だったんだよ。」
「ふふふ・・・。よくねぇ、木登りしてはスカートを破ってだめにしちゃったり、山の中で秘密基地を作ってたら足踏み外して転げ落ちたりして怒られたんだよねぇ。」
「そいつはすげぇな。喜多が聞いたら大目玉食らうぞ？」

ゆっくり頭を撫でる手が気持いい。
ふわふわする気持のまま目を閉じると、怪我をして帰れば怒りつつも治してくれた母や、秘密基地の作り方をレクチャーしようとする父と兄の姿が浮かんでくる。
「ねぇ、政宗。昔はすごく毎日が楽しかったの。それでね、今はその昔より毎日が楽しい。政宗が居て、小十郎が居て、喜多さんが居て、みんなが居て。」
「そうか。」

政宗は盃を置くとくしゃくしゃ頭を撫で回した。
「そろそろ寝るぞ。明日にはここを発つぞ。」
「え～観光は？」
「したらその分帰りが遅くなって、仕事が溜まる一方だぞ。」
「うえ～。」
仕方ない。すでに米沢から離れて四日。帰りも同じだけかかる訳だから、トータル九日間も国のトップが不在なんだもんね。

よいこらしょと起き上がると、徳利と盃を片付けて、単衣になると布団にもそもそ入る。
「もっと詰めやがれ。」
「へ？部屋に帰るんじゃないの？」
「ここはオレの城じゃないから、念のためだ。」
奥へいけと言われて横にずれると、同じく単衣になった政宗が布団の中に入ってきた。

むぅ、なんかこれでいいのか？とか思わなくもないけど、米沢でも時々一緒に寝てるし、幼女趣味じゃないって言い張ってるし、とりあえずま、いっか。

「おやすみなさい。」
「おやすみ。」

慣れない部屋と布団で、いつもは寝付くまでに時間がかかるのに、政宗の匂いと声で安心したのか、さっきみたく頭を撫でられて目を閉じると、すぅっと引きずり込まれるように眠りに落ちた。

夜中、ふと目が覚め、腕の中で眠るツキを見た。
体がうっすらと青く輝いて、少しずつ体が伸びている。
本人はぐっすり寝入っていて、特に苦しげな様子もない。

さっき舞を舞っていたツキも、同じように青い光に包まれて、見事な舞を見せていた。
あれほど綺麗で儚いものを見たことはない。
夢幻となって消えてしまうのではないかと、怖くなった。

奥州筆頭ともあろうこのオレが、だ。
情けねぇ話だ。

だが、口を開けばいつものツキで、懐かしそうに子供の頃の話をする表情は決して無理をしているようではなかった。

オレの元での生活が、ツキに変化を与えている。
その実感がオレを喜ばせる。
優越を感じさせる。

いつの間にかオレの中心にはツキが居て、それが良いことなのか悪いことなのか分からない。
だが、これだけは確実だ。
ツキを手放すことは考えられない。

半ば強行軍のように明日帰るのは、これ以上真田や猿とツキを一緒にしておきたくないからだ。
明日成長したツキを見れば、ますますあいつらはツキに興味を持つだろう。
万が一、ツキを攫うようなことがあれば、即同盟は破棄して武田を潰す。

武田信玄はオレのその考えに気が付いているのだろう。
ツキに目を向けながら、その価値がこの娘にあるのかないのか、見定めていたようだ。

おかげでツキはおっさんに怯える羽目になっちまったが。

「いつまで覗き見してやがる。とっとと帰れ。」

ツキを起さないように体を起しながら枕元の刀を掴んで警告すると、どこからともなく猿が現れた。
「あれぇ?完全に気配は絶っていたはずなんだけどな。良く分かったね。」
「うるせぇ。何の用だ?」
「いやぁ、ツキちゃん初めての場所でちゃんと寝れてるか心配になっただけさ。」
「満月の夜だから、確かめに来ただけだろうが。」
「あ、ばれてる?」

ははっと笑って頭を掻く猿だが、その目は冷め切っている。
「ほんとに成長するとは思わなかったよ。どんな妖怪変化?」
「殺されたくなかったら、二度とその言葉を言うな。」
鯉口を切って、殺気を向ける。
ツキをバケモノ呼ばわりすることだけはゆるさねぇ。

「おお怖。分かりましたよ。」
首を竦めると、猿はちらりとツキに目を向けてそれから消えた。

相変わらず幸せそうに眠るツキ。
刀から手を離して、再びツキを抱きかかえるようにして布団に入ると、隙間に風が入って寒かったのか身を寄せてきた。

「まさむね・・・?」
「起しちまったか?」
ぼんやりと目を開いてツキがオレを見上げた。
「んー・・・。」

とんとんと背中をあやしてやれば、再び瞼が落ちてきて、寝息が聞こえ始める。
その音を聞いているうちに、だんだんオレも眠くなってきて、目を閉じた。

18　満ちる月に捧げる祈り（後書き）

シリアスになりきれませんでした（@＿@。

19　朝から

鳥の鳴き声と、遠くで鶏が鳴く声が聞こえた。
うっすらと目を開けると、すぐ目の前に政宗の寝顔があってちょっとびっくり。
寝てるよ。珍しい。

いつもはニヒルに笑みを浮かべている口もうっすらと開いていて、鋭い目も瞼の下に隠れていてあどけない。
美形は寝顔も可愛らしくて良いですね。

ぼんやり思いながらも、まだ政宗が寝てるなら、私も寝ててもいいよねぇ・・・と再び目を閉じてうとうとしだした時だ。

「ツキ殿、朝でござる！おはようでござるよ！」

と、朝から脳天突き抜けるような赤い襲撃に見舞われた。

びっくぅぅぅ！！となって目を覚まして固まる私と同時に、飛び起きた政宗が刀を掴んで障子を睨み付けた。
寝起きなのに、凄い反射神経だなぁ。

「真田幸村ぁ。てめぇ、朝くれぇ静かにしやがれ。」

開けたのが幸村だと分かると、一応は刀を脇に置いたものの、機嫌は滅茶苦茶悪い。
私も心臓がバクバクいっていて、まだ納まらないよ。
あーびっくりした。

「何故政宗殿がこちらに？ツキ殿はどうしたのでござるか？」
不思議そうにいう幸村に、ようやく落ち着いた私はもそもそと布団から顔を出して起き上がった。
足元の方に幸村は居るから、私が見えてないのだろう。

「幸村おはよう・・・って、どうしたの？」
顔が真っ赤で今にも倒れそうだよ？

「ど、同衾・・・・・。」
どうきん？何それ？
首を傾げて政宗を見上げると、政宗は面倒臭そうに溜息を吐いた。
「同衾は床を共にすることだ。」
「ああ、なるほど。一緒に寝たから、同衾ね。」
「い、いっしょにねた・・・・！？」
幸村が私の言葉を聞き取って、ワナワナ震えだした。

「あ、やべ・・・やな予感。」
「耳を塞げ！」

返事をする前に、さっと耳を塞いで、準備完了。

「破廉恥いいいいいいい！！！！」

耳塞いでも結構クるなぁ。
なんて思っていると、ドタバタとあちこちからこの部屋目掛けて近寄ってくる足音が聞こえた。

「何事!?」
まずは、きちんと身支度を整えていた小十郎が、血相を変えて部屋に飛び込んできた。

「なになに?なにごと~?」
「いかがした?」
続いて緊張感のない佐助と、どすどす地響きを上げてやってきた信玄公まで現れて、部屋の人口密度が一気に限界近くまで上昇。

ううう・・・なんか大騒ぎになってきた。
流石に単衣で皆の前に居るのはちょっと恥ずかしいのですが。
何とかしてと思っても、元凶の幸村は、政宗とギャラリー無視で怒鳴り合ってるし。

「ツキ殿が政宗殿にいいいいい!!破廉恥いいいいいい!!」
「破廉恥なのはてめぇの頭の中身だ!!!!」
「許せん!ツキ殿は某が護る!!!!」
「上等だぁ。表出やがれ真田幸村ぁぁぁぁ!!」

とんでもない雄叫びを上げる幸村に、流石の政宗も耐え切れずにブチ切れた。
止める佐助と小十郎を引きずるようにして、二人はそのまま外に出ていった。

「旦那ヤメテー!その灯篭高いの!!」
「政宗様!落ち着きなされ!!」

破壊音の合間に佐助と小十郎の悲鳴も聞こえる。

「ゆきむらぁぁぁぁ！！もっと気合をいれんかぁぁぁぁ！！」
「おやかたさまぁぁぁぁぁ！！」
「てめぇの相手はオレだぁぁぁ！！」
「ちょ！！大将！！それこの前直したばっかなのにぃぃぃぃ！！」

・・・・・。

あ、わたしまた成長したんだ。単衣がつんつるてんだ。
喜多さんが少し大きめの奴を持たせてくれていたはず。

着替えなきゃなぁ。アホどもが戻ってくる前に。

今日は濃紺の袴に、浅葱色の着物をチョイスしました。
通りすがりの女中さんに手伝ってもらいながら準備を終えると、することもなくなったので外の様子を見に縁側に出た。

あーあ、綺麗だったのに、庭が滅茶苦茶だ。
庭の隅では、魂が口から抜けかけてる佐助が体育座りを。
その近くでは、一生懸命他人のフリをしようとしている小十郎が、庭の土いじりなんかしている。

庭の真ん中では、信玄公立会いの下、政宗と幸村がぜぇはぁぜぇはぁと肩で息をしながらまだ戦っているようだった。
どうでも良いけど、政宗はまだ単衣であまり見目がよろしくないですね。

「政宗ぇ、いつまでやってんの？」
呆れて声をかけると、今ケリをつけるからもうちょっと待ってろ！と返ってきた。

「幸村ぁ、おなかすいたよぅ。」
幸村もあとでござる！！と取り合ってくれない。

仕方がない。
この二人はほっといて、ご飯食べに行こう。

そうと決めれば、小十郎と佐助だな。
庭の隅の2人の方へ向かうと、とりあえず小十郎の袂を引っ張って意識を呼び戻す。

「小十郎～お腹すいたよ。ご飯食べに行こう。」
「あ？ああ、ツキか。いつの間に？」
「結構前からいました。で、ご飯食べたい。」
「しかし、政宗様が・・・。」
「ほっといていいよ。なんだかんだで楽しそうだし。お腹空いたら勝手にやめるよ。」
「だがなぁ。」
信玄公公認で暴れている二人を止めるのも、かといってそれを無視

して朝ごはんにするのも、気が引ける様子の小十郎。

むきぃ！もういいもん！
1人で行っちゃうもん！

縁側に上がって、ご飯をもらいに行こうとすると、武田軍のガタイの良いおじさんが現れた。
「どうなされた？この状況は？」
「朝の鍛錬ですよ。」
「なるほど。」
聞かれたので適当に答えたんだけど、おじさんは納得したように頷いた。

え？あんなに壊しまくってるのに、鍛錬ですよで納得しちゃうの？
もしかして、武田にとってはいつもの事？
おじさんを眺めていると、私の視線に気がついたのか、おじさんは私に視線を合わせるようにしゃがみ込むと、ニカっと笑った。

「儂は山本勘助と申す者。そなたはツキ殿と申したか？」
「はい。そうです。ツキと申します。」

どストライクです。
その笑顔にやられました。
顔がかぁっと熱くなるのか自分でもわかる。

もじもじしていると、山本勘助（いや、心の中で勘サマと呼ばせて下さい）は優しく頭を撫でてくれた。

「これからは同盟国に属するもの同士、よろしく頼むぞ？」

「は、はい。こちらこそよろしくお願いいたしますぅ。」
語尾にハートが飛んでるのは、仕方がないよね！

なんてちらっと思った時、背後に気配を感じて振り返った。
「何をしている？」
今先ほどまで幸村と遊んでいた政宗がすんごく怖い目で勘サマを睨んでいた。

Ｗｈｙ？
幸村はどうした？
庭に視線を向ければ、大の字に引っくり返ってる幸村がいた。
おお、政宗が勝ったんだね。

で、勝ったのに、なんで不機嫌？
首を傾げていると、政宗の向こうで小十郎が身振り手振りで何かを伝えようとしているのが見えた。

必死に私と勘サマを交互に指差して、何かを撫でる仕草をして、それからモジモジ。
って、小十郎、言っちゃ悪いけど、かなりキモいよ？

え？なに？私が頭を撫でられてモジモジしてたから、政宗が怒ってるの？
なんじゃそりゃ。

ますます意味が解らん。
反対側に首をかしげると、今度は私を指差して、モジモジ。
それから政宗を指差して、懐から出した手拭いの端を歯で噛んで、

きぃっ！と引っ張る。

小十郎、キャラ違くないか？
主のためとはいえ、その捨て身のジェスチャーはちょっと・・・。

「ほう・・・。」

後ろの勘サマから呟きが聞こえ、振り返ればうんうんと楽しげに頷いていた。

「ツキ殿も罪作りな女子（おなご）だの。」
「は？」

え？私が悪いの？
なんで？
もう一度小十郎を振り返れば、うんうんと頷いている。

「ま、あとは若い者同士で仲良くやるが良いよ。はっはっはっは！」
いや、はっはっはって、え？

訳が分からず去り行く勘サマの背中を呆然と見送った。
「さて、ツキ。ちょっとこい。」
むんずと政宗に腕を掴まれ、はっと我に返ったときには、部屋まで強制連行と相成ったのでした。

誰か説明プリーズ！！

部屋に着くとすぐに小十郎が政宗の着替えと、桶に水を汲んで持ってきた。

「朝餉の支度をしてまいります。ツキ、後は頼んだぞ。」

頼んだぞって・・・え？私が政宗の着替えを手伝うの？

無理くね？身長的に。

が、止めるまもなく、小十郎はささっと部屋から出てってしまった。しかたない。やれることは手伝うか。

手ぬぐいを濡らして、顔についた泥や血を清めてやると、政宗は大人しくされるがままだった。

仕方ない。傷も治してやるか。

頬についた傷にそっと触れて意識を集中させると、一瞬青く光って傷がすうっと消えた。

同じように右の眼帯の脇にできた傷に触れようとすると、伸ばした手を掴まれた。

「それには触るな。」

低い、脅すような声。

それが却って怯えているような印象に感じた。

「触らないよ。すぐ横に傷があるから。」
そっと政宗の腕を外すと、眼帯には触れないように気をつけて傷を治癒させると、次は単衣の腰紐から上を脱がさせて、腕や肩についた傷を順番に触れていく。

「まったく、やりすぎだよ。かすり傷とはいえ、こんなにたくさん傷を作っちゃって。」
「こんなもん傷のうちに入らねぇよ。」
「はいはい。よし、こんなもんかな。後は自分でやってよ。流石に着替えの手伝いはムリだよ。帯なら締めてあげられるけど。」

新しい単衣を手渡すと、政宗は立ち上がって汚れた単衣を脱ぎ捨てて、恥ずかしげもなく褌いっちょになりやがりました。
「少しは気を遣えぇぇぇぇ!!」
この破廉恥男が!!

なんとか政宗の着替えも終わり、あとは朝ごはんを小十郎が持ってくるのを待つだけになった。
上座に用意されていた脇息に寄りかかる政宗に寄りかかりながら、足をブラブラさせているとふぅと溜息を吐く音が聞こえた。

「どうした?おなかすいた?」
「それはお前だろうが。」
もう一度溜息を吐いて、政宗は私を足の上に乗せると、私の頭の上に顎を乗せた。

「なぁ、ツキ。お前山本勘助みたいな男が良いのか?」

「なに？突然。どうした？」
「あいつを見て顔を赤くしてたじゃねぇか。ああいう男が好きなのか？」

振り向いて政宗の顔を見ようとしたけど、がっちりホールドされていて、身動きができない。
「やだなぁ。見てたんだ。確かに好みど真ん中なんだよね。あとね、小十郎も結構良いと思うよ。」
「そ、そうか・・・。」
なんか部屋の温度が少し下がった気がするなぁ。
気のせいか？

「政宗も良いと思わない？強面が笑った顔！もうさ、あのギャップがたまらんと言うか、萌えの極みだと思うんだよね！ギャップ萌えって良いと思わない？」
「は？」

あの勘サマの笑顔を思い出して、興奮してきた！
政宗の戸惑いにも気がつかずに、マシンガントークスタート！

「あのね、前の世界でも軍で一緒にいた中年の上司が居てね、年中むすーっとしてて恐いイメージしかなかったんだけどさ、ある日軍の官舎の裏でこっそりネコに餌を上げてる姿を発見してね。その顔がもうどうしちゃったの？ってくらい緩んでてさ。可愛いったらなくてさ！あとね、あとね、某戦場でね、泣く子も気絶するって有名な男が居てさ、そいつがねある日戦場にいた孤児を預かる羽目になったんだけどさ、もう子供泣いちゃって大変で、どうにかしようとして考えたんだろうね。いきなり猫耳つけて登場してさ、もうアレ

は一生拝めない超レアな衝撃的瞬間だったよ。子供はひきつけ起しちゃったんだけどさ、私的にはもうツボだったよ。あそうそう！これも凄いんだけどさ、ちょっとの間ある国のスパイをしたこともあったんだけどさ、そこの諜報機関の長官がね、これまた」

「Ｓｔｏｐ！！もういい、止まれ！」

絶好調で語り続ける私の口を手で塞いだ政宗が、慌てて止めた。
むぅ。ここからが良いとこなのに。

「一つだけ聞かせろ。山本勘助や小十郎のような男が嫁にと望んだらどうする？」

え？ああいう男がいいのか？って結婚とかそういう話での意味だったの？
てっきりもっと軽い、芸能人で誰が好き？的な話かと思ったよ。

そういうことなら、答えは一つだ。

「お断りするよ。」
「・・・・そうか。」

ほっとしたような政宗の声。

うん。ムリ。
だって、私が誰かの嫁になるなんて、できない。

たくさんの人を殺して来た人間が、母親になるなんて。
私が、命を育てるなんて。

できるわけがない。

政宗に私の顔を見られなくて良かった。
きっと、今の私の顔を見たら、政宗はまた気にしてしまうだろうから。

目を閉じて、心を閉じて。
自分自身をコントロール。
凍えた感情は奥底に沈めて、鍵をかけて。
ゆっくり十まで数えたら、いつもの私。
1、2、3、4、5、6、7、8、9、・・・10。

「それにしても、小十郎はまだかぁぁぁ！！お腹空き過ぎて、仕舞いにゃ政宗を食べちゃうぞ！！！」
「はしたないぞ！ツキ！！」

気分を変えるために叫んだら、タイミングよく小十郎が現れて、余計な説教を受ける羽目になりました。

がっくり。

１９　朝から（後書き）

あるぇ？小十郎がどんどん崩壊していってる気がするナァ（汗）

２０　立つ鳥跡を濁さず？

朝ごはんも食べ終わって、伊達軍は帰り支度です。
とは言っても、私はやる事が無いので、みんなの邪魔にならない様に自分の部屋で待機中。
壊された庭を、眺めております。

ここの修理費って、どこが出すんだろ。
真田？伊達？武田？
まさか、本当に小人さんが来るわけないよねぇ。

あの横倒しになってる灯篭が、高かったって佐助が悲鳴をあげてた奴かな。
見事な彫刻が施された灯篭が砕けて横倒しになっている。
その横には、私が丸まって入ればすっぽりはまっちゃいそうなくらい大きな穴が開いていた。
・・・なんで剣と槍の戦いで、地面に穴があくの？

だらーっと寝転がると、雲一つない良く晴れた空が視界いっぱいに広がった。
いい天気だなぁ。
帰りも雨に降られないといいな。
濡れるとそれだけで疲れちゃう。

ぼけーっとしていると、不意に人の気配がしたので体を起こした。
知らない人の気配。
そして、極力気配を隠しているようだ。

こっちの様子を伺っている？

いつでも動けるようにとこっそり身構えると、ちょっと強めの向い風が吹いた。
まばたきをして目を開けると、目の前に見た事の無い赤い髪の長身の男が立っていた。

額当てで目元が隠されているので、表情は読めないけど、私を見ているのはわかる。
そして、微かな殺気。
なんで、初対面の人に殺気を向けられなきゃならないのよ。
疲れるから早くどっかに行ってくれ。

「信玄公は多分自室、幸村はどっかで佐助に手当されてる。あとは知らない。」
そう言って再び庭に目を向けようとすると、男は私を指差した。

あ？何？口で言え。
「私が何？誰か？ってこと？」
問えば、微かにこくっと首を動かした。

「人に名を尋ねる時は、まず自分から名乗りましょうね。名乗れないなら、私も名乗る必要はないよ。」

まったく。服装からして、どこかに属してる忍者だろうけどさ。
一体どこの忍よ。佐助んとこの部下か？
教育がなってない！

イラっとしながら男を睨みあげると、少したじろいだ様なそぶりを

見せた。

「あなたは、佐助のとこの人？」

ふるふる。

「違うの？んじゃ信玄公のとこの人？」

ふるふる。

え？ここの人じゃ無いの？

つか、話さないんじゃなくて、話せない？

「声が出ないなら、口パクでもいいよ。読唇術なら多少はできるよ。」

そう言うと、男の口が動いた。

『わかるか？』

「うん。わかるわかる。そっか。ゴメンね。きつい事を言っちゃった。」

『いい。よくあること。それより、ここで何をしている？躑躅ヶ崎に子供などいたか？』

「帰り支度をしている皆を待ってるんだよ。今日奥州へ帰るの。」

『奥州・・・。そうか。同盟は成立したか。』

同盟のことを知っている？

武田でも、伊達でもないこの人は一体何者？

「貴方はだれ？どこの人？」

『人に名を尋ねるときは、自ら先に、ではないのか？』

むきーっ！一本取られた！

悔しくて思わず頬を膨らませると、フッと小さく笑う音が聞こえた。

「私は、ツキ。貴方は？」

さぁ、名乗ったんだから、教えなさいよ！！

じぃっと見上げると、男は少しの間の後、ゆっくり口を動かした。

『風魔小太郎。』

「ふうま・・・こたろう・・・って、えええええ！？あの北条の！？」

驚いて小太郎を凝視すると、しぃっと人差し指を口に当てた。

そして、辺りの様子を窺うと、『いずれ、また』と言って、一瞬で消えてしまった。

うわぁ～。凄い！

あれが忍者の動きって奴ね。

佐助も忍者なんだけどさ、なんか今ひとつ忍者らしくないって言うか、なんていうか。

初対面が木から転げ落ちたってのが、もうさぁ。

この世界では小太郎は伝説の忍って言われてるらしいんだけど、いやぁ、あの身のこなしは確かに伝説っぽいわぁ。

瞬き一つの間に現れて、目の前で消えちゃうんだから。

なんて一人で感動していると、どかどかと足音が聞こえた。

「Ｈｅｙ，なに一人で騒いでやがるんだ？」

すっかり身支度を整えた政宗が現れて、空を見上げている私に声を

かけた。

「今、ここに風魔小太郎がいたんだよ。すごいねぇ。ほんとに風みたいだった。」

「Ｗｈａｔ!?風魔小太郎だと!?ツキ、何もされなかったか!?」

がしぃっ!と半ばタックルされるような勢いで飛びつかれて、ぐはぁ!と悲鳴が洩れた。

「ぐふっ・・・。い、いま政宗に受けたダメージの方が深刻です。」

「Ｏｈ．Ｓｏｒｒｙ.」

鎧も立派な凶器になるってことが良く分かったよ。

「なんか同盟の様子を見に来たみたいだったよ。私が伊達の人間だって分かったら、同盟は成立したのかって、一人で納得してたみたい。んで、多分政宗がこっちに来たのが分かったみたいで、帰ってったよ。」

「そうか。偵察か。」

そろそろ出発らしいので、借りていた部屋を片付けながら小太郎のことを話すと、政宗は何か考えるように脇息に凭れてふーんと呟いた。

「あっさり忍び込まれちゃって、佐助たち大丈夫なのかね。」

「いや、一応、俺様の所にも来たよ。」

え?佐助?

いつの間にか、襖に凭れ掛るように佐助が立っていて、ちょっと驚

いた。
「そろそろ時間らしいよ。二人を片倉の旦那が呼んでたよ。」
「ああ。」
立ち上がった政宗は、私の手を取ると先導する佐助の後ろに続いて歩き出した。
「そういえば、幸村はどうしたの？大丈夫？」
「ああ、旦那なら、もう復活してるよ。大丈夫。次は勝つんだって騒いでる。」
「ならよかった。」
流石は幸村だ。打たれ強さは折り紙付きだね。
「それにしても、ツキちゃん小太郎とどうやって会話したの？」
前を歩く佐助が、こちらを見て後ろ歩きしながら尋ねた。
「佐助、転ぶよ？」
「大丈夫、大丈夫。で、どうやったの？あいつ、しゃべらないでしょ？」
『転んで泣いても知らないよ？』
口パクでそういうと、佐助は目を丸くしたあと、なるほどと頷いた。
「どういうこった？」
1人背中を向けていた政宗は解らなかったようで、私を見下ろして聞いて来た。
「口だけ動かすの。声は出さずに。読唇術っていうんだけどね、口の動きで何を話してるのかを読み取るんだよ。」
「それ、簡単にいうけど、結構難しいよ。ツキちゃんはなんでそんな事できるの？」
相変わらず佐助は細かいところを突っ込んでくるなぁ。

「女には秘密がたくさんあるんだよ。それを無理に暴こうとする男は嫌われるよ？」
無駄だろうなぁと思いつつ、誤魔化してみたり。

だって、軍に所属した時のカリキュラムにあったからなんて言ったら、別の世界から来ましたって事まで話さなきゃならないじゃん？めんどくさい。
「ツキちゃんは秘密がいっぱいなんだね。俺様秘密を探るのが仕事みたいなもんだから気になっちゃってしょうがないよ。」

うわー、最悪だ。めんどくさいなぁ。
すんごく嫌な顔をして見せると、佐助は首をすくめて前を見た。
「でも、独眼竜の旦那が怖いからやめておくよ。」
「そりゃ賢明だ。」

低い声で応えた政宗を見上げれば、手を繋いで無い方の右手が刀の柄にかかっていて、不機嫌なオーラがビシビシ放出されている。ありゃ。助かっちゃった。
ありがとうの意味を込めて、キュッと手に力を込めると、ギュッと握り返してくれた。

案内された部屋には、すでに幸村や信玄公が待っていて、勘サマまでいらっしゃいましたよ！
小十郎も待っていて、勘サマと何かを話していた様だった。
部屋の入り口で繋いでいた手が離れたので、そそくさと小十郎の隣に座って、政宗の挨拶を待った。

「これから奥州へ発つ。件の内容については奥州でも迅速にすすめる。それでいいな？」

「うむ。道中気をつけて戻られよ。何時織田の手の者が潜んでるやもしれんからな。」
「ああ。そっちも、いろいろ頼んだぜ？」
「承知しておる。」

こうやって眺めていると、政宗も武田信玄と肩を並べるような戦国武将なんだなぁって思う。
堂々としていて、自信と威厳を兼ね備えていて。
いつもこうだったら、かっこいいと思うんだけどね。

なんて考えていると、信玄公が政宗を通り越して私を見た。
「ツキ殿、昨夜より少し大きくなったか？」

朝もお会いしてますがね。ははは・・・。

「昨夜は満月でしたから。」
佐助から報告は聞いてるでしょ？とにっこり笑えば、信玄公はうむ。と頷いた。
「次に会うときは、また更に成長をしているであろうな。楽しみにしておるぞ？」
「私ごときが、信玄公のご期待に沿う事などできませんよ。顔を出しにくくなるので、期待などしないでくださいね。」

見せモンじゃねぇんだぞ、ゴルァ！

うふふあははと笑いあう私と信玄公に、誰もが声をかけ兼ねていると、空気を読むのがちょっと苦手な幸村が膝を進めてきた。

「ツキ殿、今朝程は失礼したでござる。某もっと修練を積み、政宗殿からツキ殿を守って見せるでござるよ！」

キラキラ輝く純真な瞳がまぶしいよ。
まずい。幸村が完全に政宗変態説を信じきっているよ！
ここは誤解を解いておかないと、後々同盟に支障が出ちゃうかも！

冗談が通じない幸村をからかった私が悪かった。

「あのね、幸村。私は政宗に拉致された訳でも、強制的に連れ回されてる訳でも、ましてや強姦されてるわけ「ツキ！！！」はい。ごめんなさい。露骨すぎました。まぁ、なんだ、手篭め？にされてる「ヤメロ！！」え？これも駄目？うーん、ま、とにかく無理矢理なんかされてる訳でもないのよ？だからね、一緒に寝てるのも政宗が寂しがりや「誰がだ！」うるさいなぁ。とにかく、政宗が布団に入り込んできても、やましい事してないし、安心して？」

政宗の突っ込みで話がちょっと分かりにくくなった気もするけど、あとは笑顔で誤魔化せ。
幸村は頭の中で私の話を整理しているようで、ぶつぶつ言っていたが、ポン！と手を叩くと、大きく頷いた。

「なるほど！寂しがりやな政宗殿のお世話をツキ殿はされているのでござるか！」
「ふざけんな！！！」
「いや、政宗もうそれで良いじゃん。変態キャラより、さみしんぼキャラの方が可愛いって。」
「そうでござるよ。政宗殿、可愛らしいでござる！」
「真田幸村ぁ、てめぇ、同盟解消の暁には真っ先に地獄へ送ってやるからな！！」

小十郎と佐助が何か言いたそうに私を見てるけど、しーらないっと。

予定よりだいぶ出発が遅くなったのは、私のせいじゃないですよ～。

２０　立つ鳥跡を濁さず？（後書き）

甲斐偏はここまで。次話から奥州へ戻ります。

21　傷跡

同盟を結びに甲斐まで行って即戻ってきて、早2ヶ月。
梅雨も終わり、夏がやって参りました。
あれから2回満月の夜が来て、私もだいぶ大きくなった。
もう子供扱いされることも少なくなってきて、日本酒解禁まであとちょっと。

それにしても暑い。
東北だからだいぶ暑さはマシなんだろうけど、着物がねぇ。
紗というガーゼみたいな生地の羽織を羽織ってるんだけど、これでも暑い。
本当は袴が良いんだけど、外出するわけでもないのに女の子が袴なんてだめですって喜多さんが貸してくれない。

最近は政宗の手伝いもなく、一人で部屋で過ごすことが多くなってきた。
兵士の皆も、綱元さんも小十郎も、なにか緊張感を漂わせていて、うかつに遊びに行ったりもできない。
おそらく、戦が近づいているのだろう。

先月上がっていた報告書で、前回も不正が見られた小手森城が、また同じように不自然だった。
城主を呼びつけたり、実際に綱元さんが監察に行ったり、いろいろやっていたようだが、ついに敵国への内通が発覚した上に宣戦布告なんかしてきちゃったもんだから、さぁ大変。

前々から戦の準備はしていたらしくて、まもなく出陣らしい。
戦が決まってからは、私は執務室に入ることすら許されず、ここ数日は政宗にも小十郎にも会ってない。
この分じゃ、当然私は留守番なんだろうな。

付いて行くんだ！とは言えない。
遊びじゃない。人の命が懸かった戦だ。
この世界で生きていくとは決めたけど、どうやって生きていくかまではまだ決められてない。
政宗や小十郎のように、戦場で戦うのか。
喜多さんや綱元さんのように、城で政宗を支えるのか。

ここにきて五ヶ月、平和な日々が続いていたから、あえて考えなかった。
ここに残っていて、もし、万が一戦場で政宗が、小十郎が、皆が切られたりしたら。
私には皆を助ける力があるのに、ここに残っていたら役立てられない。

でも、元の世界の時のように、人の命を奪いながら戦えるのか？
力を使って戦えば、政宗が前に言ってたように、私の命を狙う人間も現れるだろう。
その覚悟が今の私にあるのか？

どちらにもなれず、甘えているだけの自分が苛立たしい。
いまさら過去から逃げようったって、そうはいかないのに。

着物の袖を捲り上げて左の肘を見れば、うっすらと傷跡が残ってい

るのがわかる。
これは私が9歳の時に、自転車から落ちて作った傷の跡。
先月の満月まではなかったもの。

つまり、生まれ変わったわけではなく、ただ体が逆行して若返っていた私が、満月の度に元に戻っているということだろう。

あと半年すれば、元の年齢にもどる。
と、言うことは、半年前ここに来る前の自分に戻るということだ。
あの、血と硝煙と埃にまみれた自分に。
それならば、また戦場で政宗を助けて走り回るほうがいいのかもしれない。

「Ｉ　ｄｉｅ　ｉｎ　ｔｈｅ　ｂｌｏｏｄ　ａｎｄ　ｇｕｎ　ｓｍｏｋｅ　ｉｎｓｉｄｅ.（血と硝煙の中で息絶える）」

昔僅かな期間組んでいた男が、壊れた笑みを浮かべていった言葉。
その言葉どおりに、彼は戦場で死んだ。

「そんなことオレが許すと思うか?」
一人だと思っていたのに突然声が聞こえて、凭れていた脇息から身を起して部屋の入り口を振り返れば、ちょっと恐い顔をした政宗が立っていた。
「私のことじゃないよ。昔そんなことを言った男が居たなぁって思い出していたの。」

部屋に入ってきた政宗を迎えるために立ち上がりながら、さりげなく捲くった袖を元に戻す。

「どうしたの？なにか私に用事？」

上座を譲って、自分用の円座を用意すると、政宗の前に座る。

政宗はまだ恐い顔のままだ。

どうしたんだろ？

首を傾げて政宗の様子を窺うが、一向に話そうともしないし、動こうともしない。

本当にどうしたんだ？

「政宗？」

痺れを切らして名前を呼んでみると、ちょいちょいと手招きをされた。

なんなんだ？いったい。

とりあえず呼ばれるままにハイハイで近寄ると、ぎゅむっと抱き寄せられた。

「ま、まさむね？」

「明日には出陣する。ツキはここに居ろ。いいな？」

「・・・・わかった。」

こくりと頷けば、政宗は安心したようにほっと息を吐いた。

「まだこの体じゃついて行ったって、足手まといになるし大した力が発揮できるわけじゃないから。」

我ながら言い訳がましいと思いつつ、ぼそっと言うと、政宗は首を横に振った。

「これから先も、戦場にお前を連れて行かない。」

「え？どうして？」

びっくりして顔を上げると、政宗は厳しい目付きで私を見下ろした。

「迷いがある者が戦場に立てば、命を落とす。」

ああ、政宗は私が迷っていることをわかってるんだ。

確かに、一瞬の躊躇いや迷いが命取りになるのが戦場だ。

その迷いなく戦ってきたからこそ、今の政宗があるのだろう。

私は自分可愛さに恐がってばかりだ。

戦で政宗たちを失うかもしれない恐怖。

戦場でまた人の命をううことになるかもしれない恐怖。

いつか、ここに来た日の自分に戻ってしまうかもしれない恐怖。

「・・・。」

うつむいて着物をきゅっと握り締める私に、政宗は背中をぽんっと優しく叩いた。

「聞いてやるから、全部話せ。」

まるで初めて自分の力について話をしたときみたいだ。

いつもはふざけんなってくらい強引なくせに、こういうときだけ優しい。

だから、つい話したくなるのかな・・・。

「体に傷跡ができたの。9歳のときにできた傷の跡。満月の夜まではなかったのに。私の体が成長するのは、今までの時を急激に取り戻してるようなものみたい。ということは、いずれはここに来る直前の自分に戻るってことなんだよね？」

震えそうになる声を頑張って押し出しながら話すと、政宗はまっすぐ私を見て頷いた。

「そうだな。外側だけな。」

そとがわ・・・？

「確かに見た目はそうなるだろう。だがな、中身は違うぜ？この世界でお前が見て感じたものは、過去にはなかったものだ。そうだろ？」

こちらに来て私が感じたもの・・・。

政宗や小十郎と会って、この城で暮らし始めて、みんなと仲良くなって、佐助や幸村たちと会った。

毎日笑って怒って、時々泣いて。

「たとえ、外が同じであっても中身が違えば、それはもう同じ人間じゃねぇ。過去のお前だ。」

ああ、そういわれてみればそうかもしれない。

目から鱗が落ちるとはこのことか。

「私は、あの日の私にならない？」

「なるわけねぇだろ。」

「そっか。そうだよね。」

過去は消えなくても、過去に戻らなくても良い。
あの日の自分に戻るけど、同じじゃない。
そんなことを悩んでいたのか？とちょっと呆れた顔の政宗が、今はこんなに頼もしく見える。

「私ね、まだ迷っているの。政宗たちが戦場で怪我をしたときに、すぐに助けてあげられる位置に居たいと思う。でもね、まだ、戦場で戦う覚悟がない。」
「そんなことは分かってる。」
くしゃっと頭をかき回されてふんぎゃーっと叫ぶ私に、政宗はにやりと笑った。

「オレの背中は小十郎に預けてあるんだ。ケガすることなんざねぇよ。それより、帰ってきたらＰａｒｔｙだ。この前みたく、舞の一つでも見せやがれ。」
そういうと、ぶーぶー言いながら髪を直す私の目の前に、木箱を差し出した。

「なにこれ？」
「開けてみろ。」

言われるままに蓋を開けると、扇が一本納められていた。
手にとって広げて見ると、綺麗な蒼い扇だった。

「どうしたの、これ。」

「作らせた。」

甲斐で見たものよりは、シンプルなデザインだけど、私の手にしっくり収まっていて、すべりも滑らかだ。

「とてもいい舞扇だよ。綺麗だねぇ。」

「お前にやる。」

「いいの？」

「ただし、これで舞を見せろ。良いな？」

うわ、こりゃ下手なものを見せたら、大変なことになりそうだ。

ちょっと冷や汗をかきつつも、手の中の扇を握り締めて頷いた。

「政宗も、くれぐれも気をつけて。帰ってくるのを待ってるから。」

「ああ。」

ぎゅっと首に抱きつけば、同じだけの力で政宗も抱き返してくれた。

次の日の早朝。

「Ａｒｅ　ｙｏｕ　ｒｅａｄｙ　Ｇｕｙｓ！？」

「ｙｅａｈ！！」

「Ｒｅａｄｙ　Ｇｏ！」

口元に不敵の笑みを浮かべた政宗を先頭に、小十郎以下伊達軍全員出陣。

21　傷跡（後書き）

シリアスは苦手です（＜＿＞）

22　お留守番です

政宗達が戦に行って、早五日が経ちました。
そろそろ敵地に着く頃だと、綱元さんが毎日来る忍び達の報告から推測してた。
にぎやかだった面子が居なくなって、米沢ってこんなに静かだったんだなぁって驚くくらい。

私は綱元さんの仕事を手伝ったり、喜多さんの仕事を手伝ったりする傍、こっそり舞の練習をしたりして毎日けっこう忙しく過ごしている。

今日は喜多さんの手伝いで、着物の繕い物。
これが難しい！
まっすぐひたすら縫う作業がこんなに大変だったとは。
ボタンつけくらいしかした事ない私には、喜多さんの手がゴッドハンドに見えます。

「った！」
「あら、大丈夫？」
本日五回目の悲鳴に、喜多さんはすでに苦笑気味だ。

ううん、痛い。
地味に痛い。

「それは、殿の着物だから大きいのよね。少し大変だろうけど、頑張って。」

だから、こんなに縫う距離が長く感じるのか！
おのれ、政宗め！

「なんで、あんなにでかいんだ？何を食べたらあんなににょきにょき育つの？」
ちょっとだけ人よりちっちゃい私には羨ましい限りだ。
「殿も幼少の頃は小さかったのよ？あの頃はね、殿にも色々あったから。」

政宗の小さい頃！
聞きたい！どんなだったのか、すんごく聞きたい！
きっと、今以上に生意気で手に負えなかったに違いない！

「政宗の小さい頃ってどんなだった？」
縫い物の手を止めて喜多さんに尋ねる。
喜多さんは少し困ったような顔になった。

何で困った顔？

「殿は幼少期に疱瘡に罹られて、一命を取り留めたのだけれど、その毒が右目に行ってしまって・・・。」
ああ、それで眼帯をしてるのか。なるほど。
「保春院様、殿の御生母様なのだけれど、保春院様はその右目を嫌悪されてしまって、以後あまり殿と接することがなくなられてしまったの。」

・・・・そうだったの。
だから、眼帯に触ろうとしたら、あんなに怯えたんだ。

「それで一時はお部屋に篭りがちになっていたのだけど、それが、今ではあんなに御元気になられてねぇ。ふふふ。」

元気すぎるのも問題だと思います！

「ツキが来てからは、だいぶ落ち着きも見せるようになられて、ほっとしているのよ？」

「あれで落ち着いたの？いままでどんなだったのさ。」

「小十郎を出し抜いては城から抜け出して、数日戻ってこないことや、成実様と熊狩りに行くと出かけていくことが、もうしょっちゅうで。小十郎も黒脛巾を総動員したりして、必死に殿の後を追っていたわねぇ。」

「小十郎、良く胃と髪がもってるね・・・。」

十年後が心配です。

「とは言え、隻眼って物の距離感とか掴めなくなるし、死角もどうしても人より多くなるから不利なのに、それも克服したんだねぇ。政宗は強いなぁ。」

「ええ。そうですね。でも、いくら強いとはいえ、時には休息も必要だと思うのよ。」

「え？あれって休息の合間に仕事してるって感じだけど？」

「ツキも殿には休息と癒しが必要だと思うわよねぇ？」

え？脅し？あれ？もしかして私今結構な命の危機？

「ま、まぁ、そうですね。」

ごめん、小十郎。私は命が惜しい。
冷や汗を背中に感じつつ、こくこくと頷くと、喜多さんは嬉しそうに笑った。

ツキの同意も得られたし、楽しみになってきたわ～！と言いながら再び手を動かし始める喜多さんに、嫌な予感がしながらもツッコミを入れる勇気もなく作業を再開させたおかげで、１０日後どえらい目に遭う事になるとは、この時は思いもしなかった。

お手伝いも一段落したところで少し時間が空いたので、ここ数日の日課となった体力作りを兼ねての散歩をする事にした。
チビ政宗ちょい成長したんだぜコレクションから、稽古着っぽいのをチョイスして、軽く準備運動。

これだけでうっすら汗ばんで来る。
今日は暑いからなぁ。ほどほどにしなきゃ。

「さて、いきますか。」
先ずは大手門目指して走り始める。
「あら、今日も走ってるの？気をつけてね。」
「はいっ。」
すれ違う人に挨拶しながら、あっという間に大手門。

門を守ってる兵士にも挨拶をすると、そのまま城の堀沿いをスピードをやや上げて走る。
数日で前の持久力が戻るはずもなく、そのうち息切れしてきた。
半周程走ったあたりで、スピードを緩めると、辺りに人がいない事を確認。

「Ｍｕｓｃｕｌａｒ　ｓｔｒｅｎｇｔｈ　ｒｅｉｎｆｏｒｃｅｍｅｎｔ．（筋力強化）」

ここにきたばかりの頃よりも、遥かに安定した力が体を駆け巡り、軽くジャンプすると、数ｍは飛び上がった。

よし。いけるな。
ニマっと笑うと、正面に見える木が生茂ってるところを目指してダッシュ。
多分、距離にして１０キロちょいくらいか？
慣らしにはちょうどいい距離だろう。

ちょっとした馬くらいの速さで走れますぜ。
ふはははは！

１５分くらい走ると、目的の場所に到着。
術を解除して、辺りを見回すと、ラッキーなことに魚が泳いでる綺麗な川があった。
人の気配は辺りになく、危険な生き物もこの近くにはいなさそうだ。

袴の裾を腰の帯に差し込んで、膝まで捲ると、袖も捲り上げて川に足を突っ込む。

「つめたー！！」
さすが東北の天然水！
汗が一気に引っ込んだよ。

顔を洗って袖で拭いて、樹々の間から零れる光を見上げた。

「きれー・・・。」

世界はいつだって、こんなに綺麗なのに。

今戦場で駆けているだろう政宗を想う。

同じ世界で、殺し合い奪い合い、己の目指すものを得る為に戦う人間。

必死に、不様でも、這いつくばって、しがみついて。
なにも得られず散って行く命の方が遥かに多いのに。
それでも、手を延ばし続けて、血を流す。

自分の手を見つめる。

人の血で汚れた手。

救う道もあったのに、奪うことしか考えられなかった。
今あの時に戻ったとしても、きっと同じ道を選ぶだろう。
そんな自分が怖い。
今もこの胸の片隅で燻ってる。全てを焼き尽くしても足りない程の憎悪。

世界はこんなにも綺麗で、優しいのに。
人間は、決して綺麗には生きていけない。

溜息を吐いて川から出ると、袴を元に戻して、さて城に戻るかと思ったとき。
目の前を何かが通り過ぎた。
ん？今のはなんだ？
一瞬の出来事で、風が通り過ぎたのかと思った。
が、目の前で立っている男を見て、風ではなかったことを知った。

「小太郎！」
以前躑躅ヶ崎館で会った風魔小太郎が、私を見て首をかしげていた。
『なんでこんなところに一人で居る？』
「訓練かねてここまで走ってきたんだよ。」
『走って？馬ではなく？』
「うん。マラソンって言ってね、長距離をゆったりしたペースで走るの。」
決してマラソンと呼べるスピードで走ってはなかったけどね。
そこは秘密なのです。
「そろそろ城に戻ろうとしたところだったんだよ。小太郎はどうしたの？」
『伝令。伊達政宗に。』
「政宗は戦に出てしばらく帰らないよ？」
『知っている。これからそこまで行く。』
そうなのか！凄いな！
馬でも数日かかる距離なのに、走っていくんでしょ？どんだけ早いの？
私が本気を出しても勝てないよ。
そもそも、小田原からここまでも走ってきたんでしょ？
この世界の忍者ってどういう体の構造してるんだろ。
「そっか。気をつけてね。」
『城に戻るなら、連れて行く。』
「え？でも、仕事中でしょ？」

『ここから城までなら大した時間かからない。』
「そ、それじゃ、お願いしちゃおうかな。」
小太郎のスピードがどんなものなのか気になるし！
片手で抱っこされて、一気に視界が高くなった。
『しっかりつかまってて。』
「うん。」
首にぎゅってつかまると、小太郎はぐっと身を低くして、一気に跳び上がった。
「ふんぎゃぁぁぁぁ！！跳ぶなんて聞いてないぃぃぃぃ！！」
人間なら地面を走れぇぇぇぇぇ！！
想像を絶するスピードで、ものの数分で米沢城の私の部屋の前に到着。
なんで私の部屋を知ってるの？とか疑問も出てこないくらい放心状態。
ま、政宗の手放し運転が可愛らしく思えてきた。
『大丈夫？』
オロオロする小太郎に、なんとか笑顔を作って頷いた。

「大丈夫。なんとか。送ってくれてありがとう。」
『大したことじゃない。』

今度はちょっと照れてるようだ。
なんか可愛いな、小太郎！

「これから政宗の所に行くんでしょ？気をつけてね。」
見送ろうと思って縁側で待っていると、小太郎は何か迷っているように私と外を見比べていた。

「どうしたの？」
『・・・手紙とか、なにかあれば。』

政宗に持って行ってくれるってこと？
なんていい人・・・！

でも、今から書いてたら小太郎の仕事に差障りがでちゃう。

「いっぱい練習して待ってるから、寄り道しないで帰って来いって伝えて。」
本当は無事で居るのか、この目で確認したいけど。
ここで待っていると、政宗と約束したから。

『わかった。』

こくりと頷いて、小太郎は風を残して姿を消した。

あ、そういえば、最後に会ってから大分成長したのに、違和感なく話しかけてきたな。
佐助辺りから情報を仕入れてたのか？
だから私の部屋も知ってたのかな？

今度会ったら聞いてみよう。

22　お留守番です（後書き）

ガールズトーク断念。
いつかリベンジします（＜＿＞）

23　追憶（前書き）

とても短いです。

23　追憶

満月の夜が明けて、家族を亡くした１０歳の体まで成長した。
ここにきて初めて一人で目覚める成長した後の朝。
早朝だというのに、セミの声がもう聞こえていて、今日も暑くなりそうな予感がした。

障子を開ければ、西の空に沈みかけている白い月が見えた。
体に力が満ちているのが分かる。

あの日を境に、日々強大化していった力。
あの男を殺すために、ひたすら磨き続けた力。
それがまた私の中に戻ってきている。

皆の葬儀を済ませた後、私は寝食の時間を削って、英語を勉強した。
朔夜がアメリカに逃亡したと、刑事から聞いたからだ。
それから半年もたたないうちに、私は身一つでアメリカへ渡った。

広いアメリカの地で、闇に属する人間たちの間をくぐり、いつ殺されてもおかしくはない世界で３年間生きた。

力を使いきれずに怪我をして命を落としかけたことや、仕事で人を殺すこともした。
生きるか死ぬか。
ギリギリの中で技を磨いて、人を殺す技術を身につけた。

強くなっていく体と、死んでいく心。
狂気とも呼べる憎しみに囚われて、自分すら殺しながら生きていた。

そのうち裏社会で名が知られるようになって、あちこちから金で雇われては様々な依頼をこなした。
ある程度金が溜まれば、組織を出て、また朔夜の情報を求めて裏社会を彷徨う。

１５の時に、朔夜が中東に居るという情報を聞きつけて、対抗する軍の特殊部隊に入った。
あの頃はもう自分の経歴や戸籍など、自由に書き換えられることができたから、楽に潜入はできた。

何度か朔夜と戦うこともあったが、決着がつくことはなかった。
あと一歩というところで、するりと逃げられるのだ。

結局、私の7年はそれで終わった。

けれど、全てが終わったわけではない。
私は生きて、ここに居る。

政宗や小十郎、喜多さん、綱元さん成実、たくさんの兵士たちに助けられて、ここに居る。

これから、満月のたびに体に刻まれていくだろう傷跡。
それでも、行き着く先は過去の自分ではない。
この奥州で、政宗やみんなと一緒なら、きっと違う未来を選べる。

「ツキ、起きてる？」
喜多さんがちょっと驚いたように入ってきた。
「おはようございます。今日はなんだか早く目が覚めたの。」
「いつもそうだといいのに。」

寝起きが悪いのは自覚があるので、ここは誤魔化し笑いをすると、喜多さんはしょうがない子ねと笑った。

「先程、綱元の所に知らせが入ったそうよ。殿が戦を終えてこちらにお戻りになるって。」
「本当？良かった。」

もうすぐ、セミの声すら聞こえないほど、賑やかな連中が帰ってくる。

きっと得意げな表情で帰ってくるだろう政宗を想像して、私はひとり笑った。

23　追憶（後書き）

ヒロインの過去話でした。

次話は蒼い人ご帰還です。

24　おかえりなさい

　綱元さんのお手伝いで、領地内の年貢収穫予想をフリーハンドで表にまとめる作業をしております。
初めて作って見せた時は、物凄く驚かれてこんなまとめ方があるのか！と感動されました。

まぁ、横書きの習慣なんかないから仕方が無いんだけど、単なる一覧表でしかないのに驚かれたこっちが驚いたよ。

しかし、筆というのは、書きにくいなぁ。
腕がプルプルしてきちゃう。
おまけに、ちょっと表を小さく作っちゃったもんだから、中の文字が小さくなって、余計大変。

「ツキ、それが終わったら、次はこちらの集計をお願いします。」

どさっと置かれたのは、先月の歳出金領収書の束！
よ、容赦ないっすね。
ヒクつく頬を押さえてなんとか笑顔を作って頷くと、今やってる作業をさっさと終わらせるべく猛然と取り掛かった。

　どの位やっていただろうか。
なんだか場内の空気が変わったような気がして顔を出しあげると、綱元さんも苦笑気味で手を止めた。
「なんかあったのかな？」
「おそらく、殿がご帰還なさったのでしょう。ツキ、様子を見てきてください。」

「はーい。」

部屋を出て人の気配が集まる方向にゆっくり歩いていくと、まるでお祭かってくらい大騒ぎをしている兵士たちが居た。
良かった。皆元気そうだ。
薄汚れてはいるけど、怪我をしたり疲れていそうな気配はみえない。
笑顔で留守をしていた仲間と再会を喜び合っている。

政宗や小十郎たちはどこだろう。
キョロキョロ辺りを見回すけど、姿はどこにも見えない。

「お嬢!!」
今日もリーゼントがガッチリ決まってる良直が、私に気がついて走り寄って来た。

「良直、お帰りなさい。ケガとかしなかった?」
「もちろんでさぁ!今回も筆頭の活躍で楽勝でしたぜ!」
「それなら良かった。ところで、その政宗はどこ行ったの?」
「あれ?てっきりお嬢の所に行かれたのかと思いましたが?」
「すれ違ったのかな・・・。わかった。ありがとう。」

まぁ、いいや。とりあえず綱元さんの所に報告に戻るか。

来た道を戻りながら歩いていると、向こうから成実が鎧姿のまま歩いてきた。
「ツキちゃん発見!綱元の所に行ったら、様子を見に行かせたなんていうから、捜しに来ちゃったよ。」

「成実お帰りなさい！」

近寄った成実からは微かに血臭がして、戦帰りなんだなと改めて実感した。

本人が怪我をしている様子はなさそうだから、きっと敵の血なんだろう。

「あ、ちょっとにおう？ごめんねぇ。」

「ううん。大丈夫。それよりも、私に何か用事？」

「梵がツキちゃんにを捜してたよ。今は多分湯殿に行ってて、小半時もしたら戻ってくるだろうから部屋で待っててあげてよ。綱元もそれでいいって言ってたよ。」

「了解～。成実もお風呂行ってさっぱりしておいでよ。」

「そうする。もう、流石に限界だよ。」

でしょうね。この暑さと血臭じゃねぇ。

足早に風呂場の方へ去っていった成実を見送ると、自分の部屋に戻った。

昨日までは鳥やセミの鳴き声がうるさいくらいだったのに、今日はあまり気にならない。

やっぱり米沢城はこうでなきゃ。

自分の部屋で政宗を待ちながら、外から聞こえてくる笑い声や叫び声をＢＧＭに、喜多さんからの課題のお裁縫の練習。

くぅ！縫い終わる前に、布が血染めになりそうだ。

またもぶすっとやってしまった人差し指を咥えて、ちょと涙目になったとき、足音が聞こえて政宗が部屋に入ってきた。

いつもの着物と袴姿の政宗は、指を咥えている私を見つけると、一瞬驚いたような顔をして、それから笑った。

「刺したのか？」

「うん。きっと才能ないんだよ、私。」

すぐ横に胡坐を掻いて座った政宗にちょっといじけて答えながら、布と針を箱に仕舞った。

それから、改めて政宗を見上げる。

出発前よりも僅かにやつれた？

顔つきもいつもより険しくて鋭い。

全身が鋭い刃のような気配を纏わりつかせていて、戦場での政宗の姿がそのまま目の前に居るようだ。

「おかえりなさい。政宗。」

もう、ここは自分の家なんだから、安心していいんだよ？

「ああ。ただいま。ツキ。」

政宗は私を抱きしめると、深く息を吐いて、しばらくそのまま動かなかった。

ゆっくり、少しずつ、気配が穏やかになり、いつもの政宗に戻っていった。

向かい合わせで座りながら政宗がいない間の他愛もない話をしていると、廊下から足音が聞こえて部屋の前で止まった。

「ツキ、こっちに政宗様はいるか？」
小十郎の声だ。

「いるよ～。」
返事をすると、珍しくも袴姿の小十郎が襖を開けて入ってきた。

「小十郎、おかえりなさい。」
「ああ。留守の間何もなかったか？」
「うん。特には。」

何か喜多さんが企んでいそうだけど、多分、平和だったよ。うん。

そうかと、私の頭を撫でて、微笑をこぼす小十郎。

「・・・萌え・・・。」
「は？」
「いえ、なんでもないです。」
危ない危ない。

「小十郎、オレに何か用事があるんじゃねぇのか？」
あ、ちょっと政宗の機嫌が降下した。
まったく。自分以外に注目がいくとすぐ不機嫌になる。

めんどくさい奴め。

「まもなく宴の仕度が整うようなので、ご準備を。」
「ああ、もうそんな時間か。」

しぶしぶながら立ち上がる政宗を追って、私も立ち上がると、小十郎は慌てて止めた。
「ツキはここで待っててくれ。姉上が用事があるようで、ここで待っておくよう伝えるように言われている。」

なんだろ。準備の手伝いかな。
「わかった。って、事らしいので、政宗また後で。」
「ああ。」

なんか小十郎の様子が変だったな。
そわそわというか、ビクビクしているような気がする。
なんかあったのかなぁ。

なんて思っていると、喜多さんと数人の女中さん達が何やら色とりどりの布を持って部屋に入ってきた。

何これ?着物?
これから宴会だから、忙しいはずなのに、何で着物なんかこんなにたくさん?

「ツキ、こっちにきて立ってちょうだい。」
にっこり微笑む喜多さんとその手下達のオーラが怖い!

恐る恐る立ち上がって、示された所で立つと、一斉に飛びかかられて、着物を剥ぎ取られた。

「んぎゃぁぁぁ！！なにすんの！？」

「しっ！静かになさい！殿に感づかれたらどうするの？」

え？私が悪いの？

今先ほど四方八方囲まれて、着物をいきなり剥ぎ取られて、悲鳴を上げた私がダメ？

呆然としているうちに、単衣にされて、あーでもないこーでもないと、沢山の着物を片っ端から広げては何やら相談しあってる。

「喜多さん？これは何事？」

「殿への戦勝祝いですよ。」

「は？着物をプレゼントすんの？だったら、女物じゃなくて、男物の方が良くない？」

「着物ではありません。ツキ様を可愛らしくして、愛でていただくのです！」

なにか言いやがりましたか？手下その１！？

「そうです。お疲れの殿に、ツキ様の癒し！素敵です！」

どこが素敵なの手下その２！

癒しじゃなくて、ストレス発散に使われるだけだよ！

「まだ夜伽は無理でしょうけど、殿にはきっとご満足いただけるはず！」

手下3が恐ろしいことを言ったぁぁぁ！！

なに夜伽って！！

小十郎め！こうなるって知ってたな！

おのれ！後でギャフンと言わせてやる！！

ぶすーっとしていると、喜多さんが苦笑して一枚の着物を手に取った。

「ツキも、そろそろ裳着を迎えるような年頃になったんだから、いつまでも殿の着物ばかり着ていてはダメですよ。殿だって、ツキが可愛らしく着飾るのを楽しみにしていらっしゃるはずよ？」

「私はあまり楽しくないもん。」

ぷいっと顔を背けると、喜多さんは仕方がないわねと呟いて、溜息を吐いた。

諦めたかな？

と、思ってそぉっと様子を窺うと、喜多さんはにっこりしながら。

「裳着を迎えたなら、大人として認められるのよ？大人として認められたら、ツキの大好きなものも誰にも咎められることなく飲めるのよ？」

・・・・酒！！
酒が飲めるようになるの？
怒られることなく？

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

「大人最高～！」

意気揚々と着物を選ぶ私の後ろで、グッと親指を立て合う喜多さんと手下共。
酒が飲めるなら、着物くらい喜んで着ますとも！

２４　おかえりなさい（後書き）

ピンチというほどの事もなく、酒で解決。

25　解禁

戦は開戦から僅か一日でケリがついた。
雑魚兵に紛れて逃げようとする大内を討ち取って、蘆名にその首を送りつけてやった。
これでもまだこの独眼竜に楯突くというのなら、蘆名も潰すというＭｅｓｓａｇｅだ。

事後処理で数日小手森城に留まっている間に風魔小太郎が現れて、九州の島津が安芸の毛利、四国の長曾我部と手を組んだという情報と、ツキからの伝言を届けにきた。
いっぱい練習して待ってるから、寄り道しないで帰ってこいと。

仕方ねぇなぁと、小十郎と苦笑しながらも、残党を狩りつくして、ようやく米沢に戻ってきた。

ツキに会いたかった。
たかが半月ほど離れていただけだというのに、側にいないというだけで焦燥に駆られるような気分になった。

湯殿から出てすぐにツキの部屋に行くと、指をくわえて涙ぐんでいる姿を見て何事かと驚いたが、すぐに針で指を刺したのだと察して、ツキらしいと笑った。

布と針を箱にしまうツキの横に座り、満月を過ぎてまた少し成長

した姿を見た。
親を殺されたという年齢になったはずだった。
そろそろ裳着を行ってもおかしくはない年齢だが、まだ幼さの残る顔。

「おかえりなさい。政宗。」

その笑顔に、帰ってきたという実感が湧いた。
ツキを腕に抱き寄せて、その体温に緊張がほどけていくのが分かった。

留守の間何をしていたとか、こんなことがあったとか話していると、小十郎がオレを呼びにきた。
小十郎もツキの姿を見て気を緩めたのだろう、珍しく笑顔なんぞ見せてツキの頭を撫でた。

そういえば、前にもこんなことがあったような気がするな。
ちらりとツキを見れば、少し顔を赤くしてやがった。

Ｓｈｉｔ！面白くねぇ！

小十郎に何の用だと聞けば、Ｐａｒｔｙの準備ができたからそろそろ広間に来るように言われた。
それなら行くかと立ち上がり、ツキも一緒に行こうとして立ち上がれば、喜多がここで待っているように言っていたので待てと、ツキを慌てたように引き止めた。

「わかった。ってことらしいので、政宗また後で。」
「ああ。」

また後で。
すぐ近くにいるからこそ、当たり前に言える言葉に自然と頬が緩むのを感じながら、小十郎に続いてツキの部屋を出た。

なかなかツキが来ないまま、Ｐａｒｔｙは始まった。
準備はとっくに終わって、女中たちも下がったってのに、何してやがるんだ？
ちらっと小十郎を見れば、どこかそわそわしていて落ち着かない様子だ。

さっきといい、なんか知ってるな？
問い詰めようとした時、ふと意識せずに広間の入り口に視線が向いて、息を呑んだ。

おい、うそだろう・・・？

喜多に連れられてようやく現れたツキが現れたのだが、その姿を見て心底驚いた。
酒が入って大騒ぎをしていた連中も、ツキの姿を見た奴から口を開けたまま動きが止まった。

縹色の紗の打掛を羽織り、伸びてきた髪を結い上げ、薄く化粧を施したツキがゆっくりと顔を上げて微笑んだ。
それだけで静まり返っていた広間がざわめきだした。

「おい、小十郎、あれはツキだよな?」

あいつ、あんなに華やかな女だったか?

確かに一度だけ見た舞を舞う姿は、儚く美しかったが、今目の前に居るツキはまた違う。
儚さとは真逆の圧倒的な存在感。
部屋に入って来ただけで、騒いでいた連中が振り返る程の。

小十郎も唖然として他の連中と同じように口を開けて見ている。

ツキは広間を見回して、連中の反応に満足そうに頷くと、ニヤリと笑った。

「野郎共おかえり!そして、お疲れ!」

お前。その姿で・・・。

良くも悪くも、ツキはツキだった。

我に返った小十郎は、こめかみを押さえて残念そうにため息を吐いている。

兵士共はいつものツキに戻って安心したらしく、お嬢綺麗っす！とか叫んでやがる。

一人一人に答えながら歩くツキの後ろを歩く喜多も、すっかり諦め顔だ。

「お待たせ～。どう？」

ようやく俺の前に来たツキが、くるりと一回転して見せた。

「口を開かなきゃ、美人だな。」

「言うと思ったー！」

素直な感想を聞かせてやれば、憤慨するツキ。

「小十郎！政宗が酷い！なんか言ってやってよ！」

憤慨してツキに詰め寄られた小十郎。

正直に言ってやれ。

「一瞬幻が見えた。」

「小十郎も失礼だー！！」

頬をパンパンに膨らませて、ツキはオレの横に用意された膳の前に座った。

「それなら最後まで淑やかにしてろ。」
ニヤニヤしながら言ってやれば、ツキはむっとした表情を見せた後、ガラリと雰囲気を変えてみせた。
大人のような雰囲気を醸し出して、艶やかに微笑んで首を傾げた。

「殿はこうして、ただ微笑んでいるだけの女を御所望でございましたか？」
「Ｎｏ．面白くも何ともねぇな。」
綺麗なだけの女なんざ、これっぽっちも興味はねぇ。

悪かったと、頭を撫でてやれば、機嫌を直して盃を手にとった。

なんだ？飲むのか？
今までは喜多や小十郎がうるさく言って飲ませないようにしていたのに、今日は止めようとする小十郎を喜多が止めていた。

「今日から解禁なんだよ～。」
「そうか。じゃ、ほら。」
徳利を差し出せば満面の笑顔で盃を差し出した。
そうそう。こっちの笑顔のほうが、オレは何倍も気に入ってるんだ。

「あれ？ツキちゃんが飲んでるのって、酒だよね？」
戦場でオレよりも派手に暴れていたくせに、疲れた様子もない成実が素っ頓狂な声を上げてこっちに来た。

ちっ、うるせぇのが来たな。

隣でちびちび酒を飲んでいるツキは、上機嫌でそうだよ～と暢気に

答えて、自分の膳にあった芋の煮付けを頬張った。

「うまー。ご飯も美味しいし、お酒も美味しいし、もう最高だ～！」
「みんなで食べるってのもいいんだよね。」
「うんうん。」

ちゃっかり横に座り込んだ成実の言葉に、頷きながら次々と膳をたいらげていくツキ。
「なんだ、寂しかったのか？」
冗談のつもりで言ったら、ツキは同じようにうんうんと頷いた。
「一人で食べるのは味気ないよね。食欲も半分位しか湧かないよ。」

ちらりと喜多を見れば、困ったように笑って、微かに頷いた。
そうか。少し痩せた様な気がしたのは、成長をしたせいじゃなかったのか。

「そうか。これも食って良いぞ。」
思いっきり抱きしめてぐりぐりと撫で回したい気持を抑えて、俺の膳にあった煮物を乗せてやると、ほんのり頬を染めたツキがにこにこ嬉しそうに箸を伸ばした。

かわいいじゃねぇか。酒が入ってるせいか、やけに素直だしな。

「ツキちゃんは本当にかわいいなぁ。ねぇ梵、ツキちゃんを大森に連れて帰ってもいい～？」
「いいわけねぇだろ。一人で帰れ。」
「酷い！ツキちゃん、こんな冷たい梵の所じゃなくて、うちに来ない？」

いつの間にか手酌で飲んでやがったツキは、きょとんとした表情の後、にやっと笑った。

「成実、私を連れて帰ったら、彼女にふられちゃうよ？」
「ツキちゃん、何で知ってるの！？」

彼女？どういうこった？
小十郎を見ても、同じように不思議そうにしている。

「ツキ、彼女ってのはなんだ？」
面白そうなにおいがするな。

慌てて止めようとしている成実からツキを奪って膝の上に乗せて、詳しく話せと先を促した。
「亘理城の城主のお嬢さんに一目ぼれしたんだって。」
「んきゃー！！ツキちゃんやめてぇ～！」
「成実キモイからその悲鳴やめたほうが良いよ。んでね、手紙とか送ったら、字が汚いって怒りの返事が返ってきて、伊達政宗に仕える家臣ともあろう人間が云々って大森城にわざわざ指導しに来たらしいよ。すんごい行動的な姫様だよねぇ。」

亘理城・・・っていうと、亘理重宗か。
娘ともなると会ったこともないが、成実が気に入るような女か・・・。

「おい、成実、モノにはできそうなのか？」
「今頑張ってる所だよ。」
開き直ったらしい成実が、自棄酒を呷りながら答えた。

「成実、行動力があって、姉御肌な御姫様には強制や俺様的態度は

ダメだよ？」
ふふふと笑いながら酒を飲むツキ。
ちょっと飲みすぎじゃねぇか？

「ドジっ子属性を前面に出しつつ、でもやるときゃやるんだぜって所も見せて、意外と頼れる所もある？でも、やっぱり私がいなきゃダメ？って感じに思わせて、一気に畳み掛けると多分いけるよ。」
「え？ちょ、ちょっとまって、もう一回。」

だからね、と、女の落し方についての講義が始まって、慌てて居住まいを正した成実にツキがベラベラと一方的に話し始めた。
「女って、アホで馬鹿な男の人ほど手が焼けると思いつつも、ついつい面倒見ちゃうんだよね。で、そこを突く訳よ。」
「ふんふん。」
「あ、もちろん、そうでない女の人もいるから、見極めは重要ね？喜多さんだと、馬鹿な男は斬って捨てるよね？」
「あら、ツキはよく見ているわねぇ。」

にこりと笑う喜多が恐ぇ。
オレと小十郎が引いていると、それに気がつかない成実がぐぐっと身を乗り出した。

「なるほど。ちなみにツキちゃんはどっちのタイプ？」
「私？私は馬鹿な男は利用して、自分の都合のいいように使う、かな？」
にっこり。

・・・・・・・・。
心当たりがありすぎるぜ。

一瞬にして凍りついた空気を気にもせずに、どんどん杯を重ねるツキに、ついに喜多のＳｔｏｐがかかった。
「今日はもうそのくらいにしておきなさい？」
見れば、一人で徳利三本は空けていた。
「確かに飲みすぎだな。」
これ以上飲ませたら危険度が増すと判断した小十郎も、喜多に便乗してツキから盃を取り上げて代わりに白湯を与えた。
「そぉ？そんなに酔ってないと思うんだけどなぁ。」
確かに顔を見ただけではほろ酔い程度だが、姿勢のいいツキがくてっとオレに寄りかかっている。
「酔っ払いは大概自分は酔ってねぇって言うもんだ。」
白湯を飲み終えるのを待って、そろそろ部屋に帰らせるよう喜多に指示をすると、ツキを膝の上から立ち上がらせた。
「さ、部屋に帰りましょうね。」
「・・・うん。喜多さん、手を繋いで？」
先を歩こうとした喜多に手を差し出すと、ちょっと潤んだ目で上目遣いで強請った。
「まぁ、まるで子供みたいですよ？」
「喜多さん好きだから良いの。」
にこっと笑うツキ。

やばい・・・。
何がやばいって、全てがヤバイ。
今まで僅かな量の酒しか飲ませたことがなかったが、酔うとこうなると分かっていれば・・・！！

「梵、ツキちゃん一人で飲ませちゃダメだよ・・・？」
「そうですな。」
「ああ。」

そのまま二人が広間を退場していく後姿を三人で呆然と見送った。

25　解禁（後書き）

くどいようですが、お酒はハタチを過ぎてからですよ～

26　お友達ができました（前書き）

かすがを春日と書いていたので、修正しました。

２６　お友達ができました

暑い日も少しずつ減っていって、朝晩が涼しくなってきた葉月。
最近織田信長の動きが今までと少し変わってきていて、伝令の忍たちが同盟国を飛び回っているらしい。
先日佐助が現れて、俺様時間外勤務ばっかりで嫌んなっちゃうよとかぼやいていた。

一度は制圧されたと思われていた九州の島津が四国の長曾我部と中国地方の毛利と共に盛り返してきたことから、なにやら動きに統制が見られなくなってきたとか。
少しずつ国がまた動き出しているようだった。

そんな中でも、ここ米沢の朝はいつもと変わりませんがね。

「ＤＥＡＴＨ　ＦＡＮＧ！！」
「霞断月！」

「Ｅｘｐａｎｄ　ｔｈｅ　ｓｈｉｅｌｄ．Ｌｅｖｅｌ　１００！！（シールド展開。レベル１００）」

今日も大技出すまで熱くなった政宗と小十郎の二人をシールドで囲ってやった。
もうこのくらいは余裕でできるようになりました。

喜多さんからも褒められたし、被害は二人だけで他にはないし、良い事尽くめだね！

なんて清々しい鍛錬をしていると、復活した政宗がむくりと起き上がって屋根の上を見上げた。

「そんな所にいねぇで、さっさと降りて来い。」

ん？誰？

つられて屋根の上を見ると、金髪の女の人が立っていた。

初めて見る女の人だ。

スタイルがいいなぁ。うらやましい。

ただ、あの露出はいかん。

幸村が見たら、絶叫すること間違いなしだね。

しかし、この世界にはボディスーツがあるんだね。

どこに売ってるんだろ。動きやすそうでいいな。

でも私が着たら、大惨事なんだろうなぁ。メリハリないし。

ちぇっ。

「あいつは越後の上杉謙信の所の忍でかすがだ。」

少し険しい表情の小十郎が屋根の上を見上げて教えてくれた。

かすがかぁ。

ぜひお話がしたいな。
降りてこないかなぁ。

と、思っていると、スタっと軽い音を立ててかすがが小十郎の前に降りて来た。

「朝っぱらから何の用だ？」
「謙信様からの書簡だ。」

愛想の欠片もないかすがが、同じく愛想のあの字もない小十郎に一通の書簡を手渡した。

うーん。にこやかにとは言わないけど、もう少し口角を上げれば可愛いのになぁ。

「ツキ、こっちに来い。」
興味津々で見ていると、政宗に呼ばれた。
「なぁに？」
私は今かすがの観察で忙しい。

綺麗なお姉さんは好きですか？
はい。大好物です！

視線をかすがから外さない私に痺れを切らせた政宗が、ズカズカと寄ってきて強制的に私を引き離した。

「あう～。理想のバストが～！くびれが～ケツが～！」

「だから、お前そのおっさん思考やめろ。」

未練がましく見ているのがわかったのか、かすががちょっと引いたように私を見ていた。

お！そんな顔もかわいいなぁ。

「その小娘は何なんだ？」

きた！会話のチャンスきた！

「ツキです。綺麗な女の人大好きです！お、お友達からお願いします！」

「友達からって、てめぇはどこまで行く気だよ！」

政宗うるさい。

何でか焦ってる政宗を無視して、期待に満ちた目でかすがを見上げると、すすすと後ろに下がって恐ろしいものを見るような目で私を見ていた。

「独眼竜、こいつ頭がアレなのか？」

「否定はできねぇな。」

おのれ、政宗！！

「ひどい。仲良くなりたいだけなのに。あわよくば、その胸を鷲掴んでみたかっただけなのに。」

「かすが、悪い事は言わねぇ。今すぐ逃げろ。」

ちょ！待って！本当に逃げないでぇ！！

冗談だよぅ！！

・・・まぁ、八割は本気だけど。

渡された書簡を読んで少し考えたあと、政宗は返書を書くから半刻まてと言って、小十郎と一緒に奥へ下がった。

する事もないので、縁側に座って待つようにかすがに言うと、お茶の用意をしてから再び縁側に戻った。
まだ警戒されてる気がするけど、かすがは言われた場所で待っていてくれた。

「はい。どうぞ？」
「あ、ああ。すまない。」
一つの急須で居れたお茶を均等に同じ湯呑みに入れて、まずはかすがに取らせる。
余った方を手にして、そのままずびびーっとすすった。

あー、鍛錬のあとの茶はうまい。

その様子を見ていたかすがは、くんっと匂いを嗅いだあと、恐る恐るお茶を飲んだ。
もちろんすぐに飲み込まずに、口の中で吟味してからだ。

やっぱり忍ってのは、用心深いんだなぁ。

「何をニヤニヤしている？」
あれ？にやけてた？
無意識だったよ。

「いや、一名除いて、あとは男しか周りに居ない生活だから、やっぱり女の人はいいなぁと思って。」
「お前も女だろう？」
「女だからだよ。右みても左みても、男しか居ないし、みんなデリカシーないし、人の事を女と思っちゃいないし、そのくせちょっと足を広げて柔軟したり走ったりすればはしたないはしたないってさぁ。そうだ！かすがのその服はどこで手に入れたの？」

ぐいっと前のめりで勢い込んで尋ねると、呆気に取られた様子でバサラ屋と教えてくれた。

バサラ屋ね！奥州にもあるかなぁ。
あとで政宗に聞いてみよう！

「こちらからも質問があるんだが。」

若干腰が引いてるかすがが、湯呑みを置いて私を見た。

「先ほど独眼竜と右目を何やら青い幕で覆っていただろう？あれは何だ？」

やっぱり見られてたか～。

「あれはね、うーん、何と言うか、防御幕？あの2人を閉じ込めて、周りに迷惑被害が及ばないようにしたんだよ。」

「お前は何者だ？」
「何者だ？って言われてもなぁ。どう答えたもんか。」
「忍か？」
「ちがうよ。ちょっと特殊能力のある一般人だよ。」
果たして特殊能力がある時点で一般人と言うかどうかは怪しいけど。
でも、私は忍びじゃないし、武士でもない。
ただの一般人だ。

「できることは、その防御幕をはることだけか？」
「ほかにもできるけど、教えてあげない。」
「なにっ？」
気色ばむかすがの目の前に、手を差し出して、にんまり笑った。
「お友達になってくれたら、教えてあげる。」
むふふ～同世代の美人なお友達～
かすがはしばらく私の顔と手を見比べていたが、やがてふいっと顔を背けてしまった。
あれ？ダメ？
「と、友達とは、取引でなるもんじゃないだろうが！」
ん？なんかちょっと顔が赤い？
「私はかすがのこと可愛いし綺麗だし、好きだよ？」

もしやと思ってちょっと大げさに告白紛いのことを言ってみると、思ったとおり。
「ば、馬鹿!!そういうことを恥ずかしげもなく言うんじゃない!」
と、真っ赤な顔になって怒った。

よし、あと一息!
「ダメ?」
しょぼんとした声でうつむきがちに言うと、かすがはちょっと焦ったようにこっちを見た。
「だ、ダメとは言ってないだろう!仕方がないな!友達になってやる!」
「よっしゃぁぁぁぁ!!ツンデレ美人げっとぉぉぉぉ!!」

あ、また引かれちゃった・・・。

そんなこんなで、治癒もできるのよ~って教えている所で、返書を書き終えた政宗が戻ってきた。
楽しい時間というのは、あっという間に過ぎるなぁ。

ここからはお仕事の時間だろうから、私は小十郎の側に寄った。
かすがも仕事の顔に戻っている。

「これを持って行け。用意が整い次第こちらも出る。」
「分かった。お伝えしよう。」

受け取った書簡を懐に仕舞い、かすがは私を見た。

「ツキも来るのか？」

は？何が？

訳が分からずに首をかしげると、政宗が溜息混じりに答えた。

「連れて行かねぇ訳にはいかねぇだろ。まったく、武田のおっさんも余計なことをしてくれる。」

「どういうこと？」

「軍神の城で会合がある。その席にツキも連れて来いとさ。大方武田のおっさんが軍神にツキのことを話したんだろうよ。」

「信玄公が？・・・まぁ、行くのは構わないよ。越後でしょ？」

ぐふっ、越後といえば新潟。新潟といえば米所。

米所といえば・・・！！

酒！日本酒！

ひゃっほー！

「これを置いていったら、何が起きるかわからねぇからな。」

「そ、そうか。」

うふふ～。何とでも言うが良いさ。

「んじゃ、気をつけて帰ってね。」

「ああ。お前も気をつけてこちらに来てくれ。」

バイバイと手を振ると、少しだけ笑ってかすがが頷いた。

しゅぱっと助走もなく塀の上に飛び乗って、そのまま塀の向こうに消えていった。
さすが忍。動きが綺麗だなぁ。

「さて、朝餉を食ったら即仕事に取り掛かるぜ？」
「了解！」

さー、がんばるぞ～

26　お友達ができました（後書き）

どんどんヒロインが壊れていってますな

27　軍神と常春男に会いました（前書き）

27　軍神と常春男に会いました

甲斐より遠い春日山城は、日本海にほど近い場所にありました。
遠いよ。この距離をかすがは走ったのか。
やっぱり忍はすごいな。
馬に乗せてもらってる身分でも、もう限界です。

今回は馬に慣れてきたって事もあって、容赦なく飛ばされてかなりグロッキー。
力なく俯いている私を、先に降りた政宗が抱えながら降ろしてくれたんだけど、足がふらついて数歩よたついてしまった。

「大丈夫か？」
「まだ上下に揺れてる気がする。」

「距離があるからちょっとばかり飛ばしたが、そんなにきつかったか？」
小十郎も心配そうに声をかけてきた。

「とりあえず、揺れない所で休みたい。」

うぷっ。ちょっと気持ち悪い。
その場に座り込みたくなるのを必死に我慢して、みんなが馬を預け終わるのを待つ。
我ながらなんか産まれたての子鹿の様だわ。

「顔が青いぞ。」
ひょいっと抱っこされて、誰かと思えば小十郎だった。
小十郎に抱っこされるのは初めてかも～。

ちょっと役得～とか思いつつ、ぐったりと目を閉じた。

「どうした？」
女の人の声が聞こえて、うっすら目を開けると、かすががいて私を見ていた。
「馬に酔ったらしい。すまねぇが、休める場所を。」
「わかった。こっちに来い。」

運ばれた場所は、風通しのいい部屋だった。
とりあえず布団を敷いて貰って、その上に転がる。

「寝てれば大丈夫だから、政宗も小十郎も到着の挨拶してきてよ。」
「だが・・・。」

渋る政宗と小十郎。
とにかく到着して世話になるんだから、挨拶くらいは早く済ませないとダメじゃないのよ。

「かすが、二人を謙信公の所に案内してあげてよ。」

早く連れて行ってと目で訴えると、かすがは呆れたような顔をして政宗と小十郎を見た。
「ほら、謙信様がお待ちかねだ。行くぞ。」
渋る二人を半ば無理矢理部屋から追い出すと、かすがは懐から鈴を出して枕元に置いた。

「何かあったら、この鈴を鳴らせ。すぐに誰かが来る。」
「うん。分かった、ありがとう。」
「気にするな。」
そう言うと、そのまま二人の待つ廊下に出て、無駄のない動きで襖を閉めた。

こみ上げる吐き気を大きく息を吸って堪えて、目を閉じる。
うーん。乗り物酔いなんてしたことなかったんだけどなぁ。
ちょっと頭も痛いな・・・。

風邪かなぁ・・・。
なんて考えているうちに、いつの間にか意識が途切れた。

誰かが呼んでいる？
遠くで私を呼んでいる声が聞こえて、顔を上げた。

真っ暗な、何も見えない世界。
でも、誰かが呼んでいる。

ドコニイル？

誰が呼んでいるの？

コノ世界ニイルコトハワカッテイルンダ。
ドコニイル？

・・・だれ？

ミィ。ドコ？

え？・・・なんでその呼び名を・・・？

ミィ。必ズ探シ出スヨ。

逃ガサナイ。

いやぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！

悲鳴と共に目が覚めて飛び起きた。
心臓がものすごい速さで動いている。
ガタガタ震える体を抱きしめて、すぐ近くに武器になるようなものはないかと視線を走らせた。

あの声は・・・。
まさか、まさか、まさか、まさか・・・！！

「ツキ！？どうした！？」

複数の足音と一緒に、政宗の声が聞こえた。
外れるんじゃないかってくらいものすごい勢いで襖が開けられて、恐い顔の政宗が部屋に飛び込んできた。
続いて、数人の見知らぬ顔と、見知った顔が後に続いた。

混乱する頭と、言うことを聞かない体をどうすることもできずただ震えて視線を彷徨わせる私に、侵入者がいないことを確認した政宗はもう一度どうした？と声を和らげて尋ねた。

「あ・・・・。」

カタカタ震える手で政宗の羽織の裾を掴んで、すがりつく。
その手を握り締めると、政宗は顔を顰めて、足元に丸まっていた掻巻を取って私を包んだ。

それから後ろを振り返って、様子を窺っている人たちに顎で廊下を示した。

「悪いが、部屋から出てくれ。ツキが落ち着いたら、そっちに行く。」
「わかりました。なにかいりようなものがあったら、もうしでてください。」
「ああ。すまねぇな。」

初めて聞く優しそうな声が、政宗の話に答えて、他の人たちを部屋から連れて出て行った。

足音が聞こえなくなるのを待って、政宗は私を抱き上げて膝の上に乗せて座った。
政宗の匂いに少しだけ暴れていた心臓が落ち着く。

何も言わずに、なだめるように背中を撫でてくれる手。
しばらくして、震えが収まって脈も普通に戻り始め、ゆっくりと深呼吸をすると力を抜いて政宗に凭れ掛った。

「大丈夫か？」
「・・・うん。」
「何があった？」
「・・・・あの男の・・・朔夜の声を聞いたの。」

背中を撫でていた手が、ピクリと動いた。

「真っ暗なところで、私を捜している声。まさか、あの男もこっちに来たの？」

私を呼ぶ声。逃がさないと呟く声。
私を「みぃ」と呼ぶのは、もうあいつ一人しかいない。

再び心臓がドクドクいい始めて、目の前が真っ赤に染まる。

「やっと解放されたのに。またあの日に戻るの？」
「ツキ、落ち着け。」

あの日には戻りたくない。嫌だ。恐い。

「ああ、でも、今度こそ、あいつを・・・朔夜を殺せる？」

心の片隅で凍っていた憎しみが、じわりと溶け出す。
矛盾する気持ちがせめぎあって、カタカタと体が再び震えだした。

「ツキ、ツキ！！」
揺さぶられてハッと我に返ると、ひどく焦った顔の政宗が私を見ていて、その政宗の目に映る自分の顔が真っ青になっているのが分かった。

「酔って寝ていたせいで、見たくもねぇ夢を見たんだ。忘れろ。ただの夢だ。」
「ゆめ・・・？」
「そうだ。ただの夢だ。」

夢・・・。そうなのかな・・・。
あの声は、私が作り出した幻影？

「あの森に居たのはツキ一人だ。他の人間なんて居なかった。」
低く落ち着かせるようにゆっくりと話す政宗。

確かに、あそこには私しか居なかった。
やっぱり夢を見ただけなのかな。

「長旅でムリをさせちまったな。ここには数日滞在するから、ゆっ

くり休め。」
「うん。・・・ありがと。」
再びゆっくり背中を撫でる大きな手を感じながら、政宗の胸に顔を埋めて目を閉じる。
うん。あれは夢。
ここにいるわけがない。
大丈夫。

３０分程してようやく血の気も戻って、気持悪さも抜けたので政宗にもう大丈夫だと告げて立ち上がった。
寝るときに腰紐を緩めたせいで着崩れしていた単衣を直して、それから荷物の中から藤色の内掛けを取り出して羽織った。

「変なとこない？」
くるりと回って政宗に見せると、ちょいちょいと手招きをされた。
近寄ると髪を梳かれて、横髪を耳に引っ掛けて毛先を肩の後ろに流した。

寝ていたから、頭がぼさぼさになったのか。
頭はぼさぼさ出し、単衣は着崩れてるし、最悪の状態を皆に見られちゃったな。
恥ずかしいなぁ。なんて言い訳しよう。

なんてぼんやり考えていると、細かい所を手直しし終わった政宗が、じっと私を見下ろしたまま止まった。

「ツキ、真田にあまり不用意に近寄るなよ？」

「なんで？」

近距離で政宗を見上げながら首を傾げると、引っ掛けてもらった髪が崩れた。

ちょっと髪がうっとおしくなってきたな。

自分で髪を耳にかけようとすると、政宗が私の手を止めてすっと耳元に顔を寄せた。

「お前が子供から女になったからだよ。」

は？何を言ってるの？

驚いて横を見ようとしたら、フッと耳に息を吹きかけられた！

「んぎゃぁぁぁぁ！！」

み、耳に息を吹きかけんな！！ばかぁぁぁぁ！！

ぞわぞわする体中をこすりながら、半歩先を歩く政宗の後ろについて皆が待っているという部屋に向かった。

「幸村が女の人全般が苦手って普通に言えないの？」
「それじゃ面白くねぇだろうが。」
「面白くしなくていいっつーの！」

先程まで政宗に泣き付いていたことなんかすっかり記憶の彼方に押しやって、ぶーぶー文句をたれると、政宗はピタリと足を止めた。

な、なによ・・・。

耳を塞いで警戒をして構えると、振り返った政宗は私を見下ろしてちょっと笑った。

「顔色も良いし、もう平気だな？」
「うん。もう平気。・・・と、いうか、なんか皆に顔見せるのが恥ずかしくなってきた。」

あんなに悲鳴を上げて、取り乱した姿を皆に晒してしまったよ！
うわぁぁぁぁ！恥ずかしい！

「具合悪くて恐い夢見たって言えばいいじゃねぇか。」
「それが恥ずかしいって言ってんでしょ！」

デリカシーのない奴め！
蹴りでも入れてくれようかと思ったとき、ちょっと先の襖が開いて、

佐助が顔を出した。

「あ、やっぱりツキちゃんだ。元気になったみたいだね。」

うあ！心の準備ができる前に見つかった！

先に行ってしまった政宗の後ろから恐る恐る部屋に入ると、中には佐助の他に、信玄公、幸村、かすが、そして見たことのない人が座っていた。

「どうぞなかへはいってください。」

にこやかで穏やかなこの声は、さっきの人だ。

政宗の横に座ると、まずはと、頭を下げてお礼と自己紹介をした。

「先程は失礼をいたしました。ツキと申します。到着早々ご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした。」

「いいえ。かおいろもよくなったようで、なによりです。わたくしはうえすぎけんしんともうします。」

この人が、上杉謙信。

信玄公から想像した人物とは真逆だなぁ。

もっと大柄でたくましそうな人を想像してたんだけど。

かすがと並んでるとまるで宝塚っぽいわぁ。

まじまじと見ていると、斜め前から不穏な気配がして、ちらっと見るとかすがが怖い目で私を見ていた。

Ｗｈｙ？なんで？

「ふふ、わたしのつるぎよ、そうこわいかおをしてはいけませんよ？。りゅうのはながおびえてしまいます。」

「謙信様！申し訳ございません！」

謙信公に諭されると、かすがは慌ててスライディング土下座かってくらい勢い良く頭を下げた。

おいおい？どうしちゃったの？

何が起きてるのか分からないまま呆然と見ていると、宝塚の舞台のごとく謙信公がかすがの手をとって体を起させると、顎に手を添えて至近距離で見詰め合った。

「わかればよいのです。さぁ、そなたのうつくしいかおをわたくしにみせてください。」

「ああ、謙信様ぁ～。」

ぶわぁぁぁ！！とバラが咲き乱れる幻覚が見えます。

どうしたらいいかわからずに、隣の政宗を見上げると、暇そうにアクビをしている。

え？放置？放置で良いの？

「いつものこった。ほっとけ。」

「そうそう。それより、ツキちゃん具合悪いって聞いたけど、もう大丈夫なの？」
小十郎の言葉に同意して、佐助がにこやかに聞いてきた。

「うむ。長旅がたたったのであろう。無理はするでないぞ？」
「ツキ殿、甘いものを食せばきっと気分も良くなりますぞ！」

心配顔の信玄公と、斜め上を貫くアドバイスをする幸村。

みんな変わりなさそうで何よりです。

「ありがとうございます。信玄公。ご無沙汰を致しております。」
遅ればせながらの挨拶をすると、信玄公は鷹揚に頷いてから私を見て目を細めた。

「うむ。それにしても、美しく成長をしたのぅ。どうだ？ワシの所に嫁に来んか？」

さらっと爆弾発言いただきましたー！

暇そうにしていた隣からは殺気が。
信玄公の隣に控えていた幸村は真っ赤になって挙動不審。
小十郎はいつでも政宗を取り押さえられる位置にスタンバイ。
佐助は幸村が叫んだらすぐに口を塞げるように真後ろに移動。

ナイス連携。

「信玄公。ご冗談も程々にしないと、春日山城が瓦礫とかしちゃいますよ？」

周りを見やがれ。

遠回しに断る意味でも、冗談で躱わせば、信玄公も意図に気がついたようで、愉快げな顔をした。

この状況を楽しめるなんて、やっぱり大物は違いますな。

「はっはっはっ。これはすまない。」

勘弁してくれと思ったのは、私だけじゃないはず。

「ワシではなく幸村の嫁の方がいいかもしれんな？」

わざとか？わざと言ってるのか？

「御館様！！な、なななななにをおっしゃられるのでござるか！！？」

「Ｈｅｙ，そいつは聞き捨てならねぇ話だな、オイ。」

案の定過剰に反応した二人が、困惑と殺気をそれぞれ纏って、信玄公に詰め寄った。

あーあ。どうなってもしーらないっと。

あわや一触即発かと思ったとき、スッパーン！と小気味のいい音がして障子が勢い良く開けられた。

「恋の話かい！？それなら、俺にまかせなよ！」

はい？

仮装か？ってくらいど派手な衣装に身を包んだ男が現れて、にかっと笑った。
うわー、なんか凄いのが現れたな。

「けいじ。きてくれたのですね？」

けいじ？
謙信公が立ち上がって、派手男を迎え入れると、私に紹介してくれた。

「このおとこは、まえだけいじです。けいじ、かのじょはおうしゅうのりゅうのはな。つきです。」

なんじゃ、その竜の華っていうのは。私のことですか？
ちょっと気になったけど、まずは目の前の派手男からだな。

「初めまして。ツキといいます。」
「こちらこそよろしく！俺は前田慶次。こいつは友達の夢吉だ。」
肩からひょっこり顔を出したのは小猿。

あ、可愛い。

愛らしい仕草にちょっと和んだ時、慶次は私の肩をがしっと掴んだ。
「ツキ、恋してるかい？」
「・・・・は？」

咄嗟のことで、何を言われたのかを理解できずに間抜けな顔で慶次を見上げてしまった。

「おい、てめぇ。ツキから離れろ。」
ぎらりと抜き身の刀が私と慶次の顔の間に突きつけられて、ぎょっとした。

肩から手が離れたので、慌てて後ずさって、刀の持ち主を見ると、政宗がものすごく機嫌悪げに慶次を睨み付けている。

「危ないだろう？ツキが怪我したらどうするんだよ。」
ちょっと怒った慶次が政宗を睨み付けるけど、今回ばかりは私も政宗に付くよ。

「初対面でいきなり恋してるか？なんて突拍子もないこと言わないでよ。びっくりするじゃない。」
怪しい宗教の勧誘か？

すすすっと政宗に寄りながら溜息混じりに言ってやると、慶次はごめんごめんと笑って頭をかいた。

「珍しい連中が恋の話をしていたから、つい盛り上がっちゃったよ。」
この脳味噌常春人間が！

「恋もしないし、嫁にも行きません。皆さん他をあたってください！」

戦国の世の武将たちの会合の話がこれかよ！
どこの女子高だここは！！

27　軍神と常春男に会いました（後書き）

28　竜の誓い（前書き）

筆頭視点です。

28　竜の誓い

突然現れた前田慶次も交えて、しばらくの間他愛もない話をしていると、夕餉の準備が整ったと報告がきた。
もうそんな時間なのかと外を見れば、日が傾いて沈む頃合だった。

軍神の城に着いて早々に寝込んでいたツキは、酒酒と連呼してニタニタしてやがる。
オレの気も知らねぇで、まったく。

到着の挨拶をしていたら、突然ツキの悲鳴が聞こえて、心臓が止まるかと思った。
襲撃かと駆けつけて見れば、家族を殺した男が自分を探す声を聞いたと、取り乱して震えていたツキ。
縋りつく手は氷の様に冷たくなり、顔も死人の様だった。

ツキがここにきて間もない頃に、蒼竜と名乗った奴から、その男もこちらの世界に運ばれていると聞いている。
そいつがツキを探しているとでもいうのか。
ツキが成長をして力を取り戻しているのと同じ様に、そいつも力を取り戻しているんだろう。

接触は避けられないのか？
今回は単なる夢かもしれない。
だが、いつツキの目の前に現れてもおかしくはねぇ。

夢で声を聞いただけであの取り乱し様だ。
実際にその男が現れたら、ツキはどうなる？

最悪、オレの前から姿を消すかもしれねぇ。

・・・そんな事は許さねぇ。

こっちも本格的にその男を探して、ツキに悟られる前に先に始末するか。

「政宗?どうしたの?行かないの?」

すでに他の連中は部屋を出たらしく、オレと小十郎とツキだけが部屋に残っていた。

「ああ、今行く。」

「政宗も疲れてんじゃないの?」

「HA!オレを誰だと思ってやがる。」

「セクハラエロ俺様男。」

セクハラエロの意味は良くわからねぇが、後半の言葉から察するに、ロクでもねぇことだな。

仕置き決定だな。

「ぎゃぁぁっ!痛いっ!その鷲掴みやめてっ!」

「政宗様、そろそろ行きませんと。」

ギャーギャー喚くツキの反応を楽しんでいると、呆れ顔の小十郎が止めに入った。

ちっ、仕方ねぇな。

「へぇ、幸村たちは昨日ここに着いたんだ。」
「うむ。今朝方海を見に行ったでござるよ。甲斐には海がない故、その大きさ偉大さに某いたく感動したでござる！」
「そうだねぇ。海を初めて見た人はよくそう言うよねぇ。」
「ツキ殿は海を見たことがあるでござるか？」
「あるよ。日本海はないけど、太平洋なら。」
「にほんかい？たいへいよう？」
「あ、そっか。えっとね、越後の海はないけど、相模の海なら見たことある。」
「おお！相模の国でござるか！」

オレの横でさっきからツキと真田が楽しげに話していて

「かすがはさ、謙信に恋してるだろ？いいよねぇ、恋！」
「だまれ！」
「みんな恋すれば、こんな戦の世もなくなると思うんだ。」
「だまれと言っている！気持ちが悪いぞお前！」
「こら、女の子がそんなこと言っちゃダメだろ？な？夢吉？」

「謙信様！なんでこんな奴呼んだんですかぁ！？」

向かいではかすがに前田の風来坊が一方的に布教活動

「ふふ、こまりがおのつるぎもあいらしい。そうおもいませんか？かいのとら。」

「はっはっはっ。若いもんはいいのぅ。」

喧騒にもかかわらず、のんびり酒を酌み交わす軍神と武田のおっさん。

ちなみに、猿は夕餉が始まる前に姿を消している。

「小十郎、猿はどこに消えた？」

「わかりませぬ。が、おそらく何かしらの命令を受けての事かと。」

あいつ、もしかてさっきのツキの話を聞いてやがったか？

「佐助ならば、買い物に行ったでござるよ。」

「そうそう。さっき幸村が団子が食べたいって駄々こねて、ぶつくさいいながら出てったよ。」

「越後は米処。団子も美味いでござるよ！」

同盟組む相手を間違えた気がしてならねぇのは、どうしてだろうな？

我慢の限界を迎えたかすがが前田を力で黙らせて畳に沈める頃には、三本の徳利がツキの膳の側に並んでいた。
半ば意識を飛ばしている真田の顔も、茹蛸のように赤い。

そろそろ御開きか。
ツキの様子を見ると、眠そうに時折あくびをしている。

「わかきとらも、りゅうのはなも、けいじもそろそろねたほうがよいでしょう。かすが、へやにあんないをしてさしあげてください。」
「はい。謙信様。」

立ち上がったかすがは、小姓を呼ぶと前田を連れて行くように指示し、それから真田を担ぎ上げた。
ほとんど意識がないようで、破廉恥と叫ぶ様子もない。

「ツキ、部屋に行くぞ。」
こっちも半分夢の中だ。
うとうとしているツキを抱き上げると、うー？と寝ぼけた声が返ってきた。

真田を担いだかすが、オレ、小十郎の順に廊下を歩いていると、

中庭に出た。
明日は中秋か。
僅かに欠けた月が東の空に浮かんでいた。

「・・・ツキは大丈夫なのか？」
「いつもはもっと飲んでる。今日は疲れているのだろう。大丈夫だ。」
おそらくかすがが言いたいのは、そんなことではないだろうということは分かっていて、小十郎がしれっと答える。
かすがもそれ以上は何も言わず、客間まで三人黙ったままだった。

「この三部屋を好きに使ってくれ。武田は突き辺りを左にいった先の部屋だ。」
「わかった。後のことは俺がやる。」

小十郎に後のことは任せて部屋に入ると、用意されていた布団にツキを寝かせる。
内掛けを脱がせて、単衣にして上から掻巻をかけてやったところで小十郎が中に入ってきた。

「喜多に怒られちまいそうだな。」
「でしょうなぁ。ツキに無理をさせたとあっては、姉上も黙ってはおりますまい。」

ばれない事を祈るばかりだな。
うなされる事もなく静かに眠るツキの頭を撫でてやると、むふーと

おかしな声を上げて寝返りをうった。

「政宗様、ツキは何故あそこまで怯えていたのですか？」

「夢を見たんだとよ。家族を殺した男が夢でツキを探していたらしい。」

「・・・まだあれ程までに・・・。」

その男がこの世界にいて、ツキを捜している。

そして、最近の魔王のおっさんの動きに統制が執れなくなって来たこと。

なにかの繋がりがあるような気がするのはオレの勘繰りすぎだろうか。

「小十郎、黒脛巾を数名西に送れ。各地の状況を探らせろ。」

「斥候はすでに放っておりますが？」

「それとは別だ。ツキと同じ様な力を持つ男がいないかを調べたい。」

「政宗様、まさか・・・。」

驚愕を浮かべた小十郎に、半年前に蒼竜との話を聞かせてやった。

ツキが見たのは単なる夢ではないかもしれない。

話を聞き終えて、しばらく考え込んでいた小十郎は、顔を上げて真正面からオレを見据えた。

「政宗様、貴方は天下を獲ると決められた。その決意にお変わりはありませんな？」

「当然だ。」

「ならば、全てをツキに話し、その上でツキ自身がどうするかを決

めれば良い。」

何を、言ってやがる？

呆然となったオレに小十郎は厳しい目をして言った。

「今各国が、織田の脅威を取り除くために、影で動いている。逆にいつ織田にこちらの足元を掬われるかも分からないこのような時に、ツキ一人のために我が伊達軍の人員を割くわけには参りませぬ。お分かりか？」

「つまり、ツキを狙う男が現れたとしても、ツキに任せろということか？」

頭の芯がすっと冷えた。

左目で睨みあげれば、小十郎は動じることなく頷いた。

「そうです。天下を獲られる決意ならば、小さなものに目を囚われていてはなりませぬ。」

「お前は、ツキを小さなものだというのか？」

「天下の前には小事です。」

そうか。

それが小十郎の考えか。

奥州の平定と天下を獲ることを決めたのはオレ自身だ。

今もその決意に変わりはねぇ。

そして、ツキを守ると、側に置くと決めたのもオレだ。

「小十郎。オレは二者択一ってのは嫌いなんだ。欲しいものは全て

手に入れる。知っているだろう？」
「両方を失いかねませんぞ？」
「ＨＡ！このオレを誰だと思ってる。」
「政宗様！」
「決めたことだ。天下もツキを守ることも。竜は自らの誓いは必ず守るぜ？」

どちらかしか手にできないなんて、誰が決めた？
天下も手に入れるし、ツキも守る。
そして、いずれはツキを手に入れる。

「天下とツキを手に入れるのは、この独眼竜だぜ？」
にやりと笑って見せれば、小十郎はこめかみを押さえて大きく溜息を吐いた。

「天下よりもツキを手にする方が困難そうですな。」
「その方が燃えるだろう？」
「分かりました。この小十郎も覚悟を決めましょう。」

それでこそオレの右目だぜ。

29　夜、ふと目が覚めて（前書き）

夜のほんのひとコマの話です。
短いです。

29　夜、ふと目が覚めて

夜中喉が渇いて目が覚めた。
ぼーっとしながら起き上がって部屋を見渡すと、見たことがない場所だった。

あれ？私何をしていたっけ？
ここどこ？

夢と現実が分からなくなって混乱をしていると、突然腕を掴まれて悲鳴を上げそうになった。

なに！？

「どうした？」
掠れた声がして、見下ろすと半分体を起した政宗が私を見上げていた。

「政宗？あれ？ここどこ？」
「軍神の城だろうが。」

軍神・・・あ、そうだ。謙信公のところだ。
ほっとして体の力を抜くと、政宗は私から手を離して欠伸をした。

「朝までまだ時間がある。寝るぞ。」
「うん。」

再び布団に潜る政宗に背中を向けるように横になると、障子から透ける月の光をぼんやりと眺めた。
明るいなぁ。確か明日が満月だっけ。
中秋か・・・。

まだ家族がいて、私がただの子供だった頃、旧暦の８月１５日の満月には一族総出の観月会が催されていた。
宗主が舞を献上し、一族の全員で祈りを捧げる日。

一族を失ってからも、この日だけは祈りを捧げてきた。
皆の安らかな眠りを願って。
明日、またその日がやってくる。

一年で一番明るく輝く月のおかげで、私の力も強くなるだろう。
こっそり内緒で海に行ってみようかな。
そこで舞うのも良いかもしれない。
蒼き月の方も喜んでくれるだろうか。

「・・・眠れないのか？」
つらつらと考えていると、政宗の静かな声が響いた。
くるりと寝返りを打つと、少しだけ眠そうな隻眼が私を見ていた。
「ううん。寝るよ。」

頭を摺り寄せる様にして目を閉じると、政宗は大きな手で私を引き寄せて、満足げに息を吐いた。
やがて聞こえてきた寝息と、とくとくと穏やかに刻まれる政宗の心臓の音を聞きながら、私も緩やかに眠りに落ちた。

３０　温泉に行きました

朝起きてなかなか目が覚めずにぼーっとしながら朝ごはんを食べていると、どすどすと地響きをさせながら信玄公がやってきた。
「本日は温泉に参るぞ！」
襖を開けるなり宣言する信玄公に、政宗、小十郎、私の三人ははぁ？と首をかしげた。

温泉って、あの温泉だよね。
あるのか？
「この近くに謙信が作らせた温泉があるらしくての。そこに行くことにしたのだが、お主等もどうだ？」
楽しそうだね、信玄公。
遠くから、「お背中お流しいたしまするぞ御館様ぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」と、幸村の雄叫びも聞こえてきた。
温泉かぁ。いいねぇ。行きたい！

「行くのはかまわねぇが、少し待て。ツキ、飯をさっさと食え。それを全部食い終わらなかったら、温泉はなしだ。」
政宗が一向に減らない膳を指す。
ううん、眠いし、食欲ないし、でも温泉は行きたい。

「朝餉はきちんと食さねば、体がもたぬからのう。」
うんうんと頷いて、信玄公は出発は一刻後だと告げて去っていった。
「ほら、いつまでもボーっとしてないで、さっさと食っちまえ。」
小十郎がすでに終わっている政宗の膳を片付けながら、私に促した。
「政宗ぇ、半分食べてよ～。」
「ＮＯだ。移動中も食わねぇから体を弱める羽目になったんだ。ち

ゃんと食え。」
くっ、反論できない。

結局全部食べ終わるまで、皆を待たせる羽目になったのであります。
とほほ。

謙信公が作ったという温泉は、馬で１０分ほどの距離にあった。
ちょっとした旅館かってくらいの建物で、中にはたくさんの従業員っぽい人がいた。

すごい。これは想像してなかったわぁ。
休憩所に通されると、すぐにお茶が出てきて、少し休憩をした後に脱衣所に案内された。
かすがも来れば良かったのになぁ。
任務があるとかで、あとで来るとは言ってたけど。
一人で温泉に浸かるなんて、ちょっとつまんないなぁ。

湯帷子という麻で作られた浴衣っぽいものを着て入るらしくて、女中さんから一式渡される。
どうやらタオル代わりも兼ねているみたいで、湯上り後はこれを絞って体の水分を拭き取る物らしい。

いつもは米沢城の比較的こじんまりとした湯殿に一人で入るので、

湯帷子なんか着ないで裸で普通に入るもんなぁ。

湯帷子を着て戸を開けると、壮大な山の景色と、ほかほか湯気の立つ温泉が見えた。
湯帷子を着たまま入るのがルールらしいので、そのまま手桶でお湯をすくって体にかけると、中に入る。

「くはーっ。たまらん。」
思わず声を漏らしながら肩まで浸かると、手足を伸ばしてうっとり。
温泉にしてはぬるい方で、多分４０℃あるかないかくらい。
長く浸かるには最高だ。

縁に腕を乗せて、自然を眺めつつまったりしていると、私がいた小屋とは違う方の小屋の戸が開いて、がやがやと人が出てきた。

「なかなかだな。」
「広いでござる！」
「へぇ、本格的じゃねぇか。」
「こんな立派な温泉なんて、そう滅多にないよな！」
「きにいっていただけましたか。」

え？
なんで、目の前に全員集合？
混浴？混浴なのか？

流石に、佐助や小十郎の姿はなかったけど、信玄公、幸村、政宗、慶次と夢吉、謙信公と、湯帷子姿の男どもが並んでいた。

衝撃のあまりに固まる私の方へ、政宗がずかずか歩いてきた。

「な、なんで、こっちにくる？」

「なんでって、温泉に入りにきたんだから、当然だろう？」

不思議そうに答える政宗に、からかいや面白がる様子はない。

もしかして、この湯帷子を着るから、混浴は当たり前なのかな。

その後に続く面々も、それぞれ好きな場所で湯に浸かって気持よさそうにしている。

郷に入りては郷に従えっていうからな。

水着で混浴と思えば・・・って、思えるかぁ！！

思いっきり布が体に張り付いてんじゃん！！

視線を外に向けて、なるべく皆を視界に入れないようにしながら、遠くの山を眺めた。

あー、気持が良いなぁ。

温泉に浸かるのなんて、何年ぶりだろう。

ぼけーっといい具合に奴らを意識せずにまったりしだした頃、ざばぁ！！と誰かが立ち上がって、大きく湯が揺れた。

「うぉぉぉぉ！！みなぎるぁぁぁぁぁ！！」

びっくりして思わず振り返れば、真後ろに政宗がいて、その顔の向こうに仁王立ちしている幸村の腰から上が見えた。

あ、あぶねぇ！！

政宗がいなかったら、かなり危険なものを見てしまう所だった！！

ざばぁ！！とまた別の場所で誰かが立ち上がる音がして、恐る恐るそちらを見ると、慶次の向こう側にいた信玄公が立ち上がり、やっぱり仁王立ち。

慶次もナイスポジション。

おい、チーム武田。乙女が居ることを忘れて足広げて仁王立ちすんな、ボケが。

「温泉くらい静かに入いらんかぁぁぁ！！」

ざばざばとお湯を掻き分けて幸村に近寄った信玄公は、そのままぶわきぃ！！とものすごい音をさせて幸村を殴りつけた。

とっさに顔を伏せて目をそらすけど、お湯に宙を舞う幸村が映し出されて、こっちに跳んで来る様子が見えた。

「ツキ、こっちに来い。」

くいっと腕を引き寄せられて、ひんやり冷たい濡れた布の感触が頬に当たると同時に、だっぱーん！とすぐ後ろで水飛沫を上げて幸村が墜落したようだった。

「ちょっと！温泉くらい静かに入ってくれよな！」

頭から水飛沫を浴びた慶次が夢吉を庇いつつ迷惑そうに言うと、夢吉もキキッ！と慶次の顔を拭ってやりながら迷惑だと言わんばかりに鳴いた。

「げんきがあってよいではないですか。」
いつの間にか、一人だけちゃっかりお酒を飲みながら浸かっている謙信公。

「限度ってもんがあるだろうよ。」
同じくお湯を被った政宗が、髪をかき上げながら呆れたように言うと、慶次がそうだそうだ！と言いながら、なぜかこっちに近寄ってきた。

な、なんでこっちに来るの？
つか、信玄公もなんでしょうか？

気がつけば、後ろに沈んでいる幸村、右に慶次と夢吉、左に信玄公、前に政宗という状況。
ひぃぃぃ！！目のやり場に困ります！！

「ツキ殿、大丈夫か？すまんな。殴りつける方向を誤った。」
「ツキ怪我はしてないかい？なんか顔が赤いけどのぼせたんじゃない？」

両脇から心配そうに覗き込まれて、しどろもどろ大丈夫だと答える。
ううん、でも本当にのぼせそうだよ。でも、この状況じゃ出るに出れないし。

「本当に大丈夫か？そろそろ一旦上がるか？」

そわそわと目を泳がせる私の様子に、政宗が聞いてきたので、これ幸いにとコクコク頷いた。

「さ、先に上がります。みなさんごゆっく・・・り・・・？」

言いながら勢い良く立ち上がった時、くらぁっと目の前が真っ黒になって体が傾くのが分かった。

「ツキ！」

やばい・・・。

そう思うのと同時に意識が途切れた。

ひんやりと冷たいものが額に乗せられて、そっと目を開けるとかすがが私を覗き込んでいた。

「意識が戻ったか。」

ほっとしたような響きに、温泉で倒れたことを思い出した。

うわー、あの状況で倒れたのか・・・最悪。

「まだ横になっていろ。」

起き上がろうとした所を制されて、仕方なく横になったまま部屋を見渡すと、幸いなことにかすが以外の人影はなかった。

「えと、みんなは？」
「今佐助と竜の右目の説教を受けている。」
「は？」

なんで？どうして？

「湯帷子を着ているとはいえ、男が一人の女を囲むなど言語道断。」
「・・・もしかして、混浴ってありえないの？」
「いや、温泉に限っては、混浴が通常だ。」

やっぱりそうなんだ。

「だが、ツキはそういうことに慣れてないのだろう？気を遣えないあいつらが悪い。」
「かすが・・・。」

うう、なんて嬉しい言葉。
そうなんだよ、奴ら気遣いってもんが足りないんだよ。

「水を飲んだほうが良いんだが、飲めそうか？」
「大丈夫。貰うよ。」
ゆっくり体を起すと、良く冷えた水を渡されて、ちょっとずつ飲む。

湯帷子はすでに脱がされていて、浴衣が着せられていた。
「昨日からいろいろごめんね。」
ここに着いてから、私迷惑ばっかりかけてるな・・・。

「気にするな。奥州からここまでは大分距離があったんだ。疲れもする。」
「かすがはすごいねぇ。あの距離を走るんでしょ？」
「まぁな。忍びならばそれくらいのことはどうってことない。」
どうってことある距離ですよ。

「それに、謙信様の御役に立てることならば、多少のことなど苦とも思わない。」
そう自慢げに言うかすがの頬がほんのり赤く染まった。
かわいいなぁ。

「かすがは謙信公のことが好きなんだね。」
だから昨日の夜、謙信公を見ていたら睨んできたんだね。
にまにま笑って言うと、ますます顔を赤くしてかすがは慌てふためいた。

「か、からかうな！尊敬申し上げているだけだ！恋慕など・・・！」
「ふふふっ。かすがはかわいいなぁ。」
「そ、そういうお前はどうなんだ！？」
「へ？」
「独眼竜のことだ！」

政宗？政宗がどうかした？
きょとんとすると、かすがは驚いたような顔になった。

「独眼竜のことを好いているのではないのか？」
「え？まぁ、嫌いじゃないよ。けっこう好きだよ？」
「いや、そういう意味ではなく・・・。」

戸惑ったようなかすがに、ようやく意味を悟る。
ああ、そういうことか。

「私は恋愛をするつもりは、これから先ずっとないんだよ。」
うまく笑えているだろうか。
恋をしたり結婚したり、私にはそんな夢を見ることはできない。
そういう感情は、遥か昔に凍り付いて砕けてしまったから。

「だからね、謙信公をかすがから盗ったりしないから、安心してよね。」
「んな！！」
冗談めかしてにやりと笑えば、かすがは再び真っ赤になってわたわたしだした。
ほんと、かすがは可愛くてきれいだなぁ。

体調も戻ったので、説教中と思わしき部屋に行ってみると、とんでもない光景に遭遇しました。
痺れた足を抱えて悶絶する幸村、政宗、慶次。
信玄公と謙信公はなんでもないように胡坐をかいているけど、小刻みに震えている所を見ると、やせ我慢をしている模様。

「な、何事?」
「あ、ツキちゃん具合よくなった?」

佐助が一仕事終えた清々しい笑みを浮かべて片手を挙げた。
その横の小十郎は、乱れて一房落ちた前髪を上げて撫で付けている。

「心配かけてごめん。・・・で、これは何事?」
「ああ、右目の旦那が獄殺モードで説教しただけ。ほらほら、みんなツキちゃんに言うことがあるんじゃなかったっけ?」

ぱんぱんと手を叩いて佐助が言うと、五人の視線が一斉に私を見た。
その目が縋り付くような、助けを求めるようなものだったのは、気のせいではないだろう。

「「「「「すみませんでした。」」」」」

ひいいいいい!!
謝られてるのに、恐い!!

「い、いえ。私もご迷惑おかけしました。」

引きつる顔でなんとか答えると、小十郎がすっと立ち上がった。
その目付きは、尋常じゃないほど恐い。

「これからは、十分お気をつけなされよ？」

「「「「「はい！」」」」」

こ、これが噂に聞いていた獄殺モードでの説教・・・！！

こぇぇぇぇぇぇぇ！！

今日初めて、小十郎と喜多さんとの血の繋がりを強く感じました。

３０　温泉に行きました（後書き）

31　月に惑う（前書き）

やっちまった。だが後悔はしてない！ＹＥ――――――ｄ（。∀。）ｂ――――――Ｓ！！

31　月に惑う

どうやら温泉施設で今夜はみんなでお泊りのようです。
やたらでかいなと思っていたら、宿泊機能も備えた施設だったらしい。
謙信公は時々ここに来て温泉に浸かりながら、酒を飲むのだとか。
うらやましい・・・。

米沢にもそんな施設がないのかな?と期待を込めて小十郎に聞いたら、「そんなもん作ったら、政宗様がますます執務をしなくなるじゃねぇか。」と、一刀両断されました。
がっかり。

日が沈んで、東の空に見事な満月が昇り始めた。
月を眺めながら、皆で夕食を食べ終わって、夜も遅いということで解散。
とはいっても、まだ亥の刻、２２時にもなってないんだけどね。

小十郎もおやすみなさいの挨拶をして、部屋に戻っていった。
で、政宗はというと、当然のように同じ部屋にいる。
すぐに寝る様子もなく、縁側でまったり月を見上げていた。

「今日はよく晴れたね。雲一つないお月見だ。」

政宗の横に座って、空を見上げる。
青白い光を放つ月に、力が溢れそうなくらい強まるのを感じた。

手のひらを上に向けて少し集中しただけで、青い光の珠が生まれて宙に舞い、弾けて小さな光の粒になった。
蛍の様に浮かんで、私と政宗を囲んで漂う。

「さて、これで準備は完了。」
「なにかするのか？」
「練習の成果をお見せ致しますよ。」

本当は海に行きたかったんだけど、まさか抜け出すわけにもいかないからなぁ。

政宗から貰った扇を手にして庭に降りると、息を吸って深呼吸。
よし。始めるか。

月に向かって深く礼をした後、扇を広げて膝をつく。

「蒼き御方に蒼月華（そうげっか）が捧げ申す。」

いつか母がそうしていたように。
一族に伝わる祝詞を歌いながら、舞い始める。

不思議なことに、もう7年も口にすることのなかった祝詞は、一言

も間違えることなくすらすらと紡がれて空に溶けた。

扇が天に向かえば、光も舞い上がり。
扇を下ろせば、雪のように降ってくる。

指先にまで意識を込めて、ばば様の言葉を思い出しながら、母の舞姿を思い出しながら。

力が体からあふれて、更に光の粒を作り出す。

眩しいくらい光が辺りに漂う頃。
最後にくるりと回って、扇の上に集めて再び一つの光になった珠を、そっと押し上げるように空へ放った。

するすると昇った光が、やがて月と重なると、ぱっと弾けて消えた。

オオーーーーン・・・・・。

風の音か、それとも蒼き御方の声なのか。
空気を震わす声が聞こえて、やがて聞こえなくなった。

最後に深く一礼をして、頭を上げた。

ふぅ。なんとかできたかな・・・。

縁側に戻ると、満足そうな顔をした政宗が拍手をしてくれた。

「見事な舞だった。」
「ありがとう。」

ちょっと照れつつ政宗の隣に座ると、ワシワシと頭を撫でられた。

「あの蛍みたいな光は何だったんだ？」
「あれは私の力の結晶みたいなものかな。」

手のひらを上にして、さっきと同じように力を集中させると、蒼い光が生まれた。

「これをもう少し凝縮するとね・・・。」
更に力を注ぐと、光はだんだん形を作っていった。

今夜だから作れる、結晶。
まぶしいほどに輝く月の力を集めて、少しずつ固めていくイメージで。
観月会の影のメインイベントとも言われる、蒼い結晶石作り。

なんでも、これを大切な人に贈って、その人が一年館平穏無事でいられる様にと願うものらしい。
これが作れる様になって、初めて一人前と認められるんだけど、結局私は誰にもあげた事がなかったなぁ。

父は母に。母は父に。兄は教えてくれなかったけど、誰かにあげていたようだ。

これは政宗にあげよう。

戦場で怪我をしない様に。
病気にならない様に。
いつも政宗らしく駆けていられる様に。

直径2センチ程の大きさになった石が手のひらでコロリと転がった。

「政宗、あげる。お守りだよ。」
大きな手のひらに乗せれば、石は淡く輝いて政宗の全身を一瞬包み込んだ。

うむ。我ながら完璧だ。

「今のは何だったんだ?」
「加護だよ。」
「加護?」
「そう。怪我や病気から、政宗を守る様にって。」

そう言うと、政宗は手の中の石を握り締めて「そうか。」と呟いて大事そうに懐に仕舞った。
喜んでもらえたようで嬉しい。

「ふふ、初めてにしては完璧だわ。」
「初めて?」
「そうだよ。だって、今まであげる様な人いなかったし。」
「そうか。」

うん、いい仕事をしたわぁ。

さて、そろそろ寝ようかなと、立ち上がろうとしたら、政宗がぐいっと腕を引っ張った。

「うお！」

重力には勝てずに、そのまま政宗の肩に手をついて膝の上にのしかかった。

「あぶなっ！急に引っ張らないで・・・っ！？」

文句を言おうとした途端、政宗の顔がどアップで近づいて、唇を少しかさついた柔らかいもので塞がれた。

は？なに？

どうなってんの？

え？

あれ？

「目ぇ閉じろ。」

「は？何いっ・・・！！」

顎を掴まれたと思ったら、第二波が来た。

しかも、なんか、表現しにくいものが口の中に入って来ましたよ！！

熱いものが我が物顔で口の中を掻き回して、私の舌も絡め取る。

「～～～～っ！」

ぺしぺしと政宗の肩を叩く手に力が入らない。

何度か角度を変えてようやく離れる頃には、息も絶え絶えだった。

「なにすんのよぉ・・・。」

半べそかいてる自覚はあるけど、もう何がなにやら。

くったりと政宗の肩に顔を埋めて、真っ赤になっているだろう顔を隠すので精一杯です。

「Ｓｏｒｒｙ，いろいろ限界だ。」

大して悪いと思ってなさそうな政宗に、むっとして顔を上げる。

「欲求不満なら他で発散してこい！」

「他の女じゃダメなんだよ。」

きゅっと抱きしめられて、身動きが取れなくなる。

「お前がいいんだよ。ツキ。」

耳元で低く囁かれて、背中がぞくっとなった。

ヤバイ、流されちゃダメだ・・・！

「私は・・・。」

「言うな。聞かねぇ。」

恋なんてしない。

そう言おうとしたら、強めの言葉で止められた。

「オレは、欲しいと思ったら必ず手に入れる。Ｙｏｕ　ｓｅｅ？」
「お、横暴だ・・・。」
「いまさら、だろ？」

確かに。

不覚にも納得してしまった。
いや、納得しちゃダメじゃん私！

「今すぐにとは言わねぇ。それくらいの覚悟はオレにだってある。」
「それなら、限界とか言っていきなりキスなんかすんな。」
肩に手をついて、ぐいっと背中をそらせるように政宗を睨んでやれば、にやりと笑い返してきた。

「お前が可愛いことばかり言うのが悪い。」
「言いがかりだ！」
「初めてをオレにくれるんだろ？」
「そんなことは言ってねぇ！！この破廉恥男がぁぁぁぁ！！」

顔から火が出るかと思ったわ！
じたばた暴れて抜け出そうとする私を笑いながら押さえつける政宗。

「今すぐにとは言わねぇが、オレの理性が持つうちに、落ちて来いよ？」
再び耳元で囁かれて、撃沈。

わざと耳元でしゃべるのはやめろぉぉぉ!!

「そろそろ寝るぞ。」
いろいろありすぎて魂が半分口からはみ出てる状態でいると、政宗が立ち上がった。
「ほら、何もしねぇから、さっさとこい。」

腕を引っ張られて立ち上がると、そのまま手を引っ張られた。
「明日情報交換をして、問題がなければ、明後日には奥州へ帰る。それまでに体調を整えとけよ?」
「お前が言うなよ・・・。」

いっぱいいっぱいですよ。
着いた日よりも、疲れた気がするよ。

先に布団に転がった政宗に引きずり込まれて、一瞬緊張が走ったけど、すぐに寝息が聞こえ始めて力が抜けた。
なんなんだよ、もう!
私一人がオタオタして馬鹿みたいじゃん!!

政宗に背中を向けて、やけくそ気味に目を閉じると、そう時間がかからないうちに眠りに着いた。
自分の神経の太さに、ちょっと驚きました。

背中を向けてしまったツキから、すぐに寝息が聞こえ始めて、閉じていた目を開いた。

不意打ちで、しかも半ば強引にＫｉｓｓしたオレと同じ布団にいて、良く眠れるな。

しかも、寝付きが早ぇ。

それにしても、あの表情はまずいだろう。

嬉しそうな、恥ずかしそうな、あの笑顔。

もっと大人になるまで待つと決めていたのに、気がついたらツキを引き寄せて、口付けをしていた。

やわらかな感触に、理性の糸は脆くも切れた。

あとの感触は思い出すのもヤバイ。

オレの肩に顔を埋めて、微かに震えるツキ。
女が欲しいなら他に行けと言われて、考える前に言葉が漏れた。

他の女なんかいらねぇ。
オレが欲しいのは、ツキだけだ。

ツキがこういう話やそぶりからあえて遠ざかろうとしているのは、前々から感じていた。
何があったのかまでは知らねぇが、恐がっているようにすら見えた。

嫌われていないことは分かる。
だが、それだけじゃ足りねぇ。
オレは貪欲なんだよ。

「んー・・・。」

くるっと仰向けに寝返りを打ったツキが、眉間に皺を寄せて唸った。
ゆっくりと頭を撫でてやれば、徐々に眉間の皺が取れて、幸せそうな寝顔に変わった。

あと、どれだけこうして穏やかな夜を一緒に過ごせるだろう。

まだ子供の姿だから保てる理性も、あと数ヶ月もすれば保障はできねぇな。

「できるだけ早く、落ちて来いよ？」

口のすぐ横に軽く触れるだけの口付けを落とす。

くすぐったかったのか、再び寝返りを打ってオレの胸元に顔を埋めるツキの体を抱きしめて、今度こそ眠るために目を閉じた。

32　夢の終わり（前書き）

32　夢の終わり

春日山城に戻ってきて、政宗たちが佐助やかすがの警護の下で難しい話をしている最中、私は今海に来ています。

難しい話は寝ちゃいそうだからね。

真剣に話しているのに、居眠りしたら悪いもん。

空気を読んだのですよ、うん。

と、言うかね。

政宗と一緒ってのが、もう耐えられないのよぅ!!

朝起きて、政宗と顔を会わせるのが、ものすっごく恥ずかしかった・・・!

頑張って普通に振舞っていたつもりだけど、小十郎に具合が悪いのか?と聞かれて心臓が止まるかと思ったよ。

具合が悪いのは、政宗の脳みそだよ!!

まさか、政宗が・・・・。

あんな・・・。

・・・・・。

「うわぁぁぁぁぁl!!」

まざまざと感触が蘇って、その場にしゃがみ込んで叫びながら悶絶。

初めてだったのに、いきなりディープはないよ!!

って、思い出すなわたしぃぃぃ!!!

バンバンと砂浜を叩いて、うおぉぉぉぉ!!とか、ぎゃぁぁぁ!!とか、心のままに雄叫びを上げていると、急に影がさした。

「大丈夫ですか?」
「うはぁい!?」

一人だと思っていた砂浜で、突然声をかけられて、飛び上がるほど驚いた。
顔を上げれば、見たこともない男がこちらを見ていた。
真っ白な長い髪と病的なまでに白い皮膚に、一瞬ぞっとするものを感じたけど、穏やかそうなその声音に気を取り直す。

「大丈夫です。」
立ち上がって答えると、男はそうですかと呟いて微かに笑った。
ううん、なんだろ。
この人苦手だ。
さっきからぞくぞくする。

「ところで、こんな所で一人で何をされていたのですか?」
「海を見に来たんですよ。」
「御一人で?」
「ええ。みんな忙しくしているものですから。」

もう帰りますけどね、と半ば逃げるようにその場を去ろうとすると、

男に引き止められた。

「実は、私人探しをしているのですが、もしご存知だったら、教えていただけませんかね？」

人探し？

逃げ出したい気持を抑えて、どんな人ですか？と聞くと、男はふふっと笑った。

「女性です。癒しの力を持つ、奇跡の女性。ご存じないですかねぇ？」

心臓がものすごい速さで脈打っているのが分かった。

目の前の男に聞こえてしまうんじゃないかと、心配になるほどだ。

うーんと首を傾げて、思い出す振りをしてみせる。

緊張のあまりカラカラになる口を湿らせて、ゆっくり口を開いた。

「聞いたことないですね。そんな人、本当にいるんですか？」

「私も半信半疑なんですよ。ただ、私の上司とその知人が探せと言うものですから。」

困ってるんですという顔をする男。

「そうなんですか。お役に立てませんで。では、私そろそろ行かな

いと。」
会釈をして、その場を去ろうと後ろを見た瞬間。

「ですから、こうして試しに来たんですよ。」

背後に殺気を感じた瞬間、意識する前に体が横に飛退いていた。
体があった場所を銀色の光が走った。

「おや、よく避けられましたね。すばらしいですよ。」

信じられない思いで視線を向けた男の手には、二本の死神(デスサイズ)の鎌のような鎌が握られていた。
男の表情は愉悦に歪んでいて、ゆらりと体が揺れた。

「・・・危ないじゃないの。いきなり斬り付けるなんて。」

この男、危険だ。
人としての正常を逸脱している。

この世界に来て初めて感じる命の危機に、全身の細胞が目覚めるような感覚が起きた。
武器も防具もないこの状況で、あの鎌のリーチの差を埋めて戦うのか。

「貴女、癒しの力を持つお嬢さんですよね？私に見せてくださいよ。その力を。」
「あなた、だれ？」
「私ですか？ああ、申し遅れてしまいました。私は織田信長公が家臣、明智光秀と申します。」

ラスボスの家臣かよ！！
明智光秀がこんなイっちゃってる男だったなんて・・・！

嫌な顔をしてやると、明智光秀は嬉しそうに笑った。
変態め！

「ふふっ、貴女は、ツキさんですか？ああ、ミツキさんとお呼びした方がよろしいですかね。」

その名を聞いた瞬間、全ての音が消えた。

な・・・んで・・・？
その名前・・・・どうして・・・？

前の世界で捨てたはずの名前。
両親から貰った満月（みつき）という名前を知る人は、この世界では誰一人いないはずなのに・・・。

一昨日見た夢は・・・現実?

「どうやら、当りのようですね。ふふっ、良い表情ですよ、貴女。とても良い表情です。絶望と驚愕が入り混じって、そこに恐怖が覗いている。とてもおいしそうな表情ですよ。」

はっとなって、明智光秀を見ると、心底楽しそうな顔をしていた。

「あなた、さっき上司とその知人って言ってたわね。まさか、知人っていうのは・・・。」

「朔夜殿ですよ。貴女にとても会いたがってます。どうです?私と一緒にいらっしゃいませんか?」

朔夜・・・!!!!

体中の血液が沸騰したように全身が熱い。

けれど、心は逆に氷のように冷えていく。

あいつが生きてこの世界にいるのならば。
今度こそ必ず・・・！

「断る。朔夜に伝えろ。時が満ちれば、こちらから出向くと。」
「一緒に来てはいただけないのですか？」
「そう言った。」
「それはいけませんねぇ。信長公は貴女をご所望ですよ。」

一度は下ろした鎌を片方持ち上げて私を指すと、明智光秀はくくっと笑った。

「多少傷をつけてでも、連れて帰ります。」
「ならば、受けて立つ。」

朔夜を知っている人間に、手加減は一切無用だ。
コロセ。

「Ｕｎｌｉｍｉｔｅｄ　ｃａｐａｃｉｔｙ　ｔｏ　ｒｅｌｅａｓｅ.」

全ての能力を解放すると、体から放たれた青い光が爆発し、明智に

襲い掛かった。
同時に砂を蹴って懐に入り込んで、驚愕に彩られているその顔を下から思いっきり蹴り上げた。

宙を舞って崩れ落ちると、すかさず手を硬化させて、仰向けに倒れ込んでいる腹に容赦なくぶち込む。

「ぐ・・・！」

内臓が潰れる感触が手に伝わり、明智が口から血を吐き出した。

「こ、これほどまでとは・・・。油断、してしまいましたね。」
「油断したら、死ぬ世界で生きてきたんじゃないの？」

止めだ。

無駄口を叩いていたら、どんな反撃があるか分からない。
今のうちに殺してしまわなければ。

首の骨を叩き潰そうと、手を振り上げた瞬間。

「なっさけないな、こんな女にズタボロにされてんのかよ！？」

変声期もまだのような、子供の声と、数本の矢が飛んできた。
明智から飛退いて矢を避け、声の主を見やれば、男の子が小馬鹿にしたような顔で次の矢を構えていた。

「蘭丸。何しに来たのです?」
ふらつきながら明智が立ち上がり、鎌を支えにして苦しげな息を吐いた。

「助けに来てやったんだよ、この蘭丸感謝しな!」

そう言いつつ次々と矢を放つと、子供は後ろに控えていた兵士たちに明智を救助するように命じ、明智はその兵士たちに抱えられるようにして、馬に乗せられて運ばれていった。

っち、逃がしたか。
苛立ち紛れに飛んできた矢を掴み取ってへし折ってやると、子供は驚いたような顔をした。

「お前、女の癖にやるな!信長様にすぐ帰ってくるように言われてなければ、戦いたかった!」

その無邪気さに、苛立ちが増す。

この子供は、戦を、人の命を奪うことを、ゲームと勘違いしているのか。

「帰って朔夜に伝えろ。決着は必ずつけると。」
「いいよ！んじゃ、またな。」
そういうと、くるりと背を向けて、子供は去っていった。

再び、一人になった砂浜に、波の音が戻ってきた。

「終わっちゃった・・・。」

がくりと膝をついて呟いた。
ぽつり、頬を伝って落ちた滴が砂浜を濡らす。

楽しかっただけの、夢の時間が終わった。
手に残る、肉を潰す感触。
吐き出された血で汚れた着物。

「・・・っく・・・・。」
歯を食いしばって、洩れる嗚咽を堪える。

どうしても、どうしても逃げられない運命。
この世界に来て、ようやく逃げ切れたと信じていたのに。

「・・・ふぇっ・・・・。」

再び凍り始めた心が痛い。
嫌だと叫んでる、助けてと悲鳴を上げている。

どうして、こうも私は弱いんだろう。

許すことも、憎んで殺そうとすることも、どちらを選ぼうとしても、辛い。

もう、こんな気持になりたくなかったのに・・・。

もう、後戻りはできない。

たとえ、どんな結果になろうとも、進むしかない。

夢は終わったのだから。

33　分岐点

城に戻ると、まだ会合をしている最中だったらしく、部屋に政宗の姿はなかった。
汚れた着物を脱いで、出掛けるまで着ていた内掛けを羽織ると、バシッと自分の両頬を挟むように叩いた。

「よし。」

部屋を出て、とりあえずは皆に織田軍がすぐ近くまで来ている事を教えなきゃ。
会合をしている部屋に近づくと、ちょうど佐助が部屋から出てきた。
佐助は私に気がつくと、すぐにこちらに近寄ってきた。

「ツキちゃん、なにか用事？」
「佐助、明智光秀がすぐそこまで来てる。みんなに伝えて。」
「それ本当？」

佐助の顔が飄々としたものから、忍の顔に変わる。
「本当。海にいた。蘭丸って子供もいる。兵を引き連れていた。」
「わかった。ツキちゃん、もう出歩いたりしないで、部屋にいてよ？」
「了解。」

体に潮の香りが纏わりついていたようで、佐助は顰め面をして私に言うと、そのまま慌しく部屋に戻っていった。

さて、私も動きますか。

部屋まで戻ると、私の荷物の一番下から、以前こっそり用意していた忍装束を取り出した。
佐助に、政宗に内緒で用意してもらったもので、ご丁寧にクナイまで添えてよこしてきた。
どうやら佐助の部下に、私と似た様な身長の人がいるらしく、その人のお下がりらしい。

奥州からここに来るまでにも使った、旅に必要な品を手製のカバンに詰め込んで、忍装束と一緒に丸めて物陰に隠し、そろそろ来るであろう人を待つ。

おそらく、各地の忍たちの報告で、織田軍が動き出したことは知っているはず。
いつ仕掛けるか、どこで仕掛けるかを話し合っていたのだろう。
城内は慌しくあるが、混乱の様子はない。

佐助に報告してから一時間ちょっとして、政宗と小十郎が険しい表情で現れた。
すでにいつでも戦に出られるような恰好だった。

「明智に会ったのか？」
入って来ると同時に小十郎が問うて来た。
「会ったよ。話の通じなさそうな人だったから、軽く沈めておいたけど。」
「怪我は？」
これは政宗。
「大丈夫。私は怪我はしてない。」
相手は内臓潰れてるだろうけどね。
なんて言えば、大変なことになりそうなので言わない。
本当に怪我をしてないか上から下まで観察した後、大丈夫そうだと判断したのか、政宗はようやくほっとした様な顔になった。
それから少しのお説教を貰った後、佐助やかすがからもたらされた報告と、これからについてを教えてもらった。
明智光秀と蘭丸の隊は加賀の国に撤退。
織田信長率いる本陣は、安土城を出陣して甲斐に向かっているらしい。
まもなく慶次含む上杉軍と、武田軍は甲斐に向かって出陣。
すでに幸村と佐助は、躑躅ヶ崎城に戻って本陣を指揮する為に、こ

こを出たそうだ。
信玄公が後に合流することになる。

伊達軍は、すでに伝令が奥州に向けて走っていて、成実が全軍を引き連れて来る手筈になっているらしい。
小十郎によると、甲斐との国境付近にまで軍を進めてあって、いつでも出陣できる状態だとか。

なんでそんなに早いのか？と小十郎に訪ねたら、同盟国の頭が集まるこの時に、敵がしかけてこねぇはずがねぇと事も無げに答えた。
おそらく、戦場は川中島になるだろうと、小十郎は予想しているらしい。

「オレと小十郎もすぐに出る。ツキは、明日には奥州からの迎えが来るから、そいつらと一緒に先に戻っていろ。いいな？」

政宗はそう言うと、私の返事を聞く前に立ち上がった。
小十郎もその後に続く。

「政宗。」
「なんだ？」

すぐにでも飛んで行きたそうな政宗を呼び止めて、微笑んだ。

「どうか、気をつけて。」

今までで一番綺麗に笑えてるだろうか。
どうか、そうであってほしい。

「ああ、行って来るぜ。米沢でいい子にして待ってろよ。」
いつもの自信に満ち溢れた政宗の笑顔を、瞬きすら忘れて見つめる。

忘れない様に。

「ツキ？」
小十郎が訝しげな顔をしてこちらを見た。

「小十郎も、政宗のお世話は大変だけど、気を付けてね。怪我しちゃダメだよ？」

「あ、ああ。ツキも、帰り道は十分気を付けていけよ？」
「うん。わかった。」

何か腑に落ちなさそうな顔をしつつも、政宗が部屋を出て行こうとしているのを見て、踵を返した。

「行くぜ、小十郎。」
「はっ。」

背を向けて部屋を出て行く政宗の後を追って出て行く小十郎。
二人が出て行って、再び私一人になった。

遠くから兵たちの声や、馬の嘶きが聞こえてくる。
戦が始まるというこの時に、私のことなど気にかける人はいないだろう。
人が来る前に、準備をしなければ。

まずは政宗に宛てた手紙を書いた。

今までのお礼と、朔夜がこの世界に来ていると明智光秀に聞いたこと。
これから朔夜の元に向かうこと。

そして、さようならを。

ここでキスをされたのが、もう遠い昔のように感じる。
混乱から抜け出して思い返してみると、驚きはしたけど決して嫌ではなかった。

このまま一緒にいられたら、いつか政宗に恋をしたのかもしれない。

でも、もう・・・。

行かなければ。
覚悟を決めたんだから。

私は私の運命を、政宗は政宗の運命を、それぞれ歩いて行く。

楽しかった。

幸せだった。

政宗や小十郎、喜多さんは、私にとってはこの世界の家族だった。

朔夜に見つかった以上、一緒にいたら迷惑にしかならない。
あいつは、私の大切なものを全て奪って壊してしまう。

大切な、本当に大切な人たちだから。
もう、ここにはいられない。

手紙を机に置いて、隠していた荷物を取り出し、着ている着物を脱いで忍装束に着替えた。
まだ少しだけ大きな服の隠しポッケにクナイを仕込む。

政宗から貰った扇を少しだけ悩んで、カバンの奥に仕舞った。

庭に出る頃には、太陽が西に傾き始め、空がゆっくりと茜色に染まり始めていた。

まずは、武器を手に入れなければ。
バサラ屋ってどこにあるんだろ。
と、思いながら城の外にまずは出ようと裏門の方へ歩き始めたとき、目の前に人が現れた。

「小太郎・・・。」

両手を広げて、行くなと首を振っていた。

『明智を追っていて、先程の海での話は聞いていた。』
「聞いていたって、隠れる場所なんかなかったよ？」
『俺は風だ。』

良く分からないけど、忍術って奴ですか？

『朔夜という男の所へ行くのはだめだ。あぶない。』
「どんなに危険でも行く。見ていたのなら、分かったでしょ？私弱くはないんだよ？」

苦笑して、小太郎の腕をそっと下ろさせた。

「皆は皆の戦いに行った。私は、私の戦いに行く。お願いだから、止めないで。」
『ツキ・・・。』
「朔夜は私と同じ。癒しの力を使うことができる。明智も朔夜に治癒してもらえば、一瞬で完治してしまうの。あいつを殺さないと、連合軍の勝利の可能性は低くなってしまう。」

悔しいけれど、治癒の力は私よりも、あいつの方が上だ。
私は治癒よりも攻撃の方が得意で、他者の傷ならまだしも、自分自身の治癒については、ほとんどできない。

月の光を浴びて、治癒力を上げることで今までなんとかやってきたような状態だ。

『ならば、俺も一緒にいく。』
「だめ。北条はどうするの？同盟に参加しているんでしょ？」
『北条は今回の戦には無関係を通すことに決まった。織田も狙いは甲斐の武田。北条には見向きもしてない。』

それはそれで、どうなんだろうか・・・。
ちょっと呆れてしまったけど、それが北条の姿勢ならば仕方がないのか。

「それでも、ダメ。小太郎は連合軍の中で、すべきことがたくさんある。少しでも有利な戦況に持っていくための情報集めとかあるでしょ？」
『それは、猿飛やかすががする。』

しぶといな・・・。
私の聞いていた伝説の忍ってのは、ドライでビジネスライクなはずなのに。
そもそも、私にここまで構う理由なんてないでしょう？

譲らない小太郎に、仕方なく私は妥協案を出すことにした。
もう、ここで振り切って出て行ったら、即行で政宗の所にチクリに行きそうなんだもん。

「ならば、私と一緒に行こう。ただし、織田信長の居場所が分かったら、すぐに政宗たちに知らせに行くこと。いい？」
『ツキはどうするんだ？』
「私の目的は朔夜だもの。織田信長の近くにいる朔夜のところに行くよ。そこからは、小太郎は手出ししないで。」

アレは、私の獲物だ。誰にも譲る気はない。

すっと冷えた表情を見た小太郎は、少し考えた後、こくりと頷いた。
「これで決まりね。それじゃ、しばらくの間よろしく。相棒。」
『ああ。』

まぁ、地図を手に入れたと思えば、この先の旅も楽になるか。

あとは武器ね。

あ、そうだ。小太郎なら知ってるかも。

「小太郎、バサラ屋って知ってる？」
期待を込めて尋ねると、こくりと肯定の頷きが返ってきた。

よっしゃ。

「まずはそこに行きたい。」
『分かった。』

さて、では行くか。

表の喧騒も落ち着き始めたようだ。

「んじゃ、いこう。」

こくりと頷くと、小太郎は私を抱き上げ、しっかり掴まるように指示すると、助走もつけずに跳んだ。

春日山城の屋根の上に上がったようで、眼下には出陣していく兵士たちの列が見えた。

先頭を駆けていく政宗たちの姿は、すでにここからでは目視できない。

「・・・さようなら。」

小さく呟いた声は、風にきえた。

３４　バサラ屋（前書き）

短めです。

３４　バサラ屋

殆どの店が閉店して、人も殆どいなくなった城下町の一角にバサラ屋はあった。
見た目は普通の雑貨屋さんなんだけど、小太郎の姿を見た店の人が急に営業スマイル全開で、奥に通してくれた。

奥の部屋に入ると、一人の初老の男性が煙管を吹かせて座っていた。
小太郎によると、この人が店主らしい。

「いらっしゃい。おや、初めて見る顔だね。」
「こんばんわ。こんな時間にすみません。」

頭を下げると、店主はかまわないよと笑った。

「ここは営業時間なんぞ有って無きが如しさ。先日も伊達の子倅が夜中に来おって、ごますり棒を買って行きおったわい。」

ごますり棒？なにそれ？
首をかしげると、店主が効能を教えてくれた。

使うと、みんなに褒めて貰えて、いい気分になれるらしい。
間違いなく小十郎と綱元に使ったな。
怒られそうになった時に使ったに違いない。

そんなことに使う金があるなら、もっと他に使い道があるでしょうがぁぁぁぁ！！

あまりのアホらしさに頭を抱えていると、店主はかっかっかっと、どこかのご隠居の様に笑った。

「男とはそんなもんじゃよ。さて、お嬢ちゃん、ご入用の品は何かな？」

そうだ。私買い物に来たんだった。
政宗のせいで、うっかり目的を忘れるところだったよ。

小太郎は部屋の入り口近くの壁に背中を預けて、腕を組んだまま口を挟む気はなさそうだった。

「武器を。」

一言はっきり告げると、店主はじっと私を見つめた。
見透かすような、見定めるような視線を向けられて、私もじっと見つめ返した。

「お嬢ちゃんはずいぶん変わった属性をお持ちのようだ。」

そう言うと、店主は少し考えた後、後ろに並んでいる棚の一つから、いくつかを取り出して机の上に並べた。

「お嬢ちゃんが欲しいのはこれらだね？」

そう言って店主が並べたのは、光沢を放つ糸のようなものと、一丁の拳銃。ホルダーのついたベルトと、弾薬が収められたケース。

うそでしょう・・・？

糸の様なものを手にとって見ると、元の世界で私が良く使用していた極細の鋼糸（ワイヤー）だった。

金属とは思えないほどしなやかで、重さも感じない。

「なんで、これを？」

鋼糸は元の世界で私が一番得意として使用していたものだ。

どうして何も話してないのに、これを選んだの？

「客の希望する商品を提供するのが、儂らの仕事じゃからの。」

にやっと笑う店主。

希望も何も、どんなものが欲しいのかなんて話してないのに。

こっちの拳銃も、自動式拳銃（オートマチック）だし。
話で回転式拳銃（リボルバー）ならこの世界にもあるってのは聞いていたけど、まさか自動式拳銃まであるとは思わなかった。
異世界だからありなの？

はてなマークが頭の中を埋め尽くしているけど、使い慣れている武器が手に入るのは嬉しい。
小太郎も初めて見る武器に興味があるのか、壁から離れて鋼糸を手にとってしげしげと眺めていた。

「さて、それで支払いだが。」

あ、そうだった。ただで貰える訳はないもんね。
最近あまりお金を使うことなかったから、うっかりしていた。
越後の酒を買って帰ろうと思ってたから、多少は持ってはいるんだけど・・・。

足りなかったら、ローン利くかなぁ。
って、私収入がなくなっちゃったから、ローンもダメじゃん！
小太郎、貸してくれるかな・・・。

などとビクビクしながらも、値段を聞いたら、これまたびっくり。
本当に良いの！？ってくらい安い。
小太郎もびっくりしているくらいだから、本当に安いのだろう。

「店主、桁を間違ってない？二つくらい。」
「いや。これはこの価格が正当じゃよ。そもそも、原価はあって無きが如しじゃからのう。」

どういうこと？
原価がかからない銃なんてあるわけないじゃない。

「実はな、これらは今から半年ほど前に、店の棚に独りでに現れたんじゃ。店の者に聞いても誰も知らんというし。この店には、たまーに武器自らがこの店に現れて、主を待つことがあるんじゃよ。」

じゃから、この値段は保管料金じゃな。
と店主はかっかっかっと笑って、再び煙管をふかした。

半年前って・・・まさか。
拳銃をもう一度良く見てみると、ＤＥＳＥＲＴ　ＥＡＧＬＥと刻まれていて、小さな傷が幾つもあった。

「って、これって・・・！！」
私が使ってた奴じゃないの！！

どういうわけなのかはサッパリ分からないけど、これは私がこちら

に来る寸前まで使用していたものだ。
弾が入っているか弾倉を外して見ると、フル装填されている。
予備の弾薬のケースもホルダーもある。

私と一緒にこの世界に飛ばされてきて、途中で何かがあって武器だけここに飛ばされたのかな・・・。

「使い方の説明などは必要なさそうじゃの。」
「ええ。これは、私のだもの。」

言われたお金を支払って、腰にホルダーをつけて銃を挿し、鋼糸はくるくると輪になるように巻いて反対側に留めた。

よし。これで良いかな。

落ちないようにもう一度確認すると、小太郎を見た。
「お待たせ。これでいつでも出発できるよ。」

小太郎は一つ頷くと、店主に軽く頭を下げて部屋の外に出た。
続こうとして一歩歩き出したとき、店主がお嬢ちゃんと私を呼び止めた。

「なんでしょう?」
「老いぼれからのお節介じゃ。人間生きていれば、良いことも悪いことも起こる。じゃが、人は決して一人ではない。それを忘れてはいかんぞ?」

店主はそう言うと、またいつでもおいでと、優しく笑った。

「ありがとうございます。」

頭を下げると、今度こそ小太郎を追って店の外に出るために、部屋を後にした。

35　風と一緒に

越後を出発して、現在小太郎と併走して走って山の中を突き進んでいる。
小太郎は初め背負って連れて行くといって聞かなかったが、勘を取り戻すためと言って私は譲らなかった。
私の意志で今こうして動いているのに、小太郎に背負われるなんて情けなさ過ぎるというのが本音だけど。

夜に越後を出発したので途中野宿して、その翌日には甲斐の国に入った。
川中島まで、あと数刻走れば着くらしい。

太陽が西に傾いて、そろそろ山の中は薄暗くなってきた。
水場を見つけたので、今日の野宿場所にすることにした。

「織田信長は川中島まで来るかな・・・。」

休息をとりながら、足元に即席の日本地図を描いてみる。
安土城は琵琶湖の近くにあって、ここからだとだいぶ距離があるんだよね。
まぁ、米沢から川中島に比べたら近いけど。

『わからない。だが、確かに織田の兵が山越えをしてこちらに向かっている。』

小太郎が加賀から北アルプスを越えて来るルートを指で示した。

「これって、越後から一旦引いた奴ら？それって規模はどのくらい？」

『そうだ。兵は五千ほど。』

「蘭丸って子供が率いてるの？」

『明智が動けない以上は、それしかないだろう。』

そうか。んじゃ、織田信長は？

あの中にはいなかったはず。

「織田信長はどこに？」

『三河を抜けて、東側から来ている。』

そう言って示したのは、北アルプスと南アルプスの間を抜けるルート。

ってことは、挟み撃ちにする気か？

「このことはもちろん、信玄公たちも知ってるよね？」

『もちろんだ。』

それならいいや。

小太郎が書いたルートを指でなぞる。

織田信長はこちらにいるのか。

ならば、朔夜もここにいるはず。

あいつはいつだって敵の頭の側にいて、私に分かりやすいようにしていた。
今回も、織田信長本人の側にいるに違いない。

「順調に進んだとしたら、幸村たちはいつごろ川中島に着く？」
『早くて明日。』
「伊達は？」
『同じくらい。』
「織田は？」
『もう何時着いてもおかしくない。』

間に合わないかもしれないのか。

元の世界なら、リアルタイムで情報が入ってくるのに、この世界はなんて不確かな予想で回っているんだろう。

小十郎の予想通り、川中島で戦は始まる。
あとは、武田と伊達の本陣と、織田の本陣がどこでどのように絡んでくるか。

様子見になるか・・・。

今日の夕飯の食材ゲットと、武器を使う勘を取り戻すため、辺りの獣を探してうろついていると、視界の端を何かが横切った。

腰から鋼糸を引き抜き抜いて、振り向きざまに鋼糸を猪に向かって投げつける。
先端が私の意志のままに飛んで、草むらに逃げ込んだものに襲い掛かる。

ピギィィィィ！！

手に鈍い衝撃が伝わって、獲物を仕留めたことを伝えた。
ウサギか何かかな・・・。

鋼糸を伝って草むらを覗くと、茶色のウサギがぴくぴく痙攣していた。
うーん。なんか視線が微妙に低くなってるせいか、思ったよりも下にいったなぁ。

後で練習をしておいた方が良さそうだ。

「小太郎、夕飯獲ったよ。」

そう言いながら水場に戻ると、小太郎が火を熾して待っていた。
どこから採ってきたのか、木の実もある。

「これ、マツタケって言うものではないですか！！？」
茸の王様、マツタケを震える手で掴んで匂いをかぐ。
間違いない。

『こんなものどこにでもある。』

なんでもないことのように言って、小太郎はウサギを受け取ると捌き始めた。
どこにでもあるの？
まじで？

マツタケは串に刺して遠火でじっくり。
ウサギは塩を振って、直火でこんがり。

木の実をかじりながら、焼き上がりを心待ちにしていると、小太郎が私を見ているのに気がついた。
「なに？」
『朔夜という男と何があった？』

唐突に、且つストレートに聞いてきたわね。
まぁ、別にいまさら隠すような話でもないか。

「私と朔夜は、従兄弟なんだ。私達は蒼き月にいる御方の血を受け継ぐ月の一族。月の力を使って、人の傷を癒すことを生業にしてきたんだけど、朔夜に全て殺されて残ったのは私と朔夜だけ。私は復讐のために、朔夜を追っていたの。元の世界で。」

『元の世界？』

「そう。私たちはここではない別の世界から、飛ばされてきたんだよ。今から半年前に。奥州の森で政宗に拾われたときは、今より七歳くらい小さい年齢の姿だったんだけど、満月の度に少しずつ成長して、多分あと半年後には元の姿に戻るはずなんだ。で、まさか朔夜までこっちにきているとは知らなかったから、復讐を諦めざるをえなくて、途方にくれてたんだけど、政宗がここにいれば良いって言ってくれて・・・。」

『・・・。』

でも、朔夜はこの世界にいる。

ならば、私のすべきことは一つだ。

「朔夜は力を使いこなすことができなかった私の師だったの。諦めずに私を指導してくれて、ようやく人並みになった。信頼していた。けれど、その信頼は、家族を殺されて粉々になった。」

ウサギを火から下ろして様子を見ると、もう食べても良さそうだ。大きな葉を洗って作った皿の上で切り分け、三分の二を小太郎に渡した。

「私は朔夜を何があっても許せない。奥州で過ごした日は、その思いを薄れさせてはくれたけど、消すことはできなかった。」

自分の分を持って、かじりつく。

うま。
胡椒があったらもっと良かったけど、贅沢は言えないね。

「だから、私は私の思いを貫くんだよ。」
これだけは譲らない。
誰にも。

小太郎は『そうか』とだけ言うと、あとはもう何も言わなかった。

次の日。
朝もやが漂う中、川中島に到着した。
東に連合軍、西に織田軍が陣を構え、睨み合っているのが少し離れた場所から確認できた。

数から言えば、連合軍の方が若干多め。
でも、織田軍には銃がある。

「織田の本隊はどこかな。」
西に目を向けてみても、その姿は見えない。
ここにはいないなら、もう少し西に行ってみようかな・・・。

そう思った時、戦場に動きがあった。
連合軍の誰かが一人、織田軍に向かって走り出した。

その後ろに続くもう一人。

「ねぇ、あれって、政宗と小十郎だったりする?」
あんまり答えは聞きたくないんだけどさ。

恐る恐る小太郎を見ると、こっくりと深く頷いてくれました。

敵は鉄砲を持ってるってのに、何考えてんのよ!!
撃たれたらどうするの!?

食入るように見つめていると、号令が出たのか、連合軍の全員が総攻撃を始めた。
政宗はすでに敵陣の中に突入している。

「し、心臓に悪すぎる・・・。いつもこんな戦い方をしているの?」

『大体は。』

無茶を越えてるよ・・・。

そのうちに敵も味方も入り混じった混戦になり、時間だけが過ぎていった。

時々赤い火柱が上がったり、氷の塊が飛んだり、雷が落ちたり、突風が吹き荒れたり、しているので大体どこに誰がいるのかが分かる。

つか、この世界の戦って、元の世界の戦争より激しいな・・・。

どのくらいたったか。織田軍が劣勢になってきた頃、南の方角から武田と伊達の本隊が姿をみせた。

織田の本隊はどこ？

なんで姿を見せないの？

このままなら、連合軍の勝利だ。

そう思ったとき、連合軍の本隊の後方で異変が起きた。

黒い炎が昇って、爆発したのだ。

「なに？あれは？」

『あの技は・・・明智光秀。』

明智!?

なんであそこに明智がいるのよ?

まさか、朔夜に治してもらった・・・?

そうだとすれば、朔夜はこの辺りにいる!

視線をめぐらせると、西の方から御旗が次々と上がり、木瓜の紋からそれが織田信長のものと分かった。

いた。

あそこだ。

前からも後ろからも包囲されて、動揺が走る連合軍を嘲笑うかのように、織田の軍勢はその包囲網を縮め始めた。

「小太郎。」

静かに名前を呼んで小太郎を見ると、すでに小太郎は私を見ていた。

「約束だったよね。ここでお別れだよ。」

少し笑って言うと、小太郎は目元を隠していた額当てを外した。

初めて見る小太郎の素顔。

まったく、この世界の男共は無駄に顔がいいのが腹立つ。

バーミリオンの瞳は言葉以上の感情を表していた。
行くなと。

ああ、なんでそんな額当てしてるのかと思ったら、小太郎は目に感情を表すのね。

「小太郎。政宗に伝えて。明智は陽動。本陣は信長。明智に気にすることなく、織田信長を叩けと。私は仕留め損ねた明智を始末した後、朔夜の元に行くわ。」

さぁ、行って。

『死ぬな。』
「最大限の努力はするわ。」
『生きろ。』
「うん。」

死ぬつもりはない。朔夜を残して死んだりするもんか。
再び額当てを付けて、数秒私を見下ろした後、小太郎は意を決したようにその場から姿を消した。

まずは、明智光秀。あんたを仕留める。

今も連合軍を背後から襲撃している明智光秀。

さぁ、はじめよう。

36　堕ちる（前書き）

流血描写あります。苦手な方は回避願います。

36　堕ちる

春日山城でツキと慌しく別れて、出陣してから四日目。
川中島で織田の奴らと開戦し、手応えがないままそろそろ仕舞いかと言う頃になって、前方に魔王のおっさんの軍勢が現れた。
成実と真田の率いる本隊も到着したと猿が報告に来たが、その直後本隊の後方から明智光秀が率いる軍勢が攻撃を仕掛けてきたと別の忍から報告が上がった。

敵味方が入り乱れた状態で、混乱が置き始めやがった。
武田のおっさんも軍神もこの混戦の中でどこにいるのか把握ができねぇ。

「政宗様！ここは一度体制を立て直すべきです！一度陣に戻りましょう！！」
ちっ、仕方がねぇ。
南から成実が連れてきたうちの連中もまもなく到着する。
一斉に仕掛けたほうがいいか。

「小太郎、成実はどこだ？」
「あちらに。我が伊達の旗印が上がっております。もう目と鼻の先です。」
「明智はどうした？」
「分かりませぬ。おそらく、しんがりの者が抑えているかとは思いますが・・・。」

これ以上の混乱はよくねぇな。
Ｓｈｉｔ！敵も味方も多すぎて、統制がきかねぇ。

「小十郎、本隊を任せる。成実一人じゃ荷が勝ちすぎるだろ？準備が出来次第、一斉に攻めろ。」
「政宗様はいかがなさるおつもりで？」
「決まってんだろ？魔王のおっさんの首を貰い受けに行くんだよ！」
「なりませぬ！せめて、体制がもう少し整ってからでなければ・・・！」

おいおい、小十郎。
一番乗りはオレと決まってんだ。
ぐずぐずしていたら、他の奴に魔王の首を持っていかれちまう。

小十郎の制止を無視して、馬を走らせようとした瞬間。

「まぁぁぁさぁぁぁむぅぅぅねぇぇぇどのぉぉぉぉぉぉぉ！！！！」
砂埃を上げてこちらに突進してくる赤い塊。

ちっ。一番うるせぇのが着いちまったじゃねぇか。

あっという間にオレの目の前にたどり着いた真田は、息切れ一つした様子もない。

「御館様に我が武田の全軍の指揮権を御譲りしてきたでござる。」
「てめぇ、明智はどうした。」
まさか放って来たわけじゃねぇだろうな？
こいつは前に進むことしか考えずに、後方で明智がいたこと自体を知らねぇとか言い出しそうなんだよ。

「先ほど風魔殿が佐助と共に現れて、明智光秀殿は別の者が相対しているゆえ、織田信長殿を討てと。」
「他の者？武田のおっさんじゃねぇよな？軍神か？」
「いや、上杉殿は御館様と一緒でござった。」
「前田か？」
「前田殿も先ほど上杉殿と共にしておられたでござる。」
ならば、誰が？

「はいはい、皆こんな所に固まってたら、狙われちゃうよ？」
猿が風魔と共に現れた。

「織田信長はあの本隊の中にいる。確認済みだよ。明智は小太郎曰く、陽動なだけだから旦那たちは気にせず行けってさ。うちの大将もいることだし、問題ないでしょ。」
猿の言葉に、風魔は一つ頷いた。
ＯＫ．ならば、Ｐａｒｔｙを始めるか。

「小十郎、お前は成実と共に、本隊の指揮をとれ。」

「承知。」

「真田、遅れんなよ？」
「望む所でござる！！」

さぁ、魔王のおっさん。首を洗って待っていろよ？

片倉の旦那は大将たちがいる本隊へ。
旦那と竜の旦那は織田の本隊へ。

それぞれの役割を果たすために、走り出した。
戦が始まる。もう誰に求めることはできない。

「小太郎、本当にこれで良かったのか？」

俺様の問いに、小太郎は答えずに、南の方を見つめている。
明智光秀と、ツキちゃんがいる方向を。

小太郎から話は聞いた。

ツキちゃんの親の敵が織田信長の側にいたと。
そして、癒しだけではなく、バサラ技のような力を持っていることを。

敵を討つために、竜の旦那の庇護から出たと。

何かを隠しているとは思っていた。
それが、癒しの力や若返ってしまった体だけではないことも。

「今なら助けにいけるんだぞ？」
『彼女はそれを俺に望んではいない。』

空気を震わせるような微かな《声》が聞こえた。

『彼女が望むのは、救いだ。』

「救い？何からの？」

『抜け出せない自分の心。』

そういうと小太郎はどこへともなく姿を消した。

自分の心・・・ねぇ。

そんなもの、捨ててしまえば楽になれるのに。

超一流の忍な俺様には、理解できない話だね。

けど、ツキちゃんがそうなってしまうのは、俺様なんとなく嫌なんだよねぇ。

あの子は俺様と同じ世界の人間にはなって欲しくはないんだ。

だから。

「俺様も働くとしますかね。」

まずはツキちゃんの復讐相手ってのがどんななのか探ってみるかな。

「もう少し、遊びたかったのですが、貴女がいらしたのならば、もっと楽しく遊べそうですね。」

鎌に串刺しにされた兵士は、すでに事切れていた。

鉄のような血の香りが辺りに充満していて、気を緩めれば吐きそうになる。

「悪趣味な男ね。明智光秀。」

腰から鋼糸を抜き取って、両手に渡らせるようにして構える。

明智光秀は、くすっと笑うと兵士の死体を放り捨てて、ゆらりと一

歩前に出た。

「私はね、ミツキさん。人の絶望と嘆きが大好物なのですよ。もちろん、貴女のその心もね。」

「虫唾が走る。」

「ありがとうございます。」

吐き捨てたセリフを嬉しそうに受け取り、明智はまた一歩前に進んだ。

「Ｕｎｌｉｍｉｔｅｄ　ｃａｐａｃｉｔｙ　ｔｏ　ｒｅｌｅａｓｅ.一つ聞く。朔夜はどこにいる?」

能力を解放すると同時に、蒼い光が体から溢れた。

体が軽くなり、五感も常の数倍鋭くなった。

その分血の匂いがきつくなり、明智の微かな笑い声や息遣いまで良く聞こえるようになって、気に障る。

「朔夜殿ですか?信長公と一緒にいらっしゃいますよ。」

「そう。ならば、あなたを殺して、朔夜に会いに行くとするわ。」

さっさと終わらせてしまおう。

地を蹴って明智の懐に入り込もうとしたが、一瞬鎌を振り下ろす方が早かった。

「っと。」

鋼糸を張って鎌の刃を止めると、右足で明智の脇腹を真横に蹴った。

足も強化しているせいで、明智の体はあっけなく吹っ飛んで、１０ｍほど転がる。

鎧で覆われている部分を蹴った為か、明智はさしてダメージを受けた様子もなく起き上がった。

「ふふ・・・いたぁい・・・」

心底嬉しそうに痛いと呟く明智光秀。

こいつ、本当に気持悪い。

再び鋼糸を構えて走り出すと、今度は左右の真横から鎌が振られ、咄嗟に上に飛び上がった。

たわんだ鋼糸が明智の首に回るように指を動かしたのと同時に、クロスした鎌が私の背中に向かって振り上げられた。

「しま・・・！！」

避けようとしても、空中では避けようがない！

次の瞬間、右の肩に焼け付くような痛みが走り、視界の端に鎌の先端が見えた。

「おや、串刺しにするはずが、思ったよりも小さいので肩に当たってしまいましたか。」

そのまま鎌の柄で抱き寄せられるように引き寄せられて、肩に刺さった刃先を更にぐりっとねじ込まれた。

「ぐぅっ！！」

口から飛び出そうになる悲鳴を押し殺してなんとか堪えると、明智は笑いながら私を解放した。

「良いですねぇ。その苦痛に歪む顔。」

左手で抑えると、生暖かい液体の感触がして、滴ったものが地面にぽたぽたと落ちた。
治癒をしようと試みるけど、やっぱり自分には治癒の効果が現れない。
ああもう。痛いなぁ！

「さて、そろそろ信長公もお待ちです。朔夜殿には申し訳ないですが、貴女には死体となって信長公に謁見していただきましょう。あの時、結構痛かったんですよ？」

上機嫌で話す明智。
越後で半殺しにしたことを根に持ってるのか。

まぁ、子供みたいな女に、油断したとはいえ内臓潰されちゃ腹も立つか。
どこか人事のように思いながら、動かない右腕に鋼糸を絡ませて、反対の先端を血で滑る左手に巻きつけた。

「さぁ、死になさい！！」

奇声を上げながら突進してくる明智光秀は、能力を解放している私から見ても、相当早い。
これを避けて尚且つ攻撃をする。
やらなければならない。チャンスはこれだけだ。

「Ｅｘｐａｎｄ　ｔｈｅ　ｓｈｉｅｌｄ．（シールド展開）」
体にぴったりと纏わりつかせるような防護壁を展開し、左腕と右足で振り下ろされた鎌の刃を防ぐ。

金属音を立ててはじき返された鎌が再び振り下ろされる前に、左腕を大きく水平に円を描くように回して、そのまま明智の頭上をジャンプで飛び越えた。
振り上げられた右腕に鋼糸が絡まる。

「痛いのが好きならば、とくと味わうが良いわ。」

そう言うと、渾身の力を込めて鋼糸を引いた。

ずず・・・・ぶち・・・。

肉の切れる感触が鋼糸を伝って手に響いた。

ぼと・・・。
からぁ・・・・・ん・・・・・。

重みのある物が落ちる音と、鎌が転がる音が同時に聞こえた。

「あ・・・あああああ・・・・・・・・あああああああああああああああ

あ！！！！」

右腕を肩から切り落とされた明智が、噴出す血を左手で抑えてのた打ち回る。

「私の腕が・・・腕が・・・・・！！痛い・・・ああ・・・痛いいいい！」

その姿を見ても、何も感じない自分。

ああ、堕ちるのは簡単だなぁ。

腰に挿していた銃を抜いて、震える手でスライドを引いた。

右手は使えないから左手で銃を握り、照準を明智に当てる。

もう、戻れないね・・・。

ズガァァァァァン！！！

まっすぐに弾丸は私の狙い通りに、明智を貫いた。

37　喪失

明智光秀討死の知らせは、瞬く間に忍を介して戦場中に広がった。
一角の武将の手ではなく、一人の幼い少女の手によって死んだと、忍達は口々に伝え合った。

その知らせを黒脛巾組の一人から受けたのは、日も傾き始めた頃だった。

明智光秀を討つ程の力量を持つ少女など、俺は一人しか知らない。
だが、そいつは今、春日山城から米沢に向かっているはず。
こんな戦場になんかいるはずがねぇ。
いるはずはねぇんだが・・・。

春日山城で最後に見たあのツキの態度に、ずっと違和感を感じていた。
まるで、最後の別れを惜しむような・・・。

「小十郎、どういう事なんだよ!?なんで、ツキちゃんが!!」
「落ち着け成実!まだツキと決まったわけじゃねぇ!」

共に報告を聞いていた成実も、同じことを考えてたようだ。
取り乱す成実を落ち着かせようとする俺自身が、冷静さを欠いている事は頭の片隅で理解している。

しかし、政宗様のお気持ちを思えば、冷静でなどいられるか！

「その明智を討った女を探せ。ツキなら連れてこい！」

「はっ。」

瞬時に消える忍と入れ替わる様に、別の忍が現れた。

「政宗様より伝令です。海津城へ全軍引く様にと。」

はっと空を見上げれば、間もなく夕暮れを迎える頃合いだった。

海津城には、以前甲斐で同盟を組んだ際に政宗様と信玄公とで話し合って取り決めたうちの一つ、戦を想定した食料の備蓄がある。

今夜はそこで体制を整えるということだろう。

「政宗様もこちらにお戻りか？」

「はっ。」

「わかった。成実。全軍を海津城へ向かわせる。明智を討った女の話は、それからだ。」

「了解。」

馬を走らせる成実の後姿を見送って、俺自身も海津城へ向かうべく馬の頭の方向を変えた。

伝令が慌しく走る戦場を見渡し、溜息をつく。

万が一、ツキがここにいるとしたら、政宗様にお教えすべきか否か。

今は織田信長を討つ事だけに集中すべき時。

できることならば、俺の手で事態の収拾を図りてぇ所なんだが・・・

。

政宗様は天下もツキも両方手に入れると、守ると誓った。
俺もその誓いをお助けする覚悟を決めた。

ツキがここにいるとしたら、ついにツキの家族を殺したという男の存在を知ってしまったという可能性が高い。
と、するならば、どこでツキはそのことを知ったのか。
越後に着いた日の、あの取り乱しようを考えれば、その時点までツキは男がこちらにいることは知らなかったはずだ。
ならば、明智光秀と接触をした時としか考えられねぇ。
政宗様の読み通り、男は織田にいたと、そういうことなのか。

何にせよ、まだ推測の域を出ない話だ。
猿飛か風魔から話を聞かないことには、どうにも動けん。

だが・・・。
俺の予想通りなら、もうツキが止まることはないだろう。
まだツキを他国の間者と疑っていた出会ったばかりの頃、自分の身の上を語るあの表情は、暗い底のない目は、ツキの憎しみの深さをまざまざと物語っていた。
奥州で過ごすうちに、その影は見えなくなったが、人の心はそんなに単純じゃねぇ。
ちょっとしたきっかけがあれば、すぐまた元に戻る。

政宗様。どうなさるおつもりですか？

戦場を走り回り、立ち向かってくる雑魚どもを切り捨て、魔王のおっさんの姿を探したが、見つからなかった。
まさか、尻尾を巻いて逃げたんじゃねぇだろうな？
朝からの戦でとここに来るまでの強行軍で、うちの連中にも疲れが見え始めているようだ。

「真田、今日は一旦海津城へ引くぜ。忍を放って、魔王のおっさんの居場所をもう一度特定する。」
「そうでござるな。」
そう答える真田の表情にも、流石に疲れの色が見え始めていた。

ちょうど戦況の報告をしに来た忍に、全軍への伝令を命じた。
「海津城へ全軍を一旦引け。オレ達もすぐに向かう。」
「承知。」
頭を下げて走り去る忍を見送り、海津城へ向かおうとすると、良直

が慌てた様子でこちらに走って来るのが見えた。

「ひ、筆頭!!!明智光秀が討たれましたぁ!」

明智が?討ったのは誰だ?

確か、軍神でも武田のおっさんでも前田でもない、別の奴だって話だったが・・・。

明智ほどの武将を、そこいらの奴が討てるとは思えねぇ。

他に誰が?

考えていると、焦れた様に良直が詰め寄ってきた。

「筆頭!お嬢がまさかここに来ているんですか!?」

「何を言ってるんだ?ツキならば、米沢に帰っているはずだろうが。」

ちゃんと迎えの手配もしただろう。

どうしたのかと問いただすと、良直は泣きそうな顔になった。

「忍たちの話では、明智光秀を討ったのは、年端も行かない女だって!」

年端も行かない女?

・・・・まさか・・・・。

春日山城で明智に会ったというツキ。

魔王を討つんだと、それればかりに気が逸っていて、碌に話を聞きもせずに戦に出てしまった。

まさか、明智は朔夜を知っていて、その上でツキに接触したのか?

Ｓｈｉｔ!!
どうしてもっとちゃんと話を聞かなかった!?
なぜ明智に会ったと聞いて、こうなると予想しなかった!?

ツキが朔夜のことを明智から告げられたとして、あいつが動かない訳がねぇ。
明智が朔夜を知っているならば、朔夜は織田にいる。
ツキはオレ達の後を追ってここまで来たのか?

明智を別の者が討ちに行ったと真田に告げたのは、猿と風魔。
その明智を討ったとか言う女の正体を知っているとすれば、この二人だ。

「政宗殿?どういうことでござるか?」
ツキが使えるのは癒しの力だけだと思っている真田は、話が見えないと訝しげに聞いてきたが、構ってる暇はねぇ。

「すぐに海津城へ行くぜ。真田は猿を引きずってでも連れて来い。聞きてぇことがある。」

戸惑う真田を無視して、馬の腹を思いっきり蹴り上げると全力で海津城へと向かった。

海津城に到着すると、武田の小姓の案内で真っ先に小十郎のいる部屋に向かった。
すでに小十郎や他の連中も戻っていたらしい。

先ずは用意された座に座ると、戦況報告を小十郎から受ける。

「我が伊達の被害は微小。武田、上杉も大した被害はございません。一方織田ですが、明智光秀討死、森蘭丸は上杉謙信公との戦いを後に行方不明。織田信長も陣の中心で姿を見た後の行方は不明。」
「指揮する者が不在の状況で、織田の軍はよくもってるな。誰か他にいるのか？」
「いえ。忍の報告では、武将の姿は他にはないと。」

あれだけの大軍が自分達の意思だけで、まとまりを持てるのか？

魔王のおっさんがいるはずだ。
居なけりゃ他に誰が指揮を摂るんだ。

などとつらつら考えていると、小姓が来て武田のおっさんと真田が来る事を告げた。
その後すぐに、不貞腐れた顔の猿を引きずった真田と、おっさんが現れた。

いや、確かに引きずってでも連れてこいとは言ったがな・・・。
本当に引きずって来やがるとは思わなかったぜ。

流石は真田幸村だ。
とりあえず、オレの部下にはいらねぇがな。
武田のおっさんも、苦労が絶えねぇんだろうな・・・。

僅かばかり同情をしていると、武田のおっさんは真田達に座る様に促し、自らも座るとオレを見た。

「明智光秀の件は聞いておるか？」
「ああ。」

苦り切った顔で答えれば、小十郎と成実も渋い表情で頷いた。
小十郎と成実も忍の話を聞いていたか。

「その事で、佐助から話がある。」
「うわー、大将丸投げっすか？俺様明日の朝日拝めるかなぁ。」
心底嫌そうな顔をした猿が、ため息を吐いた。

「朝日が拝めるかどうかは、てめぇの話次第だな。さっさと知ってる事を全て吐きやがれ。」
小十郎が低い声で言い、その横で成実が頷いた。
殺気立つオレらを見回した後、分かりましたよと呟いた猿は、表情を消して忍の顔になった。

「明智光秀を討ったのは、ツキちゃんだよ。」
その言葉に、成実がなんでだよ！と叫び、小十郎はやはりかとため息を吐いた。

「政宗殿？」
真田が不思議そうにオレの顔を見た。

「なぜ、笑っているのでござるか？」

笑っている？
オレがか？

「幸村、黙っておれ。佐助話を続けろ。」

武田のおっさんが真田を黙らせた。
そうだな。それが賢明だ。
オレは今最高に機嫌が悪い。こんな胸糞悪い気分は久しぶりだぜ。
目の前のもの全てを斬り捨てちまいたい気分だ。

「小太郎が越後の海でツキちゃんと明智の話を聞いていたんだよ。
朔夜って奴が織田信長のところに居て、癒しの力を持つ女を探してるって言ったらしい。ツキちゃんに切りかかった明智は、逆に臓腑を潰される様な目に遭って森蘭丸に回収されたんだってさ。」

「なんと・・・！ツキ殿にそんな力があったとは・・・。」
真田の驚きに、成実はそうなんだよと、溜息をついた。
「ツキちゃんが本気を出したら、俺なんか一瞬だよ。あの子に勝てるのなんて、梵か小十郎くらいのもんじゃないの？」
「それほどの・・・！」

「続けるよ。」
戦馬鹿二人の話の間に入った佐助は、また話しだした。

「その後、大将や竜の旦那たちが城を出た後、ツキちゃんも城を出ようとした所を小太郎が捕まえて、説得しようとしたんだけどダメだった。なんとか川中島まで同行はしてきたけど、それも戦が始ま

るまでだったらしい。ツキちゃんはうちの軍を引っ掻き回す明智を討ちに行った。竜の旦那が織田信長に集中できるようにって。」

・・・・あの馬鹿たれが・・・！

「川中島に向かう途中で、ツキちゃんが言ってたらしいよ。家族を殺した男を何があっても許せない。どうしても消すことができなかったって。だから、自分の思いを貫くんだって。」

そうか・・・。
ツキは、選んだのか。
オレと奥州で生きることではなく、朔夜を殺す為の戦いを。

「政宗様・・・。」
小十郎が物言いたげにしていたが、それに気づかない振りをして立ち上がった。

「悪いが、しばらく一人にしてくれ。」

そう言うと、オレはそのまま部屋を出た。

38　追う者

廊下を歩いて人のいない庭に出ると、月のない空を見上げた。
虫の声と、遠くから時折聞こえる具足の音だけの、静かな空間。
いつも傍らにいた、小さな存在がいない。

当たり前のように傍にいた存在は、オレの足りなかった何かを埋めた。
ツキがいれば、それだけで満たされた。

だが・・・。

この手をすり抜けて、離れて行っちまった。
あの時、明智に会ったと本人から聞いたとき、なぜもっと詳しく話を聞かなかった?
その後悔だけが、ぐるぐると頭の中を回っている。

なぜ、どうして、あの時もっと、ああしていれば、こうしていればオレらしくねぇとは分かっている。
こんなのは奥州筆頭伊達政宗じゃねぇ。

持余す気持を、誰もいない庭で刀を振り回してどうにかしようと

しても、少しも晴れねぇ。
刀が空気を切る音が、余計に苛立ちを募らせる。

「Ｓｈｉｔ！」

私はね、見たいの。政宗や小十郎や綱元さんや成実が毎日頑張って良くしようとしている、この国を。その上で、私にできる手伝いをしたかったの。

あの言葉を、お前は忘れたのか？
オレよりも、復讐を選んだのか？

しばらく刀を振り回していると、近くに人の気配を感じた。
「誰だ？しばらく近寄るなと言っただろうが。」
刀の先を気配に向ければ、物陰から風魔が現れた。
「今、一番見たくねぇ顔が現れたか。何の用だ？オレは今機嫌が悪い。くだらねぇことなら今すぐ消えろ。」
オレの言葉を気にした様子もなく、風魔はこっちに来ると、書簡を

差し出した。
「何だこれは。」
刀を鞘に収めて書簡を見れば、見覚えのある字だった。
受け取って中を開いて見ると、ツキからオレに宛てたものだった。

伊達政宗様

この手紙を読んでいるということは、もう私が居なくなったことを知っているんでしょうね。
急に居なくなってごめんなさい。

今日、越後の海で明智光秀に会って、朔夜もこちらの世界に来ている事と、私を探しているということを知りました。
明智光秀を私のところに向けたということは、私が政宗の所に居るということも、あいつはもう知っているんだと思う。
このまま奥州に居たら、政宗や小十郎、喜多さん兵士の皆、全てに迷惑がかかってしまうので、奥州を離れようと思います。
本当は、いつまでもみんなと一緒に居たかった。
政宗の目指す国を、傍で見てみたかった。

でも、あいつは、私の大切なものを全て壊そうとする。
それだけは、絶対に嫌だ。
それに、やっぱり、私はあいつをどうしても許せない。

だから、行きます。

私は私の戦いに。
心配しないでください。

政宗は政宗の戦いがあるでしょ？
政宗が目指すものがあるでしょ？
それを忘れないで。

今まで、本当にありがとうございました。

さようなら。

ツキ

なんだ、これは。
迷惑がかかるから、だと？
大切なものを壊されたくないから、だと？

迷惑だなんて、思うわけがねぇだろうが。
大事なら、尚のこと近くで守りてぇと思うだろうが。

オレの目指すものの中に、お前も入っているってことが、わかってないんだな？

見たいなら、見れば良いんだ。オレの傍で。
居たいなら、いつまでも居れば良い。

分からないならば、教えてやる。

書簡を畳むと懐に仕舞い、そこに立っていた風魔を見た。
「風魔、ツキの居場所は分かっているな？」

こくり。

「ならば、しばらくツキを守れ。オレはこのまま魔王のおっさんを討つ。ツキに説教するのは、それからだ。」

こくり。

どこか満足気に頷くと、風魔は風になって消えた。

お前はずっとオレの傍に置くと決めたんだ。
今更、オレから逃げられるなんて思うなよ？

先ほどの部屋に戻ると、軍神も揃って地図を広げて軍議をしていた。
全員の視線がオレに向いているのを感じながらも、小十郎の隣に座る。

「待たせたな。」
「いえ。わたくしたちも、さきほどきたばかりです。」
「前田はどうした?」

今朝開戦前に見たきり、前田の姿は見てない。
「けいじは、にしにむかいました。こたびのおだのうごきがあまりにもふしぜんだったゆえ、おわりのようすをみにいってくれるそうです。」
「うむ。いつまでも姿を見せぬ織田信長。姿を消した森蘭丸。だが、織田の兵に混乱は見られぬ。もしや、織田信長は未だ尾張の安土城に居るのではないかと思うてな。」
軍神の言葉を引き継いで、武田のおっさんが難しい顔で頷いた。

「猿、てめぇ言ったな?魔王のおっさんの姿を確認したと。」
「言った。確かに見た。これは間違いない。」

はっきり言い切る猿が、嘘をついている様子はない。

「ならば、考えられるのは、三つだ。魔王のおっさんは居たが、逃げた。今もこの辺りに居るが姿を隠している。影武者。」

「あれだけ戦場を走り回っても姿を見つけることが叶わず、忍たちも見つけられないということは、姿を隠していることは考えられないでござる！」

真田が力説すれば、猿も頷いた。

「確かにここに織田信長はもう居ないと考えた方が自然だ。」

「なれば、逃げたと？」

「あのだいろくてんまおうが、ですか？」

「一人で撤退する理由がないかと。」

武田のおっさん、軍神、小十郎が撤退の線を否定すると、成実が影武者だよ！と主張した。

「ただの影武者が、あの大軍を動かしているとでも言うのか？」

「朔夜とかいう男なら、できるんじゃないの？」

・・・ほう。

成実、お前はいつも直感で物事を判断しやがるが、今回はその直感に助けられそうだな。

「それが正解だ。」

成実の発言で静まり返っていた部屋に女の声が聞こえ、視線を向ければ軍神の横に跪いているかすがが居た。

「謙信様、織田の軍が退いております。その軍の先頭に、朔夜と呼ばれている男がおりました。」
「そうですか。ごくろうさまでした。わたくしのつるぎ。」
「い、いえ！これくらい当然のことです・・・。」

恒例の二人の世界が始まったのを尻目に、武田のおっさんが腕を組んでうなった。
「撤退を始めたとは、どういう・・・。」
「我らの力を思い知り、逃げ帰るのでありましょう！！」
「そんな奴らなら、苦労はしないでしょ、旦那。」

真田の楽天的な考えに、猿の指摘が入った。

「おそらく、誘いかと。」
「だろうな。」
「で、梵。どうする？」

にやりと成実が笑い、オレも同じように笑い返した。

「当然、追う。このまま尾張まで行って、さっさと魔王の首を獲るぜ。」
「あえて誘いに乗じるか。」

武田のおっさんも、うむと頷いた。

「ツキ殿はどうするのでござるか？」
「朔夜が尾張に向かうのならば、ツキも来るはずだ。それまでは好きにさせるさ。念の為に風魔も護衛につけた。」
「道中は大丈夫でござろうか・・・。」

「ＨＡ！あいつはＳｕｒｖｉｖａｌには慣れてるんだ。問題ねぇよ。それに、少しは苦労して、オレの元を離れたことを後悔しやがれってんだ。」
「うわぁ、梵黒いなぁ。ツキちゃんがかわいそうになってきた。」
「うるせぇよ。さっさと魔王のおっさんの首を獲って、ツキを回収するぞ。」
ニヤリと笑えば、成実はツキちゃん逃げてぇ！など無礼極まりないことを言いやがった。

「うぉぉぉ！！漲る！みなぎるずぉぉぉぉぉ！！」
「うむ！幸村！！後れを取るでないぞ！？」
「畏まりましてございまする！！御館様！！」
「幸村ぁ！」
「御館様ぁ！」
「ゆきむらぁ！！」
「おやかたさまぁ！！」
「ゆきむるぁぁぁぁぁぁ！！！！」
「おやかたさばぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

「はいはい。みんな避難してくださいねぇ。」

どういう理屈かは知らねぇが、嬉々として名前を呼び合って殴り合いを始めた武田のおっさんと真田から、離れるようにと猿がオレ達を部屋から出した。

グァシャァァァァ！！

障子を突き破り、真田が庭の壁まで吹っ飛ばされて、人形の穴が開いた。

「すげぇ・・・。」

初めて見る成実が呆然と呟いた。

「もうさ、修理費とか修理費とか、修理費とかがさ。」

「ええい！男がしみったれた声を出すな！」

「これからは、しおではなく、もくざいをおくることにしましょう。」

「ホント！？助かるよ！」

軍神を拝み始めた猿と、それを引き剥がそうとするかすが。

「いけ！そこだ！ああ、そうじゃないって！」

隣では真田とおっさんの殴り合いを観戦している成実。

「なぁ小十郎。このままオレたちだけで尾張に向かった方が良い様な気がするんだが。」

「政宗様、それはこの小十郎も、思ったり思わなかったりするようなしないような気がしなくもないですが、ここは皆で向かった方が得策かと。」

うちの軍師も少し壊れ始めたようだ。

39　吐露（前書き）

流血描写があります。ご注意ください。

39　吐露

川中島での戦から7日が過ぎ、今は尾張と甲斐の国境の山の中にいる。

明智光秀を殺したあの日、傷を癒すために一度森に身を隠し、翌朝戻って見ると織田軍の姿はどこにもなかった。

伊達、武田、上杉の連合軍も西に向かっていて、ここにはもう織田信長も朔夜もいないんだということは分かった。もし、昨日のうちに織田信長を討っていたなら、連合軍は解散して各国に戻るはずだ。なのに、一緒に動いているということは、おそらく織田信長は軍が進む方向に居るだろう。

西。即ち、尾張の国に。

そんなわけで、私も少し遅れて西に向かうために、山に入ったんだけど・・・。

「ワン！」

「お！今日は鹿か！凄いね白銀（しろがね）、黒金（くろがね）！」

目の前で獲って来た鹿を自慢げに口にくわえつつ、尻尾を全開に振っている銀色と黒色の毛並みの狼たち。

山越えの途中で怪我をしている所を助けたらついてきた、この狼たちと一緒に今は尾張の安土城を目指している。

火を熾して捌いた鹿を火にかけて、残りを白銀と黒金にあげると、

二匹はすばらしい勢いで食べ始めた。
白銀はメス。黒金はオス。どちらもライオンくらいにでかい。
白銀が猟師の罠に嵌っていた時、黒金はその傍に居て必死に助けようとしていた。
はじめのうちは、噛み付こうとしたり引っかこうとしたりしていた二匹だけど、体を強化していたから怪我もしない私に尻尾を巻いて怯え、それから助けて治癒したら服従を示すようになった。
昔子供の頃家で白銀と黒金という名前の犬を飼っていたから、なんだかほっとけなくて助けただけだったのに、二匹はそれからずっと私に着いて来ている。

なのでこの狼たちも、白銀と黒金と名前をつけて呼んでみたら、不思議なことにそれぞれきちんと反応してきたので驚いた。
まるで最初から白銀と黒金という名前だったといわんばかりだった。

そんなこんなで、奇妙な一人と二匹の旅も、早五日を過ぎた。
「さて、そろそろ尾張に入る頃だと思うんだよね。ええと、この辺りは木曽って言ったっけ。」
「ウォン！」
私の独り言に、黒金が返事をした。
「このまま山を下ると、木曽川に出るから、そこを下っていけば、良いはずなんだ。」
「ワン！」
これは白銀。

ううーん。君たちが居てくれるおかげで、独り言も虚しくなくなるよ。ありがとうね。
焼きあがった肉を食べ終わると、体を休めるために横になる。

すかさず白銀と黒金が両脇を挟むように寝そべってくれるので、寒さなどまったく感じない。
「そろそろお風呂入りたいなぁ。一昨日川で体を拭いただけだもんなぁ。」
「くぅーん・・・。」
ぺろんと頬を舐めて慰めようとしてくれる白銀の頭を撫でて、目を閉じる。
「川に出たら、水浴びするか。」
今が夏でなくて良かったなぁ・・・。
そう思いながらゆっくり眠りについた。

翌朝、山を下っていると、微かな殺気を感じて立ち止まった。
黒金と白銀も止まって低く唸り声を上げている。
腰の鋼糸に手を伸ばして、いつでも使えるようにしながら様子を窺っていると、上から何かが飛んできた。
はい、敵確定。

飛んできたものを避け、鋼糸の先端を気配に向かって投げると、小さな悲鳴が聞こえた。
そのままぐいっと引き寄せると、首に鋼糸が絡まった、黒尽くめの忍が落ちてきた。

「あなたどちらの人？」
「・・・・。」
ま、そうでしょうね。聞かれてほいほい答える忍なんか、居るわけないか。

「あなた、私が明智光秀を殺した女だって知ってるわね？」
「・・・・・・。」
そうか。その無反応っぷりが、ＹＥＳだといっているようなもんなのよ。

「織田信長は安土城にいらっしゃるのかしら？」
「・・・・・・。」
「朔夜は一緒に居るの？」
「・・・・・。」
「そう。ならば、御使いを頼めるかしら？」
「？」

初めて忍に戸惑いという感情が表れた。
「朔夜に伝言を。会いに行くから、逃げるなと。」
そう言って鋼糸を外してやると、忍はふらつきながらも立ち上がり、憎憎しげに私を見た。
「その様な伝言は無意味。」

せっかく、命は助けてあげようと思ったのに。
素早い動きで切りつけて来た忍をかわすと、鋼糸を操って忍の首に再び引っ掛け、くいっと引っ張った。
「ぐ・・・ぎゃ！！」
刃物と化した鋼糸が容易く忍の頸動脈を切り裂き、血飛沫が辺りに飛び散った。

生暖かい液体が顔に飛んできて、頬を垂れ落ちるのを感じて、ぐいっと拭った。
鮮やかな赤に染まる手の甲を見ても、もう何も感じない。

明智を殺してから、何人目だろうか。
「黒金、それは食べちゃダメ。」
血が付着した鋼糸を、事切れた忍の服で拭って、匂いを嗅ごうとする黒金を制止させる。
大人しく従った黒金の頭を撫でて、辺りの様子を窺う。

どうやら単独行動だったらしく、他に人の気配は感じられない。
「しかし、今人に会ったら、相当スプラッターな状況なんだろうな・・・。」
溜息をついて立ち上がると、白銀が私の服の裾を銜えて引っ張った。
なに?どうした?
服を離して、とてとてと数歩歩くと、振り返ってこちらを見ている。
着いて来いってこと?

少し歩いては振り返る白銀の後を着いていくこと二時間。
「ふおぉぉぉぉ!!」
目の前には湯気の立ち昇る温泉がありました。

「白銀凄いよ!」
天然１００%、源泉掛け流し、完全露天温泉。しかも、でかい。
こんな所に人は来ないから、完全に自然にできた温泉だ。
恐る恐るお湯に触れて見ると、少し温めだけど問題なく入れそうだ。
来ていた服を脱いでお湯に浸けて汚れを洗い落とすと、固く絞って岩の上に乗せる。

天気も良いし、そのうち乾くでしょう。

それから湯に入って、体に付いた汚れを落とす。

「くはー生き返るぅ。」

白銀と黒金は入る気がないのか、服を乾かしている辺りで寝そべっていた。

聞こえるのは、鳥の声と、風が木を揺らす音、お湯が岸辺に打ち付けられる音だけ。

川中島で明智が死んだという知らせは、もう織田側にも連合軍側にも伝わっている。

そして、殺したのが私だと言うことも。

あれから一度だけ、伊達の忍、黒脛巾組の一人に会った。

私のことを知っていたらしく、政宗や小十郎が探しているから一緒に行こうと言ってくれた。

申し訳ないと思いつつ、気を失わせて安全な場所に寝かせてから、その場から逃げ出した。

自分の復讐の為だけに人を殺す私が、自分の守るべき民のために戦をする政宗たちと一緒になんか居られるわけがない。

これは、私が決めた、私の為の戦いだ。

政宗たちを巻き込むわけにはいかないんだよ。

あの日の夢をまた見るようになった。
家族が殺され、一族全てが殺されたあの夜の夢。

それがどんどん私の心を侵食していく。
なぜ皆を殺した?なぜ私だけ殺さなかった?
一緒にあの時殺してくれれば・・・・。

アナタヲ憎マズニ済ンダノニ・・・・。

頭まで湯に静めて水面を見上げると、万華鏡のように綺麗な光の模様が映っている。
こぽり・・・。
口から空気が零れて、泡となった。

こぽ、こぽ・・・・。

少しずつ息苦しくなってくるけど、そのまま水面を見上げ続けた。
このまま、水に溶けて消えられたら、楽になれるのかな・・・。

こぽ、こぽ、こぽ・・・・。

何もかもを放り出して、死んじゃったら、もう終わりにできるのかな・・・。

こぽ・・・・・。

でも、そんな終わり方、しちゃだめなんだ。
そんな終わり方を、したいわけじゃない。

どぼん!どぼん!と言う音が水を伝わって聞こえてきて、白と黒の塊が必死にこちらに向かってくるのが見えた。
ぐいっと鼻先で体を押し上げられて、無理矢理水面に押し上げられる。
え?ちょ!?

「げほっ!げほっ!」
驚いた拍子にお湯を飲んでしまって、激しく咽た。
「ウォン!ウォン!」
「ワン!ワン!」

唸り声を時折混ぜながら、白銀と黒金が私に向かって吠える。
「ちょ、まって、大丈夫、大丈夫だから。こんな所で自殺なんかしないって。」

鼻にまでお湯が入って、かなり痛い。
二匹に押されるように岸に上がると、荷物の中から手ぬぐいを出して顔を拭いた。

あー、苦しかった。

未だに唸っている白銀の頭を撫でると、苦笑をもらす。
「白銀も黒金も、本当に頭が良いね。まるで私の心が分かってるみたいだ。」
「ワン！」
「うん。心配させてごめんね。」

体の水分を拭いて、干しておいた服の様子を見ると薄い下着は乾いていたけど、厚手の上着とズボンはまだ生乾きだった。
裏返してもう一度日の良く当たる岩の上に乗せると、下着を着て白銀と黒金の間に座った。

「私の中にね、もう楽になりたいっていう気持と、朔夜だけは許せないって気持があるの。」
擦り寄ってくる二匹の首に腕を回して抱きつくと、お日様の匂いがした。

「今でも、家族を殺して私を裏切った朔夜が憎いと思う気持があって、どうしてもそれを抑えることができないから、こうして政宗の元を離れて独りになったの。」
じりじりと低温火傷のような痛みが、心を締め付ける。

「・・・弱いのかな。私。全てを忘れて政宗たちの所に戻って、ぬくぬくと幸せで楽しい毎日を過ごせたらとも思っちゃうの。」
心が凍えきらないのは、まだ奥州で過ごした日々を暖かく感じるから。

「でも、戻れないの。朔夜が居るから。朔夜は私の大切に思うものを全て壊す。そして、私に自分を憎めという。だから、朔夜を殺さ

ないと、私は・・・・。」

憎いから殺したい。もう全てを忘れて政宗の所に戻りたい。でも、朔夜を殺さないと、戻れない。朔夜を殺した自分は・・・・戻れない。

もう一度ゼロからやり直せたと思った人生だけど。
また前の世界と同じように、人の血で汚れてしまった。

ほんの少しだけ滲んだ涙を無理矢理飲み込んで、白銀と黒金の背中を撫でた。
「白銀と黒金が一緒に居てくれて本当に良かった・・・。」
「くぅ～ん・・・。」
「くぅ～ん・・・。」

もう決めたの。朔夜を殺して、全てを終わらせるって。
戻れないなら、進むしかないの。

39　吐露（後書き）

４０　貫く想い

海津城を出発して１０日。
ようやく美濃を抜け、尾張に入った。

今夜の野営地を決め、質素な夕餉を済ませて、また明日の為にそろそろ眠りに就こうかという時間。
天幕を出て空を見上げれば、月のない夜空に、星が無数に散らばっていた。
ただ黙って見上げていると、後ろに慣れた気配を感じた。

「政宗様、いかがなされましたか？」
小十郎が幾分声を潜めて、オレの横に並んで尋ねた。
「今夜は月がねぇな。」
「葉月も終わり、明日より長月ですから。」
朔日か。
中秋からもう半月たったのか。

ツキも今頃は寝ているのだろうか。
こんな明かりのない夜に、今どこで何をしているだろうか。

時折風魔が報告に来る限りでは、体調に問題はなさそうだった。
途中でオオカミを二匹拾ったとの報告もあった。
無事ならばいい。

「明日も一日移動になるでしょう。そろそろお休みください。」

「ああ。」
小十郎の言葉に頷くと、もう一度空を見上げてから、天幕に戻った。

月のない夜に動くのは危険。
そう判断して川のすぐ近くの木の下で、白銀のお腹を枕に、黒金の尻尾を掛け布団にして、寝転がった。
見上げた空には、沢山の星があって、どれがどの星座なのかなんてわからないくらいにすごい。
「政宗達はいまどの辺だろうねぇ。」

向こうは大軍で移動だから、私の方がもう追い抜いちゃってるのかも。
いつもの政宗らしく、元気でいるといいな。
最後に見た笑顔を思い出しながら、静かに目を閉じると、すぅっと眠りについた。

「逢いたいと願うならば、逢えばよかろうに。」

眠りに落ちる瞬間、誰かの声が聞こえた様な気がした。

ふと気が付くと、小高い丘に立っていた。
この世界に来る前の、本来の姿で。
空を見上げると、蒼くはない大きな満月が昇っていた。

届きそうな気がして、そっと手を伸ばすと、強い風が吹付けた。
思わず目を閉じて風から顔を背けると、背後に人の気配を感じた。

風がやんで、気配のする方を見た。
「うそ・・・。」

目の前で驚いた顔で固まっている政宗がいた。
別れた時と同じ、鎧に蒼の陣羽織姿。

ああ、これは夢か。
ちょっと笑えば、政宗もホッとした様に笑った。

「飯はちゃんと食ってるのか？」
やけに優しい気がするのは夢だからかな。
「食べてるよ。三日前は温泉も入ったし。」

「うらやましい話だな、おい。」
「ちゃんと食べて、ちゃんと生きてる。だから、安心してよ。」
もう、私のことは忘れて、自分のすべきことを成し遂げてよ。
そう言おうとして、顔を上げたら、目の前が蒼一色に染まっていた。
え？
「オレから逃げようなんざ、１００年早ぇ。」
気が付いたときには政宗の腕の中だった。
成長してもまだこんなに身長差があるのかと、現実逃避的なことを考えていると、頭の上で溜息が零れた。
「朔夜を殺して、お前の戦いが終わったら、オレの所に帰って来い。」
「政宗？」
なにを・・・？
思わず見上げた政宗の顔は、いつになく真剣で、哀しげだった。
「許せないなら、許さないで良い。憎いなら、憎めば良い。どれだけの人間を殺そうが、オレはお前を否定したりはしない。だから、逃げるな。オレから離れるな。」
「でも・・・。私の手はまた真っ赤になっちゃった。心の中だって、憎しみでドロドロ。」
「そんなのは、誰にだってある。オレにだって。」
そういうと、政宗は右目の眼帯をそっと手で押さえた。
「この右目を失ったせいで、母上はオレを蔑んだ。弟はオレを哀れむ目で見た。オレはあの日母上を失った。母上が、弟が、心の底か

ら憎かった。」
「政宗・・・。」
苦しそうに話す政宗は、泣きそうにも見えた。
「父上だけが、オレを認めてくれた。だが、その父上をオレは敵もろともに、殺した。」
政宗の両親を米沢で見たことがなかったのはそういう事情があったのか。
お母さんのことは喜多さんから、少しは聞いていたけど・・・。
「オレは奥州の民の為だけに戦ってるんじゃない。弟よりも、父上よりもオレが優れていることを母上に見せつけてやりてぇんだ。そのためならば、父上を見殺しにだってした。」
「政宗！」
政宗を力の限り抱きしめて、私は叫んだ。
そんな私の頭を優しく撫でて、政宗は微笑した。
「なぁ、ツキ。この戦国の世は、どいつもこいつも自分の想いを貫くために、戦っている。その想いに良いも悪いも、綺麗も汚ねぇもねえ。お前は一族を殺した男を殺したいという、自分の想いを貫くために戦っている。オレは母上を見返したいがために、戦っている。オレもお前も、踏み越えてきた人間の血に塗れてな。」
もう泣かないと決めたのに。
もうこの腕にはすがらないと決めたのに。
溢れ出した涙で、政宗の顔が見えない。

「オレはお前を止めない。納得するまで戦え。自分の力で成し遂げなければ意味がないからな。だが、これだけは約束しろ。必ずオレの元に帰って来い。」
「うん。・・・・うん。」
「前に言ったな?迷いがある者が戦場に立てば、命を落とすと。決めたのならば迷うな。」
「うん。」

頷いた私の涙を大きな暖かい指がそっと拭った。

帰りたい。
政宗たちの所に。

全てが終わったら。

「帰る。それで、また皆でお花見して、山菜採りに行って、蛍見て、あちこち遊びに行って・・・。」
「そうだな。」
「政宗が大好きな奥州を見て回りたい。」

お母さんを見返すためだけじゃないことも、お父さんを自ら望んで見殺しにしたわけじゃないことも、ちゃんと分かってるよ。

政宗の選んだ一つ一つに、苦渋があったはず。
それでも、選んで勝ち取ってきたから、今の政宗がいるんだね。

私も、そんな風に強くなれるかな。
ううん。なりたい。

そっと眼帯に手を伸ばすと、政宗は少しだけぴくっとなったけど、
前かがみになってよく見えるようにしてくれた。
伸ばした手が、淡く光っていて、私の輪郭が少しずつぼやけ始めた。

「夢から覚めるのかな・・・。」
「かもな。」

至近距離で見る政宗の顔。
「政宗、ありがとう。」

そう言ってから、右目にそっとキスをする。

「な・・・・!!」

焦ったような、驚いたような、一瞬で真っ赤な顔になった政宗に、
思わず噴出す。

「ツキ!!」
「あははは!」

やがて視界は真っ白に染まって、僅かの間の後。

「ワン！！」

白銀の肉球パンチで、目が覚めた。

「白銀、もうちょっと優しく起して下さい・・・。」

夢から覚めれば体はまた子供のもので、現実は何一つ変わってないけど。

何かが一つ心に生まれたような気がした。

目が覚めると、天幕の中だった。
「政宗様、おはようございます。」
「あ・・・ああ。」
いつもどおり起しにきた小十郎から、さりげなく手で顔を覆って隠した。
ツキめ・・・。
夢だというのにやけにＲｅａｌな感触に、顔が上げられねぇ。
「政宗様?どこかお加減が?」
「何でもねぇ。」
天下を獲って民の暮らしを安定させて母上に認められる時には、ツキお前に隣に居て欲しいんだ。
「さっさと飯食って出発するぞ。」
「はっ。」
まずは、魔王の首を獲ってからだ。

「まったく、手のかかる娘だ。」
「そうして人は輝きを手にするものだと、主も申しておられたではないか。」
「確かに。」
「竜の宝玉を見守ることこそ、我らが務め。」
「我らが主の望むままに。」

４０　貫く想い（後書き）

本作品は、史実を都合よく摘まんで加工しております。
ご了承ください。

41　魔王謁見（前書き）

お待たせして申し訳ありませんでした。

４１　魔王謁見

ようやくたどり着いた安土城は、とても立派な城だった。
ものすごく高くて、強固な作り。
それが第一印象だった。

すでに戦は始まっていて、だいぶ離れた場所からでも、織田の兵と連合軍の兵がぶつかり合う音が聞こえる。
安土城を正面に見て、左が赤の武田、右が水色の上杉、真正面が蒼の伊達。
時折銃声が聞こえる中、連合軍の包囲網がじりじりと狭まっているのが見えた。

相変わらず信玄公や幸村の炎は災害級だな・・・。
正面の蒼い光は政宗かな。
またずいぶんと敵陣の奥深くに入り込んでるなぁ・・・。

「ウォン！」
戦の行方を見守っていると、黒金（くろがね）が牙を剥いて私の後ろに向かって吠えた。
後ろを見ると、弓を構えた子供がこちらを睨みつけていた。
確か、蘭丸って言ったっけ。

「Ｅｘｐａｎｄ　ｔｈｅ　ｓｈｉｅｌｄ．Ｌｅｖｅｌ　５０．（シールド展開。レベル５０。）」
つぶやいた途端、１０本の矢が一気に飛んで来た。
シールドの手前で全て弾かれて燃え尽きる矢を見て、蘭丸は益々怒

りを露わにする。

「お前が、光秀を殺したんだな！？」

「それがどうした？」

「許さないぞ！」

許さない？

殺すか殺されるかしかない、戦場で戦って私が勝った。

私が生きて、明智光秀が死ぬのは必定でしょ？

この子供は、そんなことも分からずに、戦場で人を殺しているの？

ああ、やっぱりこの子供は私を無性に苛立たせる。

唸り声をあげる白銀（しろがね）と黒金の頭をひと撫ですると、銃を取り出してスライドを引いた。

「命の奪い合いで負けたら死んで、勝ったら生き残るのは当然。明智光秀は私に負けた。だから、死んだ。お前も私と殺り合うならば、死ぬ覚悟を持って挑んで来い。」

言い終わると同時に、蘭丸の右頬目掛けて一発銃を撃ち放った。

「っ！」

おそらく、この世界の物よりも、私の銃の方が遥かに殺傷力は高い。

飛距離も比べ物にならないだろう。

狙い通り右頬を掠った痛みに、蘭丸は目を見開いた。

「さて、それでどうするの？死ぬ？」

わざと優しく言ってやると、蘭丸はかぁっと顔を赤くした。

「ば！バカにすんな！」

そう叫ぶと、弓をこちらに向かって放った。
さっきとは違い、帯電した矢がシールドを突き抜けて、私のすぐ脇を数本すり抜けた。
ふーん。私のシールドを突き抜けるくらいの力はあるのね。

「上等。」

シールドを解除して、瞬発力と動体視力を上げると、飛んでくる矢を除けながら一瞬で蘭丸の懐に飛び込む。

「はやいっ!?」
「何言ってんのよ。明智光秀はこのくらいのスピードは軽々防いでいたわよ。」
銃口を額に突きつけると、蘭丸は真っ青な顔で小刻みに震えた。
「死ぬ覚悟がないくせに、殺人武器(そんなもの)持ってんじゃないわよ。」
呆れて言えば、蘭丸は悔しそうに唇を噛みしめた。

「殺せ!殺せばいいだろ!」
「そんなに死にたいなら、望み通りに。」

トリガーにかけた指に力を込めようとした時、私のものではない銃声が放たれた。
はっとするのと同時に、弾丸が私と蘭丸の間を通過した。

「そのくらいにしておいていただけないかしら?」

女の声が聞こえ、そちらを見ると、着物姿のセクシーな女の人が両手に銃を構えたままこちらを見て居た。

スリットが際どい所まで入っている黒い着物には、見事な蝶の柄が描かれている。

「どちら様？」

「織田信長が妻、濃と申します。」

濃姫？確か、美濃の国の姫だっけ。

信長の妻ねぇ。

こっちの世界の本物のお姫様を初めて見たけど、二丁拳銃ぶっ放すなんて凄いな。

「濃姫様がわざわざこんな戦場に何のご用？」

「そこの未熟な子供を連れ戻しに。」

「これは、私に勝負を挑んで負けた。死は免れない。そう思わない？」

蘭丸から銃口を外す事なく、にっこり笑って言ってやると、濃姫は困ったわねと呟いた。

「それでは、取引をいたしません？その子を返して頂けたら、朔夜殿の元へご案内いたしましょう。」

この姫様、私が誰か知っているわけね。

ま、殺して得する相手でもないし、教えてくれるってなら手間も省けるし？

ただ、その取引は正当に交わされるかどうか？ってことね。

いつでも撃てるように警戒しつつ、蘭丸から離れた。

「取引成立、ね。蘭丸君、お行きなさい。」
にこりと笑った濃姫は、銃を下ろすと太腿のホルダーにしまった。
美女は何をしても様になっていいですね。
うらやましいスタイルだな。

ちょっとだけいじけつつ私も銃をしまうと、蘭丸は悔しそうに私と濃姫を見比べた後、何も言わずに走り去った。

「では、ご案内いたします。」

そのまま背を向けて歩き出す濃姫。
その後ろを、白銀と黒金を連れて数歩離れてついていくと、戦をしている場所を避けてだいぶ大回りをして、安土城の裏手にでた。

そのまま中に入る濃姫の後に続くと、山の上に城があって、城へと続く階段が伸びているのが見えた。
うわー、攻め上るのが大変そうな作りだなぁ。
毎日通ってる人はさぞ足腰が鍛えられるんだろうな・・・。

「こちらです。」
濃姫はそのうんざりするような階段を示した。
「げ・・・ここを登るの？」
「ええ。それが何か？」

ううう、そのスタイルもこの階段を登って作られたの？
くそー、登ってやるわよ！

人気のない階段を登って、城の内部に入り、更に中の階段を登って、ぐるぐる回って、また登って、迷路のような城内を歩くと、やがて最上階の部屋にたどり着いた。
暗い。じめっとしてる気がする。
視覚ではなく、感覚でこの部屋は気持が悪い。
そして、中に居たのは、白い鎧を纏った男。

いやね、階段を登り始めた時点で、なんか嫌な予感はしてたんですよ。

「上総介様、ご所望の娘を連れてまいりました。」
朔夜じゃないんかい！
何で織田信長とご対面なんだよ！

「話が違くない？」
チラリと濃姫を見ると、彼女はクスッと笑った。

「朔夜殿は今前線で戦ってるわ。こちらで待っていれば、独眼竜の首を持って現れるわ。」
「政宗が朔夜の首を持って現れる確率の方が高いわよ？」

お返しにフンッと哂ってやれば、濃姫はギッと私を睨みつけた。
ふふん。美人な顔が台無しね。

「濃、これが、彼奴の言っていた女か？」

「はい。」

やけにゆっくりした話し方で、信長は濃姫に尋ねた後、こちらを見た。

感情というものが欠落した、闇そのものの様な眼が、じっとこちらを見ている。

この人、本当に人間？

体温を感じない。心を感じない。

人形のような、でも圧倒的な存在感は人形ではありえない。

白銀と黒金も唸りながら、いつでも跳びかかれるように姿勢を低くした。

「あなたが織田信長？」

「いかにも。」

肘をついてこちらを見下ろしている信長。

それだけで、全身から汗が吹き出てくる。

下っ腹に力を込めて、深呼吸をすると正面から信長を見据えた。

「なにか私に用？」

「彼奴が探している女が如何程のものかと思っただけよ。」

「大したことなくてすみませんね。」

肩をすくめれば、信長は表情を変えることなくふんっと哂った。

感じ悪いな！

「ならば、もう用はないわね？ここに間もなく政宗が来るから、大人しく待ってなさいな。」
それじゃね、と部屋から出ようとすると、濃姫がこちらに銃口を向ける音が聞こえた。

「ここで大人しく待つのは、あなたよ？」
「Ｅｘｐａｎｄ　ｔｈｅ　ｓｈｉｅｌｄ．Ｌｅｖｅｌ　７０．Ｅｎｈａｎｃｅｄ　ｂｏｄｙ．（シールド展開、レベル７０。肉体強化。）」
中を抜けて行くのは色々めんどくさそうだ。外から行こう。

濃姫を無視して、天守閣を囲む柵から直接外に出ようと足を出した途端、背後から銃声が聞こえた。
シールドを突き抜けて、私の左腕を掠める弾丸。
へぇ。この人も属性を持っているのか。

素早く腰の銃を抜いて、三発を後方へ撃った。

「きゃぁっ！！」

濃姫の悲鳴が聞こえ、肩越しに振り返れば、右肩を押さえてうずくまる姿があった。
信長は微動だにしないどころか、苦しげに呻く濃姫には一瞥をくれることもない。
ただ私を見ているだけだった。

朔夜も大概だと思うけど、信長は異常だ。
人としての感情が欠落している。

自分の妻が撃たれたっていうのに、無反応ってどういうことよ。
こんなのが天下を獲ったら、確かにヤバイわ。

振り返ったまま動かない私に向かって、信長は猫を追い払う様に手を振った。
「去ね。お前にもう用はない。」

本当に見てみたかっただけなのかよ!!
なんて自分勝手で、冷血漢なんだ!

「一つ聞くけど、朔夜はどこ?」
「余の知ったことではない。」

あ、そ。
まったく、こんな所まで連れてこられて、いい迷惑だ。

柵を乗り越えて屋根に降りると、そこから下に向かって一気に飛び降りた。
シールドと強化した体のおかげで、数階分を落ちても問題なく着地する。
白銀と黒金も難なく着地して、私の横に張り付いた。

立ち上がってもう一度天守閣を見上げれば、信長がこちらを見下ろしていた。
が、やがてマントを翻して中に戻っていった。

織田信長・・・か。

42　相容れぬ者

安土城に到着すると、魔王のおっさんの軍勢は、すでに陣を展開して待ち構えていた。
事前に打ち合わせた通りに、武田、上杉、伊達の軍が三方に散って織田軍を一気に囲む。

右側はその軍神の所。
左側は武田のおっさん。
正面はオレの所が展開して、同時に攻め入る。

魔王がここに居る事は、前田が確認した。
その時にやられた傷は決して浅くはなく、今上杉のところで手当てをしている所だ。
あいつをあそこまで痛めつけられる奴なんざ、そう滅多にいねぇ。
魔王のおっさんがここに居るのは間違いねぇ。

「小十郎、行くぜ？背中は任せたぞ。」
「承知！」

さぁ、Ｐａｒｔｙを始めようぜ。

「Ｈｅｙ，Ｇｕｙｓ！！Ａｒｅ　ｙｏｕ　ｒｅａｄｙ！？」
「Ｙｅａａａａａｈ！！」

「遠慮はいらねぇ！思う存分楽しめよ！？」
「何処までもついて行きやすぜ！筆頭！！」
「川中島は手応えなかったからね！今日は思いっきり行くぜ！？」

成実も兵士共も良い面構えをしてやがる。
今日は楽しめそうだな。

「魔王の首を獲るのは、このオレだ！」

馬の腹を蹴りつけて一気に織田の陣地に向かって走り出すと、後ろに小十郎や成実兵士等も続き、向かってくる雑魚共を蹴散らす。
ほぼ同時に武田も上杉も攻め入り、戦が始まった。

「ＨＥＬＬ　ＤＲＡＧＯＮ！」

鉄砲隊が一斉に火を噴くのと同時に、こっちも技を出して弾を全て弾き飛ばし、そのまま中央を突破。
群がる足軽共を蹴散らし、城門目指して突き進む。

「政宗様！無茶をなさいますな！」
後ろで小十郎が叫んでるが、無茶をしてるつもりはねぇからな。
どんどん行くぜ！！

「邪魔だ！どけぇ！！」
城門を固める足軽ごと門を突き破ると、一気に中に雪崩込んだ。

嬉々として暴れまわる成実と、背後の足軽共を切り伏せる小十郎に後ろは任せて、馬を下りると辺りを見回した。

さて、魔王は何処に居やがんだ？

時々現れては斬りつけて来る雑魚を斬り捨てながら奥へと進むと、本丸の手前で一人の男が現れた。

「君が、伊達政宗？」
年齢はオレの少し上くらいか？
細身で、顔の造作は整っている方だろう。

目元がツキにとても似ている。

「お前は朔夜だな？」
「はじめまして。だね。」
「宜しくはしたくねぇな。」

ふんっと鼻で哂ってやれば、朔夜は肩をすくめた。
「オレに何か用か？」
「会ってみたかっただけさ。あの子を保護したこの世界の独眼竜に。」

なるほどね。会ってみたかったと。
ならば、その隠しようのない殺気はどう説明するつもりだ？

「会って、オレを潰そうって魂胆か？」
「そのつもりは始めはなかったんだけどね・・・。」

そう言うと、朔夜はすっとオレの胸辺りを指で示した。

「君、あの子の加護をもらった？」
「加護？」
「そう。結晶石を貰っただろう？」

ああ、あれか。
今も懐にしまってある蒼い石。
左手で懐を押さえると、朔夜は目を細めた。

「君はあの子に相当大切にされているんだね。」
「あ？」
「その石は一年に一度だけ、祈りと願いを込めて作る石。誰にでも渡せる物じゃない。」

そうなのか？
初めて人に贈ると言っていたな。
そうか、そういうものだったのか。

「・・・気に入らないな。あの子の全ては、僕に向いていなければならないのに。」

緩みそうになる頬に力を入れていると、苦々しい表情の朔夜がオレを見据えた。
あいつの全て、だと？

「奇遇だな、オレもてめぇが気にいらねぇ。」

あいつはてめぇに囚われて、長い間苦しんだ。
そして、今もまだ苦しんでいる。
もうあいつを解放してもいいんじゃねぇのか？

「僕とあの子の間に入り込むものは、全て排除する。」
「上等だ！吠え面かくなよ！？」

ツキ、悪りぃな。朔夜はここでオレが殺る。

こいつの前を素通りする事はできねぇ。
魔王の前に、こいつだ。

刀を頭の横の高い位置で構える。
「奥州筆頭伊達政宗、推して参る。」

「独眼竜、死んでもらうよ？」
後ろに手を回し、腰につけていた見たことがない形の懐剣のような物を二本取り出した朔夜は、両手にそれぞれ逆手で掴んだ。

「はぁぁぁぁ！！！」

正面から得物を前に突き出すようにして、突っ込んでくる朔夜。
それを刀で受けると、右脇から蹴りが飛んで来た。
とっさに右腕で防御して直撃は避けるが、打撃の重さに腕が痺れた。

「くっ。」

こいつ、型がツキと同じ？
鈍く痺れる右腕で朔夜の足を振り払い、バランスをわずかに崩した所を左手で持っていた刀で押し込む。

「はっ！！」
朔夜の刀を弾き飛ばし、倒れかけた所を返す刀で斬り付ける。
「危ないなぁ。僕はあの子と違ってそんなに反射神経は良くないんだよねぇ。」
斬ったはずの人間の声が、後ろから聞こえた。
こいつ、忍か？
目の前には何もなく、背後には銃を構えた朔夜の姿。
「あの子は体内の機能を高める術が得意。僕は幻影、幻覚が得意なんだ。川中島でも、信長の幻影に皆よく引っかかってくれて楽しかったよ。」
「なるほどな。いくら探しても魔王のおっさんの姿はなかったわけだ。」
「あの子に光秀を殺させる事が目的だったからね。わざわざ信長を連れ出す必要はなかったんだよ。」
悪戯が成功したと喜ぶガキのような朔夜を、油断なく刀を構え直して見据えた。
「なぜ、ツキに明智を殺させた？」
「だって、君の所であの子はすっかり丸くなってしまったんだもの。僕は、僕に向けるあの子の闇に染まった目が一番好きなんだ。綺麗なんだよ。とても。」
ふふふっと笑う朔夜。
この野郎・・・。
人を殺したことで、どれだけあいつが泣いたか知ってるのか？

どれだけ苦しんだのか、どれだけ悩んでいたのか、どれだけ怯えていたのか！！

「てめえは許さねぇ！地獄へ落ちろ！！」

「奇遇だね。僕も君が気に入らない。死んでくれよ。」

朔夜の指が引き金に掛かるのと同時に、走り出した。

一発、二発、三発と銃声が響くが、当たらない。

「ＭＡＧＮＵＭ　ＳＴＥＰ！」

雷帯びた突きが朔夜を捉える瞬間、背後に殺気を感じた。

「学習能力が無いんじゃないかな？」

しま・・・・！！

パァン！！

四発目の銃声が、すぐ後ろで聞こえた。

・・・・・？

痛みはない。撃たれたわけじゃなさそうだ。
今何が起こった？

振り返ると、銃口をこちらに向けて驚愕を浮かべる朔夜がいた。

「どうして？」

掠れた呟きは、オレの視線より下に向けられている。
つられる様に視線を下げると、忍装束の女が蹲っていた。

まさか・・・。

43　どうして？

信長の所を離れた後、どこをどう行ったもんだか分からなくて、適当にうろついていると、白銀（しろがね）と黒金（くろがね）が突然走り出した。
どうしたの？

二匹の後を追うと、前方から銃声が聞こえてきた。
誰かが戦っている！
気配を消してそっと覗き込むと、そこには政宗とかなり若返っているけど朔夜の姿があった。

「ＭＡＧＮＵＭ　ＳＴＥＰ！」
政宗がすさまじい突きを繰り出す先にある朔夜の姿は幻覚。

考える前に足が動いていた。
蒼い背中に向かって銃を構える朔夜。

「学習能力が無いんじゃないかな？」

間に合え・・・！！

パァン！！

銃声と、政宗の背中に縋り付くのと、どちらが早かったのか。

「どうして？」

呆然とした朔夜の声がして、ようやく自分がまだ生きていることを知った。

次に、右の脇腹に微かな痛みを感じた。

私が飛び出したことで、驚いて的を外したのか、弾は掠ったくらいですんだようだ。

「ツキ・・・・？」

呆然とした政宗の言葉に、私は苦笑しながら立ち上がった。

多少血は流れているが、動けないほどのものではない。

「大丈夫。」

青褪めた政宗に笑いかけると、はぁぁぁぁと安堵の溜息をついた。

「肝が冷えたぜ。」

「それはこっちのセリフだ。背中を守るはずの小十郎はどうしたのよ。」

「軍の指揮をおし・・・任せている。」

今押し付けてるって言おうとしなかったか？

ジト目を向けると、さっと目をそらした所からも、確信犯的に置いてきたんだな。

私の視線に耐え切れなくなったのか、政宗はがしっと私の両肩を掴むと、じっと見つめてきた。
「ツキ、この戦が終わったら、お前に話がある。」
は？なに？
真剣な目で見つめられて、思わず顔が赤くなる。
「オレと、小十郎と、ああ、それからきっと喜多も参加したがるだろうな。」
・・・そ、それって・・・・・。
もしかして・・・・。
今度はさーっと顔が青くなった。
「オレは言ったよな？大人しく米沢に帰れと。」
話って、説教か！！
喜多さんの説教・・・！！
勝っても負けても、死亡フラグ！！
ガクブルする私を満足そうに見た後、政宗は私の後方を睨みつけた。
「必ずあいつに勝て。いいな？勝ったら説教は免除だ。」
「それは何が何でも勝たなきゃね。」
くすっと思わず笑ってしまいながら、政宗と同じ方向に目を向ける。

半年振りに見る朔夜は、私と同じように若返っていたのか、家族を殺したあの時とほぼ同じくらいの年齢に見えた。
手にしたサバイバルナイフを玩びながら、私と政宗を眺めている。
その目はあの頃と変わらず、暗い狂気が潜んでいる。

だめだ・・・。やっぱり、どうしてもあふれ出てしまう。
憎しみが、恨みが、悲しみが、悔しさが。

もう少しだけ堪えろ。
政宗を送り出さなきゃ。

「政宗、織田信長は天守閣にいた。そっちも必ず勝ってよ?アレはヤバイ。天下獲らせたら、この国滅ぶよ。」
「任せとけ。」
にやりと笑う政宗はいつもの政宗で、無条件で信頼してしまえるから不思議だ。
まぁそうでなきゃ、あの連中のトップはやってられないんだろうけど。

「まぁぁさぁぁむぅぅねぇぇどのぉぉぉ!!」
砂煙を上げながら、ものすごい勢いで突進して来る赤が見え、政宗がやれやれとこぼした。
「追いつかれちまったか。」
あっという間にたどり着いた幸村は、息切れ一つしていない。
すごいな。どんな鍛え方したらそうなれるんだろ。

「ツキ殿！！」
「や。」

私に気が付いて目を丸くする幸村に、片手を上げて挨拶する。
「ツキ殿も一緒に行くのでござるか？」
「いや。」
幸村の問いに、政宗が苦虫を噛み潰したような顔で否定した。

そう。私にはやることがあるからね。

「私はここに残るよ。さ、二人共もう行かなきゃ。」
不思議そうな顔をしている幸村に言うと、政宗もそうだなと答えた。

「そろそろ魔王退治に行くぜ？遅れんなよ？真田幸村！」
「望む所でござる！！」

「武運を。」
みなぎるぁぁぁぁぁぁっ！！と叫ぶ幸村を軽く無視して、私は政宗の懐を叩いた。
「お前もな。」
そう言って朔夜を一瞬睨みつけたあと、ニヤリと笑った政宗は、屈みこんで私に軽く触れるだけのキスをした。

なっ！！

あわてて口を押さえる私と、そこだけはバッチリ見てやがった幸村の顔が一瞬で赤くなる。

「破廉恥ぃぃぃぃぃ！！」
叫びながら走り去る幸村の後を追うように、政宗も走り出した。

「夢のお返しだ。続きは米沢に戻ったらだ。」
「ば、ばかたれぇぇぇぇ！！」
夢って何!?あれは、私が見た夢であって、政宗がなんで知ってるのよ!?

塀の向こうに政宗の姿が消えて、残ったのはアワアワしている私と、空気のような存在の朔夜だけとなった。

「随分、楽しそうだね？」

苛立ちを交えた冷たい声がした。
頭がすっと冷えていくのを感じながらゆっくりと振り返った。

「久しぶり。生きてここにいると思わなかったから、だいぶ遅くなったわ。」
「この世界に着いて、随分探したよ？ここにみぃがいる事はわかっていたから、それも楽しかったけどね。」

その声に。
言葉に。

時間が戻っていく。
ここに来る前の自分に。

「白銀、黒金、離れてて。絶対に手を出さないで。」
心配そうな目で後ろに控えている二匹に告げると、彼らは大人しく引き下がった。

「その狼たち、白銀と黒金って名づけたんだ。」
「そう。そっくりでしょ？ババ様が飼っていたあの子達に。」
「そうだね。その楯突く態度とか、ホントそっくり。もう一度殺したくなる。」

サバイバルナイフをくるくる回しながら、朔夜は白銀と黒金を見下ろした。
もう一度・・・・。やっぱり、あの二匹も殺されたのか。
あの屋敷から姿を消した二匹の行方は、分からないままだった。
お墓くらいは作ってあげたかったな・・・。
元の世界の白銀と黒金を思い出していると、朔夜はところで、と呟いた。

「みぃ。お前はこの世界で、どれだけまた大切なものを作ったのかな？一つずつ壊していってあげるから、教えて？」

こいつは・・・！！
カッと目の前が赤くなるほどの怒りを覚えて、にらみつけた。

「まずは、あの独眼竜だろ？許せないな。みぃが僕以外を見つめるなんて。」
ふふっと笑うと、朔夜は天守閣を見上げた。

「でも、信長にもうすぐ殺されちゃうね。僕の手で壊したかったけど、ま、仕方がないかな。」
「どうして、私なの？」

怒りに震える声で、朔夜に尋ねた。
ずっと、聞いてみたかったこと。

「どうして、私を殺さなかったの?私のことを残したの?」

宗主に私が選ばれた。
他はもういらないと言った朔夜。

母が好きだったんでしょ?
ならば、なんで母ではなく私を残した?

「どうして?そんなの簡単だよ。みぃは僕が好きでしょ?迦月さんはあの男を選んだ。僕じゃなくてね。許せなかったんだ。だから、迦月さんもあの男も殺して、僕とみぃだけの世界を作ったんだよ。二人の世界には、他の連中も要らない。みぃだって、僕の所に来るために、一緒に落ちてくれたじゃないか。」

なに?この男、何を言ってるの?

「一緒に遊んだ7年は楽しかったよね?みぃはどんどん僕のために壊れていってくれた。本当に可愛いよみぃは。半年前のあの日も楽しみにしていたんだ。どんな風に僕の所に来てくれるのかなって。だけど、あの地雷の暴発があって、蒼竜がみぃを連れて行こうとして驚いた。とっさに捕まえて一緒に来れてよかったよ。」

「蒼・・・竜・・・?」

「君たちが蒼き月の御方と呼ぶ、神だよ。」

どうして朔夜がそんなことを知っているのか？
殺し合いと思っていたのは私だけで、朔夜は遊びだと思っていたのか？
蒼き月の御方が私をここに連れてきた？

混乱している私を、嬉しそうに眺める朔夜。
「ここでなら、僕らは思う存分楽しめるよ。力も使い放題だ。」

一つだけ分かった。
朔夜は私と『あそぶ』為だけに、家族を、一族全てを殺した。
そして、今も『あそぶ』つもりで私の前にいる。

「・・・・・けんな・・・・・。」
「なに？」

怒りが込上げる。
今までにないほどの怒りが。
そんな理由で、私の家族は殺されたの？

「ふざけんなぁぁぁぁ！！！！！」

許さない。絶対。

４４　対成すもの（前書き）

流血、残酷シーンがあります。

４４　対成すもの

鋼糸を全て引き出して、鞭のようにしならせて朔夜に打ち付けた。
軽く避けられた鋼糸は、地面を抉った。

「確かに好きだったよ。力を満足に使えなかった私を、見捨てずに導いてくれた朔兄がね。でも、あの日、パパを、ママを、お兄ちゃんを、ババ様を、皆を殺された日に、私の好きだった朔兄も死んだ。」

そのまま鋼糸を横に薙ぎ払えば、朔夜の幻影が真っ二つに分かれた。

「お前だけは何があろうとも、許さない。必ずこの手で殺してやる。そう誓った。なのに、お前は・・・！」

真後ろに向かって銃を一発撃つと、朔夜のうめき声が聞こえて、どさっという音がした。
振り返れば左肩を押さえた朔夜が、痛いなぁと呟きながら治癒を施していた。

「ママがパパを選んだから？私が朔兄を好きだったから？ママを殺して、私を同じ場所まで引きずり落とした？どんだけ自分勝手なの！？私は、皆は、あんたのおもちゃじゃない！！」

続け様に残り六発を撃ち放つ。
寸分狂うことなく、眉間を打ち抜いた朔夜はやはり幻影。

「あの七年が楽しかったって？私があんたの為に堕ちたって？そん

なわけないでしょ！！」

弾倉に弾を装填しながら、ふつふつと湧き上がる怒りを、言葉に変えて朔夜にぶつける。
傷を治癒し終わったのか、朔夜はサバイバルナイフを握りなおすと、不思議そうに私を見ていた。

「私はね、私の為に戦った。私の意志を貫くために。たくさんの人を殺しても、何を犠牲にしても、私は私の想いを叶える為に戦ったんだ！」

装填し終わった銃のスライドを引くと、まっすぐに朔夜に銃口を向けた。
落ち着かなきゃ。
幻影を見破れなくなる。

深呼吸をして心を静めると、引き金に指をかけた。

「私は、私を裏切ったお前が憎い。私の家族を殺したお前が許せない。だから、殺す。それだけを思っていた。ここにくるまでは。」
「今は違うと？」
「ここには私を、ありのままの私を受け入れてくれる人がいる。この世界でできた新しい私の家族がいる。これ以上あんたに私の大切なものを壊させない。」

朔夜は母のことが好きなんだと思っていた。
私を通して母を見ているのだと思っていた。
それは違っていた。
こいつはおもちゃとしての対象を、母から私に移したんだ。

そのおもちゃが、他の人間に盗られないように、全てを排除しようとしてる。

朔夜という男の本性は、傲慢で自己中心的で、思い通りにならないおもちゃは叩き壊し、欲しいと思ったものはどんな手段を用いても手に入れる。
それが良く分かった。

「皆は私が守る。もう、何一つ大切なものはお前になんか奪わせない。」

引き金にかけた指に力を込めようとした時、朔夜がクスクスと笑い出した。
そのままさも可笑しそうに腹を抱えて、哄笑した。
なにが可笑しい？
一頻り笑った後、朔夜はそうかと俯いて呟いた。
「そこまであいつらはみぃの中に巣食っちゃったのか。」

ゆっくりと顔を上げた朔夜は、あの日と同じように、にぃっと三日月のように目を細めて私を見た。
朔夜の纏う気配が黒く禍々しいものに変わっていく。
今までとは明らかに違う、あからさまな殺気。

「みぃに巣食う奴らはみんな殺してしまおう。伊達も、武田も、上杉も。それで、みぃはまた僕と同じになるんだ。」

そんなこと、させない。
ここで決着をつける。
「死ぬのは朔夜一人だ。」

昔、朔夜は言葉を使うことで、力をイメージしてコントロールすることを私に教えた。
下手に力を使って、癒すどころか傷つけてばかりいた私。
私は人より蒼い月の力を強く受け継いだから、制御することが難しいのだと、朔夜はそう教えた。

やがて制御を覚えて、治癒をすることができるようになったけど、他の人よりはずっと弱い力しか出せなかった。
恐かった。人を傷つけることが。
私が力を暴走させることで、家族が傷ついたらと思うと恐かった。

朔夜と満月は表裏一体。
光に満ちる月と、闇に満ちる月。
背中合わせだけど力は同じだと、昔朔夜は言った。

同格の力。
その朔夜を捻じ伏せる為には、全ての力をもって戦うしかない。
常に意識をして押さえてきた力を解放する。
暴走して、周りを巻き込むことになっても。
私の命を削ることになっても。

元の世界では失うものは何もなかった。

でも、ここは違う。
私が負けたら、政宗たちが殺される。
あの人たちを傷つけることは、絶対に許さない。

「さあ、始めよう。」

幻影で躱す朔夜と、反射神経と瞬発力で躱す私。
早々に銃弾はお互い尽きた。

銃を投げ捨て、鋼糸を手にすると、朔夜にスピードを上げて突っ込む。
対する朔夜もサバイバルナイフを手に、まっすぐ突っ込んできて、ナイフと鋼糸が高い音を上げてぶつかった。
衝撃波で周りの砂や石ころが吹き飛んで、壁にめり込む。

幻覚ではない朔夜を捕まえなければ、いつまでも決着なんかつかない。
ナイフと切り結んでいる鋼糸を一瞬緩め、こちらに傾いてきた朔夜の脇腹に膝をめり込ませた。

朔夜の体を覆っていた防護壁を砕き、ぶちぶちっと脇の筋肉が断裂する感触がした。

「ぐ・・・・・！！」

体を折り曲げる朔夜の左腕に鋼糸を絡ませると、ぐいっと引き絞った。

「これで逃げられない。」

「みぃもね。」

呟いた私を下から見上げて、朔夜は笑った。

右腕に握っていたサバイバルナイフが光を反射して、はっとなって後ろに飛び退った。

こちらもシールドは張っていたけど、ナイフに力を込めていたらしく、簡単に刃は私の腹を切り裂いた。

「・・・・・っ。」

裂かれた服から、じわりと血が垂れた。

脇腹を蹴った時に内臓を痛めたのか、朔夜も脇腹を押さえて苦しげに顔をゆがめている。

治癒をしようとしている朔夜の腕が淡く光るのを見て、鋼糸を思いっきり引っ張った。

治癒なんかさせない。

手繰り寄せた鋼糸に引きずられるようにして、朔夜が前のめりになった所を首を狙って回し蹴りをした途端。

「足癖悪いよ。」
足首を捕まれて身動きが取れなくなった。
しまった・・・！！
「捕まえた。」
にたりと笑った朔夜は、サバイバルナイフを私の太股の内側に思いっきり突き立てた！
「あああああああああああ！！！！！」
激痛に絶叫が迸る。
朔夜はそれを愉快気に眺めた後、サバイバルナイフをぐりっとねじ込んだ。
「ぐあぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」
「痛い？ねぇ、痛い？治癒すれば？」
こ、この・・・・！！
痛みのあまり霞む視界で朔夜を睨みつけると、捕まれた足を軸にして、反対の足で思いっきり鳩尾を蹴りつけた。
みしりと肋骨が砕ける感触がした。
「ぐは・・・！！」
手を離して、その場に膝を付いて血を吐く朔夜。
バランスを崩して地面に落ちた私も、足を抱えて蹲った。
「・・・・く・・・ぁあああ！！」

太股のしかも動脈に刺さったサバイバルナイフを抜いて、噴出す血を引きちぎった袖で力いっぱい縛って止血する。
細胞が壊死するかもしれないけど、しないよりはマシだ。

高められた五感が、辺りに充満する私と朔夜の血の匂いと、荒い息遣い、そして呟くうめき声を捕らえる。
互いに力を限界以上に駆使しているせいで、体力の消耗も激しい。
でも、後には引けない。
引いたら皆が危険に晒される。
負けられない。

抜いたサバイバルナイフを手にして、体を引きずって朔夜に近づくと、首目掛けて振り下ろした。

「ぐぁぁぁぁぁ！！」

咄嗟に体を反らして首は避けたものの、前上半身を斜めに切りつけられて、朔夜は悲鳴を上げた。
このまま、方を付けてやる！

とどめを刺す為に、朔夜の胸倉を掴もうと伸ばした腕を逆に捕まれて、振り回された。
背中から地面に叩きつけられて、押さえつけられる。

背中に受けた衝撃で、咳き込む私の首を掴むと、そのまま持ち上げられた。
首を絞められて、目の前が真っ白になる。

「う・・・ぐ・・・。」
首の骨を圧し折る気なのか、みしっと嫌な音がした。
こんな、ところで、死んでたまるか・・・！！
約束した。米沢に帰ると。
誓った。必ず勝つと！

「っあああああああああああ！！！」
手にしたサバイバルナイフを振り上げ、朔夜の脇に力の限り突き刺した。

「ぐあぁ！！」

堪らず悲鳴を上げた朔夜の手が緩んで、私はそのまま地面に落ちた。
咳き込みながら這いずって朔夜から離れ、ポッケにしまっておいたクナイを取り出した。

出血が多すぎたのか、目が霞んで寒気を感じる。
足を見れば、止血もあまり効果がなく、ズボンは血でぐっしょり濡れていた。
腹からも流れる血が止まらない。

「こ・・・の・・・！」
呻きながら立ち上がろうとする朔夜。
いま治癒を朔夜にされたら、負ける。

あと一撃。
どうか、当たって・・・・！！

眉間を狙って、クナイを渾身の力を込めて投げつけた。

「ギャッ！！」

短い悲鳴が上がって、ゆっくりと仰向けに、朔夜が倒れる。

立ち上がらなきゃ。
止めをささなきゃ。

力の入らない体で辛うじて立ち上がり、もうほとんど見えない目で朔夜を探す。

「この馬鹿娘が！！さっさと治癒をせんか！！」

え？

聞いたことのない声が聞こえて、のろのろと振り返ると霞む視界に白銀（しろがね）と黒金（くろがね）が映った。

「え？」

「え？ではない！さっさと治癒をしろと言っているんだ！」

白銀の口が動いて、声が聞こえるって事は、話しているのは白銀？

「さく・・やは・・・？とどめ・・・ささなきゃ・・・・・。」
「朔夜は・・・もう死んだ。」

黒金が向けた視線の先に、仰向けに倒れたままの男の姿があった。
死んだ？

「勝者はツキ、お前だ。」

勝った？

ぐらりと体が傾いて、そのまま地面に倒れた。
「ツキ！！」
「おねが・・・い。さ・・・くやのところに・・・。」

殆ど声にはならなかったけど呟けば、風が吹いて小太郎が現れた。
小太郎は私をそっと抱き上げると、朔夜の元へと連れて行き、その場にしゃがみ込んで私に見えるようにしてくれた。

霞む目を凝らして朔夜を見ると、目を見開いた驚愕の表情のまま、息を止めていた。
朔夜の眉間にクナイが根元まで突き刺さっていた。

朔夜が死んだ。
私が、殺した。

「おわったの・・・ね。」

ぽろりと涙が零れた。

「ツキ、治癒を!!早く!!」

白銀が焦ったように叫んでいるけど、もう体が動かない。

勝ったけど、もう、ここまでみたいだ。

暗くなっていく視界と、遠のいていく白銀と黒金の声。

「こたろ・・・ありが・・・と。ごめ・・・。」

ずっと傍にいてくれたのは、気が付いていたの。

死ぬなと、生きろと言ってくれたのに。

「まさむねを・・・たすけ・・・て・・・。」

まだ戦っているだろう、政宗を助けてあげて。

私の代わりに。

政宗。

ありがとう。
あなたがいたから、私はここまで来れたの。

認めてくれたから。
受け止めてくれたから。
包み込んでくれたから。

弱い私を政宗が守ってくれた。
私を救ってくれた。

そばに居ろと、言ってくれたのに。

帰れなくてごめんなさい。
傍で一緒に同じ景色を見たかった。
あなたの傍で、同じ夢を追いかけてみたかった。
一緒に奥州を駆け回りたかった。

強くて、優しくて、時々は小十郎たちを困らせたりもするけど、
皆に心から慕われているそんな奥州筆頭。

本当は、好きなの。
いつの間にか、とても好きになったの。

政宗・・・。

ずっとずっとその腕の中に居たかったよ・・・。

でも、ここまでみたい。

ちょっとは強くなれたかな。
政宗のように、強くなれたかな。
そうだったら、嬉しいな・・・。

沈む意識の彼方で誰かが、よく頑張った、と囁く声が聞こえたような気がした。

４４　対成すもの（後書き）

45　第六天魔王（前書き）

45　第六天魔王

魔王は天守閣に居た。
血の気のうせた顔で倒れる女には一瞥もくれることなく、悠然と座ってオレと真田を睥睨していた。

「余は、第六天より具現し、魔王なり。」

ゆらりと立ち上がった魔王は、一歩、また一歩とオレらに近寄った。
刀を抜いて構えるオレと、二本槍を構える真田。
「このオレに喧嘩を売ったこと、地獄で後悔させてやるぜ。」
「罪無き民を蹂躙せし魔王！お相手いたす！！」

「虫ケラどもめ・・・。」

筒の長い銃を手にした魔王が銃口をこちらに向けた。

「死をもって贖うが良いわ。」

「奥州筆頭伊達政宗、推して参る！」
「天・覇・絶槍！　真田源次郎幸村、参る！」

行くぜ！後悔すんなよ！？
魔王の撃ち放った銃声を合図に、オレと真田は走り出した。

「小童共が・・・。我に逆らうことの愚かさ、その身に味わせてくれるわ！」

闇そのものの気が突風となってオレと真田を襲い、耐え切れなかった真田が壁に叩きつけられた。
体を丸めて衝撃を和らげた真田は、顔を顰めているものの、問題はなさそうだ。

確かに衝撃はあったが、吹き飛ばされるようなものだったか？
オレにはそれほどには感じなかったが・・・。
真田が弱いわけじゃねぇ。あいつはオレがＲｉｖａｌと認めただけの実力はある。
何が・・・？

「あ？」

刀を構える自分の体が、青く光っていることに気が付いた。
これがツキの加護ってやつなのか？
防御の力が働いているのか。
ならば。

「ハッ！遠慮なく行かせて貰うぜ！！ＷＡＲ　ＤＡＮＣＥ！！」
飛び上がって頭上から魔王のおっさんに飛び掛り、次々に斬り付けるが、刀で防がれてしまう。
「うぉぉぉ！！烈火ぁぁぁぁ！！」
後ろから真田が追随して炎を纏った槍を突き出した。

「ふん！！」

刀を横に薙ぎ払い、真田ごと炎を吹き飛ばす魔王。
「脇ががら空きだぜ！！」
隙をついて脇を切りつけると、ぐあっというかすかな声と、血の匂

いがした。

「おのれ、小癪な真似を・・・！」

ぶわりと闇が広がり、直撃を受けて真田の所まで吹き飛ばされて、強かに背中を打ちつけた。

「ぐはっ！」

「政宗、殿！！」

心配する真田に片手を挙げて応え、魔王を睨みあげた。

脇腹を押さえちゃいるが、眼光は一向に衰えた様子のない魔王。

「我が前に立塞がる者、全て滅す！！」

バァン！バァン！

続けざまに撃たれた銃を避け、体勢を立て直して刀を構え直す。

今ので背中を痛めたようで、呼吸が辛い。

このまま長引けば、オレらが不利になる。

西国を蹂躙したというその実力は良く分かった。

力が、覇気が、禍々しい気配が、存在が、半端ねぇ。

ツキが言ったように、こいつが天下を手にしたら、この日の本が滅ぶ。

オレの奥州も・・・。

させねぇ。

魔王はオレが、ここで、この手で狩る！！

「真田、傷はどうだ？」
「心配無用でござる！」

上等だ。伊達に武田のおっさんに殴られ続けちゃいねぇな。
「行くぜ！真田幸村ぁ！！」
「望む所でござる！！伊達政宗殿ぉ！！！」

「無に還るがよいわ！！」
撃ちつくした銃を投げ捨て、腰に佩いた刀を抜く魔王。

「おおおおおおお！！」
「うぉぉぉぉぉぉぉぉ！！」

突きの構えで魔王に向かって走り出す真田とオレ。

「散れぇぇぇ！！」

振り下ろされる魔王の刀を真田が受け止め、オレの刀が魔王の腹を貫いた。
「真田、止めを刺せ！！」
「承知！！」
「ぐおぉぉぉ！！」

黒い炎を纏った魔王拳がオレの頭を薙ぎ払い、衝撃に意識が一瞬途絶えた。

政宗・・・。

ツキに呼ばれた気がして、はっと目を開けた。
目の前では真田が魔王と戦っている。
オレとしたことが、気を失っていたのか。

すぐに立ち上がろうとした時、風が吹いて目の前に風魔が現れた。
ツキの傍に着けておいたはずの、風魔が。

何で、ここに居やがるんだ？
ツキはどうした？

「朔夜は死んだ。」
空気が洩れるようなかすかな言葉で、風魔が伝えてきた言葉の意味は分かった。
「そうか。」

勝ったか。ツキ・・・！

オレも負けらんねぇな！

「待たせたな！真田！！」

駆け寄るオレの隣を併走する風魔。
風魔は鎌鼬のような風の刃を放って、魔王にぶつける。
その隙に真田が魔王と間合いを取って、槍を構えなおした。

「Ｌａｓｔだ。行くぜ！！」

刀を構え、ぐっと体を沈めると一気に飛び出す。
真田も風魔も続く。

「「うおおおおおおおおお！！！」」
「ぬおおおおお！！」

オレと真田と魔王の雄叫びが安土城に轟く。

風魔の放つ風の刃が魔王の体を傷つけ、真田の突き出した炎の槍が魔王の刀と交わる。
渾身の力を込めた刀を振り下ろし、真田の槍と交えている魔王の刀を真っ二つに叩き折った。

「地獄へ帰りな！！」

雷を帯びたオレの刀と、真田の槍が同時に魔王の体を貫く。

「ぐ・・・あ・・・・・。」

大きく傾いで、刀と槍を体に刺したまま、ゆっくり仰向けに倒れる魔王。

「滅せぬ・・・もの・・・のある・・・べき・・・・・か・・・・・。」

仰向けのまま天を見上げ、微かに笑う魔王。

「是非もなし・・・。」

最期の言葉を残し、魔王は微笑を浮かべたまま、事切れた。

45　第六天魔王（後書き）

勢いだけで書いてしまったので、近いうちに改稿します。

46　慟哭

魔王が討たれたという知らせは、忍を通じて戦場を瞬く間に駆けた。
体中に傷を負った真田と、背中を痛めて肺を傷つけたオレは、魔王の遺体の横で座り込んでいた。

「政宗様！！」
「旦那！！」

知らせを聞いて駆けつけてきた小十郎と猿が天守閣に飛び込んできた。
そんな焦った顔してるんじゃねぇよ。
心配しなくてもちゃんと生きてるぜ。

真田の腕を取って立ち上がると、真田を猿が受け取った。
「あーあ、流石の旦那もぼろぼろだねぇ。」
「なんの、まだまだぁ・・・ったぁ！！」
強がろうとした途端、激痛が走ったのか顔を顰める真田。
「大人しくしててよ。」
呆れ顔の猿が真田を支える。

「政宗様、怪我は？」
「大丈夫だ。」
多少呼吸が苦しいがな。

あえて言わずに天守閣から外を見下ろす。
織田軍は大将を失って、戦意喪失で逃げ惑っている。
勝鬨を上げる連合軍の声が、地響きを伴って響き渡った。
勝った。

ようやく奥州へ帰れるぜ。
ツキと一緒に。

「小十郎、ツキを迎えに行くぜ。あいつ、勝ったらさっさと来いって言ったのにどこで道草食ってやがるんだ？」

上機嫌で振り返ると、小十郎の顔が沈痛に歪んでいるのが見れた。
どうした？
訳が分からず猿を見ると、猿の顔も歪んでいた。

「竜の旦那・・・・。ツキちゃんは・・・・・・。」
おい、なんだよ。どうしたんだよ。
「政宗様、ツキが待ってます。こちらへ。」

小十郎が意を決したように言い、オレに背を向けて歩き出した。

小十郎に案内されて来たのは、伊達の陣地の最奥。
張られた天幕の中で、狼たちに守られて、ツキは静かに横たわっていた。

「ツキ？」

血の気の無い、真っ白な顔。
まったく動かない体。

顔をうつむかせて泣いている成実と、兵士共。
オレの姿を見ると、全員が無言で頭を下げ、天幕を出て行った。
小十郎もその後について出て行った。

ゆっくりとツキに近寄ると、むくりと銀色の毛の狼が起き上がった。
「どうか、褒めてやって欲しい。」

喋る狼だと、驚く思考が頭の片隅を過ぎったが、そんなことは瑣末なことだった。
そのまま出て行く狼。

二人きりになった天幕で、そっとツキの頬に触れる。
冷たい。
口元に手を当てれば、息をしていない。

うそだろ・・・？
勝ったんだろ？

「ツキ？起きろ。迎えに来たぞ。奥州へ帰るぜ？」

小さな体を抱き起こして、腕の中に抱える。
冷たい体からは、血と硝煙の匂いがした。

「ツキ、起きてくれよ。」

熱を分け与えるように抱きしめても、ツキはピクリとも動かなかった。
口元に、微かな微笑をのこして。

「ツキ・・・。」

そっと頭を撫でてやる。
ツキは何も言わなかったが、こうして撫でてやればいつも気持良さそうに目を細めていた。
いくらでも撫でてやるから。

起きてくれ。目を開けて、オレを見てくれ。
勝ったんだ。オレも、お前も。

奥州へ帰れるんだ。
一緒に帰るんだろ？
だから、いつまでも寝てねぇで、起きろよ。

「ツキ・・・。」

目を・・・。

ぽつっと目から溢れたものが、ツキの頬を濡らした。
次から、次へと。

「っ・・・・!!」

嫌だ。こんな終わりは嫌だ。
これからじゃねぇか。
これからがはじまりだろ?

オレの隣で、オレと一緒に同じものを見るんだろ?
やっと、お前が自由になれて、心から笑えるようになったんじゃねぇか。

なぁ、笑ってくれよ。
ツキ。

「逝くな・・・・・!!」

掻き抱いた冷たい体を、オレは一生忘れないだろう。

天幕から微かに聞こえる政宗様の咽ぶ声を背中に感じながら、天を仰いだ。

知らせを受けて駆けつけた現場は、凄惨なものだった。
クナイを眉間に突き刺したまま絶命している男と、体中を血で汚し静かに目を閉じているツキ。
黒と銀の狼が項垂れてツキを囲んでいた。
慌てて駆け寄り、様子を診たがすでに手遅れだった。
抱き上げた体はぞっとするほど冷たく、軽かった。

あの時、春日山城でツキを一人にさせなければ・・・！！
ぎりっと食いしばる歯の間から、堪えきれないものが洩れる。
滲む涙を拭い、周囲の様子を窺った。

まだ織田の残党は居る。
政宗様とツキを護らねば。

やがて、知らせを聞いた信玄公と謙信公、前田とかすが、猿飛に連れられた真田がこちらに向かってきた。
一様に沈痛な面持ちで、言葉もなく天幕を見ている。
ツキの奔放で明けっ広げな性格と、天真爛漫な振る舞いは誰もが好いていた。

その影で、ツキがどれだけの苦しみと憎しみを抱えていたのか。
ここに来たばかりの頃、大怪我をしていたにもかかわらず、慣れているから平気だと、けろりとした表情で答えたツキ。
いつも、お前はこんな戦いをしていたのか？

こんな、小さな体で。
たった独りで。

この世界に来て政宗様と出会って、少しずつ笑顔を増やしていった。
だが、時折もとの世界のことを思い返しては、唯一、政宗様にだけその胸の内を零していたツキ。
あの男を殺して、解放されたのだろうか。
眠るツキの口元には、微かに笑みが浮かんでいた。

「ごじゅろぉぉぉぉ・・・。」
「男がそんなに情けない面晒して泣くんじゃねぇ。」
号泣する成実を窘めるが、伊達軍は皆声を上げて泣いている。

太陽が西に傾き、空を赤く染めていた。
今日ここを動くのは、なしだ。
政宗様とツキをゆっくり休ませてやりたい。

その意を謙信公と信玄公に伝えると、双方とも頷いた。
「それが良いだろう。」
「いまはそっとしておきましょう。」
感謝を込めて黙礼すると、信玄公たちは自分の陣へと戻っていった。

泣きながら伊達の兵士もそれぞれの持場へと戻っていき、天幕の前には俺と二匹の狼だけが残った。

明日になれば、戦後処理が待っている政宗様。
残党狩りもある。

せめて、今夜だけは・・・。

藍色に染まるそらを見上げ、溜息をひとつついた。

47　黎明

なにか暖かいものに包まれながら、ゆらりゆらりと揺れていた。
とても眠い。
うとうとと微睡んでいると、誰かにそっと撫でられた。
さらりと髪が揺れて、頬にかかる。

そのくすぐったさに、ゆっくりと目を開いた。

「よく、頑張ったな。」

慈愛に溢れる微笑を浮かべて私を見下ろす人。
蒼い瞳と髪の女性。

だれ？
こんな綺麗な人・・・・。

ぽーっとする意識のまま、女性を見上げていると、次第にまた眠くなる。

「今は、ゆっくりお休み。」

うん。眠いの。
ここはとても気持がいい。
政宗の腕の中に居るみたいな感じがする。

再び沈む意識に逆らうことなく、ゆっくりと目を閉じた。

妾の元に戻ってきた末の娘。
本に、よう頑張った。
最後まで己を貫き通したその心。
強く、気高くあれと願った通りに。

妾の元で、傷ついた魂を癒す眠りに就いた娘。
安らぎに満ちた、穏やかな顔をしている。

だが・・・。
地上からは隻眼の竜の子が娘を想って、嘆き哀しむ慟哭が聞こえる。
途切れることのない、悲痛な願いが。

戻ってこいと。
逝くな・・・と。

もう一度、二人を逢わせてやりたいとも思うが、妾にはその様な力は無い。
我が元へ上がった魂を地上へ戻す術など・・・。
いかがしたものか・・・。

「蒼、どうした？」

思案していると、背後に主の気配が生まれ、即座に平伏した。

「ああ、その娘か。」

我が主の前に、言葉は不要。

妾の思考を読み取った主は、その手を伸ばすと娘の額に当てた。

琥珀の光に包まれた娘は、瞬時に赤ん坊の姿へと転じた。

「これでよい。下界の刻限にして半年、か？ゆっくり眠らせてやれ。その後、下界へと還してやれば良かろう。」

は？

何事が起こったのか？

「即座に還してやるには、娘の力が弱くなりすぎている。俺の力を分けてやった。それでも眠りが必要だ。魂が疲弊しすぎている。」

眠る娘の頭を撫で、主は笑った。

「この娘も、下界に還りたいと願っている。ここまで頑張ったんだ。願いの一つくらいは叶えてやっても良かろう？」

安らかに眠る娘。

そうか。そなたは還りたいと願うのか。

「下界の奴にも教えてやれ。煩くて敵わん。」
苦笑すると、主はもう一度娘の頭を撫でた後、琥珀の光を残して消えた。

ここまで声を届けられる者など、そうはいない。
よほど強い意志を持たぬ限り、届かぬ声。
我が娘を、心から求める切なる願い。

「竜の子よ、その願いは聞き届けられた。」

ツキを抱いたまま、どのくらい時間が経ったのか。
夜明けが近いのか、うっすらと天幕の隙間から光が洩れていた。
腕の中のツキは、相変わらずで。

「ツキ・・・。」
頬を撫でると伝わる、ひやりとした感触にまた心が締め付けられる。

「娘は今、妾の元におる。」

久しぶりに聞く声に、はっと顔を上げると、蒼の光を纏った女がオレの前にいた。
蒼い目の女。

「蒼竜・・・。」
掠れた声が天幕に響いた。

蒼竜は音もなくオレに近寄ると、オレの頭を撫でた。
途端に楽になる呼吸。

こんなに簡単に癒せるのなら・・・。

縋る気持で蒼竜を見上げると、穏やかな目とぶつかった。

「すまぬ。妾には途切れた命を繋ぐことはできぬのじゃ。」

だめ・・・なのか・・・。

ならば、何しにきやがった?

「そう威嚇するでない。妾にはできぬが、我が主が娘に温情をかけた。」

どういう・・・ことだ?

蒼竜の一挙一動も見逃すまいと凝視すれば、苦笑をもらした。

「この世界の約半年、それまで娘は上界にて妾が預かる。」

そう言うと、蒼竜はその細い腕をツキへと差し出した。

オレの腕の中のツキがふわっと浮き上がって、蒼竜の腕に引き寄せられた。

「時が来れば、白銀と黒金をお主の元に遣わそう。」

「ツキは、帰って来るのか?」

震える声で尋ねれば、蒼竜ははっきりと頷いた。

「お主の願いと、娘の願いが、我が主に聞き届けられたのじゃ。」

ツキの願い・・・。

オレと同じ・・・?

帰ってくる。

ツキが、オレの元に。

ふつふつと湧き上がる衝動を抑え、蒼竜の腕の中のツキを見た。

「分かった。半年後、だな。あまり待たせるなよ？」
「相変わらずな男よの。」
呆れ顔の蒼竜に、ニヤッと笑ってみせる。

「今のオレに、恐れるものなど一つもなくなったからな。」
「まぁ、お主はそれで良いのだろう。」
笑みをこぼす蒼竜の腕の中のツキを見下ろす。

半年後までに、この混乱を押さえて、奥州でツキを迎える。
だから、安心して休め。
そして今度こそ、オレの所に帰って来い。

そっと触れた頬は、やはり冷たいが、もう心は痛まない。
額に、瞼に、鼻に、唇に。
触れるか触れないかの距離で撫でる。

「待ってるぜ？ツキ。」

やがて、朝日が天幕に差し込むと、蒼竜は立ち上がった。

「では。」
そう言うと、蒼竜は蒼い光を放ってツキと共に消えた。

一人残った天幕で、目を閉じてゆっくり息を吸って吐く。

半年後。
ちょうど、ツキと出会った季節か。
また一から始めるのも悪かねぇな。

だがその前に。まずはこの戦の後始末からだな。

目を開いて、床に置いたままの刀を拾い上げて、顔を上げる。
よし。忙しくなるぜ。

天幕の入り口を覆う布を勢い良く捲り上げ、朝日に輝く外へと力強く踏み出した。

48　竜の華は蒼月に舞う

安土城で織田信長が討死して半年。
抑圧されていた各国は、自国の建て直しに忙しく、また同盟を結んでいた国々も新たなる体制を構築するため水面下で慌しく動いていた。
我が奥州も政宗様を中心に、新たな天下取りの磐石の基礎を築くべく、自国内の安定を図っている。

あの日、ツキの死を受け一晩天幕に篭っていた政宗様は、朝日が昇ると同時に天幕を出て来られた。
「小十郎、さっさと処理を済ませて、奥州へ帰るぞ！」
そう宣言された政宗様の左目には、僅かな揺るぎもなく、確固たる意志が秘められていた。
何があったのかと慌てふためく俺たちに、政宗様はいつもの自信に満ち溢れた表情で話された。

「ツキは一時、蒼き竜に預けられた。ツキが戻るまでに、この混乱を沈め、安定した奥州を作るぜ。」

覗いた天幕には、確かにツキの遺体は無かった。
政宗様がおっしゃる所によると、蒼竜が連れて行ったのだと。
そんなことが起こり得るのだろうか。
正直半信半疑だったが、あのツキの事だ。ありなのかもしれねぇ。

秋が過ぎて、雪深い冬が訪れて、雪解けを迎え、そしてツキと出逢った季節が訪れた。
一日、一日と過ぎていく中で、次第に政宗様の様子が落ち着かないものに変わっていく。
とうとう弥生も半ばになり、桜が今年も満開を迎えようとしていた。

「ったく、ツキの奴、また寝坊か？」

窓から舞い込んできた桜の花弁を一枚掴んで、政宗様はぼやいた。
確かに、ツキの寝起きは人一倍悪かった。
姉上もいつも手を焼いていたからな。

夕暮れが迫る中、今年も花見をすべく準備が進められている庭を眺めながら、去年を思い出す。
「そういえば政宗様、昨年の花見の前にツキに手を出そうとなさいませんでしたか？」
「ぐっ！！？」

茶を飲もうとしていたのか、湯飲みを持ったまま咽る政宗様。
「げほっ！小十郎、突然何を言い出しやがるんだ！？」
「いえ、ふと思い出したものですから。慌てふためくツキに、政宗様は幼い子供に手を出す嗜好があるのかと尋ねられたことを。」

何をしでかしたんだ、この人は。
あの頃は、まだ８つくらいの年齢だったはず。
まさか、本当に手を出すことは無かったと信じちゃいるが。

「な、なんもしてねぇよ。ただ・・・。」
「政宗様、この小十郎の目を見てお話ください。」

「ただ、寝起きの無防備さとか、羽織を必死に手を伸ばしてかけようとする仕草とか、いろいろ・・・・。」

はぁ。で、手を出しそうになったと？

呆れて溜息をつくと、政宗様は顔を赤くしてうるせぇ！と叫んで出て行ってしまわれた。

まったく、困ったお人だ。

一年も前の事を言われて、迂闊にも取り乱した挙句、逃げ出しちまったじゃねぇか！

執務室を飛び出してドスドスと廊下を歩いていると、桜の花弁の向こうに銀と黒の姿を見つけ、目を見開いた。

「待たせたな。今宵、ようやく時が満ちる。」

黒の狼がにっと口角を上げて俺を見てはっきりしゃべった。

あの日、ぼんやりと聞いた言葉は、やはり幻ではなかったか。
いや、それより今は、黒の狼が言った言葉の内容だ。

「やっとか？あの寝坊助が。」
「蒼竜様と、月神様の二人掛りで起しているところだ。」
ふぅと、ため息をつく銀の狼。
神二人掛りってどんな状況なんだよ。

「迎えに行ってやってくれ。」
「Ｏｆ　ｃｏｕｒｓｅ．」
「場所は言わなくても分かっているようだな？」
「今日ならば、思い当たるのは一箇所しかねぇよ。」

やっと、やっと帰ってくる。
逸る気持を押さえもせずに、厩に向かって走る。
これだけオレを待たせた女は、後にも先にもツキ一人だけだぜ。

「梵！？どうしたの！？」
すれ違った成実が目を丸くしたが、構わず横をすり抜ける。

おっと。そういう訳にもいかねぇか。

「成実！これからツキを迎えに行ってくる！！後のことは任せたぜ！！」
「はぁ！？ちょ、ちょっと！！」

慌てる声と、吠える狼の声を背に受けて、そのまま振り向きもせずに走り出した。

馬を走らせて着いたのは、一年前にツキと訪れた小さな山だった。
一年前と同じく、満開を迎えた桜が咲き誇り、一面を染め上げている。
太陽は西に沈んで、東の空に蒼い満月が昇り始めていた。

馬を降りて、辺りを見回したが、ツキの姿はどこにも無い。
が、ここで間違いないと、確信がオレの中にある。

適当な場所に座って、懐にしまっておいた蒼い石を取り出した。
触れれば僅かな温もりを感じるようになったのは、いつからだったか。
ぬくもりがツキの体温を伝えているようで、不安に駆られる夜はいつも握り締めていた。

奥州内の平定は成った。
蘆名も先日の戦でついに降伏した。

武田と上杉との三国同盟は織田の壊滅をもって破棄となったが、
今の所戦を仕掛けてくる様子はどちらにも見られない。
おそらく奴らも国内の充足を図っているのだろう。

これからだ。天下を取る準備はできた。
あとはツキだけだ。
早く戻って来い。

夢を見ていた。とても幸せな夢。
政宗の腕の中で微睡んで、ただただ眠る夢。
大好きな大きな手で撫でられて、優しく話しかけられて。
いつまでもここに居たい。

「娘よ。そろそろ起きなさい。」
むぅ、だれよ・・・。まだ眠い・・・。
「起きろ、寝すぎだ。」
今度は男？だれ？眠いんだってば。

うーんと唸りつつ、寝返りを打つ。

「ええい！！起きろと言うておろうが！！」

がばぁ！！っと布団を引っぺがされるような感覚がして、ごろんと転がされた。

「なにごと！？」

慌てて起き上がれば、蒼い髪と瞳の女の人と、金髪金色の目の派手な男の人が呆れたように私を見ていた。

え？え？

なに？？

「放って置けばぐーすかと。一体いつまで寝ているつもりじゃ。」

女の人が私の手をとって立たせる。

辺りを見回せば、たくさんの草花が咲き乱れる草原のような場所にいた。

「え？私、確か・・・。」

あれ？何をしていたっけ？

首を傾げると、男の人が溜息をついた。

「お前は下界にて、同族と戦って命を落とした。」

言われた途端、最期に見た朔夜の姿と、小太郎を思い出した。

そうだ・・・私・・・。

「死を受け入れたお前は蒼の元に魂という形になって還ってきた。」

死んだんだっけ・・・。そうだ。確かに、死んだ。

って。

「私、今どうなってるの？死んだらそれで終わりじゃないの？」

「お前は終わりにしたかったのか？」
じっと見透かすような金の目で見つめられ、うっと詰まった。
死にたかったかって？そんなことはない。

「帰りたいに決まってるじゃない。でも・・・。」
うつむく私の頭をそっと撫でる手に、びくっとなる。
「願えばよいのじゃ。強く願えば、願いは聞き届けられる。あの、隻眼の竜の子の様に。」
隻眼の竜の子？
びっくりして顔を上げると、蒼い目の女の人は優しく微笑んだ。
「のう、蒼月華よ。お主の願いはなんじゃ？」

蒼月華・・・って、まさか・・・。
「蒼の・・・お方・・・？」
「そうじゃ。妾の名は蒼竜と申す。」
「うぇぇぇぇぇぇ！！？」
マジで！？って、ここはどこなの！？

ワタワタしだした私に、落ち着けと金髪男がたしなめた。
「ここは蒼の住まう宮だ。お前はここで下界の時間で半年ほど眠っていた。」
「お主の魂と肉体の治癒は完了した。後は、お主の願いを叶えるのみ。」

ちょ、ちょっと待って。キャパオーバーです。
まとめる時間をください。

え、えっと。私は朔夜と戦って死んで、蒼き月の御方改め蒼竜様

のところに来て、半年眠っていたってこと？
で、治癒が終わって、あとは私の願いを叶える？

ゆるゆると顔を上げる。
蒼竜様と金髪男は優しい表情で私を待っていた。

「帰りたい・・・です。政宗の所に。」
帰りたい。
あの場所に。あの人の元に。

「その願い、聞き届けた。」
満足そうに金髪男が頷いた。

蒼い光が私の体を包み込み、目の前の景色が消えていく。
「お前が寝すぎたせいで、蒼とあの男が約束した期限はとっくに過ぎている。ちゃんと説明しておけよ？」
「は！？」

寝坊した！？って、それより、蒼竜様にお礼も言ってない！！
慌てる私に、蒼竜様は首を振って微笑んだ。
「お主の幸せだけが、妾の願いじゃ。礼など無用。」

それでも・・・！！
伸ばそうとした手は届かず、蒼い光の洪水に私は押し流されるしかなかった。

光が消えて、次に私の目に映ったのは、咲き誇る桜が一面に広がる場所で佇んでいる、もう二度と逢えないと思っていた人。

「まさ・・・むね・・・？」
「他に誰がいるってんだ。」

信じられずに呟いた言葉に、政宗はにっと笑った。
間抜けにも伸ばしたままだった右腕を獲られ、とすっと小さな音を立てて政宗の腕の中に引き寄せられた。

「やっと帰ってきたな。」

心から安堵したというような政宗の声と、懐かしい匂い。
本物かどうか確かめたくて、恐る恐る背中に手を回した。

「本物・・・？」
「ああ。」
「私・・・戻ってきたの？」
「そうだ。」

戻ってこれた。この世界に。この人の隣に。
じわりと涙が溢れそうになる。

体を離して、顔を覗き込まれる。
少しだけ精悍になった？
この半年、何をしてたの？

聞きたいことがたくさんあるけど。

けど・・・・。

い、今はこの状況どうしたらいいですかね。
な、なんか、政宗めっちゃ色っぽいんですが。
身の危険を感じてしまうんですが。

どうしたらイイデスカ！？

逃げちゃダメかなぁ！？

アワワしだした私を暫く見つめていた政宗は、盛大なため息を吐いた。
「まぁ、いい。今は許してやる。」

今は!?
許してやるって何を!?
戦々恐々となる私に、政宗は珍しく優しい笑顔を浮かべた。

「城に戻ったら覚悟しろよ?」
「うわーんっ!政宗の笑顔がこわいよぉっ!!」
「半年以上待たせたお前が悪い!ったく、どんだけ寝坊すりゃ1人で起きられるようになんだよ!」
「だって!!すんごく寝心地が良かったんだよ!」
夢見が良かったなんて、恐ろしくて言えねぇ!
何されるか!

「オレの所でも、最高の眠りを保証してやんぜ?」

その保証が怖いんだよ!!
思わず逃げ出そうとした私をひょいっと抱き上げ、大股で馬の所に向かった。

「帰るぞ?うちの連中が雁首揃えて待ってるからな!」
「うぇ?」

小十郎、喜多さん、成実、伊達軍の皆。
皆、私を待っててくれてるの?

帰る・・・。
米沢の城に。

帰ろう。皆が待ってる私の家に。

これから先に、どんな事が起こるのかなんてわからないけど。
政宗と一緒なら。
みんなと一緒なら。
きっと私は私らしく生きていける。
もう独りじゃない。

「うん。帰ろう。一緒に。」
「ああ。一緒にな。」

ここが、私の世界。
政宗の隣が私の帰る場所。

48　竜の華は蒼月に舞う（後書き）

当作品をお読みいただきましてありがとうございました。
皆様の支えがあって、ここまで書ききることができました。

心より御礼申し上げます。

少しでも皆様の心の中に、残るものがあれば、これ以上喜ばしいことはございません。

本編はこれにて完結ですが、まだまだ書きたい話はたくさんありますので、これからもお付き合いいただけたら嬉しいです。

ご訪問いただきました、全ての方に。ありがとうございました。

ひなき　つぐり

一　曇天下のはじまり（前書き）

お騒がせしました。第二部スタートです。

一　曇天下のはじまり

私がこの世界に戻ってきて、二ヶ月ほどが経って梅雨の季節がやってきた。
毎日毎日雨か曇りの鬱々とした日が続きます。

「あー・・・運動したい・・・。」
政宗たちは毎日雨の中でも外で鍛錬をしているけど、私はダメだといわれて今日も部屋の中でストレッチや筋トレくらいしかできない。
梅雨に入るまでは、政宗たちと一緒に、木刀で素振りの練習とかさせてもらってたんだけどね。

障子を開けて庭を眺めると、今日もしとしとと雨が降っている。
今年の米は良く育ちそうだよ。ほんとに。
唯一の慰めが、庭のアジサイが綺麗に咲いてるってことですかね。
青い花が咲くってことは、ここの土は酸性ってことなのですな。
うむ。どうでも良い知識だけは結構覚えているものだなぁ。

こんな日にできることといえば、力をより安定して使えるようにするための練習くらいだ。
着物なので胡坐はかけないので、正座をして背筋を伸ばして目を閉じる。
心の中で力を手のひらに集めるイメージを描きながら、掌を上にして水を掬うような形にる。
雨の音と、蛙の鳴く声、遠くから聞こえる人の声、風の音。
それらが徐々に遠のいて、無音になっていく。

自分の体をコントロールするための力ではなく、人を癒して守る力を磨きたい。
そう思って昔を思い出しながら始めてみたんだけど・・・・。

バチィィィッ！

「ふんぎゃぁ！！」
なんで癒しをイメージしたはずなのに、放電すんのよ！！

「ううう・・・いたひ・・・。」
火傷までは行かないけど、静電気の強力版みたいな痛みがなんとも言えずたまりません。
なんか、明らかに今までとは違う感じなんだよね。
一回死んで体質が変わったのか？
「やっぱり今日もダメなのか・・・。」
がっくり。

痺れる手を振りながら溜息を吐いて立ち上がる。
・・・まさか、攻撃系も大惨事とかってないよね？
必要ないから、あの日以来使ってなかったけど・・・。
やってみるか。
ばれなきゃ訓練しても大丈夫！

護身用にと貰った懐剣を抜いて、逆手に持つ。

「Ｍｕｓｃｕｌａｒ　ｓｔｒｅｎｇｔｈ　ｒｅｉｎｆｏｒｃｅｍｅｎｔ．（筋力強化）」

ちょっと力を込めただけで、懐剣は青い光を纏って放電する。
放電はデフォルトになったようだけど、これは別に痛くもなんとも無い。
多分当たった人は、泣くことになると思うけど。
って、なんで私の体に力が回らずに、刀にいく？
前は自分の体が軽くなって動けたのに、今は特に身軽さは感じない。

「てい！」
試しにかるーく懐剣を空に向けて振るうと、政宗の技の様に青い光が天に向けて一直線に走った。

バァァァァン！！

光が雲を吹き飛ばして、丸く切り取られたような青空が見えた。

「・・・・・・・・わお。」

何がどうなったら、こうなる？
私の体、一体どうしちゃったのさ・・・。

ドタバタと複数の足音が聞こえて、襖が勢い良く開け放たれた。

「どうした!?」
政宗と小十郎が飛び込んできて、素早く室内を見回す。
やばい。なんでもないよ?とは言えないこの状況。
空は穴が開いてるし、私の手には懐剣が握られてるし。
頭の中で、おーしーおーきーだーべぇーと、某お方の声がエコー付きで響き渡る。

二人は私の手の懐剣を、次に外を見て、それから最後に私を見た。
「ツキ、何をした?」
小十郎が寒気がするほど優しい笑みを浮かべて私に尋ねられた。
恐い!!
小十郎の笑顔恐い!!

「まさか、ここで力を振るってたなんてこたぁねぇよな?」
政宗の笑顔は相変わらず凶悪だね。
うん。恐いから近寄るな!

「え、えへ・・・。」

じりじりと後ろに下がりながら、笑って誤魔化そうとしたら、二人の目がカッと見開かれた。
「「ツキ!!」」

それから、小一時間ほど二人掛りで説教されました。

その夜、ようやく雨が止んで、雲の隙間から朧月が顔を出した。
縁側でそれを眺めていると、政宗が部屋に入ってきた。
「ようやく止んだな。」
「うん。久しぶりに月が出たよ。」
私の横に座った政宗が、同じように月を見上げる。

あの説教の後、なんかあったのか？
様子がいつもと違う政宗をちらりと横目で盗み見る。
なんか、ぴりぴりしているというか、冴え冴えとしているというか・・・。

「織田が消えて、しばらくどの国も大人しくしていたが、まもなくまた戦の世が始まる。」
唐突に話し出した政宗の顔を見上げた。
政宗は真面目な顔で私を見ていた。
「武田も上杉もまた戦の準備をしているとの報告も上がった。奴らが動き次第、オレもまた動く。」

そうか・・・。また、戦が始まるのか・・・。
川中島で、安土城で、たくさんの兵士たちが倒れていく姿を見た。
また、あの光景が繰り返されるのね・・・。

目を閉じると、昨日のことのように思い出される光景。
血と埃と、硝煙の匂いが充満する戦場。

その戦場へ、政宗は再び行こうとしている。
・・・・私を置いて。

いつだったか、戦に出る前日もこんな風に私の所に来たね。
あの時は、まだ私の覚悟が決まってなかったから、置いていかれることを選んだけど・・・。

目を開けて、政宗をもう一度見上げる。
「政宗が欲しいものは何？天下？」
尋ねれば、政宗はフッと笑った。

「天下は最終目的の為の通過点だ。オレが欲しいのは、民が戦などに巻き込まれずに住む時代。オレの目指すものは、この戦国の世を終わらせることだ。その為にならば、オレはいくらでも戦場で人を斬る。いくらでも血を流す。その覚悟だ。」

強い意志を秘めた視線とぶつかった。
その覚悟を政宗が背負うのならば、私の覚悟も決まった。

「私もね、決めたことがあるの。」
にっこりと笑って膝立ちになり、政宗の右目の眼帯にそっと触れた。
僅かに緊張する政宗に、気がついてない振りをして。
「あの日決めたの。帰れたら、政宗と同じ景色を見るって。同じ夢を追うって。その為に強くなるって。」
だから。私を置いて行こうなんて許さない。
また私を一人にするなんて、許さない。

目を見開いて驚く政宗。

「大丈夫、政宗を置いてもう死んだりなんかしないから。」
「ツキ・・・。」
「だから、置いていかないで・・・。」
お願いだから。

政宗はぎゅっと何かを堪えるように口元を結んだ後、両手を伸ばして私を抱きしめた。
「置いて行こうものならば、伊達辞めて放浪の旅に出てやる。」
「それは困る。」
くっくっくと笑った政宗は、私の頭を撫でた。
大きな手に頭を撫でられるのは、嫌いじゃない。

「OK．いいぜ。連れて行ってやるただし、それには条件がある。」
「な、なによ、条件ってのは。」
「力を使うことなく、オレに勝つことだ。」

無茶振りキター！！
力を使わずに政宗に勝つの！？

「当然、オレも刀一本で力もつかわねぇ。どうだ？」

そ、それならば、頑張ればいける・・・か？
いや、間近で政宗の戦いを見たことがあまり無いからな・・・。
小十郎とやりあっている時の様子を見れば、まぁ力を使わないならなんとか・・・なるか？
それに、今のままついて行っても、体力的に足手まといになりそうだしな。

一年以上訓練をしなかったブランクを、埋める必要もあるな。

「お、男に二言は無いわね？」
「ああ。ねぇよ。」
「よし。ならばその条件受けてたつ！」

鋼糸も銃もあの時のドサクサで無くなってしまった今、力なしで政宗に勝つためには、ちょっとやそっとじゃ無理そうだな・・・。
よし。明日から猛特訓じゃぁ！！

まずは武器を選ばないとなぁと考えていると、頭を撫でていた手が、背中に下りてきた。
んん？
その手がなにやら怪しい動きを始めて、思わず政宗を見上げた。
なんともいえない、艶やかな表情でございますね。

「何をしてるのかな？」
「いや、一緒に良い所にいこうかと。」
「一人で逝け！！」

油断も隙もありゃしない！！

二　筋トレ（前書き）

腹筋でも背筋でも、鍛えたい筋肉の場所によってもやり方はたくさんあるそうです。あくまで一例ということで、よろしくお願いします。

二　筋トレ

筋トレと剣の稽古を始めて、数日後。
「き・・・きんにくつう・・・。」
全身を駆け巡る痛みに悶絶しております。

やっぱり人間楽したらその分ダメになる生き物なのですね。
ここまで落ちてるとは思わなかったよ。
ギシギシと軋む体を何とか動かして、ふらふらしながらも、政宗の執務室に根性でたどり着く。
知らない人が見たら、ちょっとしたホラーかも・・・。

「ＡＨ～。大丈夫か？」
「Ｎｏ　ｐｒｏｂｌｅｍ。この試練を乗り越えねば、筋肉は身に着かないのよ。」
ぜぇぜぇしながら、いつもの定位置に何とか座ると、ギン！と政宗を睨んだ。
「決着をつけるまで、政宗と私は敵同士なのです！心遣いは無用！」
「お・・・おい・・・。」
「その意気だツキ。」
戸惑う政宗と、うむと満足気に頷く小十郎。

今私は打倒政宗を掲げて、小十郎に指導を仰いでいる所なのです！
政宗を負かすためにとお願いしたのに、意外にも小十郎はあっさり頷いた。
いつもなら、無礼者！！とか怒られてもおかしくないのに。

ま、教えてくれるのはありがたいので、そのまま付き合ってもらってる。

筋トレの後に素振りをしているんだけど、刀は重い！
鞘なしでも1？以上あるって絶対。
あれを六本構える某筆頭さんは、一体どんな体の造りをしてらっしゃるんですかね。まったく。

ぷるぷる震える手を何とかなだめて、お仕事を頑張ること数時間。
「よし、今日はここまでだな。」
政宗が終了を宣言して、小十郎がご苦労様でしたと言った所で、本日の執務は終了。
最近真面目にやってるようで、前ほど時間がかからなくなった。

「ちょっとだけ休ませてぇ～。」
ずりずりと文机から這いずり出て、広めに開いている所に倒れる。
背筋も腹筋も、首も肩もそれから足も腕も筋肉痛なので、寝ているときしか楽になれないのですよ。

「ちょっとやりすぎじゃねぇのか？」
机に肘を付いて私を見る政宗は、本当に心配そうだ。
仕方が無い。休憩中は休戦してやるか。

「この世界に来る前に毎日こなしてたトレーニング・・・鍛錬をして、あとは刀を素振りしてるだけなんだけどね。もうね、どれだけ自分が退化したかが良く分かりましたよ。」
「あれをか？」

近くでトレーニングを見ていた小十郎が、びっくりした顔で私を見た。
いや、本当は、前やってた奴の半分しかこなせてないのですがね・・・。
だって、ここにジムが無いんだもん。
ダンベルも無いしさ。

「何をしてるんだ?」
興味津々の政宗が身を乗り出した。
「別に普通だよ。腹筋、背筋トレーニングと、腕立て伏せとスクワット、それから・・・。」
「待て待て、どんなもんなのか想像がつかねぇよ。」
仕方が無いな・・・。

よいしょと起き上がると、政宗にまず仰向けで寝るように指示。
膝を立てた状態で、腕はお腹の上ね。

「背中は丸めずに、ゆっくり起き上がって。そう、ゆっくり。はいＳｔｏｐ!」
「お、おお・・・こ、これは・・・。」
半分だけ起き上がった状態で１０秒キープ。それからまたゆっくりもとに戻る。
顔を赤くした政宗がふーっと息を吐いた。

「これを１０回を一括りにして、１００回ね。」
「ひゃ・・・!?」
「あと、次が背筋。うつ伏せになって。」

驚いている政宗をうつ伏せに寝かせて、小十郎にいつものように足

を押さえるように指示する。

「おい。小十郎は毎日、ツキにこれをやってやってるのか？」

「え！？」

うつ伏せ状態のまま、太股を両手でがっちり捕まれて、上に乗られた政宗は殺気を放って小十郎を見上げた。

まぁ、確かにこの時代の人から見れば、女の太股を押さえるなんてことはありえないんでしょうけど。

「はいはい。背筋を鍛えるためなので、邪な考えを浮かばせない！」

やりにくそうな小十郎が押さえる中、政宗に手を頭の後ろに当てて、そのままゆっくり上半身を起すように言うと、またもや顔を赤くさせて持ち上げた。

「そうそう。・・・ところで、政宗どこまで上げられる？」

ちょっとした好奇心で聞いてみると、政宗は無言のままぐいっと体を起した。

「すげ・・・。ほぼ直角と来ましたか。」

いい背筋してますね。

と、まぁ初心者でも問題なさそうな所を教えたけど、二人とも楽しそうだね。

基本的に引き締まってるんだから、もういいじゃん。

慣れないから戸惑っているだけで、政宗と小十郎なら余裕でこなすよ、きっと。

小十郎と腹を鍛える運動をしていると、ツキが大人しくなったことに気が付いた。
「寝ちまったか。」
こちらを向いたまま、目を閉じて寝ているツキ。
その寝顔を眺めながら、書簡を片付け始めている小十郎に尋ねた。

「なぁ、小十郎。なぜ引き受けた?」
ツキが小十郎の下に行くことは予想できたが、小十郎がそれを受けるかどうかは半々だった。
受けたということは、それなりの考えがあったのだろう。

「・・・ツキは確かに強い。ですが、刀との戦い方を知らない。戦に出ようが出まいが、良い機会だと思ったのです。政宗様とて、そうお思いになったからこその条件なのでしょう?」
「まぁな。本音を言えば、オレの為の安心材料を得るため、だがな。」

どうあってもツキは付いてくるだろう。こいつの意思の強さは、身に染みて分かっている。
ならば、戦場に来ても簡単にはやられないという、保証が欲しかった。
もう、二度と失わないために。

「こいつが居た世界には、刀で戦う奴は居なかったらしい。」
だからこそ、力を使うことなく、オレに勝つまでの技術を身につけさせようとしたんだ。

まぁ、すぐできるとは思ってねぇけどな。

うう・・・と顔をしかめて寝返りを打つツキに、オレも小十郎も苦笑が洩れる。

「今日の午後は休ませるとしましょう。これでは立って構えることすら難しい。」

「だな。」

努力をすることは悪かねぇが、やり過ぎは良くねぇからな。

楽しそうな二人を眺めているうちに、いつの間にか眠ってしまったようだ。

ぼんやりと目を開けると、刀の手入れをしている政宗が視界に映った。

「起きたか?だいぶ疲れてるみてぇだな。」

刀を置くと、苦笑しながらこっちに来る。

それをぼーっと見ながら、体が重いなぁ・・・と感じる。

疲れているのか、体調が思わしくないのか・・・。

「ツキ？まだ寝ぼけてるのか？」
「んー・・・。だるい・・・。」
呟くと、政宗は私の額に手を当てて、首を捻る。
「熱は無いようだが・・・。ちょっと無理しすぎたんじゃねぇのか？」

だって・・・。
無理しなきゃ、置いてかれちゃうもん・・・。
政宗の着物の袂をぎゅっと握り締める。

「寝ぼけてるな？」
苦笑した政宗がよしよしと頭を撫でるのが気持ちよくて、目をとじる。
またうつらうつらしてきたとき、ふわりと体が浮いた。
ぎょっとして目を開けると、視界が高くなっていて、政宗の顔がすぐ横にあった。
「な・・・な・・・！！」
なにごとぉぉぉ！？

お、お姫様抱っこですよ！！
うおぉぉ！！恥ずかしい！！

「暴れるな。部屋まで連れて行ってやる。今日はもう何もせずに寝てろ。」
「でも・・・午後は小十郎が・・・！」
「その小十郎がそう言ったんだから、大人しく聞いておけ。Ｙｏｕｓｅｅ？」

ちょっと恐い顔で言われてしまっては、頷くしかない。

仕方ない。今日はゆっくり休んで明日また頑張るかなぁ。

三　夢の国で修行です

結局、お姫様抱っこされたまま、女中さんや侍従さんたちに生暖かい目で見守られながら、部屋に連行されました。
政宗は気にすんなとか言ってたけど、気になるわ！
恥ずかしいんだよ！！
うおおお！穴があったら冬眠したい！

政宗はまだ用事があるらしくて、直ぐにいなくなり、今は部屋には私1人。
障子を開け放ち、脇息に寄りかかりながら霧雨の降る外を眺めていると、庭に植えてある背の低い木の葉が、ガサッと揺れた。
次いで、ひょろっとはみ出る黒いふさっとしたもの。

「・・・・・・。」

ねぇ、あれって隠れてるつもりなのかな？
頭は確かに隠れてるますが、後ろ足と尻尾が丸出しですよー？
白銀がよく、黒金を見てため息を吐いてたけど、黒金っておばか属性だよね・・・。
まぁ、そこが可愛いんだけど。

「そんなとこに隠れてないで、こっちにおいでよ。」
笑いを堪えながら言うと、尻尾がびくっ！！と跳ね上がったあと、しおしおと垂れ下がった。

「見つかったか。」

「次からは尻尾を隠すことをオススメするよ。」
「う。」
バツが悪そうに縁側に座った黒金の頭を、軋む腕を持ち上げて撫でる。
黒金は上目遣いで私を見ると、心配そうに言った。
「大分辛そうだが、大丈夫か？」
「まぁ、なんとか。それはともかく、ちょっと黒金に聞きたい事があったのよ。」
会えないかなぁと思ってたところだったのよね。
黒金の様子からも、その事で現れたんじゃないかなと思う。

案の定、黒金は少し黙った後、力の事だろ？と言った。
私は頷くと、手を握ったり開いたりしながら説明した。
「力を使おうとすると、反発するみたいに弾けちゃうの。意図するものと違う効果が出ると言うか・・・。」
「ああ、先日空に向かって力を放っただろう？それが上界にまで届いた。」
「げ。まじで？」
どうしよう！蒼竜様に攻撃をしちゃったってこと！？

「ああ。正しくは、力の波が届いたって感じだな。」
青ざめてオロオロする私を見て、黒金は大丈夫だから落ち着けと宥めた。
蒼竜様に攻撃を加えたって訳じゃないのね！？
よかったぁぁ！
はぁーっと安堵のため息を吐いていると、黒金はそれでわかったんだが、と続けた。
「ツキの中に、蒼竜様とは別の力が存在していて、それが原因でうまく力をコントロールできないらしい。」

「別の力？なにそれ？」
「ツキを生き返らせるために、月神様が力を分けてくださったんだ。それが無かったら、お前は今こうしてここにはいない。」
ふーむ。その月神様のおかげで私は今生きていて、その力が原因でコントロールができないわけね。
って、まてよ？
「うろ覚えなんだけどさ、もしかして、あの金髪に金の目の派手なのが月神様ってやつ？」
「罰当たりが！！」
がう！と吼えられて、首をすくめる。
そんなに怒らなくてもいいじゃんか。
確かに、神様に対する言葉じゃなかったとは思うけど。
ってか、すでに直接会話したときに、思いっきり素で話してたよ。

「以後気をつけます。で、その月神様の力が私の中に在るから、力がうまく使えないってこと？」
「・・・まぁ、簡単に言えばそう言うことだ。だが、話はそう簡単には終わらない。月神様のお力をお前から抜けば、再びお前は死を迎える。またそのままにしておけば、膨大すぎる力にお前自身が負けて、やはり死ぬ。」
「どっちを選んでも、死亡なのかよ！！」
思わず叫んでしまって、慌てて口を手でふさぐ。
あぶないあぶない。うっかり政宗たちに聞かれようものならば、大騒ぎ確定だ。
今また戦が始まろうってこの時に、私のことで煩わせたりはしたくない。

「だから、俺が来たんだろう。安心しろ。お前が月神様の御力を自分のものとすればいいんだ。」
えへんと胸を張る黒金。
おお!!黒金の後ろに後光が射して見えるよ!!

「具体的に、どうすれば!?」
ずずい!と詰め寄ると、黒金はふふん!と笑った。
「努力と根性だ!!」
キラリ!と犬歯が光った。

・・・このバカ狼めが・・・!

「それのどこが具体的なのかな?」
黒金のこめかみをグーでゴリゴリしてやれば、ギャインギャイン!と悲鳴が響いた。

「ま、待て!最後まで話しを聞け!」
涙目で頭を抱えて伏せをする黒金に、ちょっとだけ心がすっとする。
ここ最近、ストレスたまることたくさんあったからねぇ。

「黒金くん?私今結構イラついてるのよ?絞められたくなかったら、さっさと話そうね?」
にっこり笑って言えば、黒金はコクコクコクコクと、縦揺れ痙攣かってくらいの速さで頷いた。
「特訓をするから、今夜月神様が迎えに来るそうだ。」
「はい?お迎え?」
「ああ。ツキは寝てればいい。夢を介して上界に連れて行って、そこで力を制御する為の訓練をするそうだ。」
それならば、政宗たちにもバレずに行けそうだ。
なんか幽体離脱っぽいイメージだけど。

「なるほど。んじゃ、今日は早めに寝るよ。」
「ああ。そうしてくれ。」

しかし・・・。
昼間は小十郎と鍛錬。
夜は月神様と特訓。

どちらも必要なこととはいえ、体がもつのか、ちょっと心配。

その夜、喜多さんに早めにお休みなさいをして、布団に入った。
昼間のことがあったので、まったく怪しまれることは無かった。
横になると同時に眠気が襲ってきて、直ぐに夢の中へ。

気がつくと草原のような場所に立っていた。
「来たか。」
後ろから声がして、振り返ればあの金髪男が立っていた。
「俺には一応月神といつ名があるんで、金髪男は勘弁してくれ。」

わお。頭の中を読んじゃうのね。
こりゃ、取り繕っても無駄だよ。黒金。
「失礼しました。二ヶ月程前は、命を助けて頂きまして、ありがとうございました。そして、今回も、私の為にお時間を割いて頂きましたこと、感謝の言葉もございません。」

これは本音だもん。
言葉遣いは取り繕ってますがね！
膝をついて、最上礼で頭を下げると、月神様はふっと笑った。
「感謝するなら、蒼と、俺の所まで声を届けたあの小僧にするんだな。ここまで声を届ける奴なんざ、ここ数百年いなかったんだ。ちょっとくらい動いてやらなきゃ神の名が廃るだろ？」
「そう、ですか。」
思わず顔が熱くなってうつむいた。

政宗がそこまで思ってくれていること、嬉しいと、思う。
でも、同時に不安もある。
政宗が望むものは、私じゃなくて、住む人が平和に暮らせる国を作ること。
それを邪魔しているんじゃないかと。

「それならば、お前が小僧に見合うまでの女になりゃ良いんじゃねぇの？」
にやにやしながら私を見てる月神様。
しまった。思考を読まれてるんだった。
プライバシーがなさすぎるー！

「お前はうだうだ考えすぎるんだよ。まだあの小僧の方がストレートだな。」

「努力します。でも、その前に生きるか死ぬかの問題があると思うので、そちらから先に解決したいのですが？」
これも本音ですよ？
話を逸らしたいだけじゃないんだからね！

「くくっ。そんなに身構えるな。たいしたことじゃねぇ。こいつを捕まえることが、まずの課題だ。」
そう言うと、月神様の目の前に可愛らしいクマのぬいぐるみが現れた。
毛並みは金に近い薄茶だ。
「力を使っても構わない。が、壊すな。」

ういっす！！やったるぜ！
クマはとことこと短い足を動かして、やる気になっている私の前までくると、その可愛らしい顔でニヤリと笑った。
「せいぜい頑張るこったな。」

・・・・・？

空耳か？可愛らしいクマから、なんか政宗みたいなセリフが聞こえたような気がしたけど。

「空耳じゃねぇよ。もうボケたのか？」
へっとバカにした様な笑いまで浮かべやがった。

　このクソクマがぁ！！
ふつふつと湧き上がる怒りのまま、月神様の前だということも忘れて、叫んだ。

「地獄を見せたらぁ！待てやゴルァァァ！！」
「待つわけねぇだろうが！」
走り出したクマは、ちらりと振り返ると、あかんべをしやがった。
ふふ、ふふふ、良い根性してんじゃないのさ。
「Ｕｎｌｉｍｉｔｅｄ　ｃａｐａｃｉｔｙ　ｔｏ　ｒｅｌｅａｓｅ！」
全力で捕まえてやる！と、力を開放した途端。
　金色の光が私の体を包んだと思ったのと同時に、音も熱もない爆発が起こった。
な！？なに！？
びっくりして硬直していると、目の前にＧＡＭＥ　ＯＶＥＲの文字が現れる。
　は？ＧＡＭＥ　ＯＶＥＲ？
「壊すな、と言ったろ？」
月神様が現れて、呆れた顔をした。
「今の、何ですか？」
衝撃波みたいなのが、ぶわっと広がったように見えたけど・・・。
戸惑っている私に、月神様は溜息を吐いて言った。
「下界であれをやらなくて良かったな。やってたら、半径数キロ圏内は壊滅してたぞ。」
はい？なんだって？
「力が暴走したんだよ。覚えておけ。俺の力は劇薬だ。使い方を間違えれば、地球一つくらいは簡単に吹き飛ぶ。」
まじで・・・？
私自身が原爆みたいなものってこと？
「そう思って構わない。だが、怯える必要は無い。蒼の力だって、

似たようなもんだからな。」
「え？蒼竜様のは癒しの力なのでは？」
うちの一族にはそう伝わっておりましたが？
首を傾げれば、月神様は鼻で笑った。

「蒼がそういう風に伝承させただけだ。そうでなければ、お前の力についてはどう説明するんだよ。」
そういわれればそうか。
「月が持つ力は、癒し、幻惑、狂気、引力、変化、など様々だ。その力を俺が制御している。蒼は俺の眷属だ。俺よりはかなり弱くはなるが、同じ力を持っている。そしてその血を引くお前もな。得意不得意、強弱はあるだろうがお前も、お前の家族たちもその力を使うことはできたはずなんだ。ただ、癒しの力しか使えないと思い込んでいたから、そちらに特化したんだろうがな。」
へぇぇぇ。そうだったんだ。目から鱗だ。
つまり、元をたどれば、私の力と蒼竜様の力と、月神様の力は繋がっているという事なのね。

ってことは、月神様と蒼竜様の力が同質で、だけど月神様の力のほうが強いから、暴走するってこと？
んーでも、なんか違う気がするな・・・。
同質の力なんだけど、一つになれないから、コントロールがきかない？

考えながら、ちらっと月神様を見れば、満足そうに私を見ていた。
そうか。そういうことね。
ならば、制御ってよりは、一つに練り合わせるってことが必要なのね。

「言うは易し、行うは・・・だ。まずは自分の中の蒼の力と俺の力を見極めろ。それができなければ融合はできない。それから、コントロールができるようになるまで、絶対に地上で力は使うな。その理由は分かったな？」
「はい。」

さっきのクマが一瞬にして消えたような力が、地上で暴走したらと思うと、ぞっとする。
と、いうか、コントロールできるようになるまで、地上に帰らないほうが良いんじゃないのか？
「俺はそれでも良いが、小僧どもが大騒ぎをするんじゃないのか？」
「黒金か白銀を、政宗の所に遣いにやってもらえませんか？」
「ああ、わかった。手配しよう。この空間は、お前がいくら力を暴走させても問題は無い。納得するまでここで訓練しろ。」
「はい。ありがとうございます。」
頭を下げると、月神様は用があるときは呼べよと言い残して消えた。

四　残響

ツキを強引に休ませた翌朝。
小十郎が起こしに来るまでと、布団の中でだらだらと過ごしていると、廊下を慌しく走ってこちらに近寄る音が聞こえて枕元の刀を掴んだ。
侵入者でも現れたか？
起き上がって足音の方向を向いたと同時に、血相を変えた喜多が部屋に飛び込んできた。
「殿！！ツキが・・・！！」
ツキがどうした！？

すぐに喜多を押しのけ、単衣に羽織を掛けた状態で部屋を飛び出した。
「何があった？」
ツキの部屋に向かいながら、後ろを付いてくる喜多に尋ねる。
「起しても起きないのです。反応も無くて・・・。」
ただ寝ていて起きないくらいなら、いままでにいくらでもあったが、喜多がこんなに取り乱すことは無い。
確かに昨日筋肉痛と言うには、少し様子が変なようにも感じた。
まさか・・・。
脳裏を過ぎる思い出したくも無い記憶を振り捨て、ツキの部屋に入った。

横たわるツキの枕元に座り込んで、様子を見る。
一見しただけでは、ただ寝ているようにしか見えない。
頬に触れれば、掌に伝わる温もりに、知らずほっと息を吐いた。

「おい、ツキ？」
ペチペチと音を立てて頬を叩いても、反応は無い。
「昨夜就寝するまでは、普通だったのです。なのに今朝起しにきたらこの状態で・・・。」
熱があるわけでもなさそうだし、ただ深く眠っているだけの様だが・・・。
揺さぶっても、結構強く叩いても、体を起しても、目覚める様子は無い。

「その様なことをしても無駄だ。」
典医を呼ぶか迷っていると、庭から声がした。
「誰だ！？」
声のした方に視線を走らせれば、いつの間にか開いていた障子の向こうに、黒い毛並みの狼が居た。
「・・・黒金・・・といったか？」
確か、ツキが拾ったという狼で、蒼竜の使いとも言っていたな。
黒金を知らない喜多は、喋る狼に驚いて目を見開いていたが、オレが刀を置くのを見ると、何も言わずに部屋の隅に控えた。

ツキを布団に横たえると、改めて黒金を見る。
「簡潔に話せ。なぜツキは目覚めない？」
「お前も短気だな？」
何故か後退りしながら、グリグリはやめてくれと意味不明なことを言う黒金に、イラッとなる。
「さっさと話せと言ってるだろうが。」
「わかってるって！ツキの体は今眠ってる状態で、夢を介して上界で力を制御する訓練をしている。」
「力を？そんな必要が・・・ああ。」

必要があるのか？と聞こうとして、先日ツキが力を使って、騒ぎになったことを思い出した。
本人も何かがおかしいと、しきりに首を傾げていたな。

「なぜ今更そんな事になった？」
「ツキが一度死んだあの時、生き返らせるには、弱くなりすぎた力を補うものが必要で、そこに月神様の御力が与えられた。月神様の力は、そもそも人の身には過ぎたもの。蒼竜様の血に繋がるツキだからなんとかなったが、受け入れた力を制御しきれずに暴走しやすくなっているんだ。」
「その力を抜きゃぁ良いんじゃねぇのか？」
それで解決だろ？と問えば、そうは簡単にいかないんだと、黒金は溜息をついた。

「ツキの中の蒼竜様の力と、与えられた月神様の力が、混ざり合ってしまっていて、今更分ける事ができなくなっているらしい。後は、ツキがその二つの力を自分のものにするしか、方法はないんだ。」
なんかえらい事になってたんだな・・・。
ガリガリと頭を掻きつつ、眠ったままのツキを見下ろす。

一度は助けた命を、しかも眷属とも言えるツキに、神がそう悪いことをするとは思えねぇ。
オレにできることといえば、せいぜいこうして眠っているツキを見守ることくらいか。
情けねぇ話しだがな・・・。

「いつ、戻ってこれる？」

「これぱかりはツキ次第だな。」

そうか・・・・。
間もなく川中島で武田と上杉の戦が始まる。
明後日には、伊達も出陣する手筈になっている。

間に合うか?
間に合わなければ、置いていくしかない。
そこにオレの私情を挟むことはできねぇ。

「わかった。」
ツキの頭をひと撫でし、立ち上がる。
黒金も立ち上がり、庭に降りた。
「あ、そうだ。ツキが眠り続けている限りは、月神様の加護が働いてるから、危険はない。そのまま寝かせとけって事だ。」

OKと、手を上げて応えると、黒金はじゃあなと言って、走り去った。

「ふぇーっくしょん!!っあー。」
一人残された草原で、我ながらおっさんくさいくしゃみをしてしま

った。
政宗辺りが噂してんのか？
大騒ぎをしてなきゃ良いけどなぁ。

さて、訓練の進捗状況ですが・・・。

色々試している中で、今までと違う力が私の中にある事はわかった。
元々の力よりも、明らかにもう一つの力の方が強いんだよね。
その上、激しい感じがする。
静電気のような反発をしているのは、明らかにこっちの方だ。
筋力をあげようとした時、今までならば体の中で力が補助してくれてたイメージなのに、表面を伝って外に放出してしまう感じ。

月神様は同質の力だと言ったけど、ぜんぜん違うじゃんよー。
できない！こんなん一つにまとまるかってーの！！
もう疲れた！！

癇癪を起こして大の字にひっくり返る。
どれだけここにいても、夜にはならずに太陽の無い青空が天井に広がっていた。

このままじゃ帰れない。
でも、早く帰らなきゃ、政宗達が戦に行ってしまう。
やらなきゃならないのに、できない焦り。

昔は毎日感じていたな・・・。

満月（みつき）の名を与えられた時から、時期宗主になる事を期待されていたのに、力を暴走させてばかりいた子供の頃。
癒しの力を使う度に、暴走させて余計な怪我を相手にも自分にも負わせていた。
今の私は、あの頃と同じだ。

《自分の中で血液の様に力を全身に張り巡らせる様なイメージを浮かべてごらん？》

ふと、朔夜に何度も言われた言葉を思い出した。
あの頃と同じならば、もしかしたら・・・。

仰向けに寝転んだまま、血の廻り、心臓の鼓動に意識を向ける。
とくとくとくと、規則正しいリズムで刻まれる鼓動と、全身を流れる血流。
しばらく目を閉じていると、自分のものとは違う流れを感じる。
慣れ親しんだ蒼竜様の力だ。
そのままでいると、体の奥底に固まって動かないものがある事に気がついた。

《滞っている所があるだろ？そこの部分を少しずつ崩して流していくイメージを浮かべてごらん？》

優しく撫でる様に。緩やかに解けるように。
なかなかうまくいかないけれど、まったくできないわけじゃない。

《そう。上手だ。流れた力はまた戻ってくる。流れを止めずに、いつも自分の中を廻らせていれば、いつかみぃの思い通りに力を使うことができるよ。》

流れ始めた月神様の力が、蒼竜様の力と一緒に私の中を廻り始める。

あれほど反発しあっていた力が、融合して一つになった。

朔夜の教えに助けられるなんて・・・ね。

自嘲の笑みを浮かべながら、起き上がる。

「Ｍｕｓｃｕｌａｒ　ｓｔｒｅｎｇｔｈ　ｒｅｉｎｆｏｒｃｅｍｅｎｔ．（筋力強化。）」

慣れ親しんだ感覚が全身を包んだ。

よし。いけそうだ。

まずは試しにまっすぐ前に走ってみた。

「おおおおおおお・・・・・！！」

気持としては普通に走ってみただけだったのに、高速道路を走る車くらいのスピードが出ました。

こ、これ、何かに当たったら、私死ぬんじゃないかな・・・。

でも、力を使うことはできた。

あとは、その力加減だけど、さほど難しいことじゃない。

暴走しやすい力を、常に抑えてきたのだから、これからもその感覚で力を使えばいいんだ。

「月神様～。」

何も無い虚空に向かって声をかけると、月神様が現れた。
「どうだ？」
「何とかいけそうです。」
頷いてみせると、月神様はふむと頷いて、またあの腹立つクマを創りあげた。

「Ｍｕｓｃｕｌａｒ　ｓｔｒｅｎｇｔｈ　ｒｅｉｎｆｏｒｃｅｍｅｎｔ．Ｌｅｖｅｌ　１０．（筋力強化。レベル１０）」
まずは一番押さえたレベルで。
体の感覚が変わるのを感じて、クマに目を向けた。

「ちったぁ楽しませてもらえそうだな？」
「余裕かましていられるのも今だけよ。」

さっさと捉まえて、帰るわよ。
走りだすクマを追って私もダッシュした。
って、速っ！！
クマは一瞬で遥か遠くまで走って行ってしまっていて、唖然となる。
あの短い足で、どうしたらあんなに速く走れるの！？

「Ｌｅｖｅｌ　５０！」

こちらも速度を上げて追いかける。
暴走させることは無いけど、障害物があったら避けられる自信が無いな・・・。
帰ったら、山で修行しなきゃなぁ。

あっという間に追いついて、ちょこまかと走るクマの頭に手を伸ばした。

捕まえ・・・・・
「おらよ！」
あとちょっとで手が届くってところで、身を翻すクマ。
ムッキィィィ！！
クマのくせに生意気な！！

しばらく続けているうちに、私のほうが息切れしてきた。
向こうは余裕綽々って感じで腹が立つ！
こうなったら！！
「Ｅｘｐａｎｄ　ｔｈｅ　ｓｈｉｅｌｄ．Ｌｅｖｅｌ　３０！」
クマと私を囲むシールドを作り出し、これ以上逃げられないようにしてやった。
「ふっふっふっふ・・・最初からこうしてりゃ良かった。」
「く・・・！卑怯な・・・！」
「ふはは！なんとでも言え！私は早く帰りたいのよ！」
じりじりとにじり寄りながら、気分はすっかり悪役でクマの頭を鷲掴みにしてやった。
捕ったどぉぉぉぉぉぉ！！
。
「合格だ。良くやった。」
ヒャッホー！と捕まえた獲物を振り回して、喜びのダンスを踊っていると、腕を組んだ月神様が現れた。
「はい。月神様のおかげで、制御できるようになりました。ありがとうございました。」

「気にするな。あとは、自分で何とかしろよ?」
「はい。」
神妙な顔で頷くと、月神様はにやっと笑った。

「それと、うだうだ考えすぎるなよ?お前の悪い所だぜ?過去に囚われるな。今を見ろ。」
「う・・・はい。」
その話忘れてると思ってたのにぃ。

それからと続ける月神様に、まだなんかあるのか?と思ったら、私の手を指した。
「いつまで掴んでるんだ。いい加減それを放せ。」
まだギリギリと力いっぱい掴んでいたクマが、涙目でじたばたと暴れている。
「あらやだ。おほほ。」
ぱっと放してやると、クマは脱兎のごとく月神様の後ろに隠れてしまった。
「凶暴女め!」
ふん!そんな所から言われたって、負け犬の遠吠えにしか聞こえませーん!

クマと睨みあっていると、自分の体が少しずつ透け始めた。
ああ、目が覚めるのか。
「俺や蒼をがっかりさせるような生き方だけはするなよ?」
「はい。」
しっかり頷けば、月神様は満足げに笑った。

さぁ、帰ろう。

政宗たちまだ出陣してないと良いけど・・・。

五　アイドルってすげぇ（前書き）

五　アイドルってすげぇ

真っ白になったあと、意識が浮上して目を開けると、見慣れた天井が映った。
ああ、戻ってきたんだなと、数回瞬きをしながらぼんやり思った。
次いで顔を横に向けて部屋の様子を見ると、誰もいない。
外を見ると、比較的強い雨が降っていた。

ボーっとしながら起き上がり、掛けてあった羽織を掴むと、おぼつかない足取りで廊下に出る。
政宗や小十郎たちはどこだろ・・・。喜多さんは？
ふらふら歩いていると、ちょうど角を曲がってきた政宗を見つけた。
「ツキ！？」
驚きの表情でこちらに来る政宗に、ほっとした。
良かった。まだいてくれた。

「おはよ～。」
へらっと笑ったのに、手にしていた羽織を奪うと、政宗は私の肩に掛けてそのまま抱き上げた。
「そんな恰好でふらふらするんじゃねぇ。」
「気が気じゃなくてさぁ。私何日寝てた？」
「１０日だ。」
「１０日！？」

え？そんなに寝てたの！？って言うか、出陣はどうした！？
驚いて目を見開く私に、政宗は苦りきった顔をして見せた。
「出陣しようとしたんだが、この長雨で川が氾濫した。渡る橋が流されちまった。」
なるほど・・・。それで出陣できなくなったのか。

米沢から川中島までの距離と時期を考えたら、途中で何箇所同じようなことになってるかわからないもんねぇ。
私としては助かったけど、出鼻をくじかれた政宗としては面白くないんだろうな。
「おまけに、川が氾濫して流された村や田が出てきている。」
「被害はでかいの？」
「今はまだ規模は小さいが、このまま雨が続けばどうなるかわからねぇ。今農民の代表者が来ていて、小十郎と綱元がその報告を聞いている。」
ふむ。なるほど。
一緒に行って聞きたいけど、この恰好じゃ無理だな。寝起き丸出しだもん。
「そういうことなら、政宗もその報告を聞きに行っておいでよ。」
「ああ、そのつもりだ。喜多をお前の部屋に寄越すから、仕度が済んだら来い。」
「うーっす。了解。」
元気良く返事をすると、政宗はふっと笑った。
「だいぶ元気になったようだな。」
「うん。不調も筋肉痛もなくなって、調子が良いよ。」
「お前はその方がいい。」
部屋の前で降ろされ、政宗はそう言うと私の頭をひと撫でして去って行った。

喜多さんに御世話されながら仕度を整えて、政宗たちがいる部屋に向かうと、中から可愛らしい女の子の声が聞こえてきた。
「そうだべ。おらの村も、隣の村も家こそ問題はねぇが、田んぼが流されそうだっぺ。」
言ってる内容はあれだけど、声は可愛いなぁ。
「ツキです。開けます。」
声をかけてから襖を開けると、政宗と小十郎と綱元さん、それに数人の農民と一人女の子が座っていた。
小十郎と綱元さんはほっとしたように、農民たちと女の子は不思議そうに私を見ている。
「心配かけてごめんね。もう大丈夫だよ。」
小十郎の隣に座って、二人に言った後、ぽかーんとしている農民たちを見た。

「話の途中でごめんなさい。ツキといいます。」
笑顔で言うと、農民たちはちょっと顔を赤くしてごにょごにょなんか言っていた。
「おらはいつきだべ。ツキ姉ちゃんは蒼いお侍様の家来だべか？」
好奇心にキラキラ輝く目に、お姉さんはノックダウンです。
「か・・・かわいい・・・。」
思わず呟いた言葉を聞き取った小十郎が、落ち着けと私の腕を握り締めた。
はっ！いけない。ここで暴走したら、政宗の顔に泥が塗られちゃう。

「家来じゃないけど、まぁそう思っててくれればいっかな。」
ね？と政宗と見ると、政宗はちょっと渋い顔をしながらも頷いた。
なに？家来なんてそんな良い身分じゃないって？
今まで通り居候って言った方が良かったのか？
ニートってのが一番適してそうだけど、この世界でそんな単語無いだろうし・・・。

なんて悩んでいると、咳払いが聞こえた。
「とりあえず各地の状況は分かりました。あとはこの雨がいつまで続くか・・・。」
綱元さんがずれた話を軌道修正して、みんなの意識を引き戻した。
政宗も表情を改めると、農民たちを見た。

「幸い昨年は豊作で備蓄もまだ十分にある。最悪田が流されたとしても、この冬を食いつなぐことはできるだろう。あとは、お前ら農民だ。川の近くにある集落はいつでも高台に避難できるように準備をしろ。特に老人や女子供は今からでも避難しておけ。」
おお、政宗がちゃんと領主っぽく見える！
内心感心していると、いつきちゃんがあの・・・と遠慮がちに言った。

「もし、米さ収穫できねぇ時は、年貢は減らしてもらると思っていいだべか？」
「ああ、それがお前らと決めた取り決めだからな。」
「それを聞いて安心しだべ！」

笑顔で頷きあう農民たちに、政宗はその代わりと声を鋭くした。
「各地に配している豪族共が不審な動きをしているときは、すぐに報告をしろ。それが条件だったよな？」
ふーん・・・。なるほどね。
ギブ&テイクな取引で良いんじゃないの？
豪族を多く抱える奥州では、隅々にまで目が行き届きにくいもんね。
前みたいに私腹を肥やした挙句に、裏切るやつまで出てきたら、天下を目指すどころじゃないもの。

「分かってるだよ。そこら辺はおらがきっちり締めてるから安心してもらっていいべ。なぁ！みんな！」
へぇ。いつきちゃんって、農民代表なんだ。
こんなに若いしかも女の子がねぇ。
「んだんだ！いつきちゃんの為なら、おらたちなんでもするだ！」
「いつきちゃんの笑顔を守るためなら頑張るべ！」
「んだ！いつきちゃんはおらたちの女神だべ！」

・・・代表じゃねぇ。アイドルだ・・・！！
他の農民はいつきちゃんの信者か！！
すげぇ。この子すげぇ。

唖然として盛り上がる農民たちを見ていると、いつきちゃんは一頻り賞賛の声を聞いた後、満足げに頷いて「この通りだべ！」と政宗に言った。

「ねぇ、小十郎、この子たちいつもこうなの？」
ひそひそと隣の小十郎に尋ねると、ちょっと嫌そうな顔で頷いた。
「ああ。今日はまだ良い。いつきの村に行くと、もっと凄いものが拝める。」
「・・・なんとなく想像できた。」
武道館でコンサートをするアイドルだ。

奥州筆頭と農民たちの会談は終わり、いつきちゃんを先頭に農民たちは自分たちの村に帰るというので政宗と小十郎と一緒にお見送りです。
お見送りなんだけど、私の視線はいつきちゃんに釘付けだ。

正確には、その手に。

「・・・ねぇ、政宗。あのハンマーって・・・・。」
「あれはあいつの武器だ。昔農民一揆を起したときに、あれを振り回して挑んできやがった。」
「げ、マジ!?」
一揆を起したことも驚きだけど、それよりあれを振り回すの!?
あの細腕で!?
いつきちゃん・・・なんて恐ろしい子!!
劇画調で驚いていると、ずりずりとハンマーを引きずっていつきちゃんがこちらに来た。

「ツキ姉ちゃん、今度おらのむらに遊びに来てくんろ!」
まぶしいくらいの笑顔で言われ、頷かない人間はいまい。
いたら成敗してくれるわ!

「行く行く!ぜひ遊びに行かせてもらうね!」
「約束だ!待ってるだよ!」
嬉しそうにピョンピョン跳ねるいつきちゃん。
って、ハンマーが信者の皆さんに当たってますよ!?

「ぐは!い、いつきちゃん、もっと殴ってけろ!」
恍惚とした表情で、地面に倒れる信者。

先生!ヤバイ人がいます!

「もうそろそろ行かねぇと、日が暮れちまうぞ。」

ドン引きしている私の隣で、小十郎が呆れたように促した。
「気をつけていけよ。」
政宗が腕を組んだまま言うと、いつきちゃんは頷いた。

「んだ。そったら、行くべ！」
いつきちゃんを先頭に、農民たちは雨の中元気に帰っていった。

「いやぁ・・・個性豊かな農民たちだったね・・・。」
執務室に戻って、久しぶりないつものメンバーでお茶をしながら、しみじみというと、小十郎はまぁなと笑った。
綱元さんは他にも処理しなければならない仕事がてんこ盛りのようで、さっさと自分の仕事部屋に行ってしまった。

「それより、ツキの方は大丈夫なのか？」
「１０日も寝てた割には、体は衰えるどころか逆に絶好調なんだよね。」

生き返ってからずっと感じていた体の重さとか、だるさとかが無くなって、今ならトレーニングも普通にこなせそうだ。
明日からまた始めなきゃ。
それに、いつもの森で力を使って走ったりする練習もしないと。

直進しかできないんじゃ、話にならないもんね。

「大丈夫なら良いが、無茶はするなよ？」
小十郎が空になった湯飲みを片付けながら、これからのことを考えている私に釘を刺した。
うぐ・・・と詰まる私に、政宗と小十郎は深々と溜息を付いた。

「お前が大人しいのは、寝ているときだけかよ。」
「がーん!!政宗に言われるなんて・・・!!ショックだ!!」
てめぇ!それはどういう意味だ？ああ!?と、ドスの効いた声でメンチをきる政宗に、私も負けじと応戦する。

ぎゃーぎゃー騒ぎあう私と政宗に、小十郎がやれやれと苦笑した。

六　蛍の舞う晩に（前書き）

六　蛍の舞う晩に

ようやく梅雨も終わりを向かえ、大きな被害も出ることなく無事に夏を迎えることができた。
流れてしまった橋の修復も完了し、懸案事項は解決。
いつでも出陣できる状態になった。
だけど、武田と上杉の方に結構深刻な被害が発生したらしくて、戦どころではなくなったらしい。

え？訓練と政宗の勝負？
連戦連敗中ですがなにか？
体力とか筋力とかじゃなくて、太刀筋が分からないんだよ。
刀と戦うことが、こんなに難しいなんて思わなかった。
もっと剣術を勉強して、先読みできるようにならないとだめだなぁ・・・。

夕飯も終わって、あとは部屋で寝るだけの時間。
外の空気を入れようと障子を開けると、黄緑色の光がふわりと目の前を過ぎった。
「ホタルだ・・・。」
今日一気に羽化したのか、結構な数が舞っていた。

部屋の明かり一つだけにして、他は全部落とすと、縁側に座わる。
部屋が暗くなったせいか、遠くを飛んでいたホタルが、ちらりほら

りとすぐ近くまで飛んできては、小さな光を灯した。
徐々に数が増えて、茂みのあちこちで光り始め、ちょっとしたイルミネーションみたいだ。

去年初めてホタルを見たときには、驚いて大興奮したなぁ。
話には聞いていたけど、こんなに光るとは思ってもいなかったから、ほんとに驚いたよ。
口をあけてホタルを追いかけてたら、躓いて転んで、政宗に指を指して笑われたっけ。

・・・良イ思イ出ダネ・・・はは・・・。

痛い思い出を記憶の奥に押し込んで、気を取り直してホタルこいと小さな声で口ずさんでいると、部屋の襖が開く音がして、振り返ると政宗が入ってくるところだった。

「部屋が暗いから、もう寝たのかと思ったぜ。」
「ホタルが綺麗だったから見てたんだよ。」
そう言うと、政宗から再びホタルに視線を戻す。
柔らかな風が吹いて、ホタルが一斉に飛び立った。
「今年もそんな時期か。」
そう言いながら、政宗が私の隣に座った。

ホタルをしばらく眺めた後、政宗がそういえば、と呟いた。
「今年はホタルを追いかけまわさねぇのか？」
「うるさい！今年は遠くから眺めるから良いの！」
そろそろ言うと思ってましたよ！くっそ！！

むっとして見上げると、ニヤニヤした政宗が私を見下ろしていた。
ふんっ！とそっぽをむけば、政宗はくっくっくっと笑った。

「Ｓｏｒｒｙ．そんなに怒るこたぁねぇだろう。」
「怒ってないですよーだ！」
顔を背けたまま、ずずっと政宗との間を開ければ、すぐさまそれ以上の距離を詰められた。
つまり、膝の上に抱え上げられました。
ちょ！もう子供の姿じゃないんだから、膝抱っことか勘弁してよ！！
胡坐をかいた政宗の足の上に横向きで座らされてしまい、じたばたともがいたけど、腰に回された腕はびくともしない。
こんな所でも力の差を見せ付けられるとは！
「ホタルが逃げちまうだろ？静かにしろ。」
腕を引き剥がそうと躍起になっていると、楽しそうに政宗が笑った。
「静かにするから、とにかく降ろしてよ！」
「却下だ。」
そう言うと、ますますがっちり抱え込まれてしまい、とうとう根負けして諦めた。
大騒ぎしてホタルがいなくなるだけならともかく、誰かが様子を見に来ちゃった日には恥ずかしくて死ねる。
「足痺れても知らないんだからね。」
「ＨＡ！そんなに軟じゃねぇよ。」
あっそ。後で立ち上がったときに、足を突付きまくってくれるわ！
ぶすっとしたまま政宗に寄りかかり、騒ぐ私たちなどお構いなしにふわふわと飛び回るホタルを眺めた。
しばらく会話もなくホタルを眺めていると、一匹がこちらに向か

って飛んできた。
そっと手を差し出すと、そこに止まった。
「ほら、止まったよ。」
掌で光を放つホタルを見せようとしたら、政宗はじっと私を見ていた。
「なに？なんか付いてる？」
頭にもホタルが止まってるのかな？
首を傾げた振動に驚いたのか、掌のホタルが飛び立ってしまった。
「あ・・・。」
思わず捕まえようと伸ばした手を、政宗が掴んだ。
少し強い力で持ち上げられた手は、そのまま政宗の唇に押し当てられた。
「ま！政宗！？」

なに！？何してるのこの人！？
やわらかい感触とか、ダイレクトに伝わってきやがるんですが！！

固まった私に少し笑うと、政宗は耳元にその唇を寄せた。
「Ｓｔａｙ　ｗｉｔｈ　ｍｅ　ｆｏｒｅｖｅｒ，ｗｏｎ'ｔ　ｙｏｕ？（オレの側にいろ。いいな？）」

言われた言葉が脳に到達して、噛み砕かれて理解するまでにたっぷり十数秒はかかりました。
じわりじわりと顔の温度が上昇して、何故か目が潤んでくる。
心臓が暴走してドキドキうるさくて、周りの音が良く聞こえないくらいだ。

耳から顔を離した政宗と目が合って、慌ててうつむいた。
「ツキ、返事は？」

「と、隣にいるって言ったじゃん。」
「そういう意味じゃねぇよ。」

溜息混じりに言った後、政宗は私を膝から下ろし、向かい合うようにして座らせて、両手でうつむいている私の顔をはさんで上を向かせた。

「ツキを全部オレにくれ。」
はっきりと告げた政宗は、懇願する様な、縋る様な、そんな表情をしていた。
「ぜ・・・んぶ?」
「お前のこれからを全てだ。」

私のこれからを全て、政宗に?
えと、これって、プロポーズってやつ?

え?プロポーズ!?
ダメじゃん!政宗は伊達家の当主でそれなりの家柄のお姫様を正室にしなきゃ駄目じゃん!
って、ことは私愛人!?
昼メロばりに愛憎劇とかやっちゃうの!?

ドロッドロの女の戦いをねちねちとしちゃうの?
生まれた子供は私生児で、正妻と嫡男を恨んで殺そうとしたり!?

「ダメダメ!そんなのお母さん許しませんよ!!」
「おい、ツキ?どこにイってるんだ?帰って来い。」

軽く揺さぶられて我に返った。

「あ、失礼。あまりの衝撃にちょっと魂が飛んでいきかけたよ。」
危ない危ない。
ふぅっと額の汗を拭うと、改めて政宗を見上げた。

「えっと、結論を言えば、愛人は子供の情操教育によろしくないので辞退させていただきます。」
うむ。政宗の子供が、正室と側室の愛憎泥沼劇を見ながら育つのは、教育上よくない。
正室一人でガンガン子供を生んでいただきなさい。
私はそれを見守っていてあげるからさ。

と、すっきり笑顔で言った瞬間、政宗のヘッドロックを食らいました。
「いでででで!!!ギブギブ!!」
「このバカが!!誰がお前を側室にするって言った!!」
「ぎょへぇぇぇ!!ちょ、マジで頭蓋骨潰れる!!」
「オレは、お前しか娶る気はねぇよ!!」
「ふんぎゃぁぁぁ!!い、今みしって言った!頭がみしっていったぁぁぁぁ!!」
「人が一世一代の大勝負に出たってのに、おまえはぁぁぁぁ!!」

ろ、ロープ!!もしくはタオルをぉぉぉぉ!!

えぐえぐと頭を抱えて泣きべそをかく私と、完全に拗ねてしまった政宗。
ホタルだけが優雅に飛び回っております。
ううん、まだズキズキするよぅ。

「だ、だってぇ。こんな後ろ盾も無い私よりも、ちゃんとしたところから正室を貰わなきゃ家臣たちが納得しないじゃんよ～。」
政宗の背中に向かって言うと、ちらっとだけこちらを見て不貞腐れたように答えた。

「もうすでに話は通してある。全員認めさせた。」
「は！？いつの間に！？」
「お前が居なかった半年の間に全部根回しはしてある。」
「マジで！？つか、もっと居るでしょうが！私よりも政宗に相応しい人が！」
「オレは！！」

怒りを露にして振り返った政宗は、私を睨みつけて怒鳴った。
「家柄とか、後ろ盾とか、そんなもんオレはいらねぇ！オレは、ツキが欲しいと言ってるだろうが！」
ビクッとなった私を見て、政宗ははぁーっと溜息を吐きながら頭を掻いた。
「なぁ、ツキ。そんなことは考えんな。オレは、お前の気持を聞いてるんだ。周りの考えなんざ端から聞いてねぇよ。」

私の気持ち・・・・。

焦がれるほどの想いなら、胸（ここ）にある。
でも、私が伝えても良いの？
もっと相応しい人がいるはず。
奥州筆頭を支え、癒すことのできる女性（ひと）が。

私よりもずっと、政宗に必要な人が・・・。
だから、想いは想いのまま、秘めておいた方がいい。

そう、思っていた。

政宗を見れば、真面目な表情で私の言葉を待っている。

いい、かな・・・。
言っても、いいの・・・かな・・・。

《うだうだ考えすぎるなよ？お前の悪い所だぜ？》
呆れた声が聞こえたような気がした。

おずおずと手を伸ばして、政宗の袂を掴んだ。

「返品はできないからね？」
「しねぇよ。」

「劣化しても、捨てたりしたらダメだからね？」
「もったいなくて捨てられるか。」
「あと、大事にしなきゃだめだよ？」
「ああ。大事にする。」

なら、いいか。

ふっと笑えば、政宗も同じように笑った。

「いいよ。政宗にあげる。」
「ああ。全部貰い受けたぜ。」

ちょっとだけ蒸し暑い、ホタルが舞う晩に、私は政宗のものになりました。

六　蛍の舞う晩に（後書き）

筆頭粘り勝ち（笑）

七　飲み過ぎ注意

宴会大好き伊達軍は、何かと理由をつけては酒だ宴会だと盛り上がる。

今日も顔を顰める小十郎の隣で、政宗がさも嬉しそうにＬｅｔ's ｐａｒｔｙ!と叫び、ズラーっと並んだ兵士達がイェーイ!と盛り上がっております。

とにかくパーリーだと連れてこられた私には、何の宴会なのかがよくわからない。

渋い顔の小十郎の隣に座ると、こそっと尋ねた。

「今日は何があったの?」

「三太の所に赤ん坊が生まれたんだ。」

三太は伊達軍の兵士の一人で、荒くれ共の中では比較的穏やかで大人しい性格だ。

最近確かにそわそわしてるなぁと思ってたけど、奥さん臨月だったのね。

「あら、そりゃおめでとうだね。で、三太は?」

「帰った。」

「主役いない宴会かよ!」

「まったく、酒蔵が幾つあっても足りねぇ。」

何だかんだ言って、半月に一回は飲み会してるから、小十郎としては頭が痛いんだろう。

私は酒が飲めるなら、いつでも大歓迎なんだけどね!

「まぁ、めでたい事には変わりないんだし、小十郎も飲みなよ。」

徳利を持って傾ければ、小十郎もため息を吐いて、盃を手にとった。
政宗は珍しく兵士達の中に入って飲んでる。
多分小十郎に小言を言われるのがわかっていて、逃げたんだろう。
仕方が無い奴め。
今日は私が小十郎の自棄酒に付き合うか。

「小十郎とサシで飲むのは初めてだね。」
「そう言えばそうか。」
くいっと盃を開けて、今度は小十郎が徳利を手にした。
「あ、ども。」
返杯してもらって、私も一気に飲み干す。
うまー。

「しかし、子供が生まれる度に宴会では・・・。」
「あはは、伊達軍は独身率が高いのが救いだね。」
「まったく。政宗様も人の祝いをする前に、御自分の祝言をお考えにならなければならないというのに。なぁ？」
「ぶほっ！！」

意味深な視線付きで爆弾投下され、思いっきり酒を吹いた。
「げほっ！ごほっ！こ、小十郎！？」
「あれだけ政宗の機嫌が良ければ、嫌でもわかる。」
まぁ、確かに最近は機嫌良さそうだけど、それだけで何でわかるんだよ！

苦笑しながら背中をさする小十郎に、右手を上げて大丈夫だとジェスチャーすると、はーっと深呼吸した。
あー苦しかった。

しかし、小十郎にバレてるってことは、喜多さんにもほぼ確実にバレてるな・・・。
最近朝起しに来なくなったのはそのせいか！！
ううう、恥ずかしい・・・。
素面でやってられるか。今夜は飲んでやるぅぅぅ！！

いつも政宗の酌ばかりしていて、あまり飲んでる所を見た事がなかったけど、小十郎も飲める口だ。
飲んでも飲んでも、顔色が変わらないし、言動もちゃんとしている。
こういう人とだと安心してこっちも飲めるってもんだよ。
まぁ、政宗も酔いつぶれるなんて事はしないけど、奴の場合何をされるかわからないから、ある意味気が抜けない。

けっこう良い感じに酔ってきた頃、隣で飲んでいる小十郎にふと湧いた疑問をぶつけてみた。
「小十郎はお嫁さんもらわないの～？」
「・・・ツキ、飲み過ぎだ。そろそろやめておけ。」
「大丈夫だってぇ。で、もらわないの～？」
「家は兄が継いでいるから、俺はいいんだ。」

徳利を奪い取って、代わりに水の入った湯飲みを渡された。
酔ってないって言ってるのにぃ。
でも、喉が乾いたので、水を飲みながら、小十郎を見上げた。

「へぇ、小十郎お兄ちゃんいるんだぁ。でも、お兄ちゃんがお家を継ぐから、お家を継がない小十郎は結婚しないの？」

家を継がない人は結婚しないのか？

意味が分からんと首を捻っていると、小十郎が私から取り上げた徳利から手酌で盃に酒を注いで仰いだ。

おお、その喉仏がセクシーですな。

「家を継ぐなら、家を守るために婚姻は嫌でもしなけりゃならねぇが、それ以外の男なんてのは、どうでも良いって感じだな。」

「へぇそうなんだ～。気楽だねぇ。それに比べて、跡取りは大変だぁ。嫌でも結婚しなきゃならないいんじゃぁねぇ。」

と、そこまで自分で言って、はたと気が付いた。

政宗も跡取りだよ。

って、ことは結婚しなきゃならない組だ。

「もしかして・・・政宗も嫡男で伊達家を継ぐから、仕方なく、なのかなぁ。」

あ、なんかずーんと落ち込んできた。

そうか、仕方ないから、身近な私にしたのかぁ。

「そ、そんな事はない！政宗様に限っては、そんな事はないぞ！」

慌てた小十郎が私の肩を掴んで必死に否定してるけど、嫌でも結婚しなきゃならないって言ったのは小十郎じゃん。

うう、なんか泣きたくなってきた。

「何で政宗は違うって言えるの？政宗なんか、伊達家の当主じゃん。きっと周りがうるさいから私で手を打ったんだ。」

きっとそうに違いない。

ぶわぁっと涙が溢れて、頬を伝ってぼたぼたと膝の上に落ちた。
「お、おい、ツキ？勘違いしてねぇか？」
「ううっ、ひどい・・・政宗信じてたのにぃ。」
「いや、だから、聞いてるか？」
「ぎごえないもん！！」

小十郎がひどく戸惑った顔をして何か言っていたけど、それどころじゃなくなっていた私は、腹のそこから大きな声をだして、思いっきり泣いた。

久しぶりに良直達と飲んでいると、上座の方からツキの泣き声が聞こえて顔を上げた。
小十郎が、必死になって宥めようとしているのがここからでも分か

る。
ったく、何やってやがるんだ。

「Ｈｅｙ，何してんだ？」
「ま、政宗様！」
上座に戻って二人に声をかけると、小十郎がホッとした様な顔で振り返った。
ツキを見れば、まるでガキのように声を上げてぎゃんぎゃん泣いてやがる。

「政宗のばかぁぁぁぁ！！嫌いぃぃぃぃぃ！！」
「Ｗｈｙ!？」

オレが何したってんだ！？
小十郎、お前何を言ったんだ！？

「小十郎？」
説明しろと名前を呼ぶと、小十郎は溜息を吐いて事の次第を説明した。

なるほどな。
確かに小十郎の言っていることは、よくある話だ。
だが、なぜオレが仕方なく嫁を娶るために、ツキを妥協で選んだって事になるんだよ。
どういう思考をしてやがるんだか・・・。

呆れ気味でツキを見れば、周りに徳利が7，8本転がっていた。

明らかに飲みすぎだ。

「政宗は私のことを玩んで捨てる気なんだぁぁぁ！！」
「おおおおおおい！！人聞きの悪いことをいきなり叫ぶんじゃねぇよ！！」

勘弁しろよ！下座からの視線がいてぇよ！！

大トラと化したツキが畳をバシバシ叩きながら、私はお飾りの女なのょぅなどと、妙な小芝居を始めだした頃。
「何をしているんですか。」
と、喜多が呆れ顔で現れた。
「まったく、こんなに飲ませるなんて。」
「申し訳ありません。」

非を詫びる小十郎には見向きもせず、オウオウと泣いているツキの前に座ると抱き起こして素早く口の中に何かを放り込んだ。
「あま・・・。」
今まで号泣していたのが嘘のように泣き止み、口をもごもごさせながらきょとんとしている。
その隙にツキの顔を拭いてやると、喜多はオレを見上げた。
笑みを浮かべているが、背後になにか不穏な気配を滲ませている喜多に、薄ら寒いものを感じる。

「殿、ちゃんとツキと話をなさいませ。まさか、とは思いますが、これからの事をろくに話もせずに、ただ床を共にしているだけ、なんてことはないですよねぇ？」
「そ、そろそろしようと思っていたところだ。」

やべ・・・。
話してねぇよとか言ったら、天下を取る前に喜多に殺られちまう・・・！
「左様でございましたか。でしたらば、ぜひ早めに！！お話くださいませね？」
「お、おう。」
カクカクと頷くオレに満足そうに頷くと、喜多は去っていった。
・・・助かったぜ。

喜多が去り、再び連中が騒ぎ出す中、疲れきって脱力したオレと小十郎は座って溜息を吐いた。
「小十郎、ツキにはもう飲ませすぎるな。三本が上限だ。」
「承知いたしました。」
隣で上機嫌で飴を舐めているツキを横目で見つつ、ひそひそと話せば、小十郎も深く頷いた。
大トラから子猫に戻ったツキが、人の気も知らねぇで、くあぁっとあくびをしている。

これ以上何かしでかす前に、今夜は寝かせちまうか。
喜多の言うとおり、ツキにこれからの話もしなきゃならねぇが、この状態で話しても無駄だろう。

「ツキ、部屋に戻るぞ。」
「ええ～？」
眠そうに目をこすっているくせに、不服そうに唇を尖らせるツキ。
「眠いんだろ？もう寝ろ。」

「うう～。」
「ほら、行くぞ。」
先に立ち上がり、立てと手を差し出すと、ツキは両手をこっちに伸ばした。
「あ？何やってんだ？早く立て。」
「だっこ！」
「・・・・・・・・・・。」

・・・・・・・・・・・・ここに他の連中がいなければ・・・・・・。

上目遣いで強請るツキを無言で抱き上げると、小十郎に寝るとだけ告げて足早に広間を出た。

朝目が覚めると、政宗が私の上に覆いかぶさってました。

「Ｇｏｏｄ　ｍｏｒｎｉｎｇ　ｈｏｎｅｙ.」

「おはよう。で、この状況は一体何事？」

「昨夜のことを覚えているか？」

人の質問を無視して、朝からエロエロしい声で政宗が囁き、私は昨夜のこと？と首をひねった。

昨夜は小十郎と飲んでて・・・飲んでて・・・・。

「あれ？」

「さんざん泣いて騒いでたんだが、覚えてねぇのか？」

「うっそ・・・！そんなバカな・・・！」

といいつつも、昨日の記憶が思い出せない。

確か小十郎と飲んでて、ええと・・・・。

必死に思い出そうとしているのに、政宗は私の首に顔を埋めるとぺろりと舐めやがった。

「んにゃ！朝から何してんのよ！！」

首を押さえて怒ったけど、やっぱり無視して政宗はフンと笑った。

「オレがお前を仕方なく妥協で娶ろうとしていると、泣き喚いてたんだ。」

「うえぇぇぇ！！？」

なんですとぉぉぉ！？

つか、妥協ってどういうこと！？

完全パニックに陥った私は、政宗をどかして起き上がろうとしたが、両手を布団に縫い付けられてしまって身動きがとれない。

「オレは言ったよな？ツキが良いと。お前でなけりゃダメだと。お前意外を娶る気はないと。」

急に恐いくらいに真剣な顔つきになった政宗に見つめられて、顔が熱くなる。

「それが信じられねぇか？」

「え・・・いや・・・その・・・・。」

寝起きの脳みそに刺激が強すぎる会話で、もう頭真っ白だ。

ただ、政宗がその場しのぎや妥協で私を選んだんじゃないって事は分かっている。

けどね、なんで朝からこんな状況なの！？

なんだか泣きたい気分で政宗を見上げると、それに気がついた政宗がふぅと息を吐いてから、腕の拘束を外して起き上がり、私も引っ張り起して抱き寄せた。

圧迫と拘束から解放されて、ほっと息を吐いてから、えーとと呟いた。

「ゴメン。昨日のこと何にも覚えてないんだけど、私は政宗を疑ってるわけじゃないよ？でもね、時々でいいから、今みたいに政宗の気持を言ってくれたら、嬉しいかな。」

ぼそぼそと小さな声で言うと、政宗はそうかと呟いて私の頭を撫でた。

良く分からないけど、なんだか嬉しそうだ。

納得してくれたのかな？

良かった良かった。さて、起きて朝の仕度をしようかなと思った時。

「オレもツキから気持を聞きたいんだが？」
と、思いもよらない不意打ちに見舞われた。
恐る恐る政宗を見上げると、ニヤニヤと笑いながら私を見ていた。

ああいった手前、私も言わないわけにはいかないのか！？
でも、でも、でも、でも・・・！！
葛藤していると政宗が、言ってくれないのか？とさも残念そうに、
でもニヤニヤしながら言いやがった。
ちくしょー。絶対私の反応を見て楽しんでるな！
くそー！ならば言ってやるわよ！

むんずと政宗の襟を両手で掴むと、ぐいっと引き寄せ、膝立ちして耳の横に口を近づけた。
「政宗が大好きだよ。」
そう言うと、おまけだとばかりに、頬にキスを一つ落とすと、そのまま立ち上がった。

「着替えてくる！！」
政宗の顔も見ずにそう叫ぶと、単衣のまま政宗の部屋を飛び出して自分の部屋に逃げた。

その日、上機嫌でニタニタしている政宗が、あちこちで目撃されたという・・・。

七　飲み過ぎ注意（後書き）

以後、ヒロインはしばらくお酒を自重したとか（笑）

八　城下町へ行きました

梅雨が明けたと思ったら、本格的な夏が来て一気に暑くなった。
政宗から一本取るという勝負も、最近ではいい所までいくけど最後は負ける、というパターンが多くなってきた。
あともうちょっとなんだけどなぁ・・・。
暑くてバテちゃうってのもあるんだよね。
皆は上半身裸とかで良いですけど、私は政宗と小十郎と喜多さんからの厳命でしっかり着なけりゃならない上に、袴は暑いんじゃぁぁぁ！！

「もうやだ・・・。」
滝のように流れ落ちる汗を拭ってぼそりと呟いた私の言葉を政宗が聞いて苦笑した。
「仕方ねぇだろ、我慢しろ。」
そう言う政宗も、流石に他の人たちみたいに脱いだりまではしないけど、暑そうに前を少し肌蹴させてたりする。

大体なんでこんな暑苦しい恰好をしなきゃならないのよ！！
いつきちゃんとか、かすがとか、めっちゃ涼しそうな恰好してるじゃん！！
・・・まぁ、かすがの恰好ができるかって言ったら、恥ずかしいので遠慮しますが。

「そうだ、買い物に行こう。目指せいつきちゃんスタイル！！」
「あ？いつき？」
「そう。あの前掛けはともかく、あんな短パンが欲しい。普通に売ってるとは思わないけど、なんとかして手に入れたいなぁ・・・。
そうだ、バサラ屋とかに売ってないかな？」

隣の政宗を見上げると、なんだか渋い顔をしていた。
だらだらときり無く流れる汗を拭う私を、しばらく無言で見下ろした後、仕方がねぇかと呟いた。

「朝餉が済んだら街に連れてってやるよ。」
「え？ホント？」
「確かに、その恰好で動いていたら、倒れちまいそうだからな。」

やったー！この夏は涼しい恰好で過ごせる！

久しぶりの外出で、喜多さんとその手下共が久々に暴走してどえらい目に遭いつつ、政宗たちが待っている所につく頃には、巳の刻を過ぎてしまった。
「ごめんねぇ～。」
「いい。それより、随分めかし込んで来たな。」

驚いた顔の政宗が、頭の先から足の先までしげしげと私を眺めた。政宗の隣を歩くなら、これくらいしろと言われて、半強制的に化粧だ髪結いだ、果ては着物を着せられてそりゃぁもう大変だったんだよ。
ははは・・・。

「やっぱり目立つ？私は地味な恰好にしてくれって言ったんだけどさ。」
「良いんじゃねぇか？オレが一緒に行くんだ。問題はねぇだろ。」

「え？問題？」
政宗が一緒じゃなかったら、この恰好だと問題あるの？
どういうこと？と尋ねると、小十郎が苦笑して、ならず者が時折現れるからな、と教えてくれた。
ふーん。良い恰好してる女は良いカモって事か。
「どんなに警備を強化しても、なかなか防ぎきれるもんじゃねぇからな。」
「なるほど。」
もう時間もだいぶ押してるし、このまま行くしかないんだけどさ。
「準備できたなら行くぞ。」
「はーい。」

と、政宗の後ろについて行くと、馬がいた。

そうだよ。馬だよ馬。
どうやって乗るの？

政宗と小十郎の馬が並んでいて、私はたぶんどちらかに乗せてもらうんだろうけど、こんな着物でどうやって乗ったら良いの？
いつもは袴で気楽に跨いで乗っていたんだけど、着物でそれやったら引かれるよねぇ？

じぃっと興味深げに私を見ている馬と見詰め合っていると、急に腰を捕まれて、ぐいっと持ち上げられた。
「おわっ！？なに！？」
「じっとしてろ。」
すぐ近くで政宗の声がしてはっと周りを見れば、いつの間にか馬に

跨っていた政宗に抱え上げられていた。
自転車の横座りみたいな状態の私の腰に片腕を回して支え、もう片方の手は珍しく手綱を掴んでいた。
なるほど、こうやって乗るのか。

って、こんな座り方じゃ落ちるわぁぁぁぁぁ！！

「オレの腰に腕を回してちゃんと捕まってろよ？」
上機嫌の政宗に言われるままに抱きつくような形でしがみつく。
腰が細いなコノヤロウ・・・。
って、端から見たら結構こっぱずかしいんじゃないか？この恰好。
「ちょ、やっぱり着替えてきた方がいいんじゃ・・・」
「このままで良い。行くぜ！ＹＡ－ＨＡ！」
「ってうっきゃぁぁぁぁ！！」

前足を上げて嘶く馬に悲鳴を上げひしっとしがみつく私に、政宗は落とさねぇよと笑ったけど、それでも恐いものは恐いの！！
安定が悪いというか、政宗容赦ねぇなというか・・・。

結局、街に着いて馬を降りるまで、周りを気にする余裕なんか無かったよ。

米沢の城下町は、想像していたよりもずっと賑やかだった。
「うはぁ・・・すっごい人だね。」

休日の渋谷くらいは混んでるよこれ。
あんぐりと口をあけて辺りを見回していると、ぐいっと腕を引かれた。
「ほれ、行くぞ。いつまでもボーっとしてるとはぐれるぞ。」
あ、うん。と頷いて政宗と小十郎の後ろを着いていくんだけど、歩くのが速くて自然と小走りになってしまう。
周りを見る余裕もなく、二人の背中を追いかけていると、急に横から大きな荷物を背負った男の人が横切って慌てて止まった。
「ごめんよ～！」
言いながらも、男の人はそのまま走り去ってしまった。
こんな人ごみの中で危ないなぁ。
って、政宗と小十郎どこいった？
「わお・・・いきなりはぐれたし。」
気がついて戻ってくるかと思ってしばらく待ってみたけど、背が人よりちょっとだけ低い私には、二人を見つけ出すことはできなかった。
ううん。あと１０センチ身長伸びないかなぁ・・・。
ここでいつまでも待ってても仕方が無いので、まずは最初の目的地だったバサラ屋に行ってみようかな。
政宗たち待ってるかもしれないし。
うむ。我ながら頭が良いな！
早速近くの人を捕まえて、バサラ屋ってどこですか？って聞いたら、なんですかそれ？と聞き返されてしまった。

え?どういうこと?米沢にはバサラ屋ないの?
でも政宗たちはそんなこと言ってなかったしなぁ。
・・・あ。そういえば・・・。
前に小太郎に連れて行ってもらった春日山城近くのバサラ屋は、一見雑貨屋みたいだったんだっけ。
もしかして、知る人ぞ知る隠れたお店なのか?

だとしたら、どうしよう・・・。探せないじゃん。

うーんと俯いて悩んでいると、影が差した。
「どうしたの?何かお困り?」
顔を上げると、いかにもゴロツキですって風貌の男が、にやにやしながら私を見下ろしていた。
伊達軍の面子は強面が多いヤンキー集団だけど、こんな風に嫌な雰囲気は漂わせてない。
面倒なのに目をつけられたなぁ・・・。

「大丈夫です。連れを待ってるだけですから。」
「そうなの?でも、あんたここでずっとうろうろしてたよね?」
ちっ、ずっと目をつけていたのかよ。暇人め!
でも、もしかしたらこういうタイプの人間の方が、知ってるかもしれない。

「あの、バサラ屋って知ってますか?」
「バサラ屋?」
一瞬眉を顰めた後、男はああ!と思い出したように呟くと知ってるよと頷いた。
おお!意外に使える人間だった!
「案内してあげるよ。結構複雑に入り組んだ路地にあるから。」

「なるほど。じゃ、お願いします。」
頭を下げると、男はこっちだよと私の手を強引に掴むと歩き出した。

いやぁ、三回目の角を曲がった辺りから嫌な予感はしてたんですけどね。
連れて来られたのはバサラ屋なんかではなくて、怪しげな御茶屋さんだった。
「これのどこがバサラ屋？」
「へっ、のこのこ着いてくるあんたが間抜けなんだよ。」
本性を現した男が中に声をかけると、数人の似たような奴らがぞろぞろ出てきた。

「おお、上玉じゃねぇか。こりゃ高く売れそうだぜ。」
「ああ、俺結構好みだな。」
「お前ああいう乳くせぇガキみたいなのが良いのか？」
ギャハハハと下品に笑う男たち。

なるほど、こういうのをならず者って言うのか。
冷静に男たちを観察していると、私をここまで連れてきた男がニタニタしながら私の肩に手を置いた。
「まずは俺たちが味見をしてやるよ。」

うーむ、お約束の展開になってきたな。

どうしようかなぁ。あまり大騒ぎにはしたくないんだけど・・・。
「おい、恐くて声も出ないのか？」
顔を覗き込まれた瞬間、拒絶反応が出ました。
即ち、右ストレート炸裂。

「ぐはぁ！！」
顔を抑えてのた打ち回る男に、周りの連中が驚愕した。
が、すぐに我に返ると、刀を抜いて一斉に私を取り囲んだ。
「このアマ、優しくしてやってれば付け上がりやがって・・・！」
「付け上がってないし、優しくしてもらった覚えも無いって。」
そう言い終らないうちに、刀を構えた男が一人切りかかってきた。
おっと。危ないなぁ。
毎日鍛錬しているおかげか、以前よりも少ない動きで刀を避け、ついでにそいつの脇腹に肘をめり込ませると、声も鳴く脇腹を押さえて蹲った。
「こ、こいつ女のくせに・・・！」
三人目は小太刀を前に突き出すようにして飛び掛ってきて、避けた瞬間を四人目が刀で切りかかってきた。
「った・・・！」
避け切れなかった刀の先が、右手首を掠めた。
ぽたりと赤い滴が地面に落ちる。

うわ！着物汚しちゃう！！喜多さんに怒られるじゃん！！

左手で右手首を押さえて、顔をしかめていると、男たちはニヤニヤしながら包囲を縮めてきた。
「どうした？恐くなったのか？」
「最初から大人しくしてりゃ、気持良い思いだけで済んだのによぉ。」
「お譲ちゃん大丈夫ぅ？」

頭悪そうなセリフを並べる男たち。
うーん、どうしようかなぁ。
一、着物が汚れるので、いろいろ我慢する
二、着物が汚れてもいいから、こいつら全員シメる。

二択か・・・。うーむ。
一はありえないな。うん。二を採択して、喜多さんには政宗と小十郎から謝らせよう。そうだ、それが良い！
私をさっさと置いていった罰だ！

「って、事で二を採択。」
血が止まらない右手で懐の懐剣を取り出そうとしたその時。

「こんな所にいやがったのか。」
聞き慣れた声がして、振り返るとホッとした表情の政宗が立っていた。
「何遊んでやがるんだ。ちゃんとついて来いって言ったろ？」
「あんなスピードついていける訳ないでしょうが。少しは私を気遣えよ！」

選択肢三、政宗に全部押し付ける。
うん。即決です。
これで着物を汚さずに、尚且つこいつら全員シメられるね。
一石二鳥だ。

「誰だテメェは！」

男たちを無視して政宗と話し始めたのが気に入らなかったのか、呻いていた男が起き上がって政宗を睨みつける。
政宗はそいつらを気にすることなく、無造作にこちらに向かって歩いてきた。
「ツキ、手をどうした?」
鋭い目をして私の右手を見る政宗。
「かすり傷。着物で立ち回りは難しいねぇ。」
「油断したんだろ?」
「う・・・。」

はい、その通りです。すみません。
一気に不機嫌になった政宗が、刀を抜いて男たちを見据えた。
「覚悟はできてるんだろうな?」
「うるせぇ!テメェ一人で何ができるってんだ!!女は売れるが、男には用はねぇ!やっちまいな!」

男が叫んだ瞬間、政宗はダン!と強く一歩を踏み込んで間合いを一瞬で詰めた。
抜いた刀を男の首筋に当てると、地の底から湧くような声を出した。

「ツキを売るだと?地獄が見てぇのか?」
「っひ・・・!」

蒼白になった男は、刀を落として震えた。
あーあ。ダメじゃん、得物を落としちゃ。
「政宗、殺しちゃだめだよ?背後とか洗いざらい吐かせないと。」
「わかってる。」
チッと舌打ちをして、政宗は男の腹を殴って地面に転がした。

「に、逃げるぞ！」
圧倒的な力の差に、怖気づいた一人が逃げ出そうと振り向くと、いつの間にか小十郎と黒脛巾の数人が取り囲むように立っていた。
おおう。私一人を探すのに、黒脛巾使いましたか。

「やれ。」
小十郎の言葉が、「殺れ」に聞こえたのは、多分気のせいだよね。

ゴロツキたちを黒脛巾組の人たちが片付けて、一件落着ってところで、只今真っ当なお茶屋さんで小十郎に手当てされております。
治癒をしたんだけど、血を止めるまでしかできなかったんだよね。
もっとこっち方面も練習しなきゃなぁ。
苦手意識ってのはなかなか薄れないものですね・・・。

「ったく、話しかけて振り返ったらばあさんがいて、はぁ？とか言われたオレの気持がわかるか？」
「知らんがな。つか、あんな速さで歩かれて、ついていく私の身にもなれってーの。」
「いつもと同じ速さで歩いてただけじゃねぇか。」
「よし、わかった。城に帰ったら女装させてやる。そして私の気持を篤と味わえ。」

反省のはの字も無い政宗に、イラッとしていると、小十郎が苦笑して終わったぞと言った。
「ありがと。」
「いや、それよりこのくらいで済んで良かった。こっちも気づいてやれなくてすまなかったな。」
「うう、その言葉が欲しかったのよ・・・！政宗も小十郎を見習えってーの！」
「へーへー。」
「むきぃぃぃぃぃ！！」
「落ち着け、ほら団子食ってバサラ屋に行くぞ。」

小十郎が素早く突き付けた団子を、条件反射でぱくり。
「うま・・・。」
やわらかくて、程よい甘みのみたらし団子に、刺々しかった気分も穏やかになった。

「小十郎、それ喜多がやったのと同じだよな？」
「ツキを静めるのには、これが一番有効的かと。」
「オレも金平糖か飴玉を常備しておくか・・・。」

などと、コソコソ話している主従に気づかず、美味しいお団子を幸せ気分で満喫する私でありました。

八　城下町へ行きました（後書き）

九　お買い物です

いろいろあったけど、ようやくバサラ屋に到着です。
米沢のバサラ屋は、表向きは質屋さんだった。

中に入ると、越後で会ったあのおじいさんがニコニコ顔で出迎えてくれた。
「あれ？越後からこっちに転勤？」
「いや、アレは儂の弟じゃよ。」
はい？双子ですか？
首を傾げる私に、小十郎が耳打ちした。
「バサラ屋の店主は謎が多い。どこの国のバサラ屋に行っても同じ顔の店主が現れる。」
何それ！！双子どころの話じゃないじゃん！！

「お嬢ちゃんあの時は大分思いつめたような顔をしておったが、今は落ち着いたようじゃの？悪いこともあったが、良いこともちゃぁんとあったじゃろ？」
「えと、ホント何者？」
「ほっほっほっ。」
ほっほっほっじゃなくてさ。
バサラ屋店主恐るべし・・・！

「さて、お嬢ちゃんが欲しいのは、これらかね？」
と並べられたのは、これよこれ！と叫びたくなるようなものだった。
「おい、本当にこれを着るのか？」
恐る恐るといった様子の小十郎に、私は笑顔で頷く。

「そうそう。こういうのが欲しかったのよぉ！」
一見すると甚平みたいなんだけど、全体的に丈が短い。
ズボンは短パンくらいで、上も袖はなくて丈も短めだ。
「足が・・・腕が・・・。」
「これしかないのか？」
ぶちぶちと何かを呟いている小十郎と、不機嫌そうに店主に尋ねる政宗。
店主は困ったように私を見て苦笑している。

「いいじゃん。夏なんだしこれくらい大丈夫だって。元の世界でもこれくらいの恰好は当たり前だよ？夏はもっと露出することもあったんだから。」
まぁ、短パンタンクトップで過ごしたのは、小学生までだったが。
こっそり心の中で付け加えつつ言うと、政宗は不機嫌全開で否定した。

「見せすぎだ。もっと肌を隠す奴にしろ。」
「それじゃ暑いじゃん！」
「そんな恰好で真田の前に出てみろ、破廉恥だと大騒ぎして暴れまわるぞ。」
「これのどこが破廉恥！？」

ガルルルゥ！っと二人で睨み合っていると、まぁまぁと店主が間に入ってなだめた。
「お嬢ちゃんの言いたいことも、伊達の子倅の言いたいこともわかるが、ちっと落ち着け。」
良し良しとおじいちゃんみたいな店主に頭を撫でられてしまっては、私も引っ込むしかない。
ぶすっとした顔のまま、深呼吸して自分を落ち着かせると、じゃぁと妥協案を示した。

「じゃぁ、同じ素材で長いズボンってありますか？えと、このくらいの長さのやつ。」
と、膝下のラインを示すと、店主はあるよと言って奥に引っ込んだ。
膝が隠れる長さなら文句はあるまい。上については譲らんぞ！！
と改めて政宗を睨むと、ぷいっとそっぽを向きやがった。
可愛くねぇ！！

店主が持ってきたのは膝下の丈のズボンで、まぁこれなら袴よりは大分涼しいだろうと私も妥協した。
政宗は何も言わなかったけど、反対しないって事はいいって事だろう。
ま、短パンもこっそり佩きますがね。
自主トレで山行った時とかなら誰も見てないんだからいいよね。

何とか話が纏まって服は決まったけど、あとは武器も欲しい。
できれば鋼糸がいいんだけど・・・。
「鋼糸ってまた手に入れることはできますか？」
「銃ではなくて、あの糸のようなものかい？」
「そう。」
頷く私に、店主はしばらく難しそうな顔をした後。
「難しいねぇ。あれは忽然と現れた代物だから。」
やっぱりか・・・。
がっくりと項垂れていると、店主はこういうのはどうかね？と奥からなにやら持ち込んできた。

渡されたのは、蒼い光沢を放つ、鉄扇。

震える手でそれを持つと、ずしりと重い感触がした。
「ほんとにもう・・・なんで・・・・。」
この店はどうしてこうも、私を驚かせろものばかり差し出すんだろう。

ずっと欲しくて、でも結局受け取れなかったもの。
蒼月の証でもある、蒼い鉄扇。
それと同じ色形をした鉄扇が、今目の前にある。
これは偶然?それとも・・・・。

「ツキ?」
扇を見たまま動かない私に、政宗が声をかけた。
隣を見上げれば、心配そうな目と合った。
ちょっと笑って大丈夫だと答えて、手にした扇を広げてみれば、あの日見たものと同じ形だった。

「・・・店主、これどこで入手しました?」
「ひみつじゃ。ただ、その扇も、お嬢ちゃんを待っていたようだよ。」
穏やかな表情の店主に嘘や偽りは見受けられない。
まさか、という気持と、やはり、という気持が半々でそれでも手にした扇を手離す気にはなれなかった。

「これを、ください。」
かすれ気味の声でそう言うと、店主はまいどありと優しく笑った。

思いがけないものを手に入れた上に、全部政宗がお金を出してくれました。
持つべきものは金持ちな殿様だね！

「なぁ、その扇一体なんなんだ？」
ホクホクと笑顔で歩く私を横目で見ながら、政宗が尋ねた。
「これは、私の家に代々伝わってきた、宗主の証の鉄扇・・・と同じ形の扇。」
「は？」
「だって、私が与えられた扇はどこかに行ってしまって、行方がわからないんだもん。これがその扇かどうかなんてわからないし。でも、バサラ屋ならば失くしてしまった私の扇が在っても不思議じゃないかなぁと思ったりもするんだ。」
「なるほど。」
「宗主の証を武器にしてしまっていいのか？」
小十郎が後ろから尋ねてきたので、歩きながら後を振り返った。

あ、ちなみに現在は、私の左側に政宗、後ろに小十郎が歩いてます。
連行されているような気になるのは、なぜだろうか・・・。

「宗主の証が鉄扇なのは、一族を守るためだと聞いてるよ。なら、私を守るために使ってもいいんじゃないかと。」
「適当だな。」
呆れ気味の小十郎に、いいの！と言った所で、ふと目の前に髪飾りを売っている露天が目に入った。
そうだ！喜多さんのお土産に何か良さそうなのがあったら買っていこう！

二人にちょっと待ってと言って、露天を覗く。
「いらっしゃい！こりゃまた別嬪さんが来てくれたよ。」
「またまたぁ。誰にでもそう言ってるんでしょ？」
「とんでもない！お嬢さんよく綺麗だねって言われるでしょう？」
「言ってくれるのはお兄さんくらいなもんだよ。」

リップサービスを大げさに言うお兄さんに、クスクス笑いながら品物を眺めていると、これなんかお勧めだよと、綺麗な緑色の石のついた髪飾りを手にとって見せてくれた。
値段もそれほど高いものじゃないし、綺麗なんだけど、喜多さん向きじゃないんだよなぁ。

「もっと落ち着いた感じで、んーと、べっ甲みたいな感じのってある？」
「お嬢さんにはちょっと地味なんじゃないかな？」
「私じゃないよ。お世話になってる人へのお土産。」
「なるほど。」

あーでもないこーでもないと、お兄さんと話していると後ろに気配がして、振り返れば政宗がまだかよとぶっちょ面をしていた。
よし、ここは政宗の意見も聞いてみよう。

「ねぇ、政宗だったらどれが似合うと思う？」
「あ？お前にか？」
「違うって。喜多さん。」
「喜多ならこれだな。」
と、躊躇いもせずに選んだのは、綺麗な彫刻の施された櫛だった。
へぇ。良い趣味してるね。
「んじゃこれにしよう。お兄さんこれください。」

政宗から櫛を受け取って、お兄さんに渡す。
「お前にはこれだな。」
「へ？」
ぷすっと頭に何かを挿す気配がして、上を見上げると政宗が満足げに笑っていた。
「なに？どれ？」
「いいからそのまま挿しとけ。」

引き抜いて見ようとした左手を捕まれてしまい、政宗がお金をお兄さんに渡すのを見ているしかなかった。
「お嬢さん良かったね。良く似合ってるよ。まいどあり～！」
二つも売れて上機嫌なお兄さんに、喜多さんへのお土産の櫛を手渡され、はぁどうもと言っている間に政宗に腕を引かれて連れ出されてしまった。

待っていた小十郎と合流して、最後に政宗が入用だというお店にやってきた。
店先には、鰹だ昆布だ干し大根だと、台所ではお馴染みの乾物が所狭しと並んでいる。
「なぜ乾物屋・・・。」
「気にするな。」
そう言い残して乾物が並んでいるお店に入っていく政宗と小十郎の背中を見送り、私は店先で待つことにした。
乾物屋に何を買いに来たのかも気になるけど、この頭に挿してある簪の方が気になるのですよ！
いざ！と頭に手を伸ばそうとした瞬間。
「ねぇ、あんた一人？」

と、男に話しかけられた。

「ああ？」

邪魔されたイラつきのまま振り返ると、見た目からしてチャラ男ですって感じの町人風の男が立っていた。

「俺とそこの茶店で少しお話でもしない？うまい団子を奢るよ？」

「いえ、結構です。」

ナンパかよ。私なんかに話しかけるなんて、こいつ今日一日散々だったんだろうなぁ。

もう誰でもいいから話しかけてやれ！見たいな感じか？

ちょっと哀れみを込めた目で見てると、チャラ男は何か勘違いしたのか遠慮しなくていいからさと、いきなり私の右手を握った。

お忘れかもしれませんが、私の右手首は現在負傷中でございます。

「った・・・！」

遠慮なく握られて、思わず悲鳴を上げてしゃがみ込む。

目から火花が散ったよ！

「お、おい、大丈夫か？」

驚いたチャラ男が一緒にしゃがんで尋ねてきた。

見た目はアレだけど、性格はそれほど悪いわけじゃなさそうだ。

「大丈夫・・・。」

ちょっと涙目で答えた時。

「おい、何してるんだ。」

頭上から地の底を這うような声が聞こえて、顔を上げるとめっちゃ怒ってる顔の政宗が似たような顔の小十郎を引き連れて立っていた。

オウ、チャラ男に死亡フラグが立ってるネ。
これは何とかせねば。

後ろ手でチャラ男に早く去れと手を振りながら立ち上がった。
「店の物を見ていたら、手がぶつかっただけだよ。ね？」
「あ、ああ。」
コクコクと頷きながら、チャラ男はじゃ、そういうことで！と猛スピードで走り去っていった。
はやっ！

あっけに取られて見送る私の右腕を取って、政宗が顔をしかめた。
「また血が滲んでるぞ。」
「傷口が開いちゃったかな。まぁ、大丈夫明日までには治るよ。って、小十郎私は大丈夫だから、黒脛巾に追わせるな！」

政宗の背後で何か指示を出そうとしている小十郎を止めて、まだ怒り覚めやらぬという政宗を落ち着かせてって、なんで私がこんなに気を遣わなけりゃならないんだ！！

気疲れ半分、人ごみに疲れたのが半分で、城に戻る頃にはへとへとだった。
出迎えた喜多さんが私を見るなり眉を顰めたけど、頭の簪を見て、良いものを買ってもらったのねと笑顔になった。

お風呂も夕飯も済ませて、部屋で布団の上で寝転がりながら、買ってもらった簪を手にして眺めていた。
ようやく見れた簪は、蒼い石と小さな真珠で作られた可愛らしいものだった。
髪飾りなんて今までまったく興味がなかったけど、結構嬉しいものだ。
ちょっと振れば、シャラっと綺麗な音がする。
今度街に行くときは、この簪をつけて出かけよう。

昼間出かけてた為にできなかった執務を少し終わらせた後、ツキの部屋に行くと、簪を握り締めたまま寝ていた。
そっと簪を取り上げ机の上に置くと、ツキの隣に潜り込んだ。
「う・・・まさむね・・・・・？」
「寝てろ。」
「きょうはありがと・・・。うれしかった・・・。」

眠そうにしながらも、へらっと顔を緩めるツキに、こっちも自然と表情が緩む。

「そうか。また連れて行ってやるから、今日はもう寝ろ。」

「うん。」

そのまま目を閉じたツキの頭を撫でてやると、すぐに寝息が聞こえてきた。

白い包帯を巻いた細い手首が目に入り、そっと手に取る。

振り返ったら居なかった時の恐怖にも似たあの感情。

ようやく探し出したとき、男たちに囲まれて血を流していたツキを見たときの言い様もない怒り。

店の男と楽しげに話していたツキの表情を見た時の苛立ち。

ちょっと目を離しただけで、男に話しかけられるツキ。

今日お前がどれだけの男共の目に触れて、関心を集めていたかなんて、まったく気がついてねぇだろ?

「勘弁しろよ・・・まったく・・・。」

「む・・・。」

鼻を摘んでやると、眉を寄せたツキがコロンとオレの方に転がってきた。

オレの襟を軽く握り、擦り寄ってくる姿になんともいえない満足感のようなものが湧き上がってくる。

ったく、このオレがこうも女一人に振り回されることになるなんてなぁ・・・。

くくっとこみ上げてくる笑いをかみ殺して、ツキをゆるく抱き寄せる。

「Ｇｏｏｄ　ｎｉｇｈｔ，ツキ。」
柔らかなツキの匂いを感じながら、目を閉じた。

十　甲斐からのお使い（前書き）

お気に入り登録が１００件をを越えました。本当にありがとうございます。

十　甲斐からのお使い

夏も盛りを迎えて、今日も今日とて、朝の鍛錬に励んでおります。

「はぁ！！」
キィン！
「ＨＡ！」
キン！
「なんのぉ！」
ガキッ！！
「♪～！やるじゃねぇか。」

先日手に入れた鉄扇をほぼ鈍器のように扱って、政宗と戦ってるんだけど、どちらも本気でないというか、まだ肩慣らしみたいな感じだ。

「うおりゃぁ！」
扇を開いて真正面から突っ込み、斜めに振り下ろそうとすると、政宗の刀が受け止めた。
そのままの姿勢で、右膝で政宗の脇腹に蹴りを入れる。
「ぐっ！」
一瞬顔をゆがめる政宗だけど、バランスを崩すことなく力任せに私を押し出した。
「おっとっと・・・。」
流石に力を使ってない状態で、政宗に本気で力勝負にこられたら勝てるはずが無い。
今の蹴りだって、多少は痛いだろうけど、大したダメージにはなってないはず。

「今の一本って言わないの？」
だめもとで立会いをしている小十郎に尋ねると、政宗があんなもん一本とは言わねぇよ！と切りかかってきた。
おのれ！人が話しているときに切りかかってくるとは・・・！
「政宗様が参ったと認めたら一本だな。」
「げぇぇぇ！！」
認めるわけ無いじゃん！どこか一箇所でも傷つけて認めさせない限りは、絶対無理じゃん！！
「隙だらけだぜ？」
はっとなったときには、鉄扇は私の手を離れて、遠くに飛ばされて地面に落ちた。
「ＥＮＤだな。」
目の前に刀を突きつけられて、またもや私の負けだった。

今日も負けた。面白くないぃぃぃ！！
朝ごはんを終えて、政宗と一緒に食後のお茶をすすりながらぶすっとしていると、膳を片付けに行った小十郎が戻ってきた。
その表情が、苦々しいというか、うんざりというか、なんかいつもとちうがう。
「どうした小十郎？」
政宗が問いかけ、小十郎が答えようとした瞬間。

まぁさぁむぅねぇどのぉぉぉぉぉぉ！！！

「この声って・・・・。」
「真田か？」
二人で顔を見合わせた後、小十郎を見ると、こめかみを押さえて小十郎が溜息を吐いた。
「先ほど現れて、政宗様とツキに目通りしたいと。」
「仕方がねぇな。会わなかったらうるせぇだろうし。通してやれ。」
「は。」
呆れ顔の政宗が言うと、小十郎は頷いて部屋から出て行った。

幸村と最後に会ったのは、安土城で朔夜と戦う直前だったっけ・・・。
小十郎が幸村を連れてくるまで、政宗と二人で待ちながら、ぼんやりとあの時の事を思い出していた。
あれから誰とも一度も会っていない。
手紙も、なんて書いて良いのかわからなくて、書いていない。
会ってまずなんて言ったら良いのか・・・。

なんて考えていると、政宗がいきなりわしっと私の頭を掴んで引き寄せた。
「うお！ビックリした！」
「どうした？」
「なんか、幸村たちに会うのが安土城以来だから、生き返ってから手紙の一つも出さなかったし、怒ってたらどうしようかと思って。」

そう言いながら見上げると、苦笑している政宗の顔があった。
「真田も、武田のおっさんも、軍神も、ツキが戻って来ると知ったときは、安堵していた。今日は痺れを切らした真田が、お前の姿を見に来たんだろう。腹立たしかったら、いちいち奥州までこねぇよ。

」
確かにそうだろうけどさ。
うー・・・でも、緊張する。

そのうち、廊下を誰かがこちらに向かってくる足音が聞こえると、慌てて政宗の背中に隠れた。
「ツキ。」
「だってぇ・・・。」
隣に来いと促す政宗の背中にしがみついていると、襖が開けられた。

「政宗様、連れてまいりました。」
「おう。入れ。」
「失礼いたす！」
「おじゃましまーす。」

声しか聞こえないけど、幸村と佐助の声がして、すぐ近くに座り込む気配がした。
「ツキ殿は？」
不思議そうな幸村の言葉に、政宗が後ろに手を回して、私の背中を軽く叩いた。
諦めて出て来いって事だろう。

ううん、いきなりご指名とかやめてよね・・・。

おずおずと政宗の背中から顔だけ出すと、幸村と佐助が目を丸くしてこちらを見ていた。
「お、おひさしぶりです・・・。」
「おやまぁ、すっかり年頃の娘に成長してぇ。でもなんで竜の旦那の後ろに隠れてるの？」
佐助が首を傾げると、政宗が肩を震わせて笑った。

笑うなバカ！
どすっと背中にパンチをすると、政宗はますますおかしそうに笑った。
「お前らが腹を立ててるんじゃねぇかって心配なんだとよ。」
「はぁ!?なんでさ!?」

ますます不思議そうにしている佐助に、私はちょっとだけホッとして、顔だけ出した状態のままぼそっと言った。
「だって・・・。あんなお別れの仕方しちゃって、手紙の一つも書かなかったから・・・。」
「そんなこと気にしてたの?ツキちゃん律儀だなぁ。こっちだって文の一つも出さなかったんだから、おあいこだよ。ね、旦那?って、旦那?どうした?」

目を見開いて私を凝視したまま動かない幸村を、佐助がゆさゆさと結構激しく揺さぶった。
はっと我に返った幸村は、政宗の後ろの私をもう一度見た後、今度は俯いてなにやらぶちぶち言い始めた。

なに、なんか私おかしい?
今は甚平じゃなくて内掛け姿だし、そんなにおかしくはないと思うんだけど。
首を傾げる私の前で、チッと政宗が舌打ちして、なにやら不機嫌になった。
なんだ?どうした?

しばらく幸村の様子を窺っていた佐助が、なるほどねと頷くと、私を見た。
「どうやらツキちゃんが成長した姿を見て、緊張してるみたいだよ。そりゃ、それだけ綺麗になればねぇ?」

「またまたぁ、佐助は口がうまいなぁ。」
お世辞でも綺麗になったと言われれば嬉しい。
上機嫌で政宗の隣に座りなおすと、改めて佐助と幸村を見た。

二人とも相変わらず元気そう。
幸村は少し顔つきが大人びたかな・・・。
「幸村にも、佐助にも、心配をかけてしまってごめんなさい。」
床に手を付いて頭を下げると、二人ともやめてよ!!と慌てて止めた。
「ツキちゃんとこうしてまた会えただけでも、俺様嬉しいよ。ね、旦那?」
と佐助が言えば、まだ赤い顔をした幸村が。
「う、うむ。某もまこと嬉しく思いますぞ!」
と、微妙に私から目を逸らして答えた。

うーむ。いくら女の人が苦手でも、目も合わせてくれないんじゃ寂しいなぁ。
ちらりと佐助を見ると、苦笑している。
仕方がない。おいおい慣れさせるとしても、今は一旦席を外すか。
大切な用事を、私のせいでこなせなかったら悪いもんね。

「私ちょっと席を外してるよ。用事が済んだらまた呼んでよ。」
政宗にそう言って立ち上がろうとすると、幸村がお待ちくだされ!と引き止めた。
「某・・・その・・・ツキ殿があまりにも美しくなられて・・・その・・・申し訳ないでござる・・・。でも、・・・あの・・・ツキ殿にもここに居て欲しいでござる。」
最後は消え入りそうなほど小さな声になりながらも、必死に頑張る幸村に、私もなんだか恥ずかしくなってしまった。
「あ・・・うん。ありがと。じゃ、ここにいるね。」

佐助みたく言ってくれれば、普通に答えるのに、こういう言われ方はなんだか照れるな。
2人でもじもじしてると、隣から冷んやりとした冷気が漂ってきた。
発生源はもちろん政宗だ。

「真田、まさかツキの顔を見にわざわざ来ただけじゃねぇだろうな？」

「はっ！そうでござった！」

冷気に晒されたせいか、我に返って表情を改めた幸村は、政宗に向き直ると懐から書状を取り出して差し出した。

「お館様からでござる。こちらはツキ殿へ。」

二枚重ねになっていた書状のうち、一枚を私に差し出した。
私にも？

はっ！今度こそお怒りの手紙だったら・・・！
信玄公に怒られたら立ち直れないかも。

「大丈夫だから、読んで見てよ。」

苦笑しながら佐助が言い、恐る恐る書状を開くと、物凄く達筆で悠々とした字が現れた。

春日山城で別れた後を労う言葉と、その後を気遣う内容が書かれていた。
困った事があったら、いつでも頼って来いとまで書いてあって、思わず涙ぐんでしまう。
ろくに挨拶もせず、しかもその後音沙汰もなかった私に、こんな優しい手紙をくれるなんて。
目尻の涙を拭っていると、政宗が自分宛の書状を読みながら、ぽんっと私の頭を撫でた。

「ねっ、大丈夫って言ったでしょ？」
佐助に言われて頷くと、丁寧に書状を畳んで、深呼吸をして気持ちを入れ替える。
返事を書かなきゃ。

「二人ともまだいるよね？返事を書いてくるから、待っててくれる？」
そう言って、立ち上がろうとした私の腕を政宗が掴んだ。
ほえ？なんじゃ？
とりあえず政宗の隣に座り直して、隣の政宗の顔を窺うと、僅かに眉間に皺を寄せていた。

「豊臣・・・聞いたことねぇな。」
「そうなんだよ。最近急に勢力を増してきていて、大阪を中心に領地を広げている。」
「で、この書状か。・・・小十郎。」
手にした書状を小十郎に渡すと、政宗は難しい顔をして腕を組んだ。

「豊臣、秀吉？」
ぽそっと呟いた言葉は、隣に居た政宗だけが聞こえたらしい。
「知ってるのか？」
と小声で聞かれて、名前だけはと頷いた。
私の世界の人物と、この世界の人物は名前だけ一緒で、あとは全然違うんだもん。
当てになんかならないよ。

織田信長亡き後、豊臣秀吉の台頭ってのは同じ。
でも、明智光秀は私が討ったし、織田信長は政宗と幸村が討った。

このあと同時代が動いていくのかなんて、誰にもわからない。
今を生きている人たちが、これから先の未来を作っていくのだから。

「豊臣の勢力は、日増しに拡大していて、織田が支配していた地域の殆どは、すでに豊臣の配下に収まっているでござる。徳川も豊臣と同盟を組んだようでござる。」
「そう。毛利と前田も豊臣についた。残るは四国と九州、それから東。」
幸村と佐助の言葉に、政宗はフンッと鼻で笑った。
「武田のおっさんも歳か？同盟を組もうたぁ、随分気弱な話じゃねぇか。」

へぇ。同盟を持ちかけてきたんだ。
確かに、三河まで豊臣の支配下に置かれてるようじゃ、武田はうかうかしてられないだろうな。
織田信長の時と、殆ど同じ状況になってるもんね。

「豊臣の勢力は、織田のように表立ってではなく、内側からじわじわ攻め入るんだよ。おそらく、奥州にもいずれ何らかの侵攻が始まる。その前に情報の共有を目的とした同盟をと大将は考えている。」
「なるほど・・・な。」
そう言うと、政宗は少し考えた後小十郎を見た。
「小十郎、どう見る？」

おお！政宗が小十郎に意見を求めたよ。
前は独りで決めようとしていたのに。
成長したね、政宗・・・。お姉ちゃんは嬉しいよ。
同じ歳だけども。

一人でこっそり感動している間に、小十郎は政宗に書状を返して、眉間に皺を寄せながら目を閉じた。
「少し時間をいただけますでしょうか？」
「ああ、いいぜ。真田、そういうわけだが、どうする？」
問われた幸村は、うむと頷くと佐助を見た。

「佐助、御館様に報告に行ってくれ。俺はここで返事を待つことにする。」
「あいよ。了解。」
「政宗殿よろしいか？」
「ああいいぜ。部屋を用意してやる。」
政宗が頷くと、小十郎が立ち上がって、部屋の準備をするために部屋を出て行った。

「さて、俺様もそろそろ行くけど、旦那一人で大丈夫？」
「な、何を言うか佐助！！もちろん一人で大丈夫だ！」
胸を張る幸村に、佐助がさも心配だという顔で立ち上がった。

「本当に大丈夫なの？おやつは出された分だけで、それ以上催促しちゃダメだからね？」
「わかってる！」
「夕餉は好き嫌いしちゃだめだよ？出されたものは全部食べないと、右目の旦那に極殺されるからね？」
「う・・・そうなのか？」
「あと、寝るときはちゃんと掻巻を掛ける事！暑いからって何も掛

けずに寝たら、風邪引くからね。」
「わかっている。」
「夜寝ぼけて暴れちゃダメだよ?」
「ど、努力する。」

うわぁ・・・。
なにこの初めてのお泊りみたいな会話。

政宗とドン引きで二人を眺めていると、視線に気づいた佐助がずずいっとこちらに近づいた。

「悪いんだけど、寝る前に旦那を厠に連れて行ってくれるかな?あと「わかったからもう行け!Ｇｅｔ　ｏｕｔ!」っと恐いなぁもう。んじゃ、くれぐれも旦那をよろしくね?」
政宗に怒鳴られて、佐助はしぶしぶと甲斐に戻っていった。

くれぐれもよろしくって・・・。
佐助、アンタ幸村の母ちゃんかよ・・・。

十一　鍛練ですよ？（前書き）

ツキと幸村の会話の一部が削られていましたので、修正しました。
話が意味不明だったと思われます。
申し訳ありませんでした。
これからは投稿前のチェックをもっと念入りにします。

十一　鍛練ですよ？

政宗達が重役会議をしている間、私は幸村の接待です。
とはいっても、部屋でお茶をしているだけだけど。
暫くぎこちなかった幸村も、この姿に慣れてきたのか、前の様に普通に話せる様になりました。
良かった良かった。
目も合わせてくれないんじゃ、寂しいもんね。

「そっか。信玄公も変わりないようでよかった。」
「御館様もツキ殿に会いたいと申されておりましたぞ。」
「私も会いたいなぁ。春日山城でもちゃんとお別れできなかったし。」
私もかなり精神状態がひどかったし、信玄公も戦のことで頭がいっぱいでうやむやになっちゃってたからなぁ。

思い出しながら遠い目をしていると、ツキ殿、と遠慮がちに幸村が名前を呼んだ。
なに？と幸村を見ると、僅かに迷った後、意を決して口を開いた。
「ツキ殿が明智光秀殿を討ったと言うのは、真のことでござるか？」
「そうだよ。」
隠す必要もない事実なので、はっきり頷く。

「ツキ殿が明智光秀殿を討つくらいに強いとは、某全く思いもよらなかったでござる。」
「子供の姿だったし、幸村たちと戦う必要もなかったしね。」
あえて教えなかったってのもあるけどね。

「そうでござったな。・・・それ程強いツキ殿が、なぜあのような事になったのか、伺っても？」
遠慮がちに尋ねられて、苦笑を漏らした。
幸村は私が何で一度死んだのか、その経緯を知らないのね。
まぁ、政宗や小十郎が話す筈もないか。

「ずっと追っていた男と戦って、相打ちになったの。そいつとはほぼ互角の力で、なんとか辛うじてって感じで勝ったんだけど、治癒が間に合わなくて。」
「蒼き竜がツキ殿を救ったと、政宗殿が申しておられたが、それも真か？」
「それも本当だよ。蒼き竜の方は私の一族の祭神なんだけど、まさか生き返らせてもらえるなんて、思ってもいなかったから驚いたよ。」

そもそも、私をこっちの世界に連れてきて下さったのも蒼竜様だったんだよね。
そう思うと、あの方に感謝してもしきれない位の恩があるなぁ。

なんて考えていると、幸村は神妙な顔で頷いた。
「そうでござったか。某の知らないうちに、大変な苦労をされたのでござるな。しかし、何はともあれ、こうしてツキ殿とまた話ができたのは嬉しい限りでござる。」
「うん。私もまたこうして会えたのは嬉しいよ。私一人じゃ、なかなか城の外にも出られなくてさ。」
自由に動けるのは、この城の中と、この近辺の山くらいだもんなぁ。
とても甲斐や越後まで一人旅なんて、させてもらえないよ。

「そうなのでござるか？」

「うん。力を使わずに、政宗から一本とらないとダメなんだよ。って、そうだ。」

良い事思いついた。
幸村も政宗と互角に戦える武将だ。
稽古をつけてもらおう！

「幸村、お願いがあるんだけど、いいかな？」
「なんでござるか？」

「長旅の後で申し訳ないんだけど、少しでいいから私と打ち合いしてもらえないかな？」
「ツキ殿と、でござるか？」
「そう。後ちょっとで政宗から一本取れそうなんだけどさ、なかなか難しくて。幸村くらい強い人に教えてもらえば、政宗に勝てそうな気がするんだ。」
「なるほど、そう言う事でしたら、微力ながらお手伝いいたしますぞ。」

よし！そうこなくっちゃ！

ってなわけで、毎朝訓練をしている中庭で幸村と向き合っております。

最初いつもの通り甚平で対峙したら、俯いたっきり動かなくなってしまったので、仕方なく袴姿にしたんだけど、暑い！
対する幸村は腹丸出しな格好でいいですね！くそっ！

「では、ツキ殿、どこからでもかかってきてくだされ。」
「うん。よろしくお願いします。」
一礼をしてから、幸村を見る。
ただ立っている様に見えても、隙がない。

いや、隙は作るものです！
あの槍のリーチは厄介だけど、懐に入っちゃえばこっちのものだ。

まずは真っ正面から突っ込んで、突き出される槍を鉄扇で払い、姿勢を低くして潜り込もうとした。
が、それよりも早く、払われた槍とは逆の手の槍を突き出され、とっさに横に避ける。

あっぶな！二本の長槍だから、もっと大振りかと思ってたのに速い！

避けている間に、体制を整えた幸村が、逆にしかけてきた。
「ツキ殿、次の攻撃を読まねば、対処が間に合わないでござるよ！」
「はいっ！」

槍の先端を、容赦ねぇな！ってくらい物凄いスピードと勢いで突き出してくる幸村。
辛うじてそれを避けているうちに、気分が高揚して楽しくなってきた。
殺し合いとかじゃなくて、ゲームというか、スポーツ感覚に近い。

一瞬の間が空いたチャンスに、ぐっと体を低く沈めた後、一気に幸村の懐に飛び込んだ。
驚く幸村の動きが鈍り、その隙に鉄扇を容赦なく顎めがけて振り上げた。
「くっ！」
顔を反らしてなんとか避けたあと、幸村はすぐに槍の柄を横凪にして私の脇を狙ってきた。
「おっと！」

あっぶねぇ！
後ろに飛びすざって、また再び幸村との距離がひらく。

「お見事でござる。ここまでとは某、正直思ってなかったでござる。」
「ありがとう。でも、幸村もまだまだ本気じゃないよね？」
「それはツキ殿も同じでは？」
「まぁね。楽しくって、うっかり本気になりそうだわ。」
「某も、でござる。」

ふっとお互い笑みを浮かべ、構えを解いた。

「どうする？」
「是非お願いししたいでござる。」
「私じゃ幸村の相手は物足りないかもしれないけど、いい？」
「ツキ殿ならば、きっと素晴らしいものをお持ちでござろう？」
「過剰な期待されちゃったわね。頑張らなきゃ。」
「某も燃える魂の全てを懸けてお相手いたす。」

なら決まりね。
面白くなってきたわ。

「うふふ。」
「ははははっ。」

2人で笑い合いながら、じゃあやりますかと言ったその時。

「てめぇら、オレの居ない間に、なんの話だ?」
ものすっごく恐ろしい顔をした政宗が、刀に手をかけた状態で立っていた。

なんでそんなに怒ってるの?
訳がわからずに、幸村と二人で顔を見合わせた後、同時に首を傾げた。
別に殺し合いをしていたわけでも、力を使って暴れていたわけでもないのに。
いや、これからしようとはしていたけども。

「なに?政宗どうしたの?」
「どうかされたのでござるか?」
「だから、何の話をしてたんだ?」
「話?え?どこから聞いてたの?」

訳がわからず聞くと、「うっかり本気になりそう、からだ。」と政宗が答えたので、今の会話を反芻してみた。

「楽しくって、うっかり本気になりそうだわ。」
と私が言えば、
「某もでござる。」
幸村がさっき言ったことを繰り返した。

その後の会話は、えーと。

「どうする？」
「是非お願いししたいでござる。」
「私じゃ幸村の相手は物足りないかもしれないけど、いい？」
「ツキ殿ならば、きっと素晴らしいものをお持ちでござろう？」
「過剰な期待されちゃったわね。頑張らなきゃ。」
「某も燃える魂の全てを懸けてお相手いたす。」

・・・・・・・・って。まさか。

「お願いされてたのは、本気での打ち合いですが、政宗は何を考えてやがったのかな？」
にっこり笑って言えば、政宗は訝しげな顔になって、打ち合い？と呟いた。
「私ごときでは、幸村ほどの武人の相手は、弱すぎて物足りないかも知れないけどいいかしら？ってことを言ったつもりだったんだけど、政宗はどう解釈しやがったのかしら？」

うふふと笑いながらゆっくり近寄ると、刀から手を離した政宗がじりじりと後退りをし始めた。

やっぱり歪曲して聞いてやがったか、コノヤロウ。

「だ、だってよ、いきなりそんな会話が聞こえたら、そうとしか思えねぇだろ?」

「思うか!!このエロ政宗!!その桃色脳みそを鍛えなおしてくれるわ!!」

「ま、まて、落ち着けツキ!」

誰が待つか!

教育的指導を行うべく、逃げに入った政宗を追いかけようとしたとき、すぐ傍で首を傾げていた幸村が

、「あ。」と呟いて、見る見るうちに顔を真っ赤に染め上げた。

まずい!と思ったけど、時すでに遅し。

「は、は、は、破廉恥いいいい

十二　若虎の静め方（前書き）

やや短めです

十二　若虎の静め方

日が傾いて、夕飯。
宴会とまでは行かないけど、幸村、政宗、小十郎、私の四人でご飯です。
お酒も入って、私はご満悦。
幸村もほんのり頬を染めて、幸せそう。
小十郎と政宗は私の飲むペースが速いだとか、もっと飯を食えだとかうるさい。

この前ちょっと失敗してから、やたら飲酒量に口うるさくなったんだよね。
私も気をつけて、飲み過ぎないようにとは思ってるんだけど、それ以上に監視の目が厳しい。
なんか私の徳利、他の人より中身が少ない気がするのは気のせいですかね？

「政宗殿、この煮物うまいでござる！」
金平ごぼうを食べた幸村がニコニコ笑えば、小十郎がまんざらでもなさそうな表情になった。
「まだあるから好きなだけ食え。」
「まことでござるか、片倉殿！」

嬉しそうに食べる幸村を、満足げに眺める小十郎。
その隙に、私は空になった徳利を、こっそり幸村の徳利と交換しようと思ったら。
「ツキ、人のまで取るんじゃねぇ。」
と、政宗に見つかり、怒られた。

ちぇ。

お腹も膨らみ、酒も気持ちよく回ってほろ酔いになってきた頃、幸村がとろーんとした目をして、しきりにあくびを漏らした。
くっ、相変わらず飛び掛りたくなるほどラブリーだぜ。

小十郎が立ち上がって、幸村の肩を軽く揺さぶった。
「おい、寝るなら部屋にもどれ。それから寝ろ。」
「・・・・かたくらどの、やさしいでござるなぁ。」
ふらりと立ち上がった幸村が、にこにこと笑いながら、小十郎に一歩近寄った。
その顔は赤くて、目もちょっと潤んでいて可愛いんだけど、小十郎はすざっと後ろに引いて警戒した。

「お、おい真田?」
小十郎が戸惑いの声をかけると、幸村は両手を開いて、がばぁっ!と小十郎に飛び掛った。
酔っているとはいえ、あの真田幸村だ。
その動きは無駄に速い。

「かたくらどのぉぉぉぉ!!」
「ぐっ!!」

タックルをかまされて、耐え切れずに後ろに吹き飛ぶ小十郎。
そのまま小十郎に頬擦りをする幸村と、悲鳴を上げて全力で抵抗す

る小十郎。

すげぇ！滅多に見られるもんじゃないよ、コレ！！
こんなテンパった表情の小十郎、見たことない！

「やめろぉぉぉぉ！！」
「かたくらどのだいすきでござるぅぅぅ！！」
「ひぃぃぃぃぃ！！」

小十郎の鳥肌がここからでも見える。
幸村と小十郎の攻防戦を眺めながら、隣で盃を仰いでいる政宗に声をかけた。

「ねぇ、政宗止めなくていいの？」
「いいんじゃねぇか？」
「でも、小十郎が必死に助けを求めてるみたいだよ？」
「なら、ツキが助けてやれよ。」
「えー？」

なんて二人で押し付けあっていると、ふと幸村の顔がこちらに向けられた。
ふらりと立ち上がってこちらに向かって来た。

解放された小十郎は、ショックのあまり畳の上で打ちひしがれております。
男に抱きつかれたのが、よっぽどショックだったのか？

「ま、まさむね、行けよ。」
「断る！」

ワタワタと立ち上がり、お互いを盾にしようと戦っていると、幸村が目の前まで来てしまった。
「ツキどの、まさむねどの、たのしそうでござる・・・。」

にこぉっと笑った幸村は、確かに可愛いと思う。
でもね、それはね、遠くで眺めているからであってね！？

「みっぎゃぁぁぁぁぁ！！生肌ふたたびぃぃぃぃ！！」
「てめぇぇぇぇ！！ツキをはなせぇぇぇ！」

先ほどまで小十郎がされていたように、馬鹿力で抱きしめられて、頬擦りされてますがなにか！？
ひぃぃぃぃ！ほんのり汗ばんだ肌がリアルだぁぁぁぁ！！

「ツキ殿も好きでござるぅぅぅ！！」
「ふざけんな！！離れろ！」

政宗が必死に剥がそうとしてくれるけど、幸村はびくともしない。

「お前女が苦手なんじゃなかったのかよ！？」

ん？女が苦手・・・？
政宗が叫んだ言葉で、ふとある作戦が思い浮かんだ。

そうだ。やってみる価値はある。
できれば、こんな手は使いたくなかったけど、仕方がない。
私のためだ！頑張れ私！

なんとか自由になる左手を持ち上げて、幸村の頬に当てた。
それに気がついたのか、一瞬幸村の動きが止まる。

よし、いける。私は女優！！

「幸村、もっとやさしくして。ね？」

なるべく、甘く聞こえるように、できる限り耳元で囁くように、おまけに頬に当てた手はゆっくりと撫でるように首まで下ろしてやる。

「・・・・お、おい。ツキ？」
愕然となる政宗と、硬直する幸村。

二人に構わず、幸村の目を見据えたまま、口角を上げて笑みを作る。
「ねぇ？幸村？女はもっと大切に扱わなきゃだめよ？」
「お、おなご・・・？」
「そう。わかった？」

止めに幸村の頬にキスをしてやれば、そのまま白目を剥いて後ろに倒れやがった。

「ふっ、他愛もない。」
呆然とこちらを見ている政宗と小十郎に向かってニヤリと笑うと、二人とも頭を抱えて項垂れた。

「女って奴は・・・。」
「恐ろしいな・・・。」

ひそひそ話してるつもりだろうけど、全部聞こえてるっちゅーの。

寝る仕度を終えて、今日も御疲れ様でしたと布団に入ろうと、掛け布に手を伸ばした時、政宗と小十郎がやってきていきなり襖を開け放った。
「いやね、前もそうだったから、今夜も来るかもなぁとは思ってましたがね、断りもなしにいきなりあけんなよ。着替えてたらどうしてくれるんだ？」
またもや寝ようとしたところを邪魔されて、イラッとしつつも政宗

を睨みつけると、それどころじゃねぇと真剣な顔で小十郎が答えた。

「豊臣が越後に侵攻した。」

越後に侵攻した・・・って、謙信公やかすがは!?

息を呑んだ私に、政宗が安心しろと肩を叩いてなだめた。

「侵攻したといっても、猿が言っていたように軍を進めたわけじゃねぇ。内乱を起そうとしたらしい。」

「内乱・・・。」

「ああ。越後も一枚岩じゃねぇってこった。だが、事前に突き止めたために、ことは起こらなかったらしいがな。」

そうか・・・。恐いな・・・。

昨日まで味方だと思ってたのに背後を狙われるのは、疑心暗鬼になって動きが鈍くなってしまう。

当然奥州でも内部の監視の強化はするんだどうけど、やりすぎると逆に反感を買って本当に内乱になっちゃう。

ただでさえ奥州には、まだ政宗のことを快く思ってない豪族も居る。

その代表格だった蘆名氏は居なくなったけど、まだ反抗勢力が本心から服従したわけじゃない。

まぁ、いざとなれば、私自身がスパイとしてあっちこっちの様子を見てきてもいいけど、そんなもぐら叩きゲームみたいなことを政宗が選択するはずはない。

きっと、豊臣の情報を集めて直接討ちに行くだろう。

その為には、今は武田との同盟は結んでいて損はない。

「で、どうするの？同盟を結ぶの？」
ほぼ確認に近い気持で尋ねると、政宗は頷いた。
「ああ。武田のおっさんとならば、まぁ結んでも損はねぇだろう。」
やっぱりね。

「ふーん。で、また甲斐に行くの？」
「ああ。そうなるだろうな。」
「あまり今は奥州を離れるべきではないのですが、致し方ないでしょう。」

難しい顔をしている小十郎と政宗には悪いけど、私は甲斐に行きたい。
信玄公に直接お礼を言いたいです。

「私も行きたい！信玄公に会いたい！」
はいはい！と手を上げて言うと、仕方がねぇなと政宗が頷いた。

「まだオレから一本取ってねぇが、まぁおっさんの所なら良いだろう。」
「やったー！」

むふっ。
勘様にお会いできるかしら？またあの笑顔を見たい。
そんで、綺麗になられましたななんていいながら、微笑まれたら、鼻血噴くよ！
きゃっ！はずかしぃ！とかいって、あの分厚い胸板に飛び込んじゃったりして！！

「うへ、うへへへ・・・。」

「なぁ、小十郎、やっぱ連れて行くの止めた方がいい気がするんだが・・・。」
「あの状態のツキを置いていけば、何が起こるかわかりませぬぞ？」
「・・・・だよなぁ・・・。」

にょほほほ！楽しみだわぁ！！

十三　胎動

幸村達と再会して、八日後。
政宗、小十郎、私は現在甲斐の躑躅ヶ崎館にお邪魔しております。
同盟を結ぶ為とはいえ、今政宗が奥州を出ることは、あまり好ましくないということで、今回は三人だけの極秘訪問です。
今米沢には影武者として成実がいて、さらに伊達軍の皆も全員残っているから、万が一があっても安心だ。

信玄公に会って、まずは春日山城で別れた後心配をかけてしまった事を詫びて、それから先日貰った手紙のお礼を言った。
気にするでないと笑った信玄公は、大きな手で私の頭をなでてくれた。

そして、今、同盟の小難しい話を政宗と小十郎、信玄公と幸村でしていて、その間に私は散歩をしているんだけど・・・。
「うーむ。ここ、どこ？」
ただ今絶賛迷子中です。

流石に城だけあって、侵入者を迷わす構造なのか、さっきから自分がどこに居るのかもわからなくなっちゃったよ。
いい加減歩き疲れたし、誰かに会ったら道を聞こうと思っているのに、誰一人すれ違わない。
佐助辺りが探しに来てくれないかなぁと思っていると、突然目の前

に何かが降ってきた。

うお！ビックリした！

見上げると、半分顔を隠した忍姿の男の人が、私を見下ろしていた。

「主が貴殿を捜しておられる。」

冷たい、抑揚のない声。

聞いたことない声だけど、どこの忍だろ？

「主って、だれ？」

「真田幸村様だ。」

おおう！そういえば、幸村は佐助の主だっけ。

すっかり忘れてたよ。

ってことは、この人も佐助の部下なのかな？

「えと、佐助の所の人？」

聞くと、無言でわずかに首肯したところを見ると、そうらしい。

助かった。

「迷子になってて、迎えに来てくれて助かったわ。ありがとう。」

「忍に礼など無用。失礼つかまつる。」

クールというか、無愛想というか、忍は淡々と言うと、いきなり私を抱き上げた。

うひゃぁ！予告もなしに姫様抱っこ！！

驚いている間に忍はぐっと身を低くすると飛び上がり、塀の上に登った。

すげぇ！と驚く暇もなく、次は飛び降り、またジャンプしを繰り返し、上下に揺すられて脳みそがシェイクされるぅぅぅ～。

「ツキ！！」
気が付けば政宗に抱き上げられていて、周りを見れば佐助と幸村が焦ったような顔をしていた。

「才蔵殿、いくら早いからって、直線で塀を越えてきたらツキ殿が耐えられないでござるよ。」
「申し訳ございません。」
「なぁ、それ本心で言ってるか？とりあえずあやまっとけって思ってないか？」

幸村が注意してる・・・！！
そして、佐助が上司の顔をしている・・・！！
珍しい！！

まじまじと三人のやりとりを眺めていると、それに気が付いた佐助が申し訳なさそうに近寄ってきた。
「ツキちゃんごめんね？大丈夫？」
「大丈夫。ちょっと脳みそ揺れたけど、もう平気。だから、政宗おろして。」
政宗を見上げて言うと、憮然とした表情のままゆっくりと私を降ろした。

「えっと、才蔵さんって言うの？」
「ああ、俺様の部下で、霧隠才蔵。真田忍隊の一人だ。」
「霧隠才蔵と申す。今し方は配慮が足らず失礼つかまつった。」

ぺこんと首から上だけを器用に下げて、相変わらず無表情で無感情に述べた。
うん。話したってより、述べたの方がしっくりするよ。

佐助と正反対って感じだな。
「連れて来てくれてありがとう。助かったよ。」
さっき礼はいらないと言われたけど、改めて言えば、才蔵は酔狂な女だと呟いて、また佐助に怒られた。

「同盟はまとまったの？」
「ああ。内容は前とほぼ同じで、幾つか追加しただけだからな。」
「明日朝にはここを発つ。」
「はーい。」

政宗と小十郎と私の三人で話をしていると、佐助の説教を右から左へ聞き流していた才蔵が、ぴくっと反応して顔を上げた。
佐助も厳しい表情のまま同じ方向を見た。

なんかくる？
つられて同じ方を見ると、黒脛巾の忍が現れた。
所々傷を負っているのか、服が裂けている。

嫌な予感がする。
政宗を見上げると、表情を消して、目の前で膝をつく忍を見下ろしていた。

「申し上げます。」
一言そう言ってから、静止されなかった忍は、俯いたまま続けた。
「最北端と米沢に、少数ではありますが同時に襲撃あり。米沢は成実様が応戦しておりますが、最北端は農民が現在辛うじて食い止めている状態との由。」

幸村が息を呑み、佐助があーらとつぶやく中、政宗も小十郎も厳しい表情をしたまま動かなかった。

二箇所同時か。
最北端も助けにいかなきゃならないけど、米沢も落とされてはならない奥州の要だ。
どちらか一方しか選べない。
米沢を取れば、最北端の農民たちの失望を買い、最北端を取れば米沢を失いかねない。

今なら、まだどちらも助けられる。
すぐに動かなければ。

「政宗。米沢にすぐに帰って。政宗と小十郎だけなら、行きよりもずっと早く帰れるでしょ？」
「ツキはどうするんだ？」
「最北端に向かう。」

そう答えた私を、その場に居た全員が一斉に見下ろした。
うん。私が最北端に行く。
そうすれば、どちらも取れる。

「ダメだ。」
そう言ったのは、政宗。
小十郎はダメだとは言わないが、かなり苦悩している。
軍師として、私の力と現状を考えればそれが一番の良策だということはわかっているはず。
でも、政宗がそれを許さず、そして小十郎自身も迷いがあるから、

是とも否とも言えずに悩んでいるのだろう。
ならば、政宗を強引にでも納得させて、さっさと帰らせなければ。

「ならば、どちらも救える手があるっていうの？」
「オレが、すぐに帰って米沢をまず守る。それからすぐに最北端に行けばいい。」
「最北端までの距離はどれくらい？そして、米沢をいつ出れるかもわからないのに、農民たちはそこまで持ちこたえられると思う？それが、奥州筆頭としての判断？」
「・・・・・・。」

ちっと舌打ちをして苛立ちを見せる政宗。
その後ろで佐助がヒュ～っと口笛を吹き、幸村がツキ殿かっこいいでござると呟いている。
外野、ちょっと黙ってろ。
政宗説得するの、結構頭と神経を使うんだよ。

「まず米沢に戻ったら、成実を最北端に向かわせてよ。成実といつきちゃんがいれば、そん所そこらの奴らに負ける気がしないから。」
「・・・・・・わかった。」

よっし！勝った。

ふぅと安堵の溜息をついていると、政宗がニヤリと笑った。
「お前が自力で最北端に行けるのなら、そうすればいい。道がわかるのか？」
・・・・・・あ。

「のぉぉぉぉ！！盲点だったぁぁぁぁ！！」

勝ち誇った笑みを浮かべる政宗の前に、崩れ落ちて叫ぶ私。

北に行けば何とかなるとか思ってたけど、肝心の村がわからん！！

おおおお！悔しい！！政宗に一本取られた！！

どうすんべ。この時代に精密な地図なんてないだろうし。

近くに人がいれば聞いていけるけど、北に行けば行くほど人口密度低そうだもんなぁ。

「俺様が案内しようか？」

ここにいる黒脛巾の忍を案内に貸してくれないかなぁとか考えているときに、天からの声が降ってきた。

佐助様！！

「才蔵もちょうど戻ってきてるし、俺様が数日いなくても良いよね？ついでに敵さんの情報を探ってくるよ。」

隣の幸村に確認している佐助が、神々しく見えます。拝んじゃおうかな。

というか、手はすでに合わさっていて、拝むポーズになっていた私は、佐助と幸村にありがとうと叫んだ。

よっしゃぁぁぁ！！これでどうだ政宗！

勝ち誇ったように政宗を見上げると、心底嫌そうな顔で佐助を見ていた。

「仕方がねぇ。すぐに戻る。成実を最速で叩き出すから、無茶だけ

はするな。良いな?」
「了解。大丈夫。大体、いつも無茶するのは政宗でしょ?政宗こそ気をつけてね?」
「・・・・キコエネェナァ。」
心当たりがありすぎるらしい政宗が、明後日の方向を見るのを、小十郎と二人で顔を見合わせて溜息をついた。

「ツキ、くれぐれも無茶はするな。お前の目的は、農民の保護だ。敵を打つことじゃねぇ。それだけは忘れるなよ?」
「わかってる。小十郎も気をつけて。多分、敵には私たちが甲斐に来ていることが筒抜けだと思う。私は甲斐に残ってることにして。後で迎えに行くと。」
「・・・・・。わかった。」

私たちが甲斐にいることを知っているのは、伊達の上層部のメンバーと、ここにいる甲斐の人たちだけだ。
あえて今米沢を狙ってくるというのは、政宗も小十郎もいないと知っているからだろう。
情報が洩れている。
忍が進入していたのか、それとも裏切りもがいるのか・・・。

帰り支度もそこそこに、信玄公に挨拶を告げると、政宗と小十郎は大慌てで甲斐を発った。
それをチーム武田の面々と一緒に見送って、それから用意された部屋に四人で一緒に戻った。

「さて、ツキ殿はしばらく我が武田で預かるということでよいのだな？」
表向きは、この甲斐で政宗たちの迎えを待つという設定。
信玄公も快く承知してくれた。

「はい。この部屋に篭って、出ません。そうですね・・・せめて三日、騙せれば上々かと。」
「ふむ。して、いつ出立を？」
「今夜、出立します。」
「承知。佐助、くれぐれも頼んだぞ？ツキ殿に何かあれば、奥州と戦になりかねぬからの。」
「はいはいっと。」

軽く返事をする佐助の隣で、今まで黙っていた幸村がうずうずした様子で身を乗り出した。
「御館様！某もツキ殿と共に奥州へ参りたく、おねぐはぁぁぁぁぁぁ！！！」

バキィ！！といい音がして、幸村が障子を突き破って庭に飛んでった。
ビックリして信玄公を見ると、ゆっくりと立ち上がって、縁側に出て行くところだった。

「馬鹿者が！！ツキ殿がなぜ夜に出立するのか、なぜ甲斐に身を寄

せることにしたのか、わからぬのか！？」
幸村に向かって怒りを見せる信玄公。
つか、声でかいですって。

突っ込みを入れるか迷っていると、佐助が手招きをするのでそちらに近寄った。
「離れていた方がいいよ。いつのもが始まる。」
小声で言われて、幸村と信玄公を振り返ると、立ち上がった幸村が再び信玄公に食って掛かる所だった。

「しかし！ツキ殿お一人で最北端など、危険すぎます！！」
「いや、俺様の行くんだってば。」
ぼそっと呟いた佐助の声が、あの幸村に届くはずがないって。

「愚かものがぁぁぁ！！」
殴りかかってきた幸村を、強烈な左ストレートで返り討ちにした信玄公が、ズンっと地響きをさせて庭に下りた。
「危険なことなど、ツキ殿も独眼竜も右目も承知！幸村、お前が共にこの甲斐を出て奥州に向かえば、敵に余計な情報を与える事になりかねんと言うことが、なぜわからぬ！？ツキ殿も危険が増すのだぞ！？」
「・・・・ぐっ。」

そうなんだけどね。もう、この騒ぎで敵にばれちゃった気がするんだよね。
ちらりと佐助を見ると、申し訳ないとジェスチャーで謝っている。

「申し訳ございませぬ！御館様ぁぁぁぁ！！」

いや、とりあえず私に謝ろうよ。

心で突っ込みを入れながら、幸村と信玄公の殴り合いを眺める。
久しぶりに見たけど、パワーアップしてるね。
あーあ、塀が壊れたし。
佐助はもう止める気もないらしくて、ツキちゃんの部屋新しく用意しなきゃねぇとか呟いている。

「ところで、佐助。夜までに頼みたいことがあるんだけど、いいかな。」
「なに？」
「政宗が置いていった荷物の中に、予備の上着があるんだけど、それを私が着ても良いくらいに丈詰をして欲しいんだけど、できるかな？」

いつもの陣羽織は政宗が着て帰ったんだけど、ちょっとしたコートみたいな蒼い上着があるんだよね。
それを着て行けば、一瞬でも政宗が来たと思わせることができるんじゃないかな。
一度噂が広まり始めれば、情報が混乱して、敵の足並みを乱すことができるかもしれない。
まぁ、私が着たところで、身長がかなり違うからすぐばれそうですけどね。

「うん。大丈夫。ただ、切る事になるけど、いいの？」

「いいよ。政宗も滅多に着ないし。」
「了解。んじゃ、ちょっと借りるね。」
荷物の中から上着を取って渡すと、佐助は受け取ってどこかに行ってしまった。

さて、楽しげに殴り合いをしている二人、そろそろ落ち着け。
そして、私を夜まで休めやがれ。

十三　胎動（後書き）

ツキの言っている上着っていうのは、ＢＡＳＡＲＡ２の衣装其の二です。

十四　最北端へ

躑躅ヶ崎館を出発してから夜通し走って、奥州に入った。
それから二度仮眠をとって、現在山の中を爆走中です。

「この山を越えたら、村がある。そこに農民を纏めている長がいる村があるから、多分そこのことだよ。そろそろいつ敵に見つかってもおかしくはないから、油断しないでね。」
「了解。」

もうすぐなら、上着を羽織るか。
色が色なだけに目立つから、黒のズボンにTシャツみたいな身軽な恰好で今まで走ってきたんだけど、そろそろいいかな。

ちょと佐助に立ち止まってもらって、風呂敷に包んで背負っていた上着を取り出し着てみた。
・・・・・・。
「気持悪いほどにぴったりだね。」
あんなに大きい政宗の服を、私にぴったりにしてもらった腕も凄いけど、なんでぴったり？
私のサイズ測ってないよね？
目測？目測なのか？
だとすると、どんだけ見られてるんだ私？

「人を変質者を見るような目で見なーい！」
それくらい忍なら分かるの！って佐助が慌てて否定するけど、本当かなぁ？
胡乱な目で佐助を見ると、俺様頑張ったのに・・・と隅っこでいじけられてしまった。

それを横目に見ながら服を調え、最後に肩甲骨辺りまで伸びた髪を掴んだ。
今は一つに結んでいるだけなんだけど、切っちゃおうかな。
肩くらいまで切った方が、遠目に見て政宗と勘違いされやすいだろう。
よし。切っちゃえ。

「ちょぉぉっとまったぁぁぁ！！」
懐剣を出していざ切ろうとした所を、佐助に飛びつかれて止められた。
「なにしてんの！？」
「何って、髪を切ろうかと。」
「そんなケロッとした顔で恐ろしいこと言わないで！？」
なにがそんなに恐ろしいの？
意味が分からん。

首を傾げる私に、佐助は半泣きで懇願した。
「俺様独眼竜の旦那と片倉の旦那に殺されちゃううよ！」
「そんな大げさな。ちょっと髪を切るくらいで。」
「お願いだからやめて！」

こんな感じで必死に言われてしまっては、それを振り切って切ることもできない。
まぁ、もともとあまり似てないコスプレだし、髪は上着の中にいれちゃえば、衿に隠れてわからないか。

と、ひと悶着あったものの、無事に山を越えた所で、村を大勢の兵士が囲っているのが見えた。
ビンゴだ。
さて、ここまでくれば、あとはやることは単純だ。

「佐助ありがとう。後は自分で何とかするよ。」
振り返って礼を言うと、佐助はちっちっちと人差し指を左右に振った。
「ここまできたら乗りかかった船だよ。俺様も行くって。」
「ありゃ、悪いねぇ？」
「ツキちゃん、表情が悪いと思ってないから。」
当然だ。優秀な忍がついててくれるなら、私も思う存分暴れられるってものですよ。

走るためだけに強化していた力を一度解除して、深呼吸を数回した後小さく呟いた。
「Ｒａｉｓｅ　ｔｈｅ　ａｌｌ　ｃａｐａｃｉｔｙ．Ｌｅｖｅｌ３０．」
力を使って戦うのは、安土城以来だ。
やりすぎには気をつけなきゃ。

「ねぇ、そのブツブツ言ってるのって、何て言ってるの？」
ああ、英語で言ってたから、なに言ってるのか分からないのか。

「うーんと、能力を上げるよ、三割くらい。って言ってるんだよ。本当は言わなくてもできるんだけど、言葉にすることで、イメージ・・想像がはっきりするからね。」

「ふーん。それって独眼竜の旦那がよく使う南蛮の言葉？」
「そう。Ｉ　ｈａｖｅ　ｂｅｅｎ　ｔａｌｋｉｎｇ　ｉｎ　Ｅｎｇｌｉｓｈ！」
「は？」
「私が話しているのは南蛮語だよって言ったの。」
正確には南蛮語ではないけどね。

ずっと英語圏に居たから、英語でコントロールする方が慣れてるんだよね。
日本語だとなんか違和感。

「さて、こっちは準備完了。行きますか？」
懐から鉄扇を取り出し、佐助を見ると、すでに準備は整っているようだ。
「まずは、いつきちゃんに会うわよ。」
「了解。後ろをついていくから、案内をよろしくね。」
よっしゃ、んじゃひと暴れしますか！

村に近寄るにつれて、どっかで見たことがあるような家紋の入った軍旗が増えてきた。
「あれってどこのだっけ？」
「あれは南部だね。」

南部・・・ああ。そういえば、北の方にそんな名前の豪族がいたなぁ。
へぇ。政宗を裏切ったのは、南部春政ね。

「ツキちゃん、顔恐いから。」
「裏切り者には、お仕置きが必要だね。それも、かなりきっついのを。」
伊達に逆らったらどうなるか、他の奴らへの見せしめにしないと・・・ね？

「おお恐っ！」
楽しげに言った佐助が、向かってくる足軽を大きな手裏剣を投げつけて返り討ちにした。

進むにつれて情報が回ってきたのか、私を狙う奴らが増えてきた。と、いうか、さっき倒したのが紛れているような気がするんだけど・・・？

「ツキちゃん、なんかおかしいよね？」
「やっぱり佐助も思った？」
突進してくる足軽の首を狙って切りつけると、血飛沫をあげて仰向けに倒れた。
しばらくその場から動かずに様子を見ていると、靄のような何かがすぅっと足軽兵の中に吸い込まれ、その後信じられないことに死んだはずなのに起き上がった！！
ゾ、ゾンビ！！バイ○ハザード！！

「んぎゃぁぁぁぁ！！！マジ恐い！！無理！！！助けてクリス

ぅぅ！！！」
悲鳴を上げて、すぐ近くにいた佐助にしがみつく。
なんかぐえって声が聞こえたけど、構ってる暇はない！！
私ホラーだけは苦手！！死体は恐くもなんともないけど、ゾンビは無理！！
「つ、ツキちゃん、落ち着いて、俺様の首絞めてるって・・・。」
「佐助！あれ何とかして！！」
「何とかするから、手離して・・・。」
「その言葉、忘れんなよ！？」

佐助の首を解放して、じりじりと近づいて来るゾンビ共に佐助を押し付ける。
「げほっ。確か、南部晴政って、恐山でイタコ修行をして、死者を蘇らせる術を手に入れたとか聞いたことあったな。眉唾かと思ってたのに、本当だったとは、いや参ったね。」
「参ったじゃねぇ！何とかして！！」
「はいはい。まずはここを抜けて、村に行こう。話はそれからだ。」
行くよと言って、そのまま村の方に走り出す佐助。
ちょ！まって！！置いて行かないでぇぇぇぇ！！

村に入ったとたん、ゾンビ兵士たちは追ってこなくなった。
入ってこないのか、入ってこれないのか。
村の入り口手前までウロウロしてるくせに、そこから中には一歩も入ってこない。
こっちに向かってくるくせに、村の門の手前で引き返している。

「なんか仕掛けがありそうだな。」
「ツキちゃん、俺様の後ろにしがみついて、カッコつけてても意味ないから。」

はい。すみません。
恐いんだもん。目が合ったら、気絶する自信があるよ!?

「あんれ!蒼いお侍様かと思ったら、ツキ姉ちゃんだべか!?」
びっくりしたような、可愛らしい声が聞こえて振り返ると、例のハンマーを手にしたいつきちゃんが目を丸くしてこちらをみていた。

「いつきちゃんお久しぶり!」
「久しぶりだべ!」

ああ、いつきちゃんの笑顔に癒される。
ゾンビを見た後だから、余計に癒されるよ・・・。

「遅くなったけど、助けにきたよ。」
「ツキ姉ちゃんがだべか?」
駆け寄ってきたいつきちゃんは、私が助けにきたと言うと、驚いて目を丸くした。

「うん。そこそこは戦えるから、戦力にはなると思うよ。あと、便利な忍も連れてきたし、あとから後続もくる事になってるから安心して？」
「え？その便利な忍って俺様の事？」
「ここに忍が他に居なければ、そうなります。期待してるよ？」
にっこり笑えば、佐助は帰っときゃよかったと嘆いているけど、旅は道連れですよ。

ゾンビが村まで入ってこないのはもうずっとらしく、私と佐助はいつきちゃんの家に案内されて、そこでゆっくり話をすることになった。
私と佐助が囲炉裏の奥に座り、いつきちゃんが入り口側。
家の入り口には、親衛隊が万が一の為に警護している。

「まずは確認なんだけど、いつから襲撃があって、被害はどんな感じ？」
「あいつらが来たのは、七日前だべ。最初はおらたち全員で戦ったんだども、あいつらいっくら潰しても生き返ってきて、キリがないんだべ。怪我人もたくさん出ちまって、一度村に立て篭もる事にしたんだども、あいつら村には入ってこねぇで、ああやってウロウロしてんだべさ。」

うーん。敵の目的がわからない。
不死身の兵士を使って、この村を壊滅する事なんか簡単だろうに。

「それじゃ、怪我人は最初の時だけで、あとはいないのね？」
「んだ。」

うーん。ってことは、南部の目的はこの村を潰すことじゃなくて、政宗をおびき寄せること？
なんだろ・・・。

「もしかして、敵の目的って、独眼竜の旦那と片倉の旦那を分裂させることじゃないの？」
佐助が顎に指を当てながら、呟いた。
政宗と小十郎を・・・？

「もしくは、独眼竜の旦那と、ツキちゃんを分裂させること。」
「して、そのココロは？」

首を傾げる私に、佐助はふっと鼻で笑った。
「俺様が豊臣なら、ツキちゃんを手に入れようとするね。ツキちゃんはあの独眼竜の旦那の弱点でもあるんだよ？」
「・・・それは・・・まぁ・・・。」

うおぉ・・・なんだこのこっぱずかしい空気は！
なんかいつきちゃんからも温い視線を感じるんだけど・・・。

「まぁ、分裂させた所で、ツキちゃんもそう易々と敵の思い通りにはならないでしょ？」
「と、いうかあえて捕まってみるのも一手かと。」
「かっこいいねぇ。でも、南部に捕まるってことは、あの足軽たちに捕まるってことだよ？」
頑張れる？と佐助が笑顔で聞いてきたので、こちらも笑顔で答えた。

「やっぱ、南部をフルボッコにして潰そう。あんなのが奥州にいるってだけで、耐えられません。」

うん。それがいい。というか、それしか認めません。

十五　覚悟と決意（前書き）

流血って言うより、グロい表現があります。
ご注意ください。

十五　覚悟と決意

佐助を偵察に放っている間に、怪我をした親衛隊の皆さんを治癒して、軍備の確認中です。
農民というだけあって、武器は鍬と鋤か・・・。
親衛隊のトップは刀とかも持ってるみたいだけど、侍相手に勝てるような腕はない。
だって農民だから。

アレを食え、コレを持ってけと、治癒で回った家々でもてなされて、いっぱいになったお腹と両手のお土産を抱えていつきちゃんの家に戻ると、佐助が座って待っていた。

「御疲れ。すごい荷物だね。」
ひらひらと手を振る佐助の前に座ると、まぁねと苦笑した。
いつきちゃんが隣に座り、また親衛隊が入り口を見張る。
数時間前と同じ状況になったわけだけど・・・。

「で、佐助、なにか分かった?」
「うん。奴らが生き返るカラクリが分かったよ。あれは南部晴政の能力のせいだ。あちこちに香炉が置かれていて、香の効果と南部晴政の能力が合わさって、死なない兵士が出来上がるってわけ。」

と、いうことは、香炉を壊すか、南部晴政を殺るかのどちらかってことか。
うーむ。どちらにしても、あのゾンビと戦わなきゃだめじゃん。
嫌だなぁ。首がもげかけた状態のとかが、うつろな目をして襲い掛かって来たら、確実に気絶する。

でも、そんなことは言ってられない・・・か。
農民を助けに来たのに、恐いから出られませんじゃ話にならない。

「よし。まず香炉を叩き壊す。それから、南部におしおきする。」
「了解。とはいえ、もうすぐ日暮れだけど、どうする？夜陰に紛れて壊して回る？見たところ、香炉結構でかいよ。多分壊すの時間かかると思う。」
「そうだなぁ・・・。恐いけど、その方が利点が多いか。恐いけど。」
大事なことなので二回言いました。

はぁ・・・憂鬱だけど、頑張るか。
内心溜息をついていると、いつきちゃんがひと通り話を聞き終えて、はいっと手を上げた。
「ツキ姉ちゃん、おらたちは何をすればいいんだべ？」
「この村を守ってて。万が一あの兵士たちが入ってきちゃったら、なんとかして食い止めて。」
「ツキ姉ちゃんと忍の兄ちゃんだけで行くんだか！？おらたちの村のことだ。おらたちにも手伝わせてけろ！！」

いつきちゃんの気持は嬉しいけど、でもなぁ・・・。
今までは怪我人くらいで済んでたけど、次は死者が出るかもしれない。
農民を戦に駆り出す事はしたくない。
政宗もそう思っているから、どんなに人手が欲しいと思っても、戦に農民を招集することは絶対しない。

困って視線を向けると、佐助は肩をすくめていいんじゃないの？と軽い調子で言った。

「自分たちの村を自分たちで守るのは、当然のことだよ。」

「んだ！おらたちだって戦えるべ！そんで、さっさと悪いお侍をやっつけて、さっさと畑に行かなきゃ雑草が野菜の栄養を全部持って行っちまうだ！」

ああ、夏は野菜が成長するように、雑草も良く伸びるからねぇ。って、そうじゃないって。

どう説得したもんかと悩んでいると、佐助がこそっと耳打ちしてきた。

「どう説得しても、きっと後からこっそりつけてきて、計画外のことをしでかしそうだよ。だったら、最初から作戦に組み込んでしまった方がいいと俺様は思うけど？」

それも一理ある。

でもなぁ・・・。

農民たちの命を背負う覚悟を、私は持てるの？

この戦で命を落とす農民がいて、それを嘆く人たちを受け止める覚悟はある？

きっといつきちゃんたちは、自分たちが好きでしたことだから、私が気にすることはないと言うだろうけど。

人の上に立つということは、人の命に責任を持つということ。

それができないなら、ここで大人しく成実の到着を待つべきだ。

以前の私なら、多分成実を待つか、独りで勝手に飛び出していた。
でも、今は政宗の代わりとしてここにいる。
勝手なことはできない。

今米沢で、たくさんの兵士を従えて、戦っているだろう政宗を想う。
同じだけの覚悟を。
命を背負う覚悟を。

政宗の隣に並ぶと決めたんだ。
そのために強くなると、誓ったんだ。

やる前からできないと怖気づくんじゃなくて、やってみなければ前に進めない。

「Ｔｈｅ　ｗｏｍａｎ　ｉｓ　ｃｏｕｒａｇｅ！（女は度胸！）」
ばしっと自分の両頬を叩いて、気合を入れる。

「よし。ならば全員でちゃっちゃと片付けるわよ。」
宣言すると、いつきちゃんたちはぱぁっと顔を明るくして、がんばるべ！と拳を上に突き上げた。

綿密な作戦会議の末、とりあえず全員で香炉を壊しに行くことになった。
香炉は全部で三つ。
この村を三角形に囲むように置かれているらしい。

いつきちゃんと親衛隊の皆さんは、村の南西にある香炉を。
佐助は南東。
私が北にある香炉を壊しに行くことになった。

壊した後は手当たり次第ゾンビの掃除。
あとは南部晴政が現れたら、全力で討つ。

ってことで、現在ゾンビたちをかいくぐりながら、北に向かっております。
ひぃぃぃぃ！！こわい！！
もちろん全力疾走で、体にシールドを展開してるので、ゾンビたちは私に近寄ることもできないんだけど、体当たりしてくる奴らもいて、車に轢かれた状態で吹っ飛んでいった。
・・・アレが戻ってきたら、私泣くかも。

時間的には数分なんだろうけど、感覚としてはものすごい遠くに感じた香炉が、ようやく目の前に現れた。
たしかにでかい。
ちょっとした小屋くらいの大きさはある。
香炉からは妖しげな紫色の煙が上がっていて、辺りに充満している。
明らかに体に良くなさそうだ。

さっさと粉砕してしまおう。
鉄扇を逆手に握り締め、力の流れを思い描いて、鉄扇に集める。
一度米沢で偶然できた技だけど、多分できる。
体を右に捻って鉄扇を握った右手を後ろに回し、グッと体を低くした。

「メテオストライク（仮）！！」
言葉と共に、鉄扇を横に一気に薙ぐ。

ドゴォォォォォ！！！

すさまじい轟音を上げて、蒼い光が香炉にぶつかり、一瞬で粉砕させた。
わお・・・。
こりゃ予想以上だ。
もっと威力を弱めないと、味方がいる場所では使えないや。
信玄公の技より迷惑度が高い・・・。

メテオストライクだったのが悪いのか？
次は竜破斬の方が・・・ってこれもだめか？
まぁ、イメージはもう少し弱めるものに改良の余地ありってことで、
あとでゆっくり考えよう。

今の衝撃で巻き添えを食らったゾンビが結構な数いて、残りは僅かになっていた。
残りをなるべく見ないようにして斬り捨てていると、やがてゾンビが復活してこなくなった。
佐助といつきちゃんも香炉を壊したか・・・。

よし、ならばこいつらをさっさと沈めようと、鉄扇を握りなおした時。

「亡者ます　ます亡者・・・ホウ、ホウ。」

背後に不気味な着物を着た、右目を布で覆った老人が現れた。

こわっ！！
見た目が恐いよ！！

「どちら様？」
「噂に聞いておった独眼竜は、女子であったか・・・ホウホウ。」

え？それ、ボケ？それとも真面目に言ってる？
じいさん無表情で淡々としてるから、どっちなのか読めないよ。

「儂は南部晴政と申す。貴殿は伊達政宗殿で相違ないか？」
この人が南部晴政・・・。
ゾンビの親玉に相応しい不気味さだわ。

「奥州筆頭伊達政宗は、れっきとした歴とした男ですよ。私はツキと申します。伊達政宗の名代として参りました。」
「なるほど・・・。そういえば、昔会ったのは、もっと憎たらしい顔をした童であったな。」

ちょ、この人真面目にボケてるよ・・・。
どうしよう、今までになかったタイプだ！

「しかし、伊達政宗殿ではなく、女子が来るとはいやはや。」
「女子と思って舐めてかかると、怪我じゃすみませんよ？」

にっこり笑っていってやれば、南部はそれもそうかと、粉砕された香炉を見て呟いた。

「なぜ、伊達を裏切ったのです？」
「裏切ったのではない。最初から伊達に下ったつもりは毛頭ない。」
「豊臣の下につくと？」
「豊臣も伊達もどちらにも下らぬ。ただ、伊達を潰すなら、いい機会だとそう思ったまで。」

淡々と薄気味悪く話す南部の目は、決して死んでない。
野望に燃える男の目だ。

なるほど、便乗ってわけね。
確かに、南から豊臣が攻めるなら、北の構えはどうしても薄くなるものね。

「ならば、この私が御相手いたします。」
鉄扇を構えて、南部を正面から見据える。
「伊達を甘く見たこと、黄泉の国で後悔するがいい。」
「やれやれ、気の強い女子だの。」

そう言うと、南部は腰にくくりつけていた短刀を抜き、私と同じように逆手に構えた。
武将ってより、忍に近いのか？
まぁ、いい。油断はしない。全力で行く。

戦う以上、心は無用。
生きるか死ぬか。
殺すか、殺されるか。

想像以上に素早い身のこなしと、冷静な判断力で私の隙や死角ば

かりを狙ってくる南部。
バク転して後ろに引いた南部を追おうとした途端、着地と同時に前へ飛び込んできた。
「っく！」
喉元を狙ってくる短刀を鉄扇で躱し、のけぞった勢いを利用してそのままこちらもバク転をして南部の顎を蹴り上げた。
素早く引いた南部の顎を掠っただけで、ダメージは与えられなかったようだ。

再び距離が開いて、お互い構えなおす。
扇を開いて、要を握り締めるように持ち、扇ぐように南部に向かって振ると、蒼い光が礫となって飛んでいく。
それらを跳んで軽々と避けた南部の最終着地地点を狙い、再び扇を振るう。

「ぐ！」
直撃した右足が折れ、肩膝を突いて呻く南部。

「さて、人の命を何度も何度も呼び戻し、無理矢理戦わせていた貴方を、今度は誰が呼び戻してくれるかしらね？」
「どうであろうな。」

死の間際になっても淡々とした南部に、私は扇を止めを刺そうと扇を振り上げた。
その隙を突いて、南部がタックルをしてきて、私を地面に押し倒した。

強かに後頭部を打ちつけて、一瞬目の前が真っ白になった。

「さて、形勢逆転。一度死した竜の姫よ。もう一度黄泉へと還るがよい。」
目の前に短刀が迫り、避けようとしても南部が上に乗っていて動けない。
っち！油断した！

「Ｅｘｐａｎｄ　ｔｈｅ　ｓｈｉｅｌｄ！」
とっさに叫んだと同時に、蒼い膜が私を囲い、南部を弾き飛ばした。
肉の焦げる匂いと、南部のうめき声が風に乗って届いた。

咄嗟だったから、フルパワーだったかも。
それをもろに食らったら、多分火傷を通り越して、炭化したかもな・・・。
だいぶ遠くに飛ばされてしまったらしく、ここからでは南部の姿が良く見えない。

東の空に細い三日月が昇ったばかりで、頼れるのは星明かりだけ。
多少夜目が効くけど、そこまで離れたのは流石に見えない。

今度こそ油断しないように、じりじりと南部の方に近寄ると、私に気が付いたのか、ふらりと立ち上がった。
「おの・・・れ・・・。」
呻きながら上げた顔は真っ赤に爛れ、両手も皮が剥けて所々焦げているようだった。
普段の私なら、多分悲鳴を上げて逃げ出すほど、ひどい姿だ。

でも、これは私がやったこと。
そして、ここで南部を討つのは私が決めたこと。
南部を討たなければ、東北の安定は乱れる。

「黄泉で散々弄んだ兵士たちの魂に謝ってくるがいい。」
視線を逸らさず、今度は油断をすることなく扇を振り上げ、そして下ろした。

十六　収集家に目をつけられました（前書き）

短めです

十六　収集家に目をつけられました

南部が死んだことで、ゾンビたちはただの死体へと戻り、僅かに生き残った兵たちも逃げ出した。
辺りは動くものは何一つない、静かな死の世界。
風が作り出す音だけが聞こえる、冷たい静寂。
夏だというのに薄ら寒く感じる。

生きているのは私だけと錯覚しそうになった時、背後に佐助の気配が現れて、お疲れさんと声を掛けられた。

「佐助、いつきちゃんたちは全員無事？」
「怪我人がまた出たみたいだけど、全員生きてるよ。」
「そう。良かった。」

ホッとして肩の力を抜くと、振り返って佐助を見た。
「佐助は怪我してない？」
「当然。俺様を誰だと思ってるのさ。」

佐助様ですね。
憎たらしいほど元気そうで、何よりだ。
それならもうちょっと使っても大丈夫だよね？

「そんな優秀な忍の佐助に、もう一仕事お願い。成実がどの辺りまで来ているのか、見てきて。」
「ツ、ツキちゃん、真田の旦那より忍使いが荒いよ。」

嫌ぁな顔をする佐助に、にっこり笑顔を向ける。
「使える者は、他所の忍でも使う主義なの。あとで特別手当を私から出す。だから行って来て。」
四の五の言わずに、さっさと行け。

「はいはい。了解しましたっと。特別手当期待しているからね！？」
笑顔の脅迫が効いたのか、そう言うと佐助は一瞬で姿を消した。

期待しててていいよ。小十郎作の野菜セットと、政宗監修の味噌しょう油セットだもん。
希少価値高いよ～？
慶次辺りなら、垂涎ものだよ。

・・・まぁ、佐助が貰って喜ぶかどうかは分からないけどね。

佐助がいなくなり、再び静けさが戻った。
いつの間にか東の空が紺色から藍色へと変わり始め、辺りの様子が見えるようになってきた。

あちこちに転がる兵士の死体。
壊れた香炉。
南部晴政の死体。
漂う血の匂いと、腐敗臭。

初めて自分の復讐のためではなく、自分の願いの為に殺した人間たち。
小刻みに震える指を握り締めて、その目に焼き付ける。
自分の為に犯した罪を。
自分の為に殺した命を。
無慈悲に切り捨てた、たくさんの人の未来を。
死ぬまで引きずっていく、忘れてはならない、私の枷。

重い・・・なぁ・・・。

「いつまで、このような場所にいるつもりかね?」

突然声が聞こえた。
誰の気配もなかったはずなのに!

慌てて鉄扇を構えて声のした方を見ると、木の陰に見たことのない男が立っていた。
白と黒の変わった陣羽織を着ていて、悠然とした雰囲気を醸し出している。
男は木の陰から出ると、私の前に来て、南部の死体を見下ろした。

「話には聞いていたが、流石と言うべきか。なかなか大した力を持

っているようだ。」
「誰？」
敵意は感じない。
けれど、味方でもなさそうだ。
「私かね？松永久秀というしがない収集家だ。卿は満月（みつき）殿で間違いないかな？」
松永と名乗った男は、口元に笑みを浮かべて問うてきた。
私を満月と知って、話しかけてきたというわけね。
少なくとも味方ではないことは確定した。
「・・・どうしてその名を知っている？」
「警戒などしなくてもいい。今日はただ卿を見に来ただけなのだから。」
「質問に答えなさい。」
殺気を込めて再度言うと、松永は肩をすくめて、怖い怖いとおどけた。
「私は織田殿と付き合いがあったのだよ。その時に。そこまで言えば卿にもわかるだろう？」
朔夜・・・ね。
あいつ織田以外にも知り合いがいたのか。
「そう・・・。で、西国の方が、わざわざ私を見るためだけに、遠路はるばるいらしたと？」

「ああ。私は自分の興味と欲望のための労力は、惜しまないのだよ。」

興味と、欲望、ねぇ。
ろくな人間じゃなさそうだ。
大体、今日は見に来ただけって、どういうことよ。

その言葉通り、攻撃を加える気はないのか、腰の刀には一切手が触れていない。
でも、私に接触した目的が分からない以上、油断はできない。

「そうですか。ではもう満足していただけたと思うので、お帰りください。」
営業スマイル０円で消えろと促すと、松永はさも哀しげに嘆いて見せた。

「つれないではないか。私は卿と南部春政との戦いを見て、卿に興味が湧いたよ。ぜひ私の収集物の一つとして持ち帰りたくなった。」
はい。敵認定しました。
誰が収集物じゃい！！

「くくっ、毛を逆立て子猫のようだ。実に愛らしい。」
「私は物じゃない。あなたの所に行くつもりもない。力ずくというのなら、相手になるわよ？」
「確かに持ち帰りたいが、言ったはずだよ。今日は見に来ただけだと。」

小馬鹿にしたような態度がむかつく！

見に来ただけなら、こっそり見て黙って帰れ！

もう殺っちゃっていいかな？

こっそり鉄扇を握り締めて殴りかかろうかとした時、何かを感じたのか松永が、さて、と呟いた。

「さて、そろそろ私は行くよ。また近いうちに卿に逢えることを願っておくとするかね。」

「私は遭えないことを願っています。」

「くくっ、正直だ。ますます好ましい。そんな卿に一つ、情報を贈ろう。竹中半兵衛という男に気をつけたまえ。」

「竹中半兵衛？」

「では、いずれまた。」

人の質問には答えず、松永が別れの言葉を言うと、突然すぐ近くで爆発が起こった。

「うわっ！」

爆風が襲ってきて、咄嗟に身を庇う。

新手の襲撃かと警戒しつつ顔を上げると、すぐ前にいた松永の姿が消えていた。

やっと帰ったというべきか、逃げられたというべきか。

それにしても、面倒臭そうなのに目をつけられちゃったかな・・・。

十七　その質問はＮＧです

不審な人間がいないか、周辺を見回っていると、荒らされた田畑の修繕をしている村の人たちに会った。
南部軍に踏み荒らされてしまった畑のようで、結構酷い状況だ。

「手伝うよ。」
つぶされた野菜を集めている小さな女の子の隣にしゃがみこんで、見様見真似で人参を集める作業をしていると、気がついた大人が慌てて走り寄って来た。

「姫様がそんな事しちゃダメだべ！」
「へ？姫様？」
自分を指して首を傾げると、全員がこっくりと深く頷いた。
どんな誤解が広まってんの！？

「姫様じゃないって！」
慌てて否定をすると、村人たちはお互いの顔を見合う。
「いつきが言ってたべ。ツキ様は伊達様の奥方様になる方だって。」
ビクつきながら、上目遣いで言うおじさんの言葉に、くらりと眩暈がした。

いつきちゃぁぁぁん！！なんて事言って回ってるの！？

・・・いや、確かに、将来は、その、まぁ、ねぇ？
っじゃなくて！誰がいつきちゃんにそんな事を言ったのよ！！

「姫様お顔真っ赤だべ。」

隣にいた女の子に言われて、咄嗟に腕で顔を隠した。
そんな私に、はずかしがっとるべとか、照れてんだなとか、みんな言いたい放題だ。

「ひ、姫様なんかじゃないもん。ただの一般人だもん。」

恐る恐る周りの人たちを見ると、皆そう言う事にしといてやるよと言わんばかりの、生温かい目で私を見ている。
なによ、なんでそんな孫を見るような目で私を見るのよぅ。

「そうだなツキ様は、まだおらたちと同じ平民なんだべ。」
「んだ。今はまだ平民なんだべ。」
「そういうことにしておくべ。」

「う、うるさぁぁい！いいから、さっさと片付けするよ！！」

手にしていた人参を振り上げて叫ぶと、みんな笑って作業に戻っていった。
ううん、なんだこの羞恥プレイは。

皆に教えてもらいながら、畑の整備を手伝っているうちに、休憩の時間が来た。
いつきちゃんが様子を見に来た時に置いて行ったおにぎりを頬張りながら、みんな木陰で思い思いに休息をしている。

私も木に寄りかかりながらおにぎりを食べていると、子供達が遠巻きに見ている事に気がついた。
そんな、遠巻きに見なくても、取って食いはしないっつーの。
苦笑して手招きをすると、ぱっと顔を明るくした子供達が、わらわらと集まって来た。

「ツキ様、伊達の殿様のこと教えてけろ。」
「やっぱ怖いか？」
「母ちゃんとどっちが怖いんだべ？」
「そりゃ、太郎のとこの母ちゃんだべ！」

口々に質問してくる子供たちで、一気に騒がしくなった。
口の中のおにぎりを飲み込むと、うーんと考える。

「政宗が怖いかって？うーん、どうだろ。確かに怒ると怖いかな。でも、いつも怒ってるわけじゃないからねぇ。太郎くんの母さんだって、いつも怒ってるわけじゃないでしょ？」
「んだ。優しい時もあるだよ。」
うん。お母さんってのはそういうもんだよね。
喜多さんも、優しくて、怖くて、最強だ。
ママもそうだったなぁ・・・。

で、政宗はどうかっていったら・・・。

「政宗は怖いじゃなくて、強いだね。あと、器が大きい、かな。」
「器が大きい？」

最初に政宗の事を聞いて来た子が、首を傾げた。
その子の頭を撫でて、頷いた。

「そう。あ、でも、すぐ調子に乗るところもあるから、私が言った事は、政宗には内緒ね？」
口元に人差し指を当てて言うと、子供達は神妙な顔で頷いた。
ふふっ、可愛いなぁ。

「ツキ様は、伊達様のどこが好きなんだべ？」
直球で攻めて来たのは、さっき一緒に作業していた女の子だ。
他の女の子たちも興味津々と私を見上げている。

うう、こんなに小さいのに、もう恋バナに興味があるんかい。
「ひ、ひみつ。」
引きつる顔を根性で笑顔にして答えると、子供たちはあからさまに落胆したような顔になった。
ちょっと離れたところに居た大人も、こっちを見てええ～？って顔をしている。
お前らも聞いてたんかい！！

「ええー？」
不満げな声を上げる女の子たちに、かなり劣勢だ。

こんなたくさんの人が聞いてる中で、なんで告白もどきをしなきゃならないのよ！！
政宗にだって言ったことないってのに！！

誰かたーすけてー。
と、思ったとき、すぐそばに佐助の気配が現れた。
天の助け来た！

後ろを振り返ると、苦笑している佐助がしゃがんでいた。

「あっ！忍の兄ちゃんだ！」
私の視線を追った子供が叫ぶと、他の子供たちもわらわらと佐助の周りに集まった。
「ごめんねぇ？俺様まだ仕事中なんで、また今度ね？」
「ええ～？」

子供達のブーイングに、佐助はごめんねと言うと、私について来るように促した。

「手伝い途中でごめんね。」
そう言うと子供達は、またあとで手伝いに来てねー！と声を揃えて言った。
ううん、大人より素直に本音を言いやがるぜ。

「お帰り。どうだった？」
畑から離れて誰もいない所まで来ると、佐助が立ち止まったので声をかけた。

「伊達軍は、あと一刻くらいでこっちに着くよ。少数精鋭って感じの第一軍が来ていて、あとから第二軍も出発しているらしい。ここらに小隊を配置するつもりみたいだよ。」

そっか。とりあえずの一陣とはいえ、思ったよりも早く到着するな。早くて明日の朝くらいかと思ってたよ。

「了解。さて、佐助、これからどうする？甲斐に戻る？」

南部を討ち、更に伊達の援軍が来た以上、佐助がここにいる理由はもうない。

佐助もそれが分かっているのか、あっさり頷いた。

「そうだねぇ。俺様もそろそろ甲斐に戻るとするかな。特別手当ては、また改めていただきに行くよ。」

「うん。待ってる。」

味噌としょう油と野菜のセットを用意してお待ちしております。

「色々ありがと。助かったよ。」

「どういたしまして。あ、最後に、一つ。」

「なに？」

首を傾げると、佐助はにっこりと胡散臭い笑顔を浮かべた。

「米沢の戦は、独眼竜の旦那が到着する前に圧勝って形で終わったらしいよ。」

そうか。良かった。

圧勝ってことは、大した被害もでなかったんだろう。

「だから、来ちゃったんだよねぇ。」

え？何が？

「伊達の兵士を置いて、ものすごーい速さで馬を走らせていたから、もうすぐ着くんじゃないかな？」

ちょっと?もしもし?それって・・・。

「ま、そういうことで、俺様帰るね。んじゃ、またね。」

「ちょ!佐助!?」

逃げられた!!

慌てて村に戻ると、親衛隊の1人が、ホッとした表情で私の所に駆け寄って来た。

「今から迎えに行く所だったんだべ。」

「もう着いてるの?」

「あんれ?誰かから聞いたんだか?」

「ははは、まぁね。」

そうか。もう着いてるのか。相変わらずフットワーク軽いな!

親衛隊に案内されたのは、いつきちゃんの家の隣にある比較的大きな建物だった。

中にはいると、いつきちゃんと数人のおばちゃんがいて、政宗を取り囲んでいた。

なんか政宗が怒られてるっぽい?何でだ?

着いて早々なんかやらかしたのか?と思いながら近寄ると、おばちゃんたちといつきちゃんが顔を上げた。

「ま、そう言うわけだべ。あとは頼んだだよ？」
いつきちゃんに言われた政宗は、私の顔を見てわかったと答えた。
私？私がなんかやらかして、政宗に苦情を言ってたの！？
用が済んだのか、おばちゃんたちが外に出て行き、最後にいつきちゃんが私の所に来た。
「ツキ姉ちゃんは、しばらく蒼いお侍様と一緒にいてけろ。」
そう言ったいつきちゃんの表情は、怒ってるってよりも、心配そうだ。
苦情じゃ、ない？
なんか心配されてる？
戸惑いつつも頷くと、いつきちゃんはほっとした表情になって、出て行った。

「何か怒られてた？私なんかやっちゃった？」
「まぁな。」
渋い顔の政宗が頷いて、私を手招いた。

なんだろ、なにやらかしたかなぁ・・・。

恐る恐る近寄ると、腕を取られてそのまま抱きしめられた。
「と、突然なに！？」
「・・・・Ｓｈｉｔ！」
舌打ちをした政宗が、そのままの体勢で低く尋ねた。
「お前、甲斐を出てから、飯を食ったか？」

・・・ぎく！

「さ、さっきおにぎり食べましたよ？」

おにぎりの前は、昨日佐助にもらった乾燥肉と水ですが。

その前は・・・甲斐を出る前になんか食べたっけ・・・？

「どの位寝たんだ？」

「え、えーと。」

甲斐を出てから、合計で五時間くらいか？

「オレが着いて早々、いつきに何を言われたかわかるか？」

うっ！政宗、顔が怖いですよ？

つっと視線をそらすと、はぁーっとため息を吐かれた。

「休めといっても寝ない、食えといっても食わない、猿の話ではここに来るまでも、ろくに睡眠も食事もとってない。このままではツキが倒れると、そう言ってきたんだ。」

だって、ご飯は喉を通らなかったし、知らない気配いっぱいで寝付けなかったんだもん。

「無茶するなと言ったろうが。」

背中に回された腕に、きゅっと力が入って、私は政宗の肩に顔を乗せて寄りかかった。

鎧の硬い感触がしたけど、慣れ親しんだ政宗の匂いに自然と張り詰めていたものが緩む。

「・・・死体が・・・いくら殺しても、起き上がってくるのが怖か

った・・・。」
「そうか。」

トントンと優しく背中を叩かれて、その度に我慢していたものが零れ落ちた。
「いっぱい人が死んだの。」
「そうだな。」
「殺したの。」
「ああ。」
「でも、みんなが助かって、良かった・・・。」
「ツキのおかげだ。」

トントンとリズム良く背中を叩く手と、体に直接響く政宗の穏やかな声に、瞼が重くてぼーっとしてきた。
本当はまだ話さなきゃならないことがあるんだけど、瞼が意思に反して落ちてしまう。

「ここに居てやるから、寝ろ。」
「んー・・・。」

大きな手がそっと頭を撫でる感触を気持ち良いと思いながら、睡魔に抵抗することなく眠りにおちた。

十八　眠る場所

甲斐から急ぎ米沢に戻ると、すでに敵の姿はなかった。
成実と綱元がすでに最北端への遠征の兵を整えていて、出陣したのは米沢に戻って二刻後だった。

オレの城を攻めたのは、二本松だったようだが、勝てないと分かると直ぐに逃げ出したらしい。
まぁ、あいつらを潰すのはいつでもできる。

いつきの村まであと一刻ほどの所まで来た辺りで、猿が現れて最北端の戦も終結したことを知らされた。
あまりに早すぎると猿を問い詰めれば、わずかな仮眠を二度とっただけで、最北端まで一気に走ったと白状した。

無茶をするだろうとは思ったが、しすぎだ。
オレらでさえ、米沢からいつきの村までの間で二泊ほど野営をしたんだぞ？
それを、ろくに休まずに走り、さらに一人で南部晴政と戦っただと？

・・・・いや、違うか。
ツキに無茶をさせたのは、オレだな。

そもそも、これはオレの甘さが、招いた戦だ。

真田から同盟の話が持ち込まれたとき、こうなる可能性はあった。
だが、奥州は大丈夫だと、根拠のない過信をオレはしていた。
だが、現実は南部が、二本松が、オレに叛旗を翻しやがった。
そして、ツキを向かわせることになった。

オレがもっと先を見越していれば、ツキが背負うものは一つもなかったはず。

・・・馬鹿はオレだな。

漸く会えたツキの表情はどこか暗く、いつもの快活さが形を潜めていた。
抱きしめた体は驚くほど痩せ細り、それがツキに掛かった重責を思わた。

怖かったと、人をたくさん殺したと、ポツリポツリと零すツキ言葉に、苦い思いが広がる。
こんな想いをさせるために、傍に居て欲しいと願ったわけじゃねぇ。
オレの至らなさのせいで、ツキに辛い想いをさせちまった。

もう二度と、こんなことさせねぇ。
オレの国を引っ掻き回してくれた礼は、必ずしてやる。

豊臣秀吉・・・。
竜の怒りをかった罪、決して軽くねぇぜ?

日暮れ近くなって、小十郎とうちの連中が到着し、村が俄かに騒がしくなった。
小十郎を伴ってツキの寝ている部屋に戻ると、気配で目を覚ましたのか、ぼーっとした顔で起き上がっていた。

「こじゅろーだ・・・。」
「ああ、今先ほど到着した。だいぶ無茶をしたらしいな。」
「・・・それほどでも・・・ないよ。うん。」

うそつけ。ボロボロじゃねぇか。

「お前が寝てから大して時間は経ってねぇ。夕餉まではまだ寝てろ。」
頭をふらふら揺らし、目は殆ど閉じた状態のツキの隣に座ると、半ば強制的に横たわらせた。

「うん。あー、でも、言わなきゃならないことがあったんだ・・・。」

抵抗することなく横になると、ツキはあのねぇと、力のない声で言った。

「あのねぇ、松永久秀ってのにあったの。んで、竹中半兵衛には気をつけろって言ってた。」

「松永・・・だと?」

声を低くし、唸るように呟く小十郎に、ツキは小さく頷いた。

「そう。でも、あの人、味方じゃない。気をつけた方がいい。」

「くそ!松永がこの近くに居やがるのか!!」

「小十郎、知ってるの?」

殺気だって怒鳴る小十郎を、ツキは不思議そうに見上げた。

松永久秀か。厄介男が出てきたもんだぜ。

自称収集家だが、その実は欲しいもんはどんな手を使ってでも手に入れる、野盗紛いな男だ。

オレの刀を狙って城を襲撃し、小十郎とやり合った末に逃げられた過去がある。

その松永が、また現れた。

狙っているのは、オレの刀か、はたまた他の何かか・・・・。

「松永は、織田と繋がりがあったらしいんだけど、その時に朔夜と知り合ったらしくてね。私のこと知ってた。」

「・・・・どういうことだ?松永は何の目的で現れた?」

嫌な予感がしやがる。

「私に、会いに来たって・・・。」

Ｓｈｉｔ！

あの野郎！！ツキに目をつけやがったのか！！

ふざけんな！！

「小十郎！草の根掻き分けてでも、松永を見つけ出せ！！確実に地獄へ送ってやる！！」

「はっ！承知！」

殺気だって部屋を飛び出す小十郎を見送り、目を閉じて今にも寝そうなツキに向き直る。

「ツキ、松永にだけは近寄るな。現れたら全力で逃げろ。あいつは、あらゆる卑怯な手段を用いて、欲しいものは必ず手に入れようとする男だ。いいな？」

「・・・うん。分かっ・・・・た。」

って、お前寝てるだろ？

もうほとんど寝てるよな？

本当に分かってんのか怪しいが、今は寝かせるのが先か。

上掛けを掛けなおしてやり、頭を数回撫でれば、すぐに寝息が聞こえた。

どのくらい寝ていたのか、目を覚ますとすでに辺りは暗くなっていた。
見たことのない部屋に一人で寝ていて、近くに人の気配はしない。
耳を澄ますと、遠くで人の声が聞こえた。

ええと・・・。確か、ここはいつきちゃんの村で、南部を討って、そんで政宗が到着したんだっけ。
ぼーっとする頭で、政宗が来て安心して寝ちゃったんだっけと思い出した。
なんか小十郎もいたような気がするな。

夢と現実がごちゃまぜになってて、今こうしている自分が夢なのか

現実なのかも曖昧だ。

部屋の様子をぼんやりと眺めていると、控えめな足音が聞こえて襖がそっと開けられた。

「起きたか？」

政宗が私を見てちょっと笑うと、後ろを振り返って、起きたから用意をしておけと誰かに命じた。

「今何時ぃ？」

掠れる声で尋ねると、政宗は暮れ六つ（１８時）だと答えた。

布団の中で伸びをして、しょぼしょぼする目を擦って目を覚ます。それから起き上がって、布団の上で座ると、政宗を見上げた。

「小十郎たちが来たんだっけ？」

「やっぱり寝てやがったな・・・。松永の話をしたのを覚えてるか？」

えーと、・・・ああ、なんか話した気もするな。

あれは夢じゃなかったのか。

「小十郎がやけに燃えてたね。うん、覚えてる。」

「松永の行方は今黒脛巾組に追わせている。おそらくまだ、奥州のどこかに潜んでいるはずだ。気をつけろよ？」

「うん。」

松永久秀は要注意って事で、記憶しました。

ところで、私の記憶が確かならば、黒の服を着ていたと思うんですが、何で単衣なんですかね？
おまけに、なんで体がこざっぱりしてるんですかね？
寝てる間に何してくれたんでしょうね？

ちらりと政宗を見上げれば、にやっと笑いやがった。
松永久秀より、目の前の奴の方が要注意だと思うのですが！
人が寝てる間に、脱がせて、拭いて、着替えさせたのか！
今更とか言うな！
恥ずかしいものは恥ずかしいんだよ！

枕元に膝を付いた政宗が、畳んであった打掛を取って、ぶすっとしている私に羽織らせた。
「今みんな夕餉を食ってる。お前も起きて食え。」

ご飯か。そういえば、お腹空いたかも。
「うん。食べる。」

立ち上がって身支度を整えると、自分を見下ろした。
鏡がないから、おかしな所がないか心配なんだけど・・・。

「これで大丈夫？」
「Ａｈ？」

入り口付近で待っている政宗に聞くと、こっちに近寄ってきた。
しげしげと眺めた後、私の頭を整え、ついでに顔も覗き込んで、まぁ良いだろうと呟いた。

・・・最後のは、どういう意味ですかね。

ちょっとした広間みたいな所に行くと、伊達軍のみんなが宴会状態で夕飯を食べていた。
長旅だったっていうのに、相変わらずみんな元気だなぁ。

政宗の隣に座ってご飯が運ばれるのを待っていると、小十郎が膳を持って現れた。

「まだ眠そうだな。」
「うん。眠い。でも、お腹も空いた。」
「仕方のない奴だ。とにかく食って、寝ろ。話はそれからだ。」
「話はいらないぃ～。」

きっと説教に決まってる。
思い当たることしかないよ・・・！

箸を手に取り、いただきますと言ってから、まずは味噌汁を一口。

うま～。

それから、煮物、焼き魚と順番に食べていく。
さすが米所。ご飯がおいしい。
それに、野菜も小十郎が作ったものと引けをとらないくらいおいしい。

久しぶりの温かいご飯だよ。
幸せ～。

半分くらい食べたところで、お腹が膨れて今度は睡魔が勢力を盛り返してきた。
ちょっとでも油断をすると、カクンと頭が後ろに倒れる。

「ツキ、もうちょっと食え。」
すでに食べ終わった小十郎と政宗が、ひっきりなしに声を掛けてくるけど、もう限界です。
「もうむり・・・。眠いよ・・・・。」
「仕方がねぇな。じゃぁ部屋に戻るか？」
箸を置いた私にため息を吐いて、政宗が立ち上がった。
小十郎が膳をどかしてくれて、お礼を言いながら立ち上がる。
ねむ・・・。目を開けているのも一苦労だよ。

霞む目をこすりながらふらふらと政宗の後をついて行く。

「おい！」
突然呼び止められて顔を上げると、目の前に壁があってぶつかる寸前だった。
「おおう・・・。」
「おおうじゃねぇよ。ったく。」
戻ってきた政宗が、子供かよと笑いながら私を抱き上げた。

ゆらゆらと歩調に合わせて揺られているうちに、あっという間に瞼が閉じて意識が遠のいていく。
おかしいなぁ。昨日までは全然眠くもなんともなかったのに。

政宗が傍に居るだけで、こんなに安心できるなんて。

頼ってばかりで、ごめん・・・。

・・・・つまらねぇこと言うな。

ちょっと怒ったような、政宗の声が聞こえたような気がした。

十九　得難いもの

二日後、第二陣を引き連れてきたのは、綱元さんだった。
鎧姿の綱元さん初めて見たよ！
かっこいい・・・。
着物姿も素敵だけど、鎧・・・！
渋味が増して、かっこよすぎるよ！

政宗と到着の挨拶をし終えた綱元さんが、私と小十郎の所に来た。
「小十郎もツキも変わりなさそうで何よりです。姉上も心配していましたよ。」
「綱元殿、道中は何も？」
「はい。問題はありませんでした。」

うはっ！小十郎と綱元さんのツーショット。
良い男がそろって眼福だわ～。
カメラがあれば、一枚撮りたいくらいだよ。

政宗も確かに美形でカッコいいんだけど、渋味がまだ出てないというか、それほど男臭くないというか・・・。
まぁ、五年後に期待だね。

「ツキ、政宗様の視線が痛いので、こちらを嘗め回すように見るのを、止めていただけませんか？」
「ええ～？綱元さんの鎧姿を、脳裏に焼き付けておきたいのにぃ。」
「相変わらずですねぇ。」

仕方がないと苦笑する綱元さんも、素敵です！
オレには言わねぇくせにと、ぶちぶち言う政宗は、かっこいいってよりも可愛いだね。
ま、そんなところも好きだとは、言いません。
言いませんたら。

「まぁ、元気そうなので、安心しました。」
「元気だよ！毎日政宗が無理やり食べさせるから、太っちゃって大変。」

そう。あれから朝と夜のごはん以外にも、なんだかんだと食べさせようとする政宗のせいで、絶対数キロは太ったよ！！
ウェイトコントロールをちゃんとしないと、動きが鈍くなっちゃうよ。
「Ｈａ！お前はもっと食って、肉をつけろ。じゃねぇと抱き心地が良「畑に埋めるぞこの野郎！！」・・・Ｏｈ。」

余計なことを言うな！ばかっ！

明日朝一で米沢に帰ることになり、引継ぎもほぼ済ませた夜。
部屋で片づけをしていると、政宗が疲れた表情で現れた。

「まいったぜ。」
「どうしたの？なんかあった？」
頭を掻きながら座る政宗に、何か問題が発生したのかと不安になる。
まさか、またどこかで叛乱が？
「いや、村の奴らが、ツキに食わせろって野菜やら米やらたくさん寄越してきやがった。持ち帰れねぇからいらねぇって言っても聞きゃしねぇ。」
「野菜？」
「お前がちっこくって痩せているから、みんな不安なんだとよ、」
「ちっこいは余計だ！」
隣に胡坐を掻いて肘を付くと政宗が、ずいぶんと好かれたもんだなと笑った。
「小十郎が断ってたから大丈夫だとは思うが、お前も明日うっかり受け取るなよ？米やら野菜やらを、馬に載せてなんか帰れねぇからな。」
「うん。わかった。」
そういえば、昼間に畑仕事を手伝いながら明日帰ることを言うと、みんなが集まってきて大変だったんだよね。
そんな細っこい体で米沢まで帰れるのか？とか、もっと休んで体力つけてから帰れとか。
そんなに痩せてひ弱に見えるのかな・・・。
私としては昔からこれが普通なんだけど・・・。
腕とか、腹とか、いらん所に肉が付いて困ってるくらいなんだけどな。

自分の二の腕の下の肉をつまんで、こっそりため息をついていると、突然お腹に手が回って気が付いたら政宗の膝の上だった。
「細い腕だよな。」
二の腕を掴んで、政宗が呟いた。

「もっと筋肉がつくと良いんだけど、女だから難しいなぁ。」
「そういうもんなのか？」
「うん。そういうものなの。女は筋肉が付きにくいんだよ。例えば、政宗くらいの腕力が欲しいと思ったら、政宗の数倍の努力が必要なんだよ。」
「へぇ。」

お返しに政宗の上腕筋を掴めば、カチカチで引き締まった感触がした。
「女だから難しいことって、どうしてもあるんだよね。」
「いいんじゃねぇの？お前ができない部分は、オレがｆｏｌｌｏｗしてやる。」
「政宗・・・・。」

そういうのって、すごく良いと思う。
政宗ができないところは私が助けて、私ができないところを政宗が助ける。
そうやって二人でやっていけたら、うれしい。

そんで、二人でダメなところは、小十郎や喜多さんに助けてもらって、皆がダメなところを私たちで助けるの。
そうやって、みんなで生きていけたらいいな。

「うん。そうだね。そうやって助け合えたら、きっと無敵だね。」

腕から手を離して、政宗に抱きついて言うと、だろ?と抱き返された。

うん。きっと無敵。
これから何が起こっても、例えどんな目にあっても、政宗たちが居れば、無敵でいられる。
だから、政宗は護るよ。
私が、必ず。

次の日、政宗と小十郎、それから十数名の兵士たちと私は、朝早くにもかかわらず、村人全員のお見送りの中、米沢に戻ることになった。

誰も彼もみんな笑顔なのがうれしい。
来たときは、不安と恐怖で縮こまっていた人たちが、みんな笑顔だ。

「ツキ様、伊達様が嫌になったら、いつでもおらが嫁にもらってやるからな?」

半べそかいて言って来たのは、太郎くんだ。
なんて可愛いことを・・・！

あまりの可愛さに抱きしめてぐりぐりしていると、後ろからドンっと飛びつかれた。
「太郎じゃなくて、おらが嫁にもらってやる！」
振り返れば、太郎くんよりも少し大きな平太くんが、真っ赤な顔をして叫んだ。

・・・もしかして、この村に残れば、私将来逆ハーレム？
今なら私好みの男に育て放題？

「・・・いいかも・・・・。」
「ツキ？」

背後におどろおどろしい気配を感じて、恐る恐る振り返ると、仁王立ちした政宗が物凄い威圧オーラを発していた。
子供たちはもちろん、私もビビるっちゅーの！

「そろそろ行くぞ。来い。」
「あ、うん分かった。」

ビビりまくっている子供たちに、ちょっとだけ癒しの力を込めて頭をなでてやると、落ち着いたのか自分たちの親の元に戻っていった。

「あーあ、せっかくの逆光源氏計画が・・・。」
とぼとぼ政宗の所に戻ると、わしっと久しぶりに頭を鷲掴みにされました。

「みっぎゃぁぁぁぁぁ！！」
「オレに隠れて男を囲おうたぁ、楽しそうじゃねぇか？」
「痛いって！！逆ハーは乙女の永遠の夢だっちゅーの！！」
「Ｈａ！乙女？」
「いま！今鼻で笑いやがったな！？女はいくつになっても乙女なの！！」
「へぇ？」
「ぶっとばーす！！」

渾身の力を込めて腕を伸ばしたけど、頭を掴まれた状態じゃ政宗まで届かない！！
ちくしょー！リーチの差が・・・・！！
「ははははどうした？」
「むっきぃぃぃぃ！！」

腕が、あと、１０センチ長ければ・・・！
む、無念。

若干疲れて小十郎たちが待つ馬のところまで行くと、いつきちゃんが風呂敷を持って走りよってきた。
「ツキ姉ちゃん、これ、おらたちからの感謝の気持ちだ、受け取ってけれ。」
野菜や米ではなさそうな風呂敷を受け取ると、中からウサギの毛で

作った肩掛けが出てきた。
これって・・・けっこう高級な品なんじゃ・・・？

「冬になったら使ってくんろ。」
「でも・・・こんなすごいの貰えないよ・・・。」
「そんなことねぇだよ。野菜はダメだって言われて、みんなで考えたんだ。」

満面の笑顔で言われて困っていると、政宗がくれるっつーなら貰っておけと背中を押した。
「ほんとに、こんなにいい物・・・貰っていいの？」
「んだ。ツキ姉ちゃんが来てくれて、本当にうれしかっただよ。それに、おらたちが弱いから、ツキ姉ちゃんに沢山無理をさせちまった。」

そんなことない。いつきちゃんたちが助けてくれたから、南部晴政を討つ事ができたんだよ。
そう言いたいのに、言葉が詰まって出てこない。

「おらもっと強くなって、ツキ姉ちゃんみたいにこの村を守れるようになるだ。もう、ツキ姉ちゃんにばっかり辛い想いはさせねぇだよ！」
「いつき・・・ちゃん・・・？」
なにを？

「おら、本当はあの時・・・忍の兄ちゃんがツキ姉ちゃんの所に向かったとき、一緒に居たんだ。忍の兄ちゃんが居なくなって、松永っておっちゃんが現れて、話しているときも、ずっと様子を見ていた。」

あの時、いつきちゃんがいたなんて気が付かなかった・・・・。

「ごめんな？おらたちが弱いから、ツキ姉ちゃんが・・・。」

「違う。そんなことはない。いつきちゃんが謝る事なんて、一つもない。」

ようやく出た声は、みっともないほど震えていて、悔しかった。

「いつきちゃんたちから言われるなら、お礼がいい。そんで、また来てねって笑顔で言ってくれれば、それだけで十分だよ。」

弱いのは私。

謝るなら、心配をかけた私の方だ。

「また、何かあったら、政宗よりも早く駆けつけるよ。」

「これからは綱元もいるんだ、そう滅多なことはねぇよ。」

体温を感じるほどすぐ後ろに立った政宗が、そろそろ行くぞと私の頭をなでた。

振り返れば、すでに馬に乗った小十郎たちが、私が来るのを待っているようだった。

「肩掛けありがとう。奥州の冬は初めてだから、ぜひ使わせてもらうね。」

「うん。使ってもらえたら嬉しいだ。」

お互いに笑顔を向け合って、また会おうねと約束した。

「ツキ姉ちゃん。来てくれてありがとう。今度、ツキ姉ちゃんが困っていたら、おらたちが助ける。だから、いつでも頼って来て欲しいだよ。」
「うん。ありがとう。」

馬に向かう政宗の後を追おうと、踵を返した時、いつきちゃんが私の腕を捕まえて、こそっと耳打ちをした。

「蒼いお侍様と祝言挙げるときには、おらたちにも教えてくんろ。祝いを届けに行くだよ。」
「な!!」

そういえば、村のみんなにおかしなことを言ったの、いつきちゃんだった!!
かぁっと顔が赤くなるのを感じながら、いつになるか分からないけどねと、小声で言い返すと、今度こそ政宗の馬のところまで走る。

「どうした?」
不思議そうな政宗になんでもないと答えて、馬に乗せてもらうと、こちらを見上げている村のみんなを見た。

「ツキ様、どうか気をつけて!」
「ツキ姉ちゃん!ありがとうな!」
「ツキ様飯をちゃんと食うだよ!?」
「ツキ様、本当にありがとうございました。」
「おらたちがみんな生きているのも、畑が無事なのも、みんなツキ様のおかげだべ。」
「またいつでも遊びにきてくんろ。」

「みんなも元気でね！！」

「オレには一言もなしかよ。」
「それだけ皆ツキに感謝しているということでしょう。」
ぼやく政宗に、小十郎が苦笑する。

「まぁいい。」
そう言って笑うと、政宗は一緒に米沢に戻る兵のみんなを振り返った。

「米沢に戻るぜ！Ａｒｅ　ｙｏｕ　ｒｅａｄｙ　Ｇｕｙｓ！？」
「Ｙｅａａａａａａａａａａａｈ！！」

威勢よく答える兵たちに満足げに頷いて、馬の脇腹を力強く蹴りつけた。
政宗を先頭に、南に向けて伊達軍が米沢に向けて走り出す。

遠のくいつきちゃんたちの姿が見えなくなると、今度はいまだ戦の傷跡が残る周囲に目を向けた。

国をを背負うことの怖さと辛さ、そして誇らしさが、少しだけど分かった。
それが政宗に少し近づけようで、うれしい。

なんてことは言わないけどね。
言わなくても、きっと政宗はわかってるような気がするから。

二十　観月会

最北端から戻ってきて半月後、米沢城で中秋の観月会が催されることになった。
まぁ、観月会とは名ばかりでその実は、豪族達を集めて奥州の結束を図り、尚且つ政宗の力を見せつけて謀反を起こす気をなくさせるというのが目的らしい。

その計画を聞いて、まぁ平和的に奥州を強固なものにするなら、良いんじゃないの？とは言いましたけどね。

「私が見世物になるなんて、聞いてねぇよ。」
あちこちから向けられる視線が痛いっつーの。
「オレだって、奴らが娘を連れてくとは思いもしなかったぜ。」

小声でヒソヒソと言い合う私と政宗の前には、招待した豪族たちプラス、その娘たちがずらっと並んでいる。
色鮮やかな着物に身を包んだ、年頃の綺麗な女の人たちが並んで座っている様は、昔映画で見た大奥を彷彿とさせるなぁ。

誰も彼もが政宗に色目を使っていて、当然その隣の私は、邪魔者以外の何者でもない状態。
痛い。視線が突き刺さって痛いよ。
中には、敵意を通り越して、殺意を感じるものまであるよ。

これがただの宴会なら、とっくに抜け出して一人部屋でゆっくりするところなんだけど・・・。

今日の宴会を成功させるためには、私がしなければならないことがある。
それが終わるまでは我慢です。我慢。

いつもの広間ではなくて、少し広めの庭に用意された会場で、豪族同士が楽しげに飲んで騒いでいる。
姫様たちも付き添いの人たちと会話をしたり、政宗見たり、私をガン飛ばしたり、それなりに楽しそうだ。

視線のうっとうしさに、ついため息をついて空を見上げると、東の空に今年も見事な月が昇り始めていた。
眩しいくらいの見事な満月で、自分の中の力が溢れそうなくらい満ちるのがわかる。

「月が昇ったか。そろそろ始めるか？」
「そうだね。色々と限界かな。さっさと終わらせて、私は部屋に戻りたい。」
「最後まで付き合ってくれねぇのかよ。」
「小十郎がいるじゃん。私はあの姫様方が怖いんじゃい！」
「Ｈａ！敵前逃亡かよ。」
「なら政宗が行けよ。」
「嫌だね。」

お互いの脇腹をど突き合いながら、姫様の相手の押し付け合いをしていると、後ろから何をなさっているのですかと呆れた声をかけられた。
振り返ると、狩衣姿の小十郎と、艶やかな打掛姿の喜多さんが並んで立っていた。

うわ～。さすが美形姉弟。絵になるわ～。
うっとりと見上げていると、政宗が用意できたか？と二人に声をかけた。

「はい。後はツキの準備ができれば、いつでも。」

そう。なんと、今年はこの二人の伴奏で舞うという、なんとも緊張する役目があるのですよ。
あとは、私のお披露目もあるって喜多さんが言ってた。

私のお披露目なんてのはどうでもいいんだけど、失敗したら政宗はもちろん小十郎や喜多さんにも迷惑がかかっちゃうから、油断はできない。

私も今日は、神楽を舞う巫女がよく着る千早を着せてもらった。
ただし、袴は濃紺、千早は浅葱色。
これが蒼月華としての、本来の正装だ。

「こっちもいつでもいいよ。」
「なら始めるか。」

小十郎と喜多さんが用意された場所に座り、それぞれの楽器を微調整している間に、私も立ち上がって懐から鉄扇を取り出す。

「うっしゃ、いくか。」

「ほどほどでいいぞ。」
「Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．まぁ、見ててよ。去年よりは満足のいく出来栄えになる・・・と思うから。」

毎日ちょっとずつだけど、時間を見てはこっそり練習してきたんだもん。
子供の姿から、それなりに成長したし、見た目もそれなりに見られると思うんだ。

庭の真ん中に用意された舞台のど真ん中に立ち、登り始めた月を見上げた。
心を静め、突き刺さる視線と騒音を無視し、深く呼吸を繰り返す。

掌を上に向けて意識を集中させると、蛍のような小さな光の粒が次々と生まれて、庭中に漂い始めた。
もうそろそろいいかな。

その場に膝をついて、扇を開くと月に向かって深く一礼した。

「月の御方ならびに、蒼き竜の御方に蒼月華が捧げ申す。」

そう宣言すると、小十郎の竜笛の音が高く澄んだ音を響かせ、その後を追うように、喜多さんの琴の音が鳴り響いた。
相変わらず鳥肌が立つほど上手いなぁ。
これは下手な舞は絶対にできない。

祝詞を歌いながら、月を見上げながら、心に蒼竜様と月神様を思

い浮かべながら、二人の奏でる音に合わせて舞う。
時に高く、時に低く、私の口から紡がれる祝詞が、静まり返った庭に響く。

扇を翻してゆっくりと空に向けると、蒼い光の粒がゆっくりと舞い上がった。
舞い上がった光はそのままに、次から次へと生み出される光が私の周りに漂って、ふわりふわりと揺れている。

普通の扇と違って鉄扇だから、微妙な角度で固定とか結構しんどい。
母や、ばば様は、羽のように軽やかに舞っていた。

少しは近づけたかな。
あの舞姿に。あの凛とした美しさに。

上げた扇をゆっくり翻しながら斜めに下ろし、今度はふわりと水平に持ち上げる。
手首がぶれない様に、表情が強張らないように、気をつけながら一つ一つに気持ちを込めて、丁寧に。

小十郎たちの演奏が終わるのと同時に、祝詞が歌い終わった。
その場をゆっくり回って、漂う光に集まるように念じると、まぶしいくらいに辺りに漂っていた光が、一瞬で開いた扇の上に集まって大きな光の珠になった。

ちらっと辺りを見回せば、呆然と口を開いたまま私を見ている面々

が映って、くすりと笑みが漏れた。
敵意や殺意めいたものは、今はまったく感じない。
ただ驚いているような、そんな感じだ。

扇を頭上に捧げ持つと、ふわりと光が浮き上がり、ゆっくりゆっくり上に昇る。
観客の視線も上へ上へと上がる。

月に光が重なると同時に、光が弾けて一瞬辺りが真昼のようにまぶしくなった。

オオーーーーン・・・・・。

竜の咆哮ともとれる音が響き、私は月に向かって深く一礼した。

はぁ～、無事に終わった。
本当は最後に、竜の幻覚でも見せてやろうかと、こっそり思ったんだけど、連中の様子を見れば今ので十分そうだ。
鉄扇を懐にしまい、ざわめきだした豪族には目もくれずに、政宗の

所に戻る。
「どうだった？」
「Ｅｘｃｅｌｌｅｎｔ．」
どうやら政宗から見ても上出来だったらしい。
よかった。

隣に座るように促されて素直に座ると、小十郎と喜多さんもこっちに来た。
「演奏ありがとう！」
「いや。それより、驚いたぞ。あれほど見事な舞を舞えるとは。」
「素晴らしかったわ。」

三人に褒められて、照れるやら嬉しいやら。
頑張った甲斐があったってもんですよ。
「舞ってる姿を見て、誰かと入れ替わったのかと思ったくらいだ。今でも信じられん。」

こ、小十郎、それあまり褒めてないから。
珍しく興奮気味に語る小十郎に、私も政宗も顔を引きつらせていると、喜多さんが満面の笑みを浮かべて小十郎の脇腹にボディブローをかました。

「小十郎、ちょっと来なさい。」
「あ、あね・・・うえ・・・？」

強烈なパンチに、脇腹を押さえて悶絶する小十郎の襟首をつかんだ喜多さんが、やはり笑顔のまま引きずっていく。
恐っ！！めっちゃ恐っ！！
小十郎・・・治癒が間に合えば、治してあげるからね。

・・・・間に合えば。

二人で身を寄せ合ってガクブルしていると、厳めしい顔のおっさんが近寄ってきた。
見た目から、招待された豪族の一人って感じだ。
後ろに娘が控えている。

「飯坂か。どうした？」
飯坂と呼ばれたおっさんは、ちらっと私を見た後再び政宗に視線を戻して言った。

「殿、その娘はどちらの出の者なのですか？」
「あ？」

こういう事を聞いてくる人、絶対出てくると思ったんだね。
やっぱり出たよ。

「どこでもいいだろうが。」
不快感を露わにする政宗に、引くどころかその豪族は更に言い募った。
「どこの出の者かも分からぬ娘を正室になどと、私は認められませぬ。」

はいぃ？私が正室予定の人間だって、何で知ってるの？

名乗った覚えも、紹介された記憶もないんですが？

びっくりして政宗を見上げると、同時に明後日の方向を向きやがった。

「政宗？どういうことかな？」

「今夜舞を見せる女を正室にすると、我々に事前通達があったのだ。」

「聞いてねぇぇぇぇ！！！」

思わず地を丸出しにして叫んでしまった後、はっと我に返っておほほっと誤魔化したけど、後の祭りだ。

眉間にしわを寄せる飯坂のおっさんの視線を避けて、今度は私が明後日の方向を向いた。

「このような女が、奥州筆頭の正室とは、他国への恥さらしとなりましょう。」

わお。恥さらしだって～。

ちらっと政宗を見上げると、イラっとしたような表情をしている。

「オレに相応しい正妻はオレが決めると、そう言ったはずだが？」

「斯様な娘を選ぶと、そうおっしゃられるのですか？」

「ああ。そうだ。」

なんか私ここにいるのが居たたまれないのですが・・・・。

いつの間にか、私たちの周りに野次馬の人だかりができてるし。

周りを気にする私の隣で、政宗と飯坂のおっさんの緊迫したやりとりは続いている。

「オレは、大人しい従順な女はいらねぇ。オレと肩を並べられるような女でなければ、奥州筆頭の正室とは認めねぇ。」

きっぱりと言い切った政宗に、周りの視線が一斉に私に向けられた。

ひぃ！

この女ならできるのか？とみんなの目がそう言っているよ！？

・・・ここで私がムリムリって首を振ったら、どうなるかな。

ちょっと誘惑に駆られて、横に振ろうとした頭を、すかさず政宗の手が鷲掴んだ。

「いたたた！！ごめんなさい、つい出来心で・・・！！」

「やっていい冗談と、駄目な冗談ってあると思うんだがな。」

政宗、怖いからその表情止めてください。

「その娘の実力とやらを、見せていただきたい。」

「ええ～？めんど・・・なんでもないです。喜んで披露させていただきます。」

飯坂のおっさんの言葉に、嫌だと言おうとした途端、頭をまだ掴んでいる手に力が込められて、泣く泣く了承する羽目になった。

飯坂のおっさんや、野次馬達を見回して、政宗はにやりと笑った。

「明日、奥州走竜戦を行うぜ。勝者をオレの正室とする。」

ざわっ・・・・！

政宗の言葉に、会場がざわめく。
なんじゃその奥州走竜戦って。
こんな時に解説の片倉君がいてくれないと困るじゃないか。

「もちろん、代理出場も認めてやる。」
「この娘の代理を、まさか片倉殿や政宗様ご自身がなさるとか、おっしゃいませんよね？」
「ツキ自身を出す。それで文句はねぇだろ？」
「・・・・よろしいでしょう。」

おっさんと政宗が二人で睨み合っているけど、私には何がなにやらさっぱりです。
首を傾げている私を無視して、出場する気のある豪族達は、蜘蛛の子を散らすように去っていき、飯坂のおっさんも鼻息荒く去っていった。

だれか～奥州走竜戦って嫌な予感しかしないものの詳細を教えて～。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3687v/

竜の華は蒼月に舞う

2011年11月24日22時57分発行